
ポケットモンスタープラチナ・タクミストーリー

バクフーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスタープラチナ・タクミストーリー

【Nコード】

N6567F

【作者名】

バクフーン

【あらすじ】

自らの野望を叶える為に再び動きだしたギンガ団。そのギンガ団の野望を阻止する為に国際警察、ハンサムと共に行動を共にする国際警察新入りのタクミ。彼はギンガ団の野望を阻止する事が出来るのか？タクミの物語が今始まろうとしていた・・・

プロローグ

「はあゝ．．．今日も良い天気だねえ。こういう日は昼寝するのに限るぜ．．．ふあゝ．．．」

俺の名前はタクミ。

歳は16。趣味は昼寝。

性別は男。出身はカントー地方のトキワシティ。今は雲一つ無い快晴なんだ。こういう日に昼寝するのは最高なんだゝ！

ブルブルブルブル．．．

「うん？何だよせっかく人が気持ち良く昼寝しようって時に．．．」俺のポケギアがいきなり鳴りやがった。

あゝポケギアってのは．．．まあ簡単に言えば携帯電話みたいなものだ。

「はいもしも．．．」

『こらゝタクミ！！仕事サボって何してんだお前はゝ！！』

ポケギア越しから物凄い声で怒鳴られた（汗）

あゝ耳がキーンとしてするゝ（汗）

「そ、そんなデかい声出さなくても良いじゃないですか先輩ゝ（汗）」

「

『バカ者！！お前がサボったせいで大事なポケモンのタマゴが強盗グループに盗まれたんだぞ！？解ってんのかお前！？』

「あちやゝ（汗）マジですか先輩（汗）んで、その強盗グループの行方は？」『ズイタウンから209番道路に向かって逃走中だ！速く奴らを捕まえてこんか！』

ガチャ！プー、プー。

電話が切れた。

「はあ．．．209番道路か．．．仕方ない。行くか！」

ちなみに俺の職業はポケモントレーナー、であると同時に国際警察のメンバーでもある。国際警察ってのは名前の通り世界各地で活動

して悪い奴らを逮捕するんだ。俺は最近国際警察になったばかりなんだ。さてそれはさておき、俺は腰に付けてある一つのボールを手取る。

ボールって言っても100円玉サイズの小さな物だ。だけど、このボールにあるボタンを押すと一気に大きくなって手の平サイズになる！こいつはモンスターボールって言ってポケモンを連れて歩く時の必需品だ！

「出てこい！ピジョット！！」

俺はそう叫びながらモンスターボールを空に向かって投げた！するとモンスターボールが開いて中から白い閃光が！しばらくすると閃光が消えてポケモンが姿を現した！

名前はピジョット。

鳥ポケモンで俺の相棒。

「ピジョットオオオ！」ピジョットが大きく鳴いたあと俺の前まで降りてきた。俺はピジョットに乗った。

「さあ頼むぜピジョット！このシンオウ地方での俺達の最初の仕事だ！」

「ピジョピジョ！ピジョットオオオ！」

俺を乗せたピジョットが大きく羽ばたいて空に飛んだ！そして一気に加速！目指すは209番道路にいる強盗グループだ！

プロローグ（後書き）

プロローグ完成です。

初めて人間が出てくるストーリーを考えてみました！ポケモントレーナーがモンスターボールからポケモンを出す所をどうやって表現すれば良いのか結構悩んだり（^ー^；）

第一話ポケモンのタマゴを奪還せよ！

俺は今、相棒のピジョットに乗って空を飛んでいる。目指している場所は209番道路。そこにポケモンのタマゴを盗んだ強盗グループが逃走している。

ピジョットのスピードならもうそろそろ着く頃だな。そう思って俺は地上を見てみた。

「・・・おっ！あれだな！」

猛スピードで走っている車がいた。後ろにはジュンサーさん達警察の人達がパトカーや白バイに乗って追いかけている。

ジュンサーさんって言うのは警察では超有名人なんだ。しかも美人。ってそんな事言ってる場合じゃないな！

「ピジョット！あの車に接近するんだ！」

「ピジョオオオー！」

俺がピジョットに言うのとピジョットは一気に降下した。そして車のすぐ横まで来た。

「アニキ！何か来ましたぜ！」

「ふん！ただのガキじゃねえか！気にすんな！このままかつ飛ばせ！」

何か車の中が騒がしいな？なんて思ってたら強盗グループの車が加速した！だが、俺のピジョットからは逃げられないぜ！「ピジョット！鋼の翼でタイヤをパンクさせるんだ！」

「ピジョオオオー！」

ピジョットの翼が光輝いた！鋼の翼は自らの翼を鋼のように硬くして攻撃する技なんだ！

「いっけええええ！」

ピジョットの鋼の翼が車のタイヤにヒット！

鋼の翼が当たった所は切り裂かれてタイヤがボロボロになった！それでまともに走れなくなった車は急停止した。そして中から慌てて

強盗グループが出てきた。

「くそ！こんな所で捕まってたまるか！やるぞ野郎共！」

強盗グループが一斉に自分が持っているモンスターボールを投げてポケモンを出した。

「うゝん・・・犯人は四人、出したポケモンは四体でアーボックにハブネーク、グラエナにスカタンクか・・・毒タイプと悪タイプ・・・なら俺はこのポケモン達だ！」

俺は腰に付けていたモンスターボールを二つ手に取った。

「頼むぜ！エーフィ！カメックス！」

俺はそう叫んで二つのモンスターボールを空に投げた。そしてモンスターボールが開き中から閃光が！閃光が消えてポケモンが現れた！

「ガメエエエ！！」

「ファイ！」

一体はエーフィ。

太陽ポケモンって呼ばれてる。

額には小さな宝玉がついていて身体の体毛の色は紫。姿は猫に近い。そしてもう一体はカメックス。甲羅ポケモン。二足歩行が出来る大きな亀だ。このカメックスは俺がポケモントレーナーとして初めて旅立つ時にカントーのマサラタウンって言う町にいるオーキド博士って言う偉い博士にもらったゼニガメが最終進化したポケモンなんだ。

「頼むぜエーフィ！カメックス！」

俺が二匹にそう言うとエーフィはにつこりと笑って、カメックスは親指を立ててGoodサインを出して答えてくれた。

「数ではこっちが有利！やれお前達！」

強盗グループのリーダーと思われる奴が命令すると四体のポケモンがこっちに向かって来た。

「カメックス、ハイドロポンプだ！」

俺が指示するとカメックスは両肩からハイドロキャノン砲を出した。カメックスはこのハイドロキャノン砲から水を噴出して攻撃するん

だ。

次の瞬間ハイドロキャノン砲から凄い大量の水が放出された！

ハイドロポンプはグラエナとスカタンクに命中！二体は吹き飛ばされた！だけど、これでまだ終わりじゃないぜ！

「エーフィ！サイコネシスでハイドロポンプをコントロール！残りの二体にぶちかませ！」

俺がそう指示すると、エーフィは眼を閉じて意識を集中し始めた。

すると、カメックスが出したハイドロポンプが空中で静止！そして次の瞬間静止したハイドロポンプが残りのアーボックとハブネークに向かって行った！その動きはまるで水の蛇！エーフィがコントロールしたハイドロポンプは二体に直撃して吹き飛ばした！

ハイドロポンプを受けた四体のポケモン達は眼を回している。どうやら戦闘不能だな。

「あゝ俺達のポケモンが（汗）」

「さて、オッサン達！盗んだポケモンのタマゴを返すんだ！」

「ふ、ふん！誰がお前みたいながきに！」

「・・・渡してくれないなら自分から取りに行くよ。エーフィ、サイコネシスよろしく。」

「フィー！」

エーフィがサイコネシスを使って強盗グループのリーダーが大事そうに持っていたタマゴが入ったケースを奪った。

そしてケースを俺の所に運んでくれた。

「あゝ！？俺のタマゴが！？」

「オッサンのじゃねえだろ！たかつ・・・サンキューエーフィ、良くやったな」

俺は優しくエーフィの頭を撫でた。

「エーフィ」

エーフィは凄く嬉しそうに鳴いた。

「カメックスもご苦労様！かつこよかったぜ」

「ガメ！」

カメックスは笑顔で答えてくれた。

その時ようやくジュンサーさん達がやって来てくれた。

「やばいジュンサーの連中だ！逃げろ！？」

「逃がさねえ！フライゴン！！」

俺はすかさず腰に付いたモンスターボールを掴み強盗グループめがけて投げた。そしてモンスターボールが開き白い閃光が発生！閃光が消えてポケモンが姿を現した。

名前はフライゴン。

精霊ポケモンって呼ばれるドラゴンだ！こいつは結構頼りになるんだ！

「フライゴン！岩石封じ！」

「フライイゴォォン！」フライゴンが右手を地面に叩きつけると強盗グループの目の前に巨大な岩の壁が地面から出現！

岩の壁は強盗グループが逃げないように彼らを囲んだ。

「トホホ・・・（泣）」

「さすがフライゴン」

「フライイ」

俺とフライゴンはハイタッチした。

強盗グループはジュンサーさんに逮捕されて刑務所に送られた。

俺は奪還したポケモンのタマゴをズイタウンにあるポケモンを育ててくれる育て屋さんに届ける為にピジョットに乗ってズイタウンに向かった。

「このバカ者め！お前が仕事をサボらなければこういう事態にはならなかった筈だ！そもそもお前は国際警察としての自覚が足りない

「！良いか、国際警察というものはだな・・・」

タマゴを奪還して喜ばれると思ったのに・・・また先輩の説教が始まったよ（汗）

あゝこの先輩の名前はハンサム。本名じゃなくてコードネームなんだ。本名は何故か教えてくれない。

「・・・だからして、お前はだなあ・・・」

まだ説教終わらないのかよ（汗）しょうがない、説教が終わるまで読者の皆に俺の事をもう少し話しておくか。

まず、俺が国際警察になった理由はこのハンサムにスカウトされたからなんだ。俺のポケモンバトルの強さを見込んでの事らしい。一応俺はカントーのポケモンリーグチャンピオンなんだ。それ以外にジヨウト、ハウエンでもポケモンリーグに優勝した事もある。

このシンオウでもポケモンリーグに出たいと考えてるんだが・・・国際警察ってのは何かと忙しい。挑戦出来るかは怪しいな。まあこのシンオウに来た目的はポケモンリーグ挑戦ではなく、国際警察としてある組織を調査する為にやって来たんだけどな。

「・・・おいタクミ！聞いているのか!？」

「ん！あ、話終わった？」

「くうゝ!？お、お前俺の言う事聞いてなかったのか!？」

ハンサムがすっげえゝ怒ってる（汗）まあ当然か。

「まあまあハンサムさん。そんなに怒らんでも良いじゃろう?ちゃんとタマゴは帰ってきたのじゃから。」

育て屋のおじさんがハンサムに話しかけた。

「しかし・・・」

「結果良ければ全て良しって事で」

「調子にのるな!」

ゴツン！ハンサムのゲンコツが俺の頭にヒット！

「い、痛い（泣）」

ブルブルブル・・・ん？俺のポケギアが鳴ってる。

「はいもしもしタクミです。」

『もっし〜？タクミっちゃんかい？』

うっ（汗）この調子が狂う口調は国際警察で同じメンバーであると同時に幼なじみのマコトか（汗）

「なんだよマコト？」

『一緒にハンサムさんもいるよね〜？ちよつと二人に知らせる事があつたりするのよね〜！』

「知らせる事？」

『なんでも〜最近トバリシティで〜子供達が行方不明になる事件が続発してるらしいのよ〜？』

「なんだって！？それは本当かマコト君！？」

『本当っすよ〜ハンサムさん。だから〜二人には至急トバリシティに行ってもらつて〜調査して欲しいって上からの命令だよ〜？』もつと緊張感持つて言えないのかこいつは（汗）

『じゃあ〜そういう事だからよろしく〜！タクミっちゃん今度僕もシンオウに行く事になるから〜いつものように僕が開発した道具をテストしてねえ〜 よろしく〜！』

ガチャ！プー、プー・・・電話が切れた。

マコトは国際警察の中でも変わり者で妙な物を開発するんだが・・・どれも失敗作ばかり（汗）

俺や俺のポケモン達がいいつも実験に付き合わされるんだ（汗）その度にひどい目に・・・絶対奴から逃げないと！

「トバリシティ・・・かつてギンガ団のアジトがあつた場所だな・・・」ギンガ団・・・かつて時の神ディアルガ、空間の神パールキアを利用して世界を自分達の理想郷にしようとした組織だ。

だけど、5年前にコウキとヒカリって言う二人のポケモントレーナーがそのギンガ団の野望を阻止した。野望を砕かれたギンガ団はその日をもつて解散した筈なんだ。

だけど最近、そのギンガ団がまた活動を開始したという情報があつたんだ。だから、俺とハンサムはシンオウ地方に来て奴らを調査し

てたんだ。

まあさっきのタマゴの奪還みたいに他の仕事もしないといけないから調査はあまり進んでいなかったんだが（汗）

「トバリシティでの子供達の失踪・・・何か嫌な予感がする。タクミ！速くトバリシティに向かうぞ！」

「解つてますって先輩！出てこいピジヨット！」俺はモンスターボールからピジヨットを出した！

「ピジヨットオオオ！」

「ピジヨット！トバリシティまで頼むぜ！」

俺はピジヨットに乗った。ピジヨットの背中には俺しか乗れないから先輩はピジヨットの足に掴まれた。そしてそのまま空に上昇！トバリシティまで一気に加速！

このトバリシティでの事件がその後の俺の人生を大きく変える事になるなんて、その時の俺はまだ知らなかった。

第一話ポケモンのタマゴを奪還せよ！（後書き）

第一話完成です。

今まで僕が書いてた小説ではポケモンが喋る時は普通の会話だったけど、ポケモンは本来人間の言葉を喋らないからどうやってポケモンの鳴き声を書けば良いのかだいぶ迷いました（＾―＾；）

第二話トバリシティ！ギンガ団の復活！その名はネオ・ギンガ団！

ピジョットに乗ってトバリシティを目指している俺タクミと先輩のハンサム。ズイタウンからそんなに離れてないからもうそろそろ着く頃だろう。そう思って俺は地上を見た。地上には大きなデパートらしき建物が見えた。あれは確かトバリシティのトバリデパートだったな。資料でしか見た事なかったけど、結構大きいな！

「おっ見えた見えた！先輩！そろそろ降りますよ！ちゃんと掴まっけて下さいよ！」

「掴まる前に掴まれてるから動くに動けんわ！」あっそういえばピジョットに掴まれてたんだっけ（汗）

「ピジョット、ゆっくり降下してくれ。先輩が怪我したら大変だからさ。」

「ピジョット！」

ピジョットがゆっくりとトバリシティへ降下しだした。

「この高さなら大丈夫かな？ピジョット、先輩を降ろしてやってくれ。」俺がそう言つとピジョットは頷いて先輩を離した。

「っていきなり離すな！？ぐはっ！？」

あっ（汗）先輩が思いつきりしりもちついた（汗）

あれは痛いぞお。腰大丈夫かなあ？

「ごめん先輩（汗）よつと！」

俺はピジョットから飛び降りて先輩の所に向かった。

「ピジョット、ここまでありがとう！戻れピジョット！」

俺がピジョットにそう言いながらモンスターボールをピジョットに向けた。すると、モンスターボールから赤いビームのようなものが放たれた。

ビームが当たったピジョットは吸い込まれるようにモンスターボールの中へ入っていった。

「ここがトバリシティかあ！デパートやゲーセンもあるのか！」

「こらタクミ！俺達がここに来た目的は・・・」

「解ってますよ。失踪した子供達を捜すんでしょ？まずはこの街の人達に聞き込みですよね？俺はポケモンセンターで聞いてきますから先輩はトバリデパートで聞き込みをお願いします！何か解ったらポケギアで連絡を！じゃあ行つてきます！」俺はポケモンセンター目指して走り出した。

「・・・ふっ。ちゃんとタクミも解ってるじゃないか。」

トバリシティのポケモンセンターにやって来た俺はまず、ポケモン達をジョーイさんに預けて体力の回復をもらう事にした。ジョーイさんつてのはポケモンのお医者さんなんだ。しかも美人。

「はい、お預かりします。ポケモン達が元気になったらアナウンスでお呼びしますからしばらくお待ち下さいね。」

「解りました！」

ポケモンを預けた俺は、このポケモンセンターにいる人達に何か失踪した子供達の事を知らないか聞いて廻る事にした。

だけど、誰に聞いても子供達の事を知らないという返事ばかり。まあ、そんな事すぐに解るんなら俺達国際警察が調査する事は無いんだよな。

さて、念のため今まで聞いてきた情報を整理してみるか・・・俺はロビーにあるベンチに座りメモ帳を手を取った。今まで聞いた情報をこれに書いていたんだ。

「えっと・・・失踪した子供達は10代前半・・・皆活発で元気な子供ばかり・・・親を悲しませるような事をする子じゃない・・・うっんこれだけじゃなあ（汗）何か共通点は無いのか？」

俺はもう一度メモ帳を見つめた。

「・・・あれ？」

俺はある事に気づいた。失踪した子供達は皆ポケモントレーナーだったんだ。

「しかも最後に目撃したのがリッシ湖に向かう途中だった・・・」
リッシ湖。そこはシンオウ地方でも有名な場所で伝説のポケモン、意思の神アグノムがいるって言われている場所だ。

「皆リッシ湖に向かって行つたのを最後に姿を消してる・・・って事はリッシ湖で何かあるって事か？」

俺はハンサムに連絡を入れる為にポケギアを手にとった。

ブルブルブルブル・・・『ハンサムだ。』

「あつ先輩？」

『タクミか！何か解つたのか？』

「まだ確かじゃないんですけど、失踪した子供達は皆リッシ湖に向かつたのを最後に姿を消してるみたいなんです。」

『何！？』

ハンサムが凄く驚いた。

「先輩？」

『・・・俺が手に入れた情報によれば、最近リッシ湖で妙に重そうな袋を担いで何処かに行く不審人物を見かけるらしいんだ。』

「・・・マジですか（汗）」

『嫌な予感がする・・・タクミ！お前はすぐにリッシ湖に向かえ！俺もすぐに行く！』

「解りました！」

ガチャ！プー、プー。

電話が切れた。

その時ポケモンセンター内にアナウンスが流れた。どうやら俺のポケモン達が回復したみたいだ。良いタイミングだぜ！

「はい、お預かりしたポケモンはすっかり元気になりましたよ。」

「ありがとうジョーイさん！」

俺はジョーイさんからモンスターボールを受け取るとすぐに外に向

かって走り出した。

「リッシ湖は確か214番道路の先にあるんだっただな？よし、出てこいピジョット！」

俺はモンスターボールを空に向けて投げた！

モンスターボールが開き白い閃光が発生！閃光が消えて中からピジョットが出てきた。

「リッシ湖に急ぐぞピジョット！」

「ピジョオオオッ！」

俺はピジョットに乗ってリッシ湖に向かった。

トバリシティからそんなに離れてないからリッシ湖はすぐに見えてきた。

「あれがリッシ湖か・・・よしピジョット、あそこに着地するんだ。」

「ピジョッ！」

ピジョットはリッシ湖の近くに着地した。

辺りには誰もいないようでも静かだった。

「よっと！」

俺はピジョットから飛び降りた。

「これがリッシ湖・・・綺麗な湖だなあ・・・」湖の水は全く濁ってない。底が透けて見える程透明だった。ってリッシ湖に感動している場合じゃないな！

「よし、皆出てこい！」俺は手持ちのモンスターボール残り5個を空に向けて投げた！そしてモンスターボールが開いて白い閃光が発生、閃光が消えて中からポケモンが現れた。ここで改めて俺のポケモン達を紹介しておこう。

カメックスとエーフィ、それにピジョットとフライゴンは紹介したよな。あと紹介してないのはこいつらだ。

「マニユ！」

こいつはマニユーラ。

かぎづめポケモン。

姿は猫に近いかな？
二足歩行出来るんだ。

「ヒコオオオ！」

そしてこいつはヒコザル。子猿ポケモン。
子猿って言うだけあって姿は猿なんだ。

このヒコザルは俺がこのシンオウ地方に来た時、ポケモンの研究をしているナナカマド博士って言う偉い人にもらったんだ。まだ育て始めたばかりでレベルは高くないけど、頑張り屋な性格なんだ！
ピジョット、カメックス、エーフィ、マニニューラ、フライゴン、ヒコザル。これが俺の仲間達だ！「皆！手分けしてこの近辺を捜査してくれ。何か見つけたらすぐに知らせるんだぞ。まずはカメックス！湖の中を捜してくれ！」

「ガメツ！」

カメックスはリッシ湖の中に入った。

「フライゴンとピジョットは空からだ！」

「フラアイ！」

「ピジョット！」

フライゴンとピジョットは空へ飛んだ。

「マニニューラはリッシ湖の北側を頼む！」

「マニユツ！」

マニニューラは素早くリッシ湖の北側に向かった。

「エーフィとヒコザルは俺と一緒に来てくれ。」

「フィー」

「ヒコヒコ」

エーフィは俺の足にすりよって、ヒコザルは俺の右肩に乗って顔をすりよせてきた。

俺と一緒に嬉しみたいだ。それは良いが・・・歩きづらいな
(汗)

「さあ、行くぞ二人共！」俺とヒコザルとエーフィは近くの森の中

に入った。

俺と相棒のポケモン達がリッシ湖周辺の捜査を始めて30分・・・
全くもって進展無し！

何処を捜しても怪しい場所はない！ってか、ハンサムは一体何処で
何やってんだよ？

・・・俺はハンサムに連絡を取ろうとポケギアで電話をかけようと
した。

「・・・あつ（汗）電池がきれてる（汗）」

ポケギアの電池がきれていた。しまった！朝から充電してなかった
んだっけ（汗）

ガサツ！

その時俺の背後から物音が聞こえてきた！

俺はすぐに振り向いた！

「誰だ！」

俺はそう叫んだ。

そしたら一人の男が現れた・・・のは良いんだが・・・なんだこい
っ？

妙な格好をしているし、ヘアースタイルがおかっぱ（汗）今時おか
っぱって（汗）

「見たところ、お前はポケモントレーナーだな？」男が俺に質問し
てきた。

「だつたらなんだ？」

俺は挑発的に言った。

「こつするんだよ！行けゴルバット！」

妙な男がそう言ってモンスターボールを投げた！モンスターボール
が開いて白い閃光が発生、そして閃光が消えて中からポケモンが現

れた。

「ゴルバットか・・・タイプのにはエーフィが有利だけど・・・見たところたいした事はなさそうだな。ヒコザル、行ってくれるか？」

「ヒコ！」

俺がヒコザルに聞くと笑顔で答えてくれた。

そして俺の肩から飛び降りてゴルバットの前に向かった。

「やれゴルバット！翼で打つ攻撃！」

妙な男がゴルバットに指示するとゴルバットはヒコザルめがけて突っ込んできた。

「ヒコザル！穴を掘るで地面の中へ！」

「ヒコッ！」

ヒコザルは技の名前の通り、穴を掘って地面に潜った。これでゴルバットの翼で打つは当たらない。ゴルバットはヒコザルを見失って慌てている。「今だヒコザル！乱れひっかき！」

俺がそう叫ぶと地面からヒコザルが勢い良く飛び出した！

「ヒコヒコヒコヒコオオオー！」

ヒコザルは自分の手の爪を使ってゴルバットを連続でひっかいた！ゴルバットは痛がっている。効いてるな！

「何をしてるゴルバット！早くそいつを倒せ！翼で打つ！」

ゴルバットは痛みを我慢しながらヒコザルに向かって翼で打つ攻撃をしかけてきたが、ヒコザルは難無くそれを避ける。

「・・・そんな無茶な指示じゃあポケモンが傷つくだけだ。ポケモンを何だと思つてやる・・・」

「はあ？ポケモンは野望を叶える為の道具だ。それ以外に何かがある？」

俺は怒りを覚えた。

ポケモンが・・・道具だと？

「・・・ポケモンは道具なんかじゃない・・・友達だ、仲間だ！皆生きてるんだ！皆それぞれ自分の個性をもってるんだ！お前みたいな奴は・・・ポケモンを持つ資格はない！！！」

俺は男に怒鳴りつけた。「ヒコザル！最大パワーで火炎車だ！！」

「ヒッコオオオ！！」

ヒコザルは尻尾から出る炎を全開にした。そして身体を丸くして回転！炎が全身を包んだ！そしてその状態のままゴルバットに向かって突っ込んで行った！ヒコザルの火炎車はゴルバットに直撃した！ゴルバットは眼を回して倒れた。

「ちっ・・・使えないな・・・あばよクソガキ！」男は俺にそう言ううとゴルバットをモンスターボールに戻さずにそのまま逃げた！「なっ！？おい待て！？クソッ！エーフィ！アイツを追いかけてくれ！」

「フィ！」

エーフィは男を追いかけて行った。

「おい、大丈夫か？」

俺は傷ついたゴルバットに呼びかけた。

「・・・」

返事をしようとしてるみたいだ。だけど、上手く声が出せないようだ。

ヒコザルの火炎車が相当効いたみたいだな・・・

「ヒコ〜？」

ヒコザルがゴルバットを心配している。

「お前は優しいなヒコザル。」

俺はそう言いながらヒコザルの頭を撫でた。

「待ってるよゴルバット。今傷の手当てをしてやるからな。」

俺はいつもバックの中にポケモンが怪我をした時の為に応急処置が出来るように道具を持っているんだ。

「ちよつと染みるけど、我慢しなよ。」

俺は傷薬をゴルバットにかけた。これはスプレー式になっているんだ。

「・・・！？」

ゴルバットは痛がった。

「よし、後は包帯を巻けば・・・」

俺はゴルバットに優しく包帯を巻いてあげた。

「これでよし。もう大丈夫だよゴルバット。」

俺が優しく微笑むとゴルバットも微笑んだ。

「ピジョオオ！」

「フライイ！」

その時空から鳴き声が聞こえてきた。俺が空を見るとフライゴンとピジョットがいた。

「おっ！ここだフライゴン！ピジョット！」

俺が呼ぶとフライゴンとピジョットは近くに着地した。

「ガメー！」

「マニニュー！」

今度はカメックスとマニニューラがやって来た。

「どうだった皆、何かあったか？」

俺が聞くと皆は首を横に振った。

「そうか・・・じゃあ後はあの男を追ったイーフィだけだな。」

「タクミ！」

いきなり誰かが俺の事を呼んだ。振り向くとそこにはハンサムがいた。

「あつ先輩！遅いですよ！」

「すまんすまん！それで、何か解ったか？」

「まだ何も・・・ただ、妙な奴に襲われましたけどね。」

「なんだって!？」

「今イーフィが追っています。奴が何処に逃げたか解ったら戻ってきますよ。」

「そうか・・・ところでそのゴルバットはどうした？」

ハンサムは俺が手当てしたゴルバットを見ながら言った。

「こいつはさっき言った妙な奴の持ってたポケモンなんですが・・・使えない奴だって言っ捨てたんですよ。」

「なんと・・・可哀想に・・・」

「フイー！」

その時、エーフィが戻って来た！

「エーフィ！ 奴は何処に行った？」

「フイー、エーフィ！」 エーフィが向こう側に首を振っている。

「あつちか！ 先輩！ この子をポケモンセンターまで運んでくれませんか？ 俺はさっきの男を追いかけます！ 行くぞ皆！ エーフィ！ 案内してくれ！」 俺はゴルバットをハンサムに任せ、皆と一緒にさっきの男を追いかけて行った。

「あつおいタクミ！？・・・たくつ・・・」

エーフィの道案内で俺達がやって来たのは・・・

「トバリシティ！？ 戻って来ちゃったよ（汗）」

そう。俺達がやって来たのは最初に聞き込み調査していたトバリシティだった。

「エーフィ！ 本当にこっちにあの男が来たのか？」

「エーフィ！ フィツ！」 あつ俺が疑ったからエーフィがそっぽ向いちゃった（汗）

「あゝごめんエーフィ（汗）疑った俺が悪かったよ（汗）」

「フイー？」

本当に？ って言いたげな表情で俺を見ているエーフィ。

「本当だよエーフィ（汗）それで、奴は何処に向かったんだ？」

俺がエーフィに尋ねるとエーフィはある建物を見た。

「あそこか？・・・あれ？ あそこは確か・・・5年前ギンガ団のアジトだった建物じゃないか？」 エーフィが見てる建物は昔ギンガ団のアジトだった建物だ。今は廃墟になつてる筈だけど・・・
じーっ・・・

あつエーフィがすごい俺の事を見る（汗）

「信じてるってエーフィ（汗）よし、行くぞ皆！」俺達は元ギンガ団アジトだった建物に向かう・・・とその前にハンサムにポケギアで連絡を入れておこう・・・って忘れてた！電池がきれてるんだった（汗）

「仕方ない。ピジヨット。お前はポケモンセンターで先輩が来るのを待っていてくれ。先輩が来たら一緒に来てくれよ。」

「ピジヨ！」

ピジヨットはポケモンセンターに向かった。

「じゃあ今度こそ行くぞ皆！」

俺達は元ギンガ団アジトに向かった。

元ギンガ団アジトの中に入ったけど、中は荒れ放題。とても人が居そうな感じはしないけど・・・

「うわぁ・・・随分とホコリが・・・ん？」

俺が床を見ると、誰かの足跡があった。

多分さっきの男の足跡だろう・・・俺達は足跡を辿る。

「・・・ってあれ？壁があるだけじゃんか？」

どういう訳か足跡は壁に向かっていてた。

・・・こういうパターンだと、この壁の向こうに隠し通路があるんだよな。何処かにスイッチみたいなのが・・・

俺は辺りにスイッチが無いか探した。

「あゝめんどくさい！こうなったら一番簡単なやり方で！カメックス！」

「ガアアメエエー！！」カメックスが壁に向かって体当たりした。そしたら壁は壊れて奥に隠し通路が現れた。

「よし、行くぞ皆・・・」俺達は隠し通路の中を進んで行った。

しばらく進んで行くと扉が見えてきた。

中からは何か話声が聞こえてくる。

「・・・実験体105の様子はとうじゃ？」

「・・・こいつもダメですね。完全に自我を無くしてます。」

「そうか・・・あともう一息な筈なのじゃが・・・何が足りないのじゃ？」実験体？自我を無くして？何を言ってるんだ？・・・声が聞こえなくなった。

「よし、侵入するぞ・・・」

俺達は扉を開けて中に侵入した。

そこはさつき入った建物みたいにホコリだらけでは無く最近出来たような感じがする施設があった。

「ここは一体なんなんだ？」

「フイー！」

エーフィが俺を呼んだ。

「エーフィ、そんな大きな声を出すと見つかって・・・」

俺が注意しようとエーフィに近づいた時、俺は信じがたい光景を眼にした。ガラスの向こう側に檻に入れられたポケモンがたくさんいたのだ！

「これは!？」

俺は思わず叫んでしまった。

「誰だ!？」

やばい!？見つかった!？

謎の集団が俺達を囲んだ。・・・うわぁ（汗）皆揃って妙な格好してやがる（汗）しかも全員おかつぱ（汗）・・・ん？奴らが来ている服・・・良く見るとGとマークが書かれている。

「そのGのマーク・・・お前らギンガ団か!？」

「正確にはネオ・ギンガ団じゃがのう・・・」

奥から妙なじいさんがやって来た。

「ネオ・ギンガ団だと?てか、オッサン誰だ?」「ワシの名はブルート。ネオ・ギンガ団の総帥じゃよ。」

このオッサンがボス!?

「お喋りはここまでじゃ。お前さんにはワシの実験材料になってもらう!やれお前達!」

ブルートのオッサンが命令すると周りの連中が俺達に向かってきた!

「へっ!俺は簡単にやられないぜ!カメックスはハイドロポンプ!

イーファイはサイコネシス!マニニューラはシャドーボール!フライ

ゴンは破壊光線!ヒコザルは火炎放射!」

俺が皆に指示すると皆その通りに技を出して攻撃した。ネオ・ギンガ団の連中は皆吹き飛ばされた。

「ほう、中々やるのう。」オッサンは余裕の表情だ。

「言い忘れてたが、俺は国際警察なんだ。ネオ・ギンガ団総帥ブルート!あんたを逮捕する!」

「ムフフフ・・・そうか・・・国際警察か・・・悪いが、お主にワシを捕まえる事は出来んぞ!来い!ワシが作った実験体達よ!」

ブルートが叫ぶと奥からそろそろとポケモン達がやって来た!

だが、それよりも気になったのが一つ。ワシが作った実験体?どういう事だ?

「あんた・・・このポケモン達の事を自分が作ったって言ったな?どういう意味だ?」

俺はブルートに聞いた。

「ムフフフ・・・お主、恐らくこのトバリシティで失踪した子供達の事を搜していたのであろう?」

「だからなんだ?」

「目の前におるじやろう。」

はあ?何を言ってるんだこのオッサン?目の前にいるのはポケモン

じゃないか。・・・待てよ・・・まさか作っただってそういう意味か！？だが、あり得るのかそんな事が！？

「まさか・・・」

「ムフフフ・・・お主が考えている通りじゃ。そう、このポケモン達は元々人間なのじゃよ！ワシは人間をポケモンに変える実験をしていてのう！」人間を・・・ポケモンに変えるだと！？

「何故そんな事を！？」

「簡単な事。トレーナーがいなくても高度なバトルが出来るポケモン軍団を作る為じゃよ。人間の知能がポケモンに備わればそれも可能。じゃが、この実験はまだ不完全でのう。ポケモンになったこいつらは人間だった頃の記憶は全て無くしておる。つまり、野生のポケモンとなんら変わらんのじゃよ。こいつらは失敗作じゃ。」

「って俺が喋っている間にポケモンになってしまった子供達が俺達を囲んでいた！」

「くっ！？どうすれば良い！？子供達を傷つける訳には・・・」

「ガメツ！」

カメックスが子供達に攻撃しようとした！

「ダメだカメックス！攻撃しちゃダメだ！」

「ガ、ガメ！？」

カメックスは攻撃するのを止めた。それと同時に子供達が俺達にしがみついていた！？

「や、止めるんだ君達！？」俺は叫ぶが子供達は離れてくれない！

「無駄じゃ。そいつらには特別な薬を打ってある。ワシ以外の言葉は聞こえていない。さて、しっかり捕まえているよお前達。」

ブルートが胸ポケットから何か妙な液体が入った注射器を取り出した。

「な、何を！？」

「決まっておろう？お主もポケモンに変えるんじゃよ。お主は将来ワシ達ネオ・ギンガ団の大きな障害になる可能性がある。じゃから

ポケモンにして人間の記憶を消してしまうのじゃよ・・・」

ブルートが近づいて来た！離れようにも子供達がしっかりと俺を掴んでいるから動けない！

「それっ！」

ブルートは俺に注射した！液体が俺の体内に入っていく！

「ぐっ！？」

すぐに俺の身体に異変が起きた！身体が・・・熱い！まるで炎に焼かれてるようだ！

「ううう！？ぐ、ぐあああ！？」

更に俺の身体に激痛が走った！あまりの激痛に俺は意識を失ってその場に倒れた・・・

「ムフフフ・・・さらばじゃ、国際警察の若造よ・・・」

第二話トバリシティ！ギンガ団の復活！その名はネオ・ギンガ団！（後書き）

第二話完成です。

第三話 目が覚めたら・・・

『・・・ミ・・・き・・・』

・・・誰かの声が聞こえる・・・誰だ？

『・・・きてよ・・・タクミ・・・』

聞きなれない声だ・・・だけど、なんでだろう？前から知ってるよ
うな気がする・・・

『タクミ！お願いだから、目を覚まして！』

『・・・うつ・・・』

俺はゆっくりと眼を開けた。俺が目覚めた場所は清潔にされた
部屋のベッドの上。

・・・あ・・・頭が・・・ガンガンする（汗）

俺は手を頭に当てながら身体を起こした。

・・・ん？なんだ・・・この違和感・・・

俺は妙な違和感を覚えた。まず、視線の高さ。

普段起きた時と何か違う感じがした。

それと、身体の間感。

自分の身体なのに自分の身体じゃない感じがした。『良かった！目が
覚めたんだね！タクミ、僕が解る？』

また誰かが俺に話しかけてきた。

一体誰だ？

俺は声が聞こえた方を見た・・・

『タクミ？』

・・・えっ？えっ？

俺は戸惑った。

何故なら声がする方を見たらそこにいたのはヒコザルだったからだ。
・・・今話しかけたの・・・ヒコザルか？ってそんな訳ないか。だ
って、ポケモンが喋る訳・・・『僕の顔に何かついてる？』

本当に喋ったあ！？ってわわわ！？

ドテッ！

俺はびつくりした拍子にベッドから落ちてしまった。

『タ、タクミ！？大丈夫！？』 な、何でヒコザルが喋ってるんだ！？
って俺は言っ たつもりだった。 だけど、俺の耳に聞こえてきたのは・
・

「ブ、ブイブイ！？・・・ブ、ブイ！？」

聞こえたのはポケモンの鳴き声だった！ だけど、ちゃんと何を喋ったのかは理解出来る。

俺は思わず手を口に当てた。 だけど、それでまた俺は戸惑う事になる。

・・・手が！？

俺の手は人間の手ではなくなっていた。 動物の前足のようになっていた。 そしてベージュ色の毛で覆われている。 おまけに肉球まで（汗）

そしてさっきからお尻の方が違和感を感じる。

俺が後ろを見るとそこには2本の尻尾があった。 極めつけに俺の首の周り。 何やら黄色い物が見えた。 俺が呼吸すると微妙に膨らんだりする。

『お、俺・・・俺は・・・』

「ブ、ブイ・・・ブイ・・・」

やはり鳴き声が聞こえる。

『タクミ！ ねえ大丈夫？』 さっきのヒコザルが俺を心配そうに見てる。

だけど、なんでこのヒコザルは俺の名前を・・・ 『何で・・・俺を知ってるんだお前？』

『何でって・・・そりゃ・・・ってタクミ！？ 自分の事が解るの！？』

びつくりした表情で俺に聞いてきたヒコザル。

『当たり前だ・・・自分の事が解らなかったら記憶喪失だろそれ・・・』 『じゃ、じゃあさ！ 僕の事解る？ 僕はタクミのヒコザルだよ！』

俺のヒコザル？・・・そういえば俺が持っていたヒコザルと特徴が似てるような・・・

『・・・本当に俺のヒコザルって言うなら・・・俺と初めて出会った場所は知ってる筈だな？』

『当たり前だよ！ナナカマド博士の研究所だよ！僕は一目見てタクミを好きになっただからずっとくっついてたら、博士がタクミにこのヒコザルを育ててくれないか？って言うてくれたんだ！それでタクミは僕と一緒に連れてってくれたんだよ！』・・・俺と俺のヒコザルしか知らない事を細かく・・・

『本当に・・・俺のヒコザルなのか？』

『そうだよ！良かった、タクミが僕の事覚えていてくれて・・・』
『そう言っただけでヒコザルが俺の事を抱きしめた。』

『・・・心配かけたみたいだな・・・ごめんな、ヒコザル・・・』
俺もヒコザルを抱きしめた。

『・・・なあヒコザル、今の俺の姿って・・・ポケモンなのか？』
もう解っている事だけど、聞かずにはいられなかった。

『うん・・・今のタクミはブイゼルだよ。』

やっぱり・・・

『・・・あのプルトのオッサンが俺に注射したあれが・・・俺をこの姿にしたのか・・・あっそうだ！カメックスや他のポケモンは！？』

『カメックスさん達は別の部屋だよ。あの時、タクミが気を失ったあとあの嫌な人間は他の人間達と一緒に何処かに行っちゃった。だけど、ポケモン達だけは残ってタクミの事を襲おうとしたんだ。だから、皆でタクミを守った。その時に、皆怪我しちゃって・・・』
『・・・あっ！』

良く見るとヒコザルの手には包帯が巻かれていた。

『・・・俺のせいで怪我を・・・』

『そんな顔暗い顔しないでよ！僕達がタクミを守ろうとしたのは当然の事だよ。だって、皆タクミの事が好きなんだもん！あつても

一番タクミの事が好きなのは僕だけだね」

笑顔でそう言ったヒコザル。

ガチャッ！

誰かが部屋に入って来た。ジョーイさんだ！

って事はここはポケモンセンターの中か・・・

「あら？目が覚めたのねブイゼル！良かった。」ジョーイさんは俺が本当は人間だって知らないみたいだな・・・まああの現場にいたのは俺のポケモン達とネオ・ギンガ団の連中だから仕方ないけど・・・

「ジョーイさん、少しこのブイゼルとヒコザルと一緒にいてもよろしいでしょうか？」

この声！俺はジョーイさんの後ろにいる人を見てみた。

やっぱりそうだ！ハンサム！

「別に構いませんが・・・まだこの子は回復出来てませんから無茶はさせないで下さいね？」

「解っています。」

ジョーイさんが部屋から出ていった。

「・・・先輩。」

「・・・ブイ。」

ダメだ・・・何度やつても人間の言葉が出せない・・・おれがタクミだって知らせないと・・・

「目が覚めて良かったな。タクミ・・・」

「ブイッ!？」

今、俺をタクミって!？

「やっぱりな。俺がタクミのピジョットとジュンサーさんと一緒に駆け付けた時、タクミの服の中にいるお前をタクミのポケモン達在必死に他のポケモン達から守っていたからもしやと思ったが・・・本当にタクミなんだな？」

俺は首を縦に振って頷いた。

「・・・タクミ・・・一体あの建物の中で何があったんだ？」

ハンサムに伝えないと。あの建物で起きた事を！『何処かに紙とペンがあれば・・・』

今の俺は人間の言葉を話す事が出来ない。

だから、紙に字を書いてあの建物で起きた事を伝えようと俺は考えたんだ。それで部屋の中に紙とペンが無いか探してるんだが・・・ん？あれは！俺が見つけたのは部屋の片隅に置かれている俺の服とバック。バックの中には俺がいつも使っているメモ帳とペンがある。それを使えば！

俺はバックがある所に行こうと思い歩きだそうとした。だが、思うように歩く事が出来ずに俺はこけてしまった。

なんだ？上手くバランスが取れない？

俺はもう一度立ち上がってバックがある所に行こうとした。だけど、またこけてしまった。

『タクミ！無理しないで！』

ヒコザルが俺の事を心配して傍に来てくれた。

『悪いんだがヒコザル、俺のバックからメモ帳とペンを取ってきてくれないか？なんだか上手く歩けないんだ・・・』

『解った！』

ヒコザルが俺のバックまで行って中からメモ帳とペンを取ってきてくれた。

『はいタクミ！これどうするの？』

そう言いながらヒコザルは俺にメモ帳とペンを渡してくれた。

『先輩にあの建物で起きた事を伝えるんだ。先輩はポケモンの言葉が解らない、だからこれで文字を書いて先輩に伝えるんだ。』

俺はメモ帳を開き、ペンを持つとした。だけどここで問題発生。今の俺の手は人間みたいに五本の指が無い。猫や犬みたいな前足なのだ。だから、頑張ってもペンを握る事が出来ない。

そこで俺は両手を使ってペンを挟むように持ち、文字を書こうとした。

だけど、上手く両手に力が入らない。

その為文字が上手く書けない。

何度も挑戦するけど、やはり上手く書けない。

「もう良いタクミ、無理するな。」

ハンサムが俺を止めた。「……あの建物で何かが起きた……お前のその必死の姿を見れば解る。」

『先輩……』

「ブイ……」

「俺はあの建物を詳しく調べてみる。もしかしたらお前を元に戻す方法が解るかも知れん。」

そう言つてハンサムは部屋から出ようとした。

「ブイブイ！」

「タクミ、お前は休んでいろ。必ず俺がお前を元に戻す方法を見つけてやる！」

ハンサムは部屋から出て行った。

『先輩……』

『タクミ。ベッドで休もう。ほら、僕が手伝つてあげるから。』

俺はヒコザルに支えてもらいながらベッドに戻った。

『……俺……人間に戻れるのかな……』

俺は不安だった。もしかしたら一生このまま人間に戻れずポケモンのままなのかもしれない……俺は思わずそんな不安を口にしてしまった。

『……タクミ……きつと戻るよ。人間に。だから、元気出して？』ヒコザルが俺の事を心配してそう言ってくれた。『……優しいんだな、ヒコザルは……なあヒコザル。』

『うん？』

『……他の皆は……今の俺の姿を見てどう思ふかな？今までのように……俺と一緒にいてくれるのかな？』

俺の不安はもう一つあった。それは、カメックスやピジョット達だ。今の俺は人間じゃなくポケモンだ。ポケモンがポケモントレーナー

なんて聞いた事がない。もしかしたら皆俺から離れて行くかもしれない・・・

『どんな姿になってもタクミはタクミだよ。そうでしょ？だから、タクミがブイゼルになっても皆のタクミが大好きって気持ちが変わらないと思うよ。』

『・・・だと・・・嬉しいな・・・悪いヒコザル・・・俺・・・なんだか眠くなってきたよ・・・』俺は強烈な睡魔に襲われた。色々な事が起こり過ぎて疲れたのかな？

『眠って良いよ。僕が傍にいるから。』
『・・・』

俺はすぐに眠りに落ちた。

第三話 目が覚めたら・・・（後書き）

第三話完成です。

第四話 仲間（前書き）

俺・・・人間に戻れるのかな・・・

第四話 仲間

『・・・うん・・・』俺は目を覚ました。

どれほど眠っていたのだろうか？窓から見える陽射しが眩しい。

『・・・結構眠ってたみたいだな・・・ん？』

俺のすぐ隣でヒコザルが幸せそうな顔をして眠っていた。今気がついたけど、ヒコザルは俺の手を握っていた。

『・・・タクミ・・・ムニヤムニヤ・・・』

夢の中で俺と何かしてるのかな？

『・・・起こすのは可哀想だな・・・』

俺はヒコザルを起こさないように静かに自分の身体を起こした。

『・・・これからどうしようか・・・』

俺は考えた。これからどうするのかを。

・・・そういえば、先輩はまだあの建物の中にある施設を調べてるのかな？先輩は俺に必ずお前を元に戻す方法を見つけてやるって言うてくれたけど・・・

『・・・人に頼ってばかりじゃダメだな。自分の事なんだから自分で調べなきゃ・・・』

俺は決めた。

あの建物の中にある施設に行って何か人間に戻る方法が無いか探す事を。俺はヒコザルが起きないようにそつと握られていた手を離してベッドから降りた。そしてドアを目指して静かに歩こうとした・・・したんだが、バランスが上手く取れずにこけてしまった。

『イタタタ・・・なんで上手く歩けないんだ・・・やっぱ二足歩行はこの身体には合わないのか？』俺は試しに両手を地面について四足歩行で歩いてみる事にした。

ちよつときこちないけど、二足歩行の時よりは歩き安い。俺はそのままドアの前まで歩いて行った・・・のは良いんだが、今の俺は

人間じゃなくてブイゼルだ。当然人間よりブイゼルの方が身長が低い。だから、ドアの取っ手がやたら高い位置にあるように感じる。

『……届くかな？』

俺はドアに寄りかかって思いっきり背伸びした。そして手を伸ばす。なんとかギリギリ手が届いてドアを開ける事が出来た。

部屋から出たあと周囲を確認した。ジョーイさんに見つかったらきつと部屋に連れ戻されると思ったからだ。

『……誰もいないな。』まだ朝早い時間だからであろう。廊下には誰もいなかった。それが確認出来たあと俺は出口目指して歩きだした。

走って行けば数秒で出口まで行けるんだろうが、まだ不慣れな身体だから走るのは止めておこう。

俺はポケモンセンターから外に出た。

そして周りの街の景色を確認した。

『やっぱり……ここはトバリシティのポケモンセンターだったんだな。』近くにトバリデパートが見えたからすぐに解った。

『ここからだあの建物は北の方角だな。』

俺は元ギンガ団アジトの建物に向かった。

だけど、周りの人達に見つからないように慎重に。普通トバリシティにブイゼルなんていない。だから、ポケモントレーナーに見つかりでもしたら俺の事をゲットしようとポケモンバトルを仕掛けてくると思ったからだ。もしそうなったら、俺は技の出し方を知らないからあつという間に捕まってしまう。

『……右良し……左良し……』

俺は誰もいない事を確認してから元ギンガ団アジトに通じてる道路に出た。そして俺は元ギンガ団アジトに向かおうとした。だけどそ

の時、俺は誰かに見られているような視線を感じた！

『まずい！？誰かいたのか！？』

俺は慌てて周りを確認する。だけど、何回確認しても誰もいない。

『……気のせい……だったのか？』

『……何処をみている？』

突然背後から声が聞こえた！俺は慌てて後ろを振り返る。そこにいたのはダークポケモンのデルビルだった。

見たところ近くにトレーナーはいないようだ。

という事はこいつは野生のデルビルか……。でも確かデルビルの生息地はトバリシティから出たすぐ近くの214番道路だった筈だな？食べ物探しに街まで来たのか？

『……ここら辺では見ない顔だな？』

デルビルは低い声で俺に言った。……。結構迫力あるな（汗）

『お、俺はタクミって言うんだ。ちょっとあそこに見える建物に行こうとしてたんだ……。』

『……。そんな事は聞いてない……。俺は今気分が悪い……。お前を使って気分転換させてもらおうか！』

デルビルがいきなり俺に噛みつく攻撃を仕掛けてきた！

『うわっ！？』

俺は足を滑らせてその場でこけてしまった！だけどそのおかげで噛みつく攻撃は俺に当たらなかった。

『いきなり何を！？』

『気分転換だ……。朝飯にありつけなくてイライラしてんだよ……。くらえ！』

デルビルの鋭い牙が炎を纏った！これは……。炎の牙！？デルビルはかなり素早く、炎の牙が俺の腕に食い込んだ！

『ぐっ！？』

激しい痛みが俺を襲った！更に痛みと同時に強烈な熱さも俺を襲う！『オラッ！』

デルビルは俺に噛みついたまま俺を振り回し始めた！それにより更

に牙が腕に食い込んでいく！

そしてデルビルは俺を放り投げた！俺は近くにあった電柱に叩きつけられてしまった。

『ううう……』

やべえ……意識が朦朧としてきやがった……眼が霞む……

『……運が悪かったなお前……これで最後だ！』

デルビルの口から炎が溢れだし始めた。

火炎放射か……

ピジョット達……いつもバトルしている時……こんな痛みに耐えていたのかな？

俺は急にピジョット達の事を考えた。

『くたばれ！』

デルビルの火炎放射が俺に放たれた！

ダメだ……

俺は思わず目を瞑った。……あれ？

いつまでたっても俺に火炎放射の炎がやって来ない。不思議に思ってた俺は目を開けた。そして俺の目に飛び込んできた光景はデルビルの火炎放射を受け止めて俺に当たらないように必死になっているヒコザルの姿だった！『なんだお前は！』

『……ヒコザル……なんで……お前がここにいるんだ？』

『タクミを捜しに来たからに決まってるでしょ！今は話しかけないで！』そう言つてヒコザルは身体に力を入れ始めた。

そしてヒコザルは火炎放射を身体に纏わせてぐるぐると回転しだした。

これは……火炎車か？

ヒコザルはデルビルの火炎放射を利用して火炎車を発動させた！そしてヒコザルはそのまま前進してデルビルに体当たり！デルビルは吹き飛ばされた！

『タクミ！』

デルビルを倒したと思ったヒコザルが俺に駆け寄つて来た。

『・・・ヒコザル・・・お前・・・』

『タクミのバカ！！なんで勝手に部屋を脱け出したりしたんだよ！
！凄く心配したんだから！』

ヒコザルがいきなり俺を怒鳴った。

『・・・ごめんな・・・心配かけて・・・俺・・・あの建物に行つて・・・何か人間に戻れる方法が無いか・・・調べようって思ってた・・・』

『そんなの、あのハンサムって人間に任せれば良いじゃないか！僕、本当に心配したんだから・・・起きたらタクミがいなくなってるんだもん・・・皆と一緒に必死で捜したんだから・・・』

ヒコザルの眼から涙が溢れだした。

『・・・ごめんな・・・ヒコザル・・・』

『・・・もう良いよ。それより、早くポケモンセンターに行こう？怪我を治してもらわなきゃ。それに皆心配してるよ。』 『・・・解った。』

ヒコザルの肩に俺は腕を掛けて支えてもらいながら立ち上がった。

『・・・待て貴様ら！』 突然誰かが叫んだ！

声が聞こえた方を振り向くとさっきのデルビルがいた！

『嘘！？僕の火炎車を受けたのにピンピンしてる！？』

『・・・特性の・・・貰い火だ・・・』

『貰い火？』

『相手の炎技を吸収して・・・自分の炎技の威力を上げる特性だ・・・デルビルには早起きと貰い火の二つの特性があるんだが・・・このデルビルは貰い火だったみたいだな・・・』

『そういう事だ！お返しだ！火炎放射！』

デルビルは貰い火で強化した火炎放射を放った！さっきの火炎放射よりも炎の強さが増している！『タクミは僕が守るんだ！』

ヒコザルが俺を守ろうとして火炎放射に向かって行った！

『タクミを守るのはあなただけじゃないのよ！サイコネシス！』

突然火炎放射がまるで時間が停められたように停止した！

『誰だ!』

デルビルが怒鳴る。

『うるさいわねえ。少し黙ってよね!』

デルビルに負けずに言い返すこの度胸。一体誰だ?俺はデルビルが睨みつけている相手を確認してみた。

・・・・あの額の宝玉・・・・それにあの綺麗な紫色をした毛並・・・・
『・・・エーフィ?』

俺がそう呼ぶとエーフィがにっこり笑ってこっちを見た。

『搜したわよダーリン 人間だったダーリンはイケメンだったけど、ブイゼルのダーリンはすごくキュートで可愛いわね 』

あの笑顔は間違いなく俺のエーフィだ!だけど、ダーリンって(汗)まさかいつも俺の事をああいう風に言ってたのか?

『俺を無視してなに話してんだデメエー!!』

デルビルがエーフィに向かって行った!

まずい!相性的に最悪だ!エスパータタイプの技を中心に使うエーフィにとって悪タイプのデルビルは天敵なんだ!

『砂嵐!』

『吹き飛ばし!』

エーフィに向かって行ったデルビルに突然砂嵐と凄まじい突風が襲いかかった!デルビルは堪えようとしたが砂嵐と吹き飛ばしのコンビネーションは強力でデルビルは吹き飛ばされた!

今の砂嵐と吹き飛ばしは一体?俺は技が放たれた方を見た。

『ナイスタイミング さすが私の部下1号と2号 』

『誰が部下だ!しかもなんだよ1号と2号って!』

『そつだよエーフィ。どっちが1号でどっちが2号なのか解らないじゃないか。』

『・・・フライゴン、ツツコムとこころが違っぞ(汗)』

そこにいたのは俺のフライゴンにピジョットだった。

『・・・くそ、どいつもこいつも邪魔しやがって!こうなったら容赦しねえぞ!』

『ほう、どう容赦しねんだ？』

デルビルが振り向くとそこには両肩のハイドロキャノン砲をデルビルに向けているカメックスと鋭い爪をデルビルに向けているマニユーラがいた。『・・・カメックス・・・マニユーラ・・・』

『ようタクミ、搜したぜ！』

『・・・無事でなによりだタクミ。』

やつぱり・・・俺のカメックスとマニユーラだ。俺の手持ちポケモン全員いる・・・皆、俺の事を心配して搜してくれてたんだ・・・

『お、覚えてるよ！』

デルビルはそう言つて逃げ出した。

『皆助かったよ！』

ヒコザルが皆にお礼を言っている。

『・・・当たり前的事をただただ。それよりもタクミ、怪我は大丈夫か？』

『・・・』

俺は答える事が出来なかった。怪我が痛いから声が出せない訳じゃない。皆が俺の事をこんなにも心配してしてくれた事が凄く嬉しくて感動していたからだ。

もう皆俺と一緒にいてくれないんじゃないか？

そんな事を思つてたから・・・

『タクミ、泣いてるの？』ヒコザルが俺の顔を見ながら言った。

気がついたら俺は涙を流していた。

『ちよつとヒコザル！あんた私のダーリンに何したのよ！？』

エーフィがヒコザルの事を怒鳴った。

『ええ！？ば、僕なにもしてないよー！？』

ヒコザルは必死に自分は何もしてないとアピールしている。

『エーフィ、あんまヒコザルをいじめるなよ？』『何よピジョット

！部下1号のくせに！』

『誰が部下だよ！』

『ピジョットが部下1号だったんだあ！じゃあ僕が2号って事だね！』

・・・フライゴンって結構天然なんだな（汗）

『また始まったよ（汗）お前らしい加減にしとけよ？タクミが困ってるだろ。』

カメックスがピジョット達のケンカを止めた。

『あつ！ご、ごめん（汗）』

『すまん・・・（汗）』

ピジョットとエーフィは申し訳なさそうに言った。

『・・・良いよ・・・いきなり泣いちゃった俺が悪いんだし・・・俺、嬉しかったんだ。皆が俺の事を心配して捜してくれた事がさ・・・』

『何言ってるんだよ？タクミが居なくなったら心配で捜すに決まってるんだろ？』

ピジョットがそう言ってくれた。

『・・・俺・・・ポケモンに・・・ブイゼルになっちゃっただろ。』

もしかしたら皆俺から離れて行くんじゃないか？って不安だったんだ。ポケモンがポケモントレーナーなんて聞いた事が無いだろ？だから・・・』

『・・・関係ない。』

『えっ？』

マニニューラ？

『・・・お前が例えどんな姿になってもタクミはタクミだ。俺達の好きなタクミだ。だから、離れるなんてあり得ない・・・皆も同じだ。』

マニニューラがそう言うと言った。

『・・・皆・・・』

俺はまた涙を流してしまった。

『タクミ、もう泣かないで。ほら、ポケモンセンターに行こう？怪

私の治療をしなきゃ。」

ヒコザルが手を差し伸べてくれた。俺はその手を掴んだ。

「・・・皆、ありがとう・・・」

俺は皆と一緒にポケモンセンターに戻って行った。

第四話 仲間（後書き）

第四話完成です。

第五話 幼馴染み（前書き）

嬉しかった。

皆、俺がポケモンになっても関係無いって言ってくれた事。

第五話 幼馴染み

皆に助けてもらったあと俺はポケモンセンターまで皆に運ばれた。そしてジョーイさんに勝手に部屋を脱け出した事をかなり怒られてしまった（汗）

まあ当然と言えば当然なんだが・・・

俺はまた何日かポケモンセンターで治療を続ける事になった。

そしてジョーイさんは俺の仲間達であるカメックスやヒコザル達を俺と同じ部屋にしてくれた。

何故かと言うと皆俺の事を心配して中々俺から離れようとしなかったからだ。

正直嬉しい。

皆と一緒にいられる事。

『やっぱりブイゼルになったダーリンって可愛いわねえ』

エーフィが俺に寄り添いながらそう言った。

ちなみに俺はベッドの上にいる。

ジョーイさんに安静にしてなさいと言われているからだ。

『エーフィ先輩、タクミはまだ怪我が治ってないんだからそんなに傍にくっついていたらダメだよ！』ヒコザルがベッドの下からエーフィを注意している。

『何よヒコザル、私をダーリンから離れさせてダーリンを独り占めしようたってそうはいかないわよ！部下1号に2号！』

ヒコザルをちよつと懲らしめてやりなさい！』

ピジョットとフライゴンを見ながらエーフィが言った。

『だから誰が部下だ！』『えっと、僕が2号でピジョットが1号だったような・・・』

『いやフライゴン、俺が言いたいのはそのいう事じゃないんだが（汗）』

・・・フライゴンって本当に天然なんだな（汗）

『また始まったよ（汗）』カメックスは若干呆れた表情をしている。

『・・・好きにやらせてやれ。いつもの事だ。』ベランダの手すりに座って外の景色を見ながらマニニューラが言った。

クールだなあマニニューラは。

皆と一緒にいられるのは嬉しいんだが、一応俺は怪我人・・・いや今の俺はブイゼルだから人じゃないか？

まあとにかく、俺は怪我してるんだから静かにして寝たいんだが・

・

いつもこんな感じで賑やかだから寝ようにも寝られないんだよな（汗）

でも、静か過ぎるよりはマシかな。

それから数日。

俺の怪我はまだ完治してないけどジョーイさんがもう動いても良いと言ってくれた。

何日もベッドの上にいたからもう身体を動かしたくてしょうがなか

つたから俺は嬉しかった。

『タクミ、ゆつくりと前に進んでみて。』

『お、おう。』

俺は皆に手伝ってもらいながら二足歩行で歩く練習を始めた。

確かに今の俺はポケモンだけど、本当は人間だ。やっぱり人間らしい事はしたい。

『・・・おわっ!?!』

ドテッ!

俺は躓いてこけた。

『大丈夫タクミ!?!』

ヒコザルが慌てて俺の所まで駆け寄って来た。

『イテテテ・・・だ、大丈夫だ。くそ、なんで上手く歩けないんだ?』 『ねえダーリン。尻尾を上手く使うのよ。』

エーフィが俺の隣まで来てそう言った。

『尻尾を?』

『そつ。尻尾を使ってバランスを取るの。』

今のダーリンの歩き方を見てたら、尻尾が床についたままだったから。

今度は尻尾を床から離すように意識して歩いてみて。』

尻尾を床につけないように意識してか・・・

俺は尻尾の方に力を入れて床から離そうとしてみる。

だけど、人間だった時には当然尻尾は無かったからどうやってやれば良いのが全く解らない。

『自分の手足みたいに考えれば自然と動かせる筈よ。』

『自分の手足みたいにか・・・』

俺は難しい事は考えないようにして尻尾に力を入れてみた。

すると、尻尾がふつと床から離れた。

俺はそのまま歩いてみた。そしたら人間だった時みたいに普通に歩く事が出来た。

『おっ! 歩ける! 歩けるぞ!』

『ねっ？ちゃんと歩けたでしょ。でもさすがダーリン 飲み込みが早いわね 』

エーフィが俺に寄りかかってきた。

『エ、エーフィ？』

こういうのはどう対処すれば良いんだろう（汗）

『エーフィ先輩、タクミが戸惑ってるから離れた方が・・・』

ヒコザル、そういう事言うとまた・・・

『ダーリンは私のものよ！』

やっぱりな（汗）

しばらくヒコザルとエーフィの俺の取り合い？が続いた。

それでまたピジョットやフライゴンが巻き込まれ、カメックスとマニョーラは巻き込まれないように遠くで静観。

・・・俺は皆の事を理解していたつもりだったが、まだちゃんと理解出来て無かったんだな。
でも、俺がポケモンになって皆の言葉が理解出来るようになった事でより皆の事を知る事が出来る。

ガチャッ！

誰かが部屋に入ってきた。誰だ？

「やつほゝ タクミっち」

はっ！？この力が抜けるような喋り方は！？

『マコト！？』

「ブイブイ!？」

「あら〜ハンサム先輩が言ってた通り〜本当にポケモンになっちゃったのね〜？」

「おわっ!？」

マコトはいきなり俺を抱き上げた。

「でも〜ポケモンになった〜タクミっちも〜イケてるよね〜？」

「うわ〜フワフワしてて気持ち良いね〜」

「ブ、ブイ……」

く、苦しい……

マコト、抱きしめる力が強いぞ（汗）

「あ〜ごめんねタクミっち〜」

マコトは俺を降ろした。はあ〜苦しかった（汗）

でもなんでマコトがここに？

「なんで僕がここに来たんだって顔してるね〜？」

良く解ったな？

「実は〜ハンサム先輩に〜タクミっちの力になってやってってくれて

〜頼まれたんだよね〜」

ハンサムに？

ってかマコト、その喋り方なんとかならないのかよ（汗）

「それじゃ〜早速出発しようか〜 もうジョーイさんには話してあ

るんだよね〜」

マコトは俺の手を掴んで部屋から出ようとした。『ちよっ!？何処

行くんだよマコト!？』

「ブッ!？ブイブイブ!？」当然俺の言葉はポケモンの鳴き声だからマコトには理解出来ていない。

「ほら〜皆もおいで〜 置いてっちゃうよ〜？」マコトがそう言う

とカメックス達は慌ててこっちに来た。

「OK〜 それじゃ出発〜」

「OK〜 それじゃ出発〜」

一体何処に行くんだよ？

第五話 幼馴染み（後書き）

第五話完成です。

第六話 人間に戻る方法を求めて。(前書き)

マコトの奴一体何処に連れてく気だ？

第六話 人間に戻る方法を求めて。

幼馴染みのマコトに連れられて俺はある場所にやって来た。

ちなみに俺のポケモン達はマコトがモンスターボールに戻してくれている。

「着いたよタクミっち。ここが僕のおじさんの家だよ。」

ヨスガシティから南側にある212番道路。

そこに別名ポケモン屋敷って言われる屋敷があるんだ。

俺とマコトは今その屋敷の前にいるんだが・・・おじさんの家って？

「実はここに住んでる。ウラヤマさんって言う人が僕のおじさんなんだよね。」

初耳だ(汗)

でもなんでマコトはそのウラヤマさんって言う人の家に俺を連れて来たんだ？

「ムフフ。なんでここに連れて来たんだって考えてるね？」

それは中に入るまでは秘密だよ。」

なんだか楽しそうだなマコト？

ってか、マコトは俺の心を読んでるのか？

俺が疑問に思った事を次から次へと説明するとは・・・

「今、なんで俺が考えてる事が解るんだ？って思ったでしょ？」

「ああ。」

「ブイ。」

俺は頷いて答えた。

「タクミっちって何か考え事する時や疑問に思う事があるとか腕組みして難しそうな顔をするんだよね？」

癖ってやつだね？」

それに幼馴染みだからタクミっちの考えてる事はお見通しなんだよね。」

マコトに言われて気がついたけど、確かに俺は腕組みをしている。

俺にはこんな癖があったのか・・・マコトの奴良く観察してやがるな。

さすが幼馴染みってところか？

「さあ、家に入ろう？」マコトと一緒にポケモン屋敷の中に入って行った。

『うわっ！？広っ！？』

屋敷の中はとても広かった。

「おじさ〜ん！」

マコトがこの主であるウラヤマさんと呼んだ。そしたら、屋敷の奥から一人のおじさんがやって来た。

あの人がウラヤマさんか？

「お〜マコトじゃないか！」

「久しぶり〜」

マコトとウラヤマさんが抱きしめあってお互いの再会を喜んでいる。

「おや？そのブイゼルはマコトのポケモンかい？」

ウラヤマさんが俺を見ながらマコトに聞いた。

「そうだよ〜」

「ブイツー！？」

俺がマコトのポケモン！？ちょっと待て！

いつから俺はマコトのポケモンに・・・

「そうなのか！なあ、抱いて良いか？」

「良いよ〜 ふわふわしてて気持ち良いんだよ〜」

勝手に話を進め・・・ってうわっ！？

「本当だあ ふわふわしていて気持ち良い」

ウラヤマさんに抱き上げられてしまった（汗）

しかも抱きしめる力が強い（汗）

「ブ、ブイ・・・（汗）」苦しいんですけど（汗）

俺は早く離してほしいからウラヤマさんの腕を叩いた。

「おゝ苦しかったかい？こりやすまんすまん！」ウラヤマさんは俺を降ろしてくれた。

「ねえおじさん？僕の例の部屋の〱鍵を頂〱戴」

例の部屋？

「あの部屋の鍵か？ああ良いとも！」

ウラヤマさんがそう言うと言をパンパンと叩いた。すると、何処からかメイドさんがやって来た。メイドさんは何か持っている。

「ご苦労。さあマコト、例の部屋の鍵だよ。」

「ありがとう」

マコトはメイドさんから鍵を受け取った。

「じゃあ行つくよ」『ちよっ！？手を引つ張るなつて！？』

俺はマコトに引つ張られて屋敷の東側にある扉の前まで来た。

扉の前には別のメイドさんが立っていた。

「お久しぶりですマコト様。どうぞ、中は清潔にしておりますので。」

「

「ありがとうね」

メイドさんは扉から離れて別の所に行ってしまった。ってか、さっきマコトの事様をつけて呼んだよな？

すっげゝ違和感あるんですけど（汗）

「さあ中に入るよゝ？」マコトは扉の鍵を開けた。そして中へ。

『なんだ？この部屋？』その部屋は・・・部屋って言うかそこは研究室みたいな場所だった。

何に使うのか良く解らない機械がたくさん並んでいる。

「タクミっちのポケモン達にもゝここを紹介してあげないとねゝ」マコトが俺のモンスターボールからピジョット達を出した。

『何処だここ？』

ピジョット達は辺りをキョロキョロとしている。初めて見る場所だから当然か。

『何処だって良いわよ。ダーリンがいればね』 エーフィが俺に寄りかかってきた(汗)

またですかエーフィ(汗)「改めてようこそ」 僕の実験室へ

「マコトが満面な笑みで、ってかいつも笑顔なんだがな(汗)」

とにかく笑顔で俺達に言った・・・ってちよつと待て、実験室？

「ここには僕が今まで開発した道具があるんだ」

・・・やばい(汗)

俺とピジョット達は身の危険を感じてマコトから数歩離れた。

「ん？何で後ろに下がるの？」

何でって・・・そりやそうだろ(汗)

今までマコトが開発した道具の実験に付き合わされた俺達は散々な目にあってたからな(汗)

『タクミ、絶対マコトの奴また妙な道具を俺達に使わせるつもりだろ？』ピジョットが汗だくになりながら俺に聞いた。

『ああ、間違いなくそうだ(汗)』

「えい」

マコトがいつの間にか俺の目の前まで来ていて、俺の首に何かネットクレスみたいな物を掛けた。

しまった(汗)

いつもはのんびりした動きしかないマコトだが、こういう時だけ素早く動くんだった(汗)

「良く似合ってるよ」タクミっちゃん

「何が似合ってるだよマコト！・・・ってあれ？」今・・・俺人間の言葉で喋れた？

「やった」ちゃんと機能したね

マコトは喜んでいる。

俺は念のため本当に人間の言葉で喋っているのかピジョットに聞く。
「ピジョット、今俺人間の言葉で喋ってるか？」『あ、ああ。確かに人間の言葉だ・・・』

ピジョットは驚いた表情のまま頷いた。

「マコト、これどうなってるんだ？」

「それはね、僕が作った特別なネックレスでね、それを身につけたポケモンは人間の言葉を喋れるようになるんだよ？凄いでしょ？」

僕だつてちゃんと作れば、良い物は作れるんだよ。」

驚いた・・・まさかマコトの開発した道具がちゃんと機能したとは・・・ん？ちよつと待てよ？

「・・・マコト、今ちゃんと作ればって言ったよな？」

まさかとは思うが・・・今まで俺やピジョット達に使わせてた道具は・・・真面目に作ってなかったのか？」

俺はふと思った疑問をマコトに聞いた。

「それはちよつと違うな？遊びの気持ちで作ったって言ってよね？」・・・遊び？」

遊びで作った道具を俺達が使ってひどい目にあつてたつてのか！？」

「・・・皆、解ってるよな？」

俺はピジョット達に聞いた。皆頷いてくれた。

俺達はマコトを取り囲んだ。

「な、何かな？」

「何かな？っじゃねえよ！俺達はその遊びで作った道具のせいで散々な目にあつてんだよ！」

俺達はマコトにちょっとしたお仕置きをした。

大丈夫、やり過ぎてはいないから（笑）

決してマコトにカメックスのハイドロポンプをぶちまけたり、ヒコザルの火炎放射を浴びせたりはしてないから。

「え、えっと・・・あとこれをタクミっちにあげるよ・・・」
若干マコトの元気が無いような気がするが多分気のせいだろう。
マコトは腕時計みたいな物を俺の腕につけてくれた。

「なんだこれ？」

「それは、ポケッチをちょっと改造した僕の発明品だよ」
ポケッチ？確かコトブキシティで作られている製品だよな？
正式名称がポケモンウォッチだったな。

「どう使うんだ？」

「普通のポケッチと同じで良いよ？」

「同じって・・・本当に改造したのかこれ？」

「GPS機能を付けたんだ、それでタクミっちが今何処にいるのか、すぐに解るんだよね」

「GPS機能って・・・なんでそんな機能付けたんだよ？」

「なんとなく」

なんとなくって・・・良いのかそれで（汗）

「まあ、ありがたく受け取っておくけどさ・・・」

「あとこれも受け取って？」

まだあるのか？

マコトが手に何かベルトのような物を持っている。ん？それモンスターボールを付けるのに使うボールホルダーか？
人間だった時は腰に付けてたけど・・・

「今付けるね？」

マコトは俺の両腕にホルダーを巻き付けた。
ちゃんとブイゼルの腕に合うようになってる。

「へっ！結構良いじゃんか！」

「気に入ったみたいだね？それじゃあ最後にこれ受け取って？」

マコトはリュックを渡してくれた。

ブイゼルの俺が丁度背負えるサイズだ。

リュックと一緒にマコトはモンスターボールを数個俺に手渡した。

「なんでモンスターボールを・・・ん？これまさかマスターボールか！」そのモンスターボールにはマスターボールを意味するMのマークが書いてあった。

マスターボールはどんなポケモンも必ずゲット出来る超レアなボールなんだ。

「残念！それはマスターボールじゃないよ？」

「マスターボールじゃない？じゃあなんだよ？」

「口で説明するより見た方が早いよ？」

タクミたち！そのリュックをここに置いて？」マコトに言われ、俺はリュックをマコトの前に置いた。

そしてマコトはリュックに向かってMと書かれているモンスターボールを投げた。

リュックにモンスターボールは当たった。

するとモンスターボールが開き、リュックがモンスターボールの中に収納されてしまった！

「えっ！？どうなってんだ！？」

「このモンスターボールはね！ポケモンじゃなくて！道具や荷物をしまう事が出来るんだよね！僕の自信作なんだ！」

タクミたちの今の身体だと！大きな荷物は持てないでしょ？」

でも！これならどんな大きな荷物も！楽に運べるよ！」

スゲー・・・

確かにこれなら、いろんな物が楽に運べるな。

でも・・・

「なあマコト。なんでこのモンスターボールにはMって書いてあるんだ？」俺はそれが気になってしょうがないからマコトに聞いた。

「それはね、僕の名前だよ？マコトだからMって書いたんだ、名付けてマコトボールだよ。」

「ダサっ！？そして紛らわしいぞ！？Mって書いてあるからマスターボールだと思っちゃうだろ！」

「細かい事は、気にしない、気にしない。」

・・・もう良いや（汗）

いちいちツツコミをいたらきりが無い（汗）
でも・・・一つ気になる事があるんだよな。

「なあマコト。お前本当にハンサム先輩に頼まれたのか？

俺の力になってやれってさ？」

ハンサムなら俺に無茶をさせないようになると思うから、国際警察の本部に俺を保護させる、または幼馴染みのマコトに保護させる筈だ。

「うーん・・・本当は頼まれてないんだよね？実はタクミっちを僕が保護するよう頼まれたんだよね。」

やっぱりな・・・

「じゃあなんで？」

「だって、タクミっちは絶対言う事聞かないでしょ？」

だったら、最初からタクミっちのサポートをした方が、良いと思っただんだ。」

マコト・・・

「ばっちりサポートさせてもらっからね？」

困った時は、ポケギアで連絡してね？」

僕が渡した、そのネックレスがあれば、人間の言葉が話せるんだからね？」

「解った。サンキューマコト！感謝するぜ！

良し、早速ネオ・ギンガ団の連中を捜しだしてやる！」

俺をブイゼルに変えたあのプルトのオッサンなら人間に戻る薬も作っている筈。

それを手に入れる事が出来れば・・・

「そうは言うけど、タクミっち、何か手がかりとかあるの？」

「・・・あつ（汗）」

奴らに関しての手がかり、一切無かったな（汗）

「やっぱりね？大丈夫、ちゃんと僕が、情報を入手しておいたから、最近、ハクタイシティで、妙な格好をした連中を目撃したって、情報があるよ？」

ハクタイシティか・・・「なら目的地はハクタイシティに決まりだな。」

早速行ってみる！」

俺はピジョット以外の仲間達をモンスターボールに戻した。

そしてモンスターボールをマコトが付けてくれたボールホルダーに付ける。

「行くぜピジョット！

場所はハクタイシティだ！」

『了解だタクミ！』

俺はピジョットの背中に乗った。

そしてピジョットはマコトの部屋にある窓から外に飛び出した。

「気をつけてね！」

マコトが窓から俺達に向かって手を振っている。俺は右手を上げてそれに答えた。

「ピジョット！全速力で頼む！」

『了解！しっかり掴まってなよタクミ！』

ピジョットはスピードを上げた。

目指すはハクタイシティだ！

第六話 人間に戻る方法を求めて。(後書き)

第六話完成です。

タクミ：おい作者。

作者：あら、タクミじゃないか！

タクミ：今回の小説で出てきたあのマコトの発明品、その中のマコトボールだが・・・
いろいろ言いたい事がある。

作者：な、なんだい？

タクミ：マジでネーミングセンスが無いぞ！
それに、あのボールの機能！絶対あのドールに登場したあのホイホイを意識して考えただろ！

作者：・・・ま、まあちよつとは意識したかなあ（^ー^；）
ネーミングセンスの方は自分でも無いと思ってるから深く突っ込まないでほしいです（-_-；）

タクミ：おいおい（汗）

第七話 ハクタイシティ。 妙な連中を探せ！（前書き）

マコトが言ってた妙な連中・・・ネオ・ギンガ団なら良いんだが・・・

第七話　ハクタイシティ。妙な連中を探せ！

ポケモン屋敷から出発してから数十分。

さすがピジョットだ。

全速力で飛ばしたからもうハクタイシティの上空に来てしまった。

『着いたぞタクミ。何処に降りれば良い？』

「そうだなあ・・・さすがに街の中に降りるのはまずいから・・・あつ！ピジョット、彼処に頼むよ！」

俺はハクタイシティの東側にある211番道路に降りるようピジョットに頼んだ。

『解った。』

ピジョットはゆっくりと211番道路に向かって降下した。

「サンキューピジョット！しばらく休んでくれ。」

そう言っただけ俺はピジョットをモンスターボールに戻した。

「さて。」

俺はマコトから貰ったリュックから俺のポケギアを取り出した。

マコトに連絡を取るためだ。

『はい、タクミっちゃん？』

「ああ。今ハクタイシティに到着した。」

それでマコト、ハクタイシティのどの辺りで妙な連中が目撃されたんだ？」

『場所はね、昔ギンガ団が所有していた、ギンガハクタイビルだよ？』

「ギンガハクタイビルだな？解った、今からそのビルを調べてみる。」

『気をつけてね？』

俺はマコトとの通信を切った。

「よし、行くか！」

俺はリュックにポケギアとマコトから貰ったネックレスを入れた。

「ブイ。」

『あ。』

やっぱりネックレス外すとポケモンの鳴き声に戻るな。まあ、今は人間の言葉を喋らない方が良いんだよな。

人間の言葉を喋るポケモンなんて見つけたら、どんなトレーナーだってゲットしようとするからな。あつ別に人間の言葉を喋らなくてもトレーナーならゲットしようとするか？

なら、なるべく人に見つからないように慎重にいかないとな・・・俺はトレーナーに見つからないよう隠れながら目的地のギンガハクタイビルを目指す事にした。

『・・・普通に行けばすぐに着くのに・・・やたらと時間が掛ったな（汗）』俺は絶対数分で来れる筈のギンガハクタイビルに数十分掛ってようやく到着した。

ギンガハクタイビルには奇妙なトゲがいくつも付いていた。

だけど、ところどころひび割れがあったり窓ガラスが割れていたりしている。見た感じ廃墟だ。

『本当にここに誰かいんのか？』

俺は腕組みをしながらそんな事を呟いた。

『・・・』

ん？今何かビルの中から聞こえたような・・・俺は耳をすませてみた。

『・・・け・・・たす・・・』

これは・・・ポケモンの声か？助けを求めてるみたいだな。

俺は急いで廃墟となっているギンガハクタイビルの中へ入った。

『うわぁ（汗）中はホコリだらけだな（汗）』

ギンガハクタイビルの中は長い間放置されていたせいなのかホコリだらけだった。

『・・・助けて・・・誰か・・・』

また声が聞こえた！

しかも一つじゃない、いくつものポケモンの声が聞こえたきたんだ！
『上からか！』

俺は声がする上の階へ急いで向かった。

廃墟のギンガハクタイビルの四階に来た俺。

俺はそこで檻に閉じ込められている十匹のポケモン達を見つけた！

『助けて！お願いだからここから出して！』

その中の一匹のスボミーが俺に助けを求めた。

俺は檻に近づいた。

『お前達、一体何があつたんだ？』

『僕達のトレーナーと一緒に遊んでいたら、急に変な人間がやつて来て僕達をトレーナーから引き離してここに閉じ込めたんだ！ねえお願い！』

ここから出して！』

こいつらは誰かのポケモン達なのか・・・

ポケモン泥棒に捕まったつてところだな。

『待つてろ！今出してやるからな！』

俺は檻に閉じ込められているポケモン達を助ける為に檻を開けようとした。だけど、檻には鍵が掛つていて開ける事が出来なかった。

『開かねえか！だったら檻を壊して・・・』

『君！後ろ！？』

スボミーが叫んだ。

俺は後ろに振り向いた。黒い服に黒いズボン、さらに黒いサンングラスを付けた明らかに怪しい大男が三人いた（汗）

『うわあ（汗）今時そんなもん着てんのか（汗）』

『なんだこのブイゼル？俺達が盗んだポケモンを逃がすつもりか？』

『そっちはいかねえなあー！いかねえよ！』

そんな事するブイゼルにはお仕置きをしなきゃならねえなあー！』

大男三人がモンスターボールを取り出した。

そして俺の前にモンスターボールを投げて中のポケモンを外に出した。

出てきたポケモンは・・・エビワラーにサウムラー、そしてカポエラー。

三匹の格闘タイプのポケモンだ。

「お前達！そのブイゼルにきついお仕置きをしてやりな！」

一人の大男がそう言うと、エビワラー達が俺にゆっくりと迫って来た。

『格闘タイプが三匹か・・・だが、見たところ大した事なさそうだな。』

『フライゴン！出番だぜ！』俺は腕に付いているボールホルダーからフライゴンが入っているモンスターボールを取った。

そしてボールからフライゴンを出した。

「なっ！？なんでブイゼルがモンスターボールを！？」泥棒三人組が驚きの表情をしている。

まあそりやそうか。

ポケモンがポケモンを出したんだからな。

『フライゴン！頼むぜ！』

『任せてよタクミ！』

フライゴンは戦闘体勢に入った。

「やっちまえお前達！」一人の大男が命令するとエビワラー達がフライゴンに向かって襲いかかってきた！

『フライゴン！ドラゴンクローだ！』

俺がそう指示するとエビワラー達に向かってフライゴンが向かって行き、そして擦れ違った。

『決まったね。』

フライゴンは構えるのを止めた。

エビワラー達は全く動こうとしない。

「どうしたお前達!？」

大男がそう叫んだ時、エビワラー達が倒れた。

フライゴンは擦れ違った時に高速でドラゴンクローを決めていたんだ。

『さすがだぜフライゴン』

『ありがとうタクミ』フライゴンは笑顔で答えてくれた。

「っ、強い・・・逃げる!？」

大男達がその場から逃げようとした。

『逃がすか!マニョーラ!』

俺はマニョーラが入ったモンスタールボールを投げた。ボールが開いて中からマニョーラが出てきた。そして高速移動で大男達に近づき、手刀を大男達の首に決める。

大男達はその一撃で気絶してしまった。

『・・・ちよろいな。』『さすがだぜマニョーラ!』

『ありがとう!』

俺はマニョーラに檻の鍵を壊してもらって閉じ込められていたポケモン達を助け出した。

ポケモン達は俺にお礼を言ったあとそれぞれ自分のトレーナーがいる所に帰って行った。

ちなみに大男達はジュンサーさんに連行された。俺が人間の声で通報したんだ。

「マコト、妙な連中つてのはポケモン泥棒だったみたいだ。
ネオ・ギンガ団じゃなかった・・・」

『あらゝ残念だねゝタクミっちゝ?』

俺はポケギアでマコトと話している。

「マコト、他に何か情報は無いのか?」

『残念ながらゝまだ新しい情報は無いねゝ?』

「そうか・・・」

『タクミっちゝ今日は泥棒捕まえるのでゝ疲れたでしょ?』

ポケモンセンターで休んだら?』

ハクタイシティのジョーイさんにはゝタクミっちの事説明してあるからゝ泊めてくれる筈だよ?』

「解った、色々ありがとうなマコト。」

俺は通信を切った。

ポケモン泥棒を捕まえたその日の夜。

俺はポケモンセンターにいた。

マコトの言う通り、ジョーイさんは俺の事を知っていた。

他のトレーナー達が来ない特別な部屋に泊めてくれたんだ。

『ハア・・・ギンガハクタイビルは空振りだったなあ・・・ネオ・ギンガ団の奴ら・・・一体何処にいるんだ?』

コンコン！

誰かがドアをノックした。

「タクミさん、入っても良いですか？」

この声はジョーイさんだな？俺はネックレスを首に掛ける。

「どうぞ。」

俺がそう言うジョーイさんが入って来た。

「どうしたんですか？」

「ちょっとタクミさんに伝えたい事がありました。もしかしたら何か役に立つかもしれないと思って・・・」

「なんです？」

「近くにハクタイの森と呼ばれる場所があるのはご存知ですか？」

ハクタイの森？

ああ、結構広い森があつたな？きつとあれの事だな。

「はい。」

「実は、そのハクタイの森のなかに古い洋館があるんですけど・・・その洋館には誰も居ない筈なのに、最近誰かの声が聞こえると言う噂があるんです。」

ハクタイの森の洋館・・・誰も居ない筈の場所で聞こえる声・・・か・・・

「教えてくれてありがとうジョーイさん。」

明日の朝、その洋館に行ってみます。」

「役に立てたみたいで嬉しいです。でも、気をつけてくださいね？」

「解っています。」

「じゃあ、お休みなさい。」

ジョーイさんは部屋から出ていった。

ハクタイの森の洋館。

そこにネオ・ギンガ団の奴らがいるのかな？

まあ、明日調べに行けば解る事だな。

「ふあゝ・・・寝よ。」俺は明日に備えて寝る事にした。

第七話 ハクタイシティ。 妙な連中を探せ！（後書き）

第七話完成です。

第八話 ハクタイの森の洋館 (前書き)

ハクタイの森にある古い洋館かあ・・・
ネオ・ギンガ団の奴らはいるのかな？

第八話　ハクタイの森の洋館

『ここがハクタイの森にある洋館か・・・』

ポケモン泥棒を捕まえた次の日の朝。

俺はハクタイの森に来ていた。

昨日ジョーイさんが教えてくれた森の洋館を調べる為だ。

んで、今日の前にその洋館があるんだが・・・

何だか幽霊でも出そうな雰囲気を持った不気味な場所だなあ（汗）

それに、今は朝の10時なんだがこのハクタイの森の中はちょっと薄暗い。そこまで木が密集している訳じゃないんだが、今日は何だか天気が悪くて曇ってるんだ。

今にも雨が降りそうな感じ。薄暗いせいで余計にこの洋館が不気味に思えてくる。

ガサガサッ！

『な、何だ！？』

突然近くの茂みから物音が！そして次の瞬間その茂みから何か物体が空に飛んで行った。

良く見るとその物体はポケモンのドクケイルだった（汗）

『な、なんだよ・・・ドクケイルかよ（汗）
焦らせるなつての！』

ぴちゅん。

ん？何か冷たいのが俺の鼻先に当たった。

水？もしかして雨か？

そんな事を思った次の瞬間、いきなり土砂降りの大雨が降りだした！
しかも雷まで鳴りだしやがった！

『こりゃスゲーな！？仕方ない、洋館の中で雨宿りするか！』

俺は急いで森の洋館の中へ入って行っただ。

『うわぁ・・・いかにも幽霊出ますよ～って感じだなぁ（汗）』

洋館の中の至るところにひび割れや蜘蛛の巣があった。
長い間誰も来なかったみたいだな。

『この感じじゃあ、ここにもネオ・ギンガ団は居なさそうだな・・・
まあ、一応調べてみるか。雨が止むまではこっから動けないしな。
皆出てこい！』

俺はモンスターボールから仲間達全員を出した。

『何だここ？』

カメックス達は辺りをキョロキョロと見渡す。

『ここはハクタイの森にある古い洋館の中さ。
何かあるかもしれないから皆にも調べるのを手伝ってもらいた
いだ。』

『ダーリンの為なら何でもしちゃうわよ』

そう言つてエーフィが俺に寄り添う。
何かもう慣れちゃったな（汗）

『よし、じゃあ何処を調べるか分担しよう。
まずピジョットとカメックスは一階。
残りの皆は俺と一緒に二階を調べるぞ。』

ピジョットとカメックスに一階を任せて、俺はエーフィ達と一緒に
二階へ向かった。

『二階は結構部屋が多いみたいだな・・・』

二階にやって来た俺達。一階と違ってこの階は部屋が結構多い。

『エーフィ、お前は洋館の西側の部屋を頼む。
ヒコザルは反対側な。』

マニユーラとフライゴンは俺と一緒に奥だ。』

『えーダーリンと一緒にじゃないのー！』

エーフィが不満そうな表情で俺を見ている。

『・・・文句を言うなエーフィ。タクミの為なら何でもやるんだろ？』

腕組みしながらマニユーラがエーフィに言った。

『うゝ解ったわよゝ！』

ちよつとふてくされながらエーフィは西側の部屋に向かって行った。

『じゃあ行ってくるねタクミ！』

ヒコザルも東側の部屋に向かった。

俺もマニユーラとフライゴンと一緒に奥へ。

『・・・ここは五つの部屋があるようだな。どうするタクミ？』

マニユーラが俺に聞いた。

『ここでも別れて調べよう。俺は右側、フライゴンは中央、マニユーラは左側だ。』

『解った！』

『・・・了解した。』

俺はマニユーラ達と別れ、右側にある部屋に向かった。

『失礼します・・・って誰も居ないよな？』

その部屋には特に目立つ物はなかった。

あるとしたらベッドだったり壁に掛けられた大きな写真くらいかな？

『うゝん・・・特に変わった所は無いか・・・』

そういえばジョーイさんの話だと誰かの声がこの洋館から聞こえてくるって事だったけど・・・

何も聞こえないよなあ・・・』

俺は腕組みしながら考えた。

やっぱここにはネオ・ギンガ団に関係ありそうなものは何も無いみたいだなあ・・・

それに、声なんかも全然聞こえない・・・

『・・・フフ・・・』

『えっ？』

今・・・誰かの笑い声が聞こえたような・・・俺は辺りを見渡す。

だけど、誰もいなかった。気のせいかな？

『・・・フフフ・・・』

気のせいじゃなかった！

『誰だ！？』

俺はもう一度辺りを見る。だけど、やっぱり誰もいない・・・

『・・・お兄ちゃん、僕と遊ば』

『・・・（汗）』

俺の背後からそんな声が聞こえてきた（汗）

俺は恐る恐る振り返る。するとそこには小さな男の子がいた。つて一体何処から出たんだこの子は！？

『遊ば』

男の子がそう言った次の瞬間、突然男の子の目が赤く光った！その赤く光った目を見てしまった俺は突然睡魔に襲われた。

『うう・・・』

俺は睡魔に耐える事が出来ずにその場で眠ってしまった・・・

第八話 ハクタイの森の洋館 (後書き)

第八話完成です。

今回試しに主人公達のセリフと文章との間を開けてみたんですが・

・
読みやすいでしょうか？

第九話 イタズラ好きな二匹のポケモン！タクミが幽霊になっちゃった！？

『うーん……………』

俺は目を擦りながら目を覚ます。

俺が目覚めた場所はさっきと同じ部屋だった。一体何があったんだ？

『やっと起きたかい？』

誰かが俺に話かけてきた。俺は声が聞こえた方へ振り向く。

そこには二匹のポケモンがいた。

一匹はゴーストタイプのポケモン、ゲンガーだ。だけど、もう一匹は見た事がないポケモンだな？なんだこいつ？

随分ちっちゃいポケモンだなあ。

何か姿が電球に似てるような気がする。

『君達は？』

『俺はゲンガーのシャドーだ。んで、こっちが俺の親友、ロトム』

『ロイだ。』

『よろぴく』

ゲンガーは自己紹介したあと隣にいたポケモンを紹介してくれた。ロトム？他の地方では見た事がないから、恐らくシンオウ地方だけに生息するポケモンなのかな？

『俺はタクミって言うんだ。』

とりあえず俺も自己紹介しといた。

ん？何か俺忘れてるような……..
あつそうだ！

確か子供がいたよな！

『なあシャドー、さっきここに子供がいた筈なんだけど何処に行つたか知らないか？』

『子供？あゝひよつとしてこれか？』

そう言つてゲンガーの目が赤く光つて壁を照らす。すると、さっきの子供が姿を現した！

『どうなつてんだ？』

『これは俺が怪しい光で作りに出した幻さ。
良く出来てんだろ？』

これでここにたまに訪れる人間を脅かしてんだ。大抵の人間は幽霊だあ！？つて言つて逃げ出すんだ。そんな時の人間達の驚く表情がもう最高なんだぜ。なあロイ？』

『うん。面白いんだよ』

凄く良い笑顔をしながらシャドーとロイは言つた。相当イタズラ好きらしいなこの二匹は（汗）

『俺も驚いたよ。振り返るとさっきまでいなかった子供がいきなり現れたんだからさ。』

『だろだろ』

『でもさ、あの子供の幻が目から赤い光を出したんだけど、あれ何？』

『あれはシャドーの催眠術だよ？』

実は、ちよつと君にもイタズラしちゃつたんだ』

えっ！？俺何されたんだ！？俺は慌てて身体をチェックする。
何か付けられてるか？

何か落書きされてるか？俺は自分の身体をくまなくチェックするけど、特に何かされた感じは無い。一体何したんだよ？

『後ろ見てみそ？』

ロイが俺の後ろを見ながら俺に言う。

まさか、また子供がいるとか言うんじゃない？

俺はそんな事を思いながら後ろへ振り向く。

だけど、そこには俺の想像を超えた光景があった！

『えっ！？俺！？何で俺が！？』

そこには床に倒れて眠っている俺がいたんだ！

何で！？じゃあここに居る俺は何！？

『えへへ びっくりしたびっくりした』

ロイが子供みたいに喜んで居る（汗）

ってか誰かこの状況を説明してくれ（汗）

『何がどうなっただよ！？お前達俺に何したんだよ！？』

『いやな ちよっとお前の身体と魂を引き離してみただ』

こういうの確か人間の言葉で言っと・・・あれ？なんて言うんだっけか？』

シャドーが腕組みして首を傾げる。

『シャドー、幽体離脱だよ。』

ロイがシャドーに教える。

『そうそれ！幽体離脱だ幽体離脱』

手をポンツと叩いて笑顔になりながら言う。

てか、幽体離脱！？

じゃあ、今の俺は魂だけの存在なのか！？

『冗談じゃないぞ！？

元に戻してくれよ！？』

俺はすぐに元に戻すようシャドーとロイに頼む。

『うーん、どうしよっかなあ？なあロイ、どうする？』

『そうだねえ・・・・・・・・・・』

おいおい、何考え込んでんだよ（汗）

頼むから早く元に戻してくれよ（汗）

『よし！じゃあ元に戻してあげる！ただし、条件がある！』

ロイが何やら企んでいる表情で俺に言う。

条件って・・・・・・・・普通に元に戻してくれないのかよ（汗）

『何だよその条件って？』

『今から僕とシャドーと鬼ごっこをしよう

それで僕達を捕まえる事が出来たら元に戻してあげる』

何を言ってくるのかと思ったら鬼ごっこかい！？

『早速始めよ シャドー、先に捕まった方が今日の晩御飯を取って

くるんだよ？良いね？』

『良いぜ！ただし、勝つのは俺だからなロイ！』

何か二匹が今日の晩御飯の話をしてるし（汗）

てか、まだ鬼ごっこをするとは言って……………

『』につげろ』

笑いながらシャドーとロイは逃げ出した。

ハア……………やるしかないのね（汗）

『じゃあない、とにかくあいつら捕まえて早く元に戻してもらな
いと！』

こうして俺とイタズラ好きな二匹のポケモンによる鬼ごっこが始ま
った。

第九話 イタズラ好きな二匹のポケモン！タクミが幽霊になっちゃった！？

第九話完成です。

タクミ：作者。

作者：やあタクミ！どうしたんだい？

タクミ：ちょっと聞きたい事があってさ。
いつ探検隊の小説を作るつもりだ？

作者：そろそろやろうかなって考えてるよ。
二月頃に更新しようと考えてるよ。

タクミ：ふーん。どんな内容なんだ？

作者：そうだねえ、アスカの時みたいに原作よりかな？でも、ちゃんと原作とは違うストーリーも入れるつもりだよ。

第十話 シャドーとロイを捕まえる！

森の洋館にやって来て何かないか調べてたんだが、突然二人のポケモン、ゲンガーのシャドーとロトムのロイにイタズラをされて幽体離脱してしまった俺（汗）

元に戻すよう頼んだんだが、鬼ごっこをして捕まえる事が出来たら戻してあげると言われてしまった。

仕方なく現在、俺はこの二人と鬼ごっこをしているんだが……

『ほくらこつちだよ 鬼さんこつちら、手の鳴る方へ』

『ハア、ハア、たく！』

すばしっこい奴らだ！』

この二人は想像以上にすばしっこく中々捕まえる事が出来ない（汗）それにさすがゴーストタイプだけある。

不規則な動きをしゃがるから余計に捕まえにくい（汗）

『今度こそ！』

俺は空中に浮いているゲンガーのシャドーに飛び付こうとジャンプした。

『あらよつと』

シャドーは天井付近まで上昇してしまった！
ちよっ！？お前それはズルイぞってわわわ！？

ドスン！！

俺は顔から床に落ちた（汗）魂だけの存在になっている筈なのに、痛みを感じる（汗）

『イタタタ・・・くそ！お前それズルイだろ！？』

『ニヒヒヒ 捕まらなきゃ良いんだよ』

俺を嘲笑うかのようにしてシャドーとロイは部屋から飛び出した。俺も二人を追って部屋から出る。

『待てってのお前ら・・・ん？』

シャドーとロイが逃げた先にはフライゴンとマニユーラがいた。

これはチャンス！

あいつらに手伝ってもらって捕まえてもらおう！

『フライゴン！マニユーラ！そいつらを捕まえてくれ！』

俺は大声で叫ぶ。

だけど、今日の前をロイとシャドーが通ったのにフライゴンとマニユーラは無視してしまった！

『おい！？何してんだよお前達！？』

俺は近くまで行ってフライゴン達を怒鳴る。

だけど、まるで俺の声が聞こえていないみたいに俺の事を無視した。

『おいって！』

俺はマニユーラの肩を掴もうとした。

だけど、掴もうとして肩に触れようとしたら俺の手はマニョーラの身体をすり抜けてしまった！

嘘だろおい！？

俺はもう一度マニョーラに触ろうとする。

だけど、何回やっても触る事が出来ずに身体をすり抜けてしまう。

『マジかよ……フライゴン！マニョーラ！』

俺はフライゴンとマニョーラの前に立って必死に叫ぶ。

『ねえマニョーラ。』

何かちょっとこの洋館寒くない？』

『……そうか？俺はそうは思わないが。』

俺の叫びは全く聞こえていないみたいだ。

フライゴン達は会話しながら俺に向かって来た。フライゴンの身体にぶつかりそうになったんだけど、俺の身体はフライゴンの身体をすり抜けた。フライゴン達は下の階へ行ってしまった。

『あゝ言い忘れてたけど？君のお仲間に手伝ってもらおうってしても無駄だからね？』

今の君は幽霊みたいなもんだから当然生きている生き物には触る事が出来ない。

それと、僕達ゴーストタイプのポケモンは他のポケモンから見えないように姿を隠す事が出来るんだよねゝ』

俺を嘲笑うかのようにそう説明するロイ。

『ほら？鬼ごっこの続きだよゝ』

ロイはシャドーと共にまた逃げ出した。

参ったなあ、仲間の力を借りずにあいつら捕まえるとかかなり難しいだろう（汗）

ん？待てよ、もしかしたらあいつなら俺の存在に気づいてくれるかもしれない！

俺はあいつがいる部屋に急いで向かった。

『うーん、何処にも怪しい所は無いわねえ。』

あいつって言うのはエーフィの事だ。

エーフィはエスパークタイプだからもしかしたら霊感的なものを持ってるかもって思ったんだ。

頼む、聞こえてくれ！

『エーフィ！』

俺はエーフィの名前を呼んだ。

すると、エーフィの耳がピクツと動いた。

『えっ？今のダーリン？』

『エーフィ！俺の声が聞こえるのか！？』

『やっぱダーリンの声だ！でもダーリン、何処にいるの？』

やった！エーフィには俺の声が聞こえるみたいだ！

『今はお前の後ろにいる。』

『後ろ？』

エーフィは俺の方へ振り向く。

『えっ？何でダーリン、身体が半透明なの？』

姿まで見えるのか！

マジで霊感的なものを持ってたんだなエーフィは！正直ビックリだ

（汗）

『ちょっと色々と問題があつてさ（汗）』

俺はエーフィに今の状況を説明した。

『・・・良くも私のダーリンに酷い事を！見つけ次第お仕置きをしてやるわ！』

エーフィ、目が怖いぞ（汗）だけど、頼もしい助っ人だ！

俺はエーフィと一緒にシャドーとロイを追いかける事になった。

『それでダーリン、そのゴースト野郎は何処に逃げたの？』

ゴースト野郎って（汗）
ま、まあ良いか。

『ヒコザルが調べている部屋に向かった筈。』
『解ったわ。待ってなさいよゴースト野郎！』

怖い（汗）
エーフィってこんなに怖かったっけ（汗）

俺とエーフィはヒコザルが調べている洋館の二階の東側の部屋にやって来た。

『あれ？エーフィ先輩、どうしたんですか？』

ヒコザルが不思議そうな表情をしながらエーフィに聞いた。
ヒコザルは俺には気づいていない。

『・・・・・・・・』

エーフィはヒコザルの質問を無視して部屋を見回す。姿を隠しているシャドーとロイを探す為だろう。

『先輩？』

『ちよっと黙ってなさいヒコザル！気が散るわ！』

いきなり怒鳴られたヒコザルは焦りの表情を浮かべる。

まあ、ヒコザルは何も知らないから無理ないけど、説明も無しに怒鳴るのはどうかと思うぞエーフィ（汗）

『いた！サイケ光線！』

どうやらエーフィはロイとシャドーを見つけたらしい。

エーフィはサイケ光線を放った。

放ったのは良いけど、飛ばした先は………ヒコザル！？

『わわわ！？』

ヒコザルはとっさにその場に伏せてサイケ光線を避ける事が出来た。

『いきなり何するんですかエーフィ先輩！？』

『ちよつと邪魔！そこ退いて！』

『あっはい（汗）』

エーフィの凄い気迫にヒコザルは素直にそこから退いた。

『イテテテ（汗）な、何だよいきなり』（汗）』

エーフィのサイケ光線が命中したらしい。

シャドーとロイが倒れてる。

『えっ！？何処から出てきたの！？』

ヒコザルはシャドーとロイが倒れてるのを見て驚いている。

そんなヒコザルを無視してエーフィはシャドーとロイに近寄っていく。

『さああんた達、私のダーリンを早く元に戻しなさい。』

『えゝ？まだ鬼ごっこ続けたいのに……』

『いいから早く元に戻しなさい！』

『さもないと痛い目にあわせるわよ！』

サイケ光線を放つ体勢に入るエーフィ。

これ頼むと言うより脅しだよな（汗）

『わ、解った！？解りましたからもう攻撃しないで下さい！？』

エーフィの迫力に押されてシャドーとロイは俺を元に戻す事を約束した。何か、こいつらに悪い事したような気がする（汗）

『ふゝ元に戻ったあ！』

俺はシャドーに元に戻してもらった。
やっぱ自分の身体って落ち着くなあ。

『良かったわねダーリン』

エーフィが早速俺に寄りかかる。

今度はちゃんと仲間の身体に触れる。
ちよつと嬉しいな。

『さてと・・・・・・・・・・』

急にエーフィが俺から離れてシャドーとロイに近寄っていった。
どうしたんだ？

『あんた達、覚悟は良い？』

『えっ！？ちゃんと元に戻したでしょ！』

元に戻したら何もしないって・・・・・・・・・・』

『誰もそんな事言ってないわよ！』

良くもダーリンに酷い事してくれたわね！

サイコキネシス！』

エーフィがサイコキネシスを使ってシャドーとロイの身体をコント
ロールして妙なポーズをさせたり変な踊りをさせたりした（汗）
これがエーフィが言っただお仕置きか（汗）
シャドーとロイは恥ずかしい事をさせられてるから顔が赤面してい
る。

『も、もう勘弁してください！？』

『まだこんなもんじゃ足りないわよ！』

まだエーフィはお仕置きを続けるつもりらしい。さすがに二人が可
哀想だから俺はエーフィを止める事にした。

『エーフィ、もうその辺で勘弁してやれよ。』

こいつらも反省してるんだからさ。』

『ダーリンがそう言うなら良いわよ』

さっきまで凄く怒っていて険しい表情だったのに俺が話しかけると
凄いいい笑顔に変わった（汗）
随分と極端だなエーフィ（汗）

『大丈夫か二人共？』

俺は二人の近くに言ってそう聞いた。

『ハア、ハア、お、お前のガールフレンドって怖いのかな（汗）』

俺の耳元でそうシャドーが囁いた（ささやいた）。

『あれはポケモンの姿を借りた鬼だよ絶対（汗）』

ロイも耳元で囁く。

余程二人共エーフィの事が怖かったらしいな（汗）

『聞こえたわよあんた達！誰が鬼よ！？』

今の囁き声聞こえたんか！？めちゃくちゃ耳良いなエーフィ（汗）

『お、落ち着けてエーフィ！』

『止めないでダーリン！まだお仕置きが足りないのよこいつらは！』

再びエーフィのお仕置きが始まった（汗）

また恥ずかしい事をさせられてる二人。

エーフィを怒らせるような事するのは止めよう、うん（汗）

『ご、ごめんなさい、もうしませんから許して下さい（泣）』

『許して〜（泣）』

『ハア、ハア、い、良いわよ。これくらいで勘弁してあげる。』

しばらくして、ようやく二人を許したエーフィ。気がついたら外は暗くなっていた。

窓から夜空に輝く星が見える。

雨はもう止んでいた。

もうこんな時間になってたのかあ。

『今からポケモンセンターに戻るにも夜の森を通らないといけない事になるなあ……………』

『ハア、ハア、じゃ、じゃあさ、ここに泊まっていけば？』

息切れしながらロイが俺に言った。

泊まってけて……………この洋館にか？

まあ確かにここにはベッドもあるから寝るのに困らないけど……………

『また俺を幽体離脱させたりしないよな？』

俺はそれを心配して二人に聞く。

『しないよ！そんな事したら……………』

ロイは隣のエーフィを見る。エーフィはそんな事したらまたお仕置

きをする！って言いたげな表情をしている（汗）

『じゃあ、今夜はここに泊めてもらおうかな？

ヒコザル、皆に今日はここに泊まるって伝えてくれないかな？』

『解ったよ。』

ヒコザルはフライゴン達の所に向かって行った。

洋館に泊まる事になって、俺達は二階の一番広い部屋で寝る事にした。

俺以外の皆はすでに深い眠りにについている。

俺は何か新しい情報がないかポケギアでマコトに連絡を取っていた。

「カナギタウン？」

『うん。カナギタウンで不審人物を目撃したって情報があったんだ。』

「その情報、前のハクタイシティみたいな感じじゃないだろうなあ？」

『それは行ってみないと解らないよ？』

「まあ他に情報が無いなら調べてみるしかないか………解った。

明日の朝にカナギタウンに行ってみるよ。」

『頑張つてね。』

俺は通信を切った。

カンナギタウンか．．．．．確かシンオウのチャンピオン、シロナって言う人の地元だよな？

前から行つてみたいと思つてはいたけど、まさかこんな形で行く事になるとはな．．．．．

「ふあ．．．．．」

さすがに眠くなってきたな．．．．．

今日はもう寝るか。

第十話 シャドーとロイを捕まえる！（後書き）

第十話完成です。

タクミ：作者、エーフィに靈感とか持たせるってのはどういつった？

作者：いやあ、エスパーだからそんな能力持っても良いんじゃないかなあって思つて。

タクミ：まあおかげで俺は助かったけどさ。

作者：それよりさ、ちよつと聞いてくれる？

タクミ：なんだよ改まつて？

作者：いや実はさあ……今まで働いていた場所からもう来なくて良いからって言われてね……

タクミ：おいおい、それってつまり……クビにされたってか？

作者：うん、ハア……一生懸命働いたんだけどね。

タクミ：……何だよこの重苦しい空気は（汗）

作者：まあでも次の仕事先はなんとか見つけたからあんまり気にしない気にしない（笑）

タクミ：ポジティブだなおい！？

作者：いつまでも落ち込んでる場合じゃないでしょ？ずっと落ち込んでたら小説にも影響出ちゃうしね。

タクミ：言えてる。

作者：これから頑張って小説作るよ！

第十一話 カンナギタウンを目指して。 (前書き)

幽体離脱とか酷い目にあっただぜ(汗)

第十一話 カンナギタウンを目指して。

ハクタイの森にある洋館に一泊した俺達。

洋館の見た目はちよつと不気味だけど、意外と快適に過ごせた。

人間その気になれば・・・あつ今はポケモンか？

その気になれば何処でも寝れちゃうのな。

まあそれは置いて、今の時間は朝の九時。

俺はマコトからもらった情報を確認する為にカンナギタウンに向かう事になっているんだ。

今はその為の準備をしている最中なんだが・・・

『ほれロイパス』

『オーライオーライ』 『お前ら俺のモンスターボールでキャッチボールすんな!？』

シャドーとロイが俺のモンスターボールでキャッチボールを始めてしまっているように準備が進まないでいた(汗)

『良いじゃん暇なんだし』

『そうだよ？ シャドー、今度はドッジボールしよう』

『OK さあ、どこからでも来い!』

キャッチボールもドッジボールもあまり変わらないような・・・

・
つてそんな事言ってる場合か俺は!

『エーフィ、サイコネシスであるモンスターボールをこっちに運んでくれないか?』

『解ったわダーリン。』

エーフィがサイコネシスでシャドー達が遊び道具にしていたモンスターボールを俺の所へ運んできてくれた。

『あゝ俺達の遊び道具がゝ！』

『勝手に遊び道具にすな！？』

シャドー達はモンスターボールを取られて残念そうな表情をしている。

つつか俺のモンスターボールは遊び道具じゃないつつの！

『つまんないなあゝ・・・・・・・・・・』

何故か俺をジーツと見つめるシャドーとロイ。

まさかお前ら・・・・・・・・・・

『幽体離脱は勘弁だからな！』

『やっぱダメ？』

やっぱり幽体離脱を狙っていたかこいつら！

昨日散々エーフィにお仕置きされたのにちっとも懲りてないな（汗）

シャドーとロイに色々俺の持ち物で遊ばれたが、ようやく準備が出来た俺。何か準備するだけで疲れたよ（汗）

『もう行っちゃうの？』

俺がピジョットに乗って出発しようとした時、ロイが寂しそうな表情で俺に言った。

『ああ。どうしても見つけられない奴らがいるんだ。』
『そっかぁ……。何か寂しくなるけど、頑張ってねタクミ！』

ロイは寂しそうな表情から一変、笑顔に変わって俺に言った。

『おう！それじゃピジョット、頼むぜ！』
『了解だ！』

ピジョットは俺を乗せて力強く翼を羽ばたかせ、空に飛んだ。
目指すはカンナギタウン！

ハクタイの森から出発してから役十分。

前は全速力で飛んでもらったけど、今回はゆっくりと空の旅をしていた。マコトを信じてない訳じゃないけど、何か今回も空振りのよ

うな気がしちゃってさ（汗）

たまにはのんびり空の旅を楽しむのも良いかなあって思ったんだ。

『良い眺めだなあ！』

俺は空から見えるシンオウ地方を眺めながらそんな事を呟く。

考えてみれば、シンオウに来てから一度も景色を楽しんでなかったんだよなあ。

『確かにそうだなあ。』

それに、今までいろんな地方に来たが、ここは空気が美味しいし、空を飛んでいて凄く気持ち良いんだ！』

おっ？ピジョットの奴結構気持ち良さそうにしてんな？

『この地方の空が気に入ったみたいだなピジョット？』

『ああ！』

笑顔で元気良く答えてくれたピジョット。

それからしばらく飛んで行くと、大きな山が見えてきた。
シンオウ地方で一番大きな山、テンガン山だ。

『ひよえ〜！デケエなあ〜！』

俺は感じた事をつい言葉に出して言う。

『カントーのお月見山よりも大きいなタクミ。』『ジヨウトのシロガネ山よりも大きいだろ。』

俺とピジヨットはそんな話をしながらお月見山やシロガネ山と比べながらテンガン山を見ていた。だがその時、地上の方から光る閃光が見えた！

『何だ？』

『あれは……まずい！？避けるピジヨット！』

俺がピジヨットに叫んだ時にはもう遅かった。

その閃光は冷凍ビームで、冷凍ビームがピジヨットの右翼に直撃してしまった！

『くっ！？』

『ピジヨット！？』

ピジヨットの右翼が凍り潰けにされてしまった！そのせいでピジヨットは上手く飛べなくなってしまった！

俺とピジヨットはテンガン山に向かって落下していった……………

第十一話 カンナギタウンを目指して。(後書き)

第十一話完成です。

第十二話 ポケモンハンター！（前書き）

一体誰が冷凍ビームを！？

第十二話 ポケモンハンター！

『頼むフライゴン！』

冷凍ビームを受けて右翼が凍り漬けになってしまったピジョット。俺とピジョットはテンガン山に向かって落下していた。

このままじゃ俺とピジョットはテンガン山の硬い岩に叩きつけられてしまう！

だから俺は、とっさにフライゴンが入ったモンスターボールを投げて中からフライゴンを出した。

『今いくよ二人共！』

フライゴンは俺を背中に乗せた後、ピジョットを両手でしっかりと掴んだ！

『ふゝ！助かったよフライゴン！』

『どういたしまして！』

でも何があつたの？

何でピジョットの右翼が凍り漬けに？』

『突然地上から冷凍ビームが放たれたんだ。』

また撃たれるかもしれないから、早く何処かに着陸しないと！』

『解った！』

フライゴンは急いで地上へと降下を始めた。

俺とフライゴン、それにピジヨットはテンガン山の近く、211番道路に着陸した。

『くっ………翼が………』

冷たそうだなピジヨット………身体がブルブルと震えている。待ってるよピジヨット！

『ヒコザル！』

俺はモニターボールからヒコザルを外に出した。

『ヒコザル！火炎放射で氷を溶かすんだ！』

『任せて！』

ヒコザルは火炎放射でピジヨットの凍りついた右翼を溶かしてくれた。

だけど、まだ寒そうにしているピジヨット。

『ヒコザル、今度は火炎車でピジヨットを暖めてくれ。』

『うん。』

ピジヨットの近くでヒコザルは火炎車を使った。俺も手伝わないと！俺はピジヨットの右翼に抱きついて自分の体温で暖める事にした。

『待ってるピジヨット！すぐに暖かくなるからな！』

『す、すまないタクミ・・・・・・・・』

少しかけ震えが治まってきたな。
しかし・・・・・・・・一体誰が冷凍ビームを？

「見つけたぞ！」

突然誰かの声が聞こえた！俺は声がる方へ振り向く。
そこには赤い長髪で右目に眼帯を付けた妙な男がいた。
その男の横にはポケモンが一匹。

あれはたしかユキワラシから進化するユキメノコだったな？
まさかこいつがさっきの冷凍ビームを？

「なんだあ？ピジョット以外に他にもいやがるなあ？まあ良い、ま
とめて捕獲して売り捌けば金になるしな！
ユキメノコ！冷凍ビームだ！」

長髪の男が指示を出すとユキメノコが冷凍ビームを放ってきた！

『フライゴン！竜の息吹！』

フライゴンは竜の息吹を放って冷凍ビームにぶつめた。

それで大きな爆発が起きた！

俺のフライゴンの竜の息吹と互角なんて・・・・・・・・何て強力な冷凍ビームなんだ！

「あん？抵抗しようってかあ？生意気だなあ。
大人しくユキメノコの冷凍ビームで凍り漬けになれってんだ！
ユキメノコ！もう一発だ！」

再びユキメノコが冷凍ビームを放ってきた！

『フライゴン！今度は火炎放射だ！』

フライゴンは火炎放射を放って冷凍ビームにぶつけた！

今度は炎タイプの技だ！いくら強力な冷凍ビームでもこれなら・・・

・・・俺はそう思ったけど甘かった。

相手のユキメノコは相当レベルが高いらしく、フライゴンの火炎放射に負けていない！

またさつきみたいに爆発が起きた！

「やれユキメノコ！」

相手はさすがに冷凍ビームを放った！

俺はフライゴンに避けるよう指示しようとしたけど間に合わなかった！

冷凍ビームはフライゴンに直撃してしまい、凍り漬けにされてしまった！

『フライゴン！？』

氷の中に閉じ込められたフライゴンは動く事が出来ずにその場で倒れた！

「まず一匹。一気に捕獲とするかあ！

出るユキノオー！」

長髪の男が腰に付けていたモンスターボールを一つ取り出して中からポケモンを出した。

あれはユキノオーか！

ちっ！ユキメノコとユキノオーの二体で一気に攻撃するつもりか！

「やれ！吹雪だ！」

ユキメノコとユキノオーが俺達に吹雪を放った！ダメだ！？避けられない！？

「天空に舞え、ガブリアス！砂嵐！！」

突然俺達の前にガブリアスが現れた！

ガブリアスは砂嵐を発動して吹雪にぶつけた。

その砂嵐は強力で、吹雪を弾き飛ばしてしまった！

「誰だ！？」

「ポケモンを売り捌くなんて、聞き捨てならない事を聞いたから・・・あなたは許す訳にはいかないわね！」

ガブリアスの隣に一人の女の人が出てきた。

金髪の長い髪をした女の人だ・・・

あれ？この人、何処かで見た事が・・・

「おやおや！まさかこんな所で会いするとは思ってなかったなあ？シンオウチャンピオンのシロナさんよう！」

長髪の男が強い口調で言った・・・・・・・・ってシロナさん！？この人が！？

「あなた、まだこんな事をしていたのね？」

四天王候補に選ばれながら、ポケモンを無理矢理捕まえて売買し、ポケモン協会から追放された、氷のヒョウガ君。」

長髪の男に向かってシロナさんが冷たい口調で言った。
こいつ、ヒョウガって言うのか……………
それに、四天王の候補だっただつて？

「あんたが来たんじゃ、商売が出来ないな。
大人しく今日は引き上げるとするか！あばよ！」

ヒョウガはユキノオーとユキメノコをモンスターボールに戻すと近くに停めていた車に乗り込み逃げていつてしまった。

「ヒョウガ君……………あなた達、怪我はない？」

シロナさんが俺達にそう聞いてきた。

俺とヒコザルは無事だけど、フライゴンが……………

「その子……………待ってて！ガブリアス！」

シロナさんがガブリアスの名前を呼ぶと、ガブリアスは俺のフライゴンに近寄ってきた。

「私がこの氷を溶かしてあげるわ。」

ガブリアスが俺にそう言ったあと、火炎放射を放ってフライゴンの氷を溶かしてくれた。

つてか、このガブリアス だったのか！？

「た、たず、助かったよ……………」

フライゴンがガブリアスにお礼を言う。

だけど、寒さで身体が震えていて声も上手くだせていなかった。

「あなた達、私の実家がすぐ近くにあるからそこに来なさい。
ガブリアス、その子を支えてあげて。」

シロナさんに言われガブリアスはフライゴンに手を貸して立たせてくれた。

『カメックス！』

俺はカメックスをボールから出した。

『カメックス、ピジョットを運ぶのを手伝ってくれ！』
『解った！』

ピジョットを運ぶのをカメックスに手伝ってもらいながら俺達はシロナさんについて行った。

第十二話 ポケモンハンター！（後書き）

第十二話完成です。

第十三話 カンナギタウン（前書き）

あのヒョウガって奴のポケモン、かなり強かったな・・・

第十三話 カンナギタウン

「今温かい飲み物を持ってくるわね。」

そう言ってシロナさんは食堂の方へ向かっていった。

俺達は今カンナギタウンのシロナさんの実家にいるんだ。
俺のピジョットとフライゴンの看病をしている。

『ピジョット、フライゴン。大丈夫か？』

俺は毛布の上からピジョット達の身体を擦りながら聞く。

『さ、さつきよりは、マ、マシかな。』

『嘘つけよ……身体が震えてるぞフライゴン。』
『ピ、ピジョットこそ。』

二人共身体が震えている……

「お待たせ。さあ、これを飲みなさい。
身体が暖まるわよ。」

シロナさんが二人の為にホットミルクを作ってくれた。
二人はゆっくりとそれを飲む。

『ありがとうシロナさん。』

ポケモンの声だけど、俺はそう言っでシロナさんにお辞儀した。

「あなた……不思議な感じがする子ね？上手く言えないけ

ど・・・・・・・・ポケモンっぽくないって言うか・・・・・・・・まるで人間みたいね？」

それを聞いて俺は思わずドキッとした。

「気にしないでね？」

あくまでそんな気がするただだから。

この子達が回復するまで好きなだけここにいて良いからね。」

そう言うとしロナさんは玄関の方へ。

「私これからポケモンセンターに行かなきゃならないの。すぐに戻るから待っててね。」

行っちゃった・・・・・・・・シロナさんって不思議な人だなあ。

『あゝ、暖まるよ。』『ってフライゴン！』

俺の分まで飲もうとすんなよ！』

ピジョットとフライゴンがホットミルクの取り合いをしている（汗）でも元気になって良かったよ。

『・・・・・・・・ん？あつ寝ちゃってたか。』

いつの間にか俺は眠ってたみたいだ。
結構時間が経っていたらしい。

外はもう暗くなっている。ふと俺はピジョット達をみる。
ピジョットとフライゴンは毛布に包まって熟睡している。

良い寝顔してやがる・・・・・・・・見た感じ、もう大丈夫だな・・・・・・・・

・あれ？そういえばシロナさんがいないなあ？

まだ戻って来てないのか？

すぐに戻るって言ってたけど・・・・・・・・

ちよつと様子を見にいつてくるかな。

俺は二人を起こさないようにそつと静かに歩いて外に出た。

『・・・・・・・・随分と静かだな・・・・・・・・』

外に出て俺は違和感を感じた。

いくら夜だからって町が静か過ぎるからだ。

それに町の家には電気がついていない。

ポケモンセンターまでもが暗かった。

『どうなってるんだ？』

俺はとりあえずシロナさんが向かった筈のポケモンセンターに向かった。

『開かない？』

ポケモンセンターの出入口は自動ドアになってるんだけど、俺がドアの前に立っても開かないんだ。それに、ポケモンセンターの中には人がいる気配が無い。

マジでどうなってんだよ？シロナさんや町の人達は何処行っただよ？

『・・・・・・・・うう・・・・・・・・』

ん？今誰かの声が聞こえたような・・・・・・・・あっちか？

俺はカンナギタウンの東側、210番道路へと繋がる道へ向かった。

『あつ！？おい大丈夫か！？』

俺はそこで驚きの光景を見る事になった。

シロナさんのガブリアスが傷つき倒れていたからだ！

俺は慌ててガブリアスに駆け寄る。

『何があつたんだよ！？』

シロナさんはどうした！？』

『・・・・・・・・皆、捕まってしまったわ・・・・・・・・私、戦おうとしたんだけど、シロナのおばあちゃんを人質にされて・・・・・・・・』

攻撃が出来なかったのか・・・・・・・・シロナさんのガブリアスがそんな簡単に負ける筈がないからな。

『それで、シロナさん達は何処へ？』

『あっちの方角へ・・・・・・・・』

ガブリアスが見ている先は210番道路だった。

『解った。ガブリアス、君は休んでいる。
俺がシロナさんを助ける！』

俺はシロナさんや町の人達を助ける為に210番道路へ向かった。

第十三話 カンナギタウン（後書き）

第十三話完成です。

タクミ：作者、あのヒョウガって作者が考えたオリジナルキャラか？

作者：そうだよ。本当はアニメに出てくるポケモンハンター」を出そうかと思っただけだよ………

タクミ：なんで出さなかったんだ？

作者：いやね、Jって結構強いじゃん。

彼女出しちゃうと君達がすぐ捕獲されちゃう気がしてさ（^| ^;）

タクミ：まあ確かにJは強いし、ハイテクメカ使ってポケモンを銅像みたいに固めちゃうけどさ………さすがにすぐ捕獲されはしないぞ！

いや、捕獲なんかされないからな！

作者：じゃあ試しに彼女をこの小説に登場させるかい？

タクミ：えっいや………それは止めておいてくれ（汗）

第十四話 シロナさん達を救え！（前書き）

一体何処のどいつがシロナさん達を？
とにかく、シロナさん達を助けないと！

第十四話 シロナさん達を救え！

『あれは・・・・・・・・』

俺は今深い霧が立ち込める210番道路を進んでいた。シロナさんとカンナギタウンの住人達を誘拐した犯人を追いかけているからだ。しばらく210番道路を進んでいくと、途中に大きな飛行艇が一機停まっているのを発見したんだ。

『明らかに怪しいな・・・・・・・・良し！』

俺は飛行艇の中に潜入する事にした。

運が良い事に飛行艇のハッチが開いていたから楽に潜入出来た。

「なあ、あのカンナギの連中達をどうすんだ？」 『やばっ！？』

中に入って早速乗組員に遭遇。 だけどあつちはこちらに気づいていない。 運良く近くに通気孔があつたから俺はその中に入って身を隠した。

身体が小さいブイゼルの俺だから出来る事だ。
俺の前を乗組員が二人通り過ぎようとした。

だけど、二人は急に俺の前で止まって立ち話を始めた（汗）
さっさと何処かに行けよ（汗）

「さあな。マーズ様の気分次第だろ。」

「でもさ、なんでマーズ様はカンナギの連中を連れて来たんだ？」

「お前話聞いてなかったのか？5年前に出来なかったギンガ団の崇高な目的を今度こそ実現させようとしてんだろ。」

一人の男が呆れた感じでもう一人の男に言っている。つか、ギンガ団だって！？

どういう事だ？今活動しているのはネオ・ギンガ団の筈だろ？

「だから、なんでカンナギの連中を？」

「お前本当に人の話を聞いてないんだな（汗）

良いか、カンナギの連中がディアルガとパルキアを呼び出すのに使う金剛玉と白玉を持っているという情報があったんだ。だからマーズ様はカンナギの連中を捕まえて金剛玉と白玉を奪おうとしてんだろ？」

なっ！？ディアルガとパルキアだって！？

「あゝそういう事ね。」

納得。んで、あいつらもう金剛玉と白玉を渡したのか？」

「いや、連中持っていないの一点張りだ。」

マーズ様も手を焼いている。」

「まあマーズ様だからなあ（汗）サターン様ならなんとかしてくれるのになあ。」

随分と長い立ち話だったがようやく二人は何処かへ行ってくれた。
しかし驚いたな。

壊滅したと思っていたギンガ団がまだ活動を続けていたなんて・・・

って事はネオ・ギンガ団は一体なんなんだ？

こっちはディアルガとパールキアを呼び出そうとしているが、ネオ・ギンガ団は人間をポケモンに変えようとしている・・・この二つの組織は別物なのか？

・・・ダメだ！

考えても解んねえや（汗）とにかく、今はシロナさん達を助けだす事だけを考えよう。

シロナさん達を捜し始めて数十分。

中々見つけれない（汗）想像以上にこの飛行艇の中が広いんだ（汗）

「・・・・・・・・いい加減に白状しなさいよ！」

『ん？』

今誰かの怒鳴り声が聞こえたぞ？

あつちか？

しばらく進んだ通路の先に一つの部屋に出入りするドアがあった。完全には閉じていない。俺はドアの僅かな隙間から中の様子を確認する。

「知らないと言っているの。例えば知っていたとしても、あなた達に教える筈がないでしょ？」

シロナさんだ！

それにシロナさんの後ろにはたくさんの人達が。あの人達がカンナギタウンに住む住人達だな？

良かった、怪我はしてないようだ。

「あんたって本当にム力つく女ね！？」

誰だあいつは？

シロナさん達の前に赤髪の女性がいる。

何だかイライラしてるみたいだな？

「大人しく金剛玉と白玉を渡せって言ってるのよ！さもないと、こ

の子があんた達にお仕置きしちゃうんだから！」

そう言つて赤髪の女性がモンスターボールを取り出した。
そしてモンスターボールを投げて中からポケモンを出した。
出てきたポケモンは虎猫ポケモンのブニャットだった。

「くっ！」

シロナさん達は後ろに後退りした。

もしかしてシロナさん、今ポケモンを持っていないのか？

「さっきまでの勢いはどうしたのかしら？
やっぱり、シンオウチャンピオンもポケモンがいなければただの人
ね。」

さあ、金剛玉と白玉を渡しなさい！」

「だからわしの孫が言っておるじゃろ！
わし達は金剛玉も白玉も持っておらん！」

一人の老人が強い口調で言った。

孫って事はあの人シロナさんのおばあさんか。

「……………もう我慢の限界だわ。」

ブニャット！切り裂く攻撃よ！！」

マズイ！？

『いけマニョーラ！
辻斬りだ！』

俺は部屋の中に入ると同時にマニョーラをモンスターボールから出した。マニョーラは辻斬りでブニャットの切り裂く攻撃を受け止めた！

『……………悪いが、邪魔させてもらう！』

マニョーラはブニャットを吹き飛ばした！
だけどブニャットはすぐに体勢を立て直した。
赤髪の女性の所に戻っていく。

「な、何よあんた達！？」

「君は……………今朝のブイゼル？」

シロナさんがそう聞いたから俺は頷いて答えた。

「ポケモンのくせに私の邪魔しようつての？
生意気なのよ！」

ブニャット！乱れひっかきよー！」

ブニャットがマニョーラに向かって突っ込んできた。

『マニョーラ！影分身で避けるんだ！』

『了解。』

マニョーラは影分身で無数の幻影を作り出した。ブニャットの乱れひっかきは幻影に直撃して本体には当たらなかった。
そしてマニョーラはそのまま影分身でブニャットの周りを囲んだ。

『よし！そこで辻斬りだ！！』

無数の幻影と共にマニユーラがブニャットに突っ込んでいった！
そしてマニユーラの鋭い爪でブニャットを斬りつけた！

よし！マニユーラの辻斬りをまともに受けて無事でいられる筈が・
・
・

「切り裂く攻撃！」

『なっ！？』

確かにブニャットに辻斬りが決まった筈なのに、ブニャットは何事
もなかったように切り裂く攻撃で反撃してきたんだ！

俺は指示出来ずにマニユーラは切り裂く攻撃を受けて壁まで吹き飛
ばされてしまった！

『マニユーラ！？』

俺は慌ててマニユーラに駆け寄る。

『大丈夫かマニユーラ！？』

『あ、ああ・・・・タクミ、あいつはかなり強いぞ。』

マニユーラの言う通りだ・・・・マニユーラの辻斬りを受けて
もあのブニャットはピンピンしてやる。

まさか、あの弾力がありそうな身体の脂肪が辻斬りのダメージを吸
収したのか？

「このマーズ様のブニャットを甘く見ないでよね？その程度の攻撃
じゃあ倒れないんだから！」

ブニャット！トドメのギガインパクトよ！！」

ブニャットが凄い勢いでこっちに向かって来た！今ギガインパクトなんて大技くらったらいくらマニユーラでも……………くそ！！

俺はマニユーラを守る為にブニャットに突っ込んで行った。

『止めるタクミ！？』

俺はマニユーラの制止を振りきり、ブニャットのギガインパクトを受けた。

『ぐっ！？』

凄いパワーだ！？

だけど、ここで踏ん張らないとこいつはマニユーラに……………

「ブニャット何をしてるの！そんな奴早く吹き飛ばしなさい！」

ブニャットの奴、またパワーをあげてきやがった！？うわぁ！？

俺はブニャットのギガインパクトに耐える事が出来ずに吹き飛ばされて壁に激しく身体をぶつけてしまった。

『うう……………』

やべえ……………意識が朦朧としてきやがった……………

「良くも邪魔してくれたわね？まずはあんたから始末してあげるわよ！」

「ブニャット！」

ブニャットが俺に近づいてきやがった……やばいな……

コロコロ……

ん？俺の所にモンスターボールが転がって来た？

「あのモンスターボールは！？君！それを私に！」

シロナさんが俺にそう言いながらこっちに向かって走ってきた。

これ、シロナさんのか……渡したいけど……身体が思うように動いてくれない……

投げるのは無理だ……だけど、中からポケモンを出す事くらいは……

俺はモンスターボールを軽くタッチした。

すると、モンスターボールは開いて中一匹のポケモンが飛び出した。

「ルカリオ！ブニャットに波動弾！」

中から出てきたのは波動ポケモンのルカリオだった。

シロナさんがルカリオに指示すると、ルカリオは波動の力を集めた技、波動弾を放ってブニャットに直撃させた！

ブニャットは吹き飛ばされて仰向けになって倒れた。目を回して気絶している。

「ブニャット!？」

「形勢逆転ね。他の私のポケモン達も返してもらっわよ。」

シロナさんは近くにあった自分のモンスターボールを回収した。

「おばあちゃん、その子達をお願い。」

「ここは私に任せて。」

「解ったよ。気をつけるんじゃぞシロナ!」

「ええ。ルカリオ!」

おばあちゃん達をカンナギタウンまでお願い!」

ルカリオは頷くと動けない俺を抱えてシロナさんのおばあさんと住人達を連れて部屋から脱出した。マニニューラはなんとか自力で走り一緒に来た。

俺………何してんだろ?シロナさん達を助けるつもりが………
……逆に助けられてるよ………
情けない………な………

俺は意識を失った………

第十四話 シロナさん達を救え！（後書き）

第十四話完成です。

タクミ：なあ作者。最近何か俺達負けるパターンが多くないか？

作者：だって主人公が最強じゃあバトルシーンが面白くないでしょ？

タクミ：確かにそうだけどもぁ……………

一応俺達はカントー、ジョウト、ホウエンのポケモンリーグで優勝したって設定なんだよな？

作者：うん。だけど、いくら優勝したからってシンオウでその実力が通用するとは限らないでしょ？

タクミ：うつ（汗）た、確かにそうかも（汗）

作者：心配しなくても大丈夫だよタクミ。

君達はこれからいろんな事を経験して強くなっていくから。

タクミ：本当かぁ？

作者：嘘はつきません。

第十五話 夢の中で

……あれ？ここってまさか……

今まで意識を失っていた俺が目覚めた場所はとても懐かしい場所だった。何故なら、俺が生まれ育った場所。

カントー地方のトキワシティだったからだ。

なんで俺トキワシティに……確か俺はシロナさん達を助ける為にあのマーズとか言う奴とバトルして……マニョーラがやられそうだったから俺が守ろうとして攻撃を受けて……

「おいブイゼル〜！」

ん？誰かの声が聞こえたぞ？誰だ？

「ハア、ハア、ハア……やつと見つけたよブイゼル〜！もう急にいなくなるから捜しちゃったよ〜！」

えっ……これは……どういう事だよ……

俺は驚いた。

目の前で息をきらせながら俺を見てるのは子供で隣にはポップがいるんだが、その子供が昔の俺だったんだ！

「もう勝手にいなくなっちゃダメだよブイゼル。さっ帰ろ」

そう言っって昔の俺が俺を抱き上げた。

……なんだよこれ？

夢を見てんのか俺は？

……夢に決まってるよな？それにカントー地方にブイゼルがいる訳ないし……けどなんでだろ？凄く懐かしい感じがする……

俺がそんな事を考えてる時、突然強烈な睡魔に俺は襲われた。
……ダメだ……とても……起きてられない……
俺はそのまま目を閉じて眠りついた。

『……タクミ……』

誰かの声が聞こえる……この声……ピジョットか？

『うう……』

俺はゆっくりと目を開けた。

そこはトキワシティじゃなく何処かの家の中だった。

……やっぱり、さっきのは夢だったのか？

『気がついたかタクミ！おい皆！タクミが目を覚ましたぞ！』

俺の隣にいたピジョットがそう大声をあげて言った。

すると、いつ出てきていたのか俺のポケモン達全員がやってきた。

『タクミ!』

『ダーリン!大丈夫なの?』

ヒコザルとエーフィが心配そうな表情をしながら俺に聞いた。

『大丈夫だ……痛ッ!?』

上体を起こそうと思ったんだが、その時に身体に激痛が走った。
ブニャットのギガインパクトのダメージがまだ残ってるみたいだ。

『無茶するなタクミ!』

まだ安静にしている。』

ピジョットに言われ、俺は再び横になった。

今気がついたけど、俺の身体には誰かが治療してくれたのか包帯が巻かれていた。

『ピジョット……ここは何処なんだ?』

『ここはシロナの家だ。』

ピジョットに聞いたんだが、別の方から声が聞こえてきた。

声が聞こえた方に顔を向けるとそこにはシロナさんのルカリオがいた。

腕組みしながら壁に寄りかかっている。

『ちなみにお前の怪我を治療したのはシロナの祖母だ。』

あとで礼を言っておけ。言葉は通じなくても気持ちちは伝わる筈だ。』

シロナさんのお婆さんが……あれ?

そういえばシロナさんがいない……

『ルカリオ……シロナさんは？』

『シロナはまだバトルをしている。』

まだバトルを！？

『安心しろ。波動でシロナのバトルをみているんだが、シロナが相手を圧倒している。』

そういえばルカリオは波動を使って離れた所にいる相手の行動を知る事が出来るんだっただな？

そうか……シロナさんが勝ってるんだ。

さすがシンオウチャンピオンだな……

『お前はまだ寝ている。回復しきれてないんだからな。誰かが襲いかかってきても俺が追い返してやる。』

ルカリオはそう言う部屋から外に出た。
見張りをするつもりなんだろ。

『……なあ、ピジョット。変な事聞くけど、昔俺にブイゼルの友達がいいたか？』

俺はピジョットに聞いた。ポツポの頃からの付き合いで、俺が小さかった時からずっと一緒にいたこいつなら何か知ってるかもしれないと思ったんだ。夢で見たあの光景の事も……

『ブイゼル？うーんどうだったかなあ……』

ピジョットはしばらく考え込んだ。

『……すまん。思い出せない（汗）』

『そっか……なら良いんだ。ごめんな、変な事聞いて……』

やっぱあれはただの夢だったのかな？

……また眠くなってきやがった……

『……悪い……眠くなっちゃったよ……』

『良いさ。ゆっくり寝なよ。そばには俺達がいるからさ。』

俺はピジョット達に囲まれたままゆっくり目を閉じて再び眠りについていた。

第十五話 夢の中で（後書き）

第十五話完成です。

タクミ：今回なんか意味深なシーンがあったな作者？

作者：うん。何故タクミがポケモンになったのに記憶が無くならなかったのか……まだちゃんと話に出てないよね？

タクミ：そういえばそうだったな。

作者：今回の話はそれに関係するんだよね。

タクミ：へえ〜。

どんな風になるんだ？

作者：ネタバレになるから言えません。

タクミ：やっぱか（汗）

第十六話 頼もしい協力者！（前書き）

あの夢……何だっただろ？

第十六話 頼もしい協力者！

シロナさんを助けるつもりが負傷してしまい、逆に助けられてしまった俺。俺はシロナさんの実家で治療を受けて怪我を治してもらっている。

シロナさんはあの後、ギンガ団を追いつめたらしいんだけど逃げられてしまったんだってさ。

しかし、さすがシンオウチャンピオン。

マニニューラが苦戦したブニャットを使うマーズを倒しちゃうなんてさ。

「はい、もう大丈夫ね。」

俺はまだシロナさんの実家にいる。

今はシロナさんに包帯を取ってもらっているところなんだ。

「……ねえ、君って一体何者なの？」

腕に付けてるボールホルダー、それにこのマニニューラ達のまるでトレーナーに懐いているみたいな君への態度。

君は普通のブイゼルじゃないわよね？」

包帯を巻き取りながらシロナさんが俺に聞いてきた。確かに、普通ブイゼルがボールホルダーを付けたりしないし、タイプが違うポケモン達が俺に懐いていたら変だっと思うよな。

……シロナさんにだったら教えても良いかな。

『ヒコザル、俺のリュックからあれ取ってくれないか？』
『解ったよタクミ。』

俺はヒコザルに俺のリュックからマコトが作ってくれたネックレスを取ってくるように頼んだ。

ヒコザルはネックレスを取ってきてくれた俺に渡してくれた。

『ありがとうヒコザル。』

ヒコザルに礼を言った後、俺はネックレスを首に掛けた。

「…………あの、シロナさん…………」
「えっ!？」

俺が人間の言葉を喋ったらシロナさんは驚いたみたいだ。
そりゃ驚くよな、ポケモンが人間の言葉を喋れば……

「驚かせてすみません…………俺の名前はタクミって言います。
これは俺の親友が作ってくれた物で、ポケモンが人間の言葉を喋れるようになる道具なんです。
あと、助けてくれてありがとうございます。」

ちゃんとお礼は言わないとな。

「タクミ君…………やっぱりただのポケモンじゃなかったのね？」
「俺は…………本当は人間です。訳あって今はブイゼルになってますけど…………」

「一体何があったの？」

俺はシロナさんに説明した。俺は国際警察で、ネオ・ギンガ団のルートに薬を打たれてブイゼルになってしまった事。

そして、今俺はネオ・ギンガ団を捜している事、今までに起きた事全部話した。

「……確かにトバリシティで子供達が行方不明になっているという事件は聞いていたけどまさかそんな事が……」

「でも事実です。」

まだ公にはなっていないんですけど……」

「……それで、何かそのネオ・ギンガ団に関して手掛かりは掴めたの？」

「いえ、何も……」

「そう……ねえタクミ君。私もあなたに協力させてくれないかしら？」

えっ！？

「でも……」

「あなただけでどうにかなる相手じゃないでしょ？それに、私が声を掛ければシンオウの四天王や全ジムリーダーも協力してくれるわ。一人で捜すより大勢で捜した方が見つける確率が高くなるし。」

シロナさん……

「……それじゃあ、協力してもらっても良いですか？」

「もちろんよ。」

シロナさんが協力してくれる事を約束してくれた。頼もしい助っ人だよ。

「これが俺のポケギアの番号です。
何かあったら連絡を下さい。」

俺はシロナさんに俺のポケギアの番号をメモした紙を渡した。
ちなみに今俺とシロナさんは外に出ている。

「解ったわ。」

「じゃあ俺、そろそろ行きます。」

そう言っただ俺はピジョットの背中に乗った。

「気をつけてねタクミ君。」

「はい。ピジョット！」『掴まってるよタクミ！』

ピジョットは翼を大きく羽ばたかせて飛んだ！

『それでタクミ、目的地はさっき彼女が言っていた場所で良いのか？』

さっき言っていた場所ってのはマサゴタウンの事だ。
シロナさんが言うには、マサゴタウンにいるナナカマド博士ならもしかしら俺を人間に戻す方法を何か見つけてくれるかもしれないんだってさ。今はネオ・ギンガ団やシロナさん達を襲ったギンガ団の手掛かりは何も無いし、今はマサゴタウンに行ってみるのが良いだろ。

「ああ。」

『解った！』

ピジョットはマサゴタウン目指して前進した。

第十六話 頼もしい協力者！（後書き）

第十六話完成です。

第十七話　マサゴタウンを目指して。タクミVSコウキ！（前書き）

シロナさんってやっぱり不思議な人だよなあ……

第十七話　マサゴタウンを目指して。タクミVSコウキ！

カンナギタウンを飛び立ってから数十分。
俺とピジョットは今シンオウ地方の大都市、コトブキシティの上空を飛んでいる。

目的地のマサゴタウンまではもうすぐって所か……しかし、凄いなコトブキシティは。
デカイ建物がいくつも並んでるよ。

『タクミ、あれを试着みる！』

『ん？』

ピジョットが地上を見ながら俺に聞いてきた。
何か見つけたのか？

俺は地上を見してみる。

コトブキシティとマサゴタウンの間にある202番道路。

そこで二人の大人の男と一人の少女を発見した。

二人の横にはアブソルとグラエナがいる。

なんか、アブソルとグラエナが少女を威嚇してるな？

『なんかトラブルか？』

ピジョット、近くに降りてくれ。』

『解った。』

ピジョットは三人から少し離れた所に着地した。その後、俺とピジョットはゆっくりと三人の近くへ向かった。

「さあもう逃げられないぜお嬢ちゃん？」

「大人しく俺達と来てもらうぞ。」

男二人が脅すような口調で少女に言っている。

「誰があんた達みたいな如何にも悪人面した奴と一緒に行くもんですか！それに、私に何かしたらお兄ちゃんが黙ってないわよ！」

あの子結構気が強いな。

「うるさい小娘だ……」

博士から身の代金を受け取るまでの間眠っけてもらおう。
やれアブソル！」

一人の男がアブソルに指示すると、アブソルが少女に襲いかかるうとした！させるか！

『ピジョット、電光石火でアブソルを吹き飛ばせ！』

『解った！』

ピジョットが猛スピードでアブソルに体当たり！アブソルはピジョットの電光石火を受けて吹き飛んだ！

「な、なんだ！？」

男二人が驚いている。

俺は少女を守る為に少女の前へ。

ピジョットも一緒。

「えっ？ブイゼル？」

少女はキョトンとした表情をしている。

「ポケモンのくせに俺達の邪魔をしようってか？生意気だな。グラエナ！そいつらを倒せ！」

「アブソル！倒れてないでお前も行け！」

アブソルとグラエナが俺達に向かって飛びかかってきた！

『ピジョット、竜巻で奴らを吹き飛ばすんだ！』『任せろ！』

ピジョットは翼を思いっきり羽ばたかせ、大きな竜巻を作り出した！ピジョットが作り出した竜巻はアブソルとグラエナ、さらにそのトレーナーである男二人を巻き込み空高く吹き飛ばした。
男達は星になった。

こりやまたえらく飛んだなあ。

まあ、ああいう奴らにはちょうど良いか。

「すっごーい……」

少女がピジョットの竜巻を見て感動してるみたいだ。

見たところ、怪我はしてないみたいだな。

さっきの奴らは思いっきり吹っ飛ばしたから一人にしても大丈夫だ

な。

『行こう。ピジョット。』 『解った。』

俺はピジョットの背中に乗った。

そしてマサゴタウンに向かおうとしたんだけど……

「おい！」

今度はなんだ？

俺と同じ年っぽい青年がこっちに向かって走って来た。

「あつ！ コウキお兄ちゃんだ！」

「コウキお兄ちゃん！」

少女がそう言って走りだした。

あのコウキってのがあの子の兄貴って事か。

ん？ コウキ？

どっかで聞いた事あるような……

何処だったかなあ？

「もういきなりいなくなるから心配したぞアイ！ 大丈夫だったか？
何処か怪我とかしてないか？」

コウキが妹のアイの事を凄く心配そうな表情をしながら聞いている。

「うん大丈夫！」

途中怖い人に追いかけられたけど、彼処にいるブイゼルとピジョットが助けてくれたから！」

「ブイゼルとピジョットが？」

コウキが俺達の事を見ている。
特に俺の事をじーっと見ている……
なんで俺をじーっと見てんだよ（汗）

「その腕に巻き付けてあるボールホルダー……
そしてピジョット……
君、もしかしてタクミ君かい？」

えっ！？なんでこいつ、俺の名前を！？

「コウキお兄ちゃん、この子達を知ってるの？」
「まあな。アイ、悪いけどちょっと下がっててくれないか？」
「えっ？う、うん解った。」

アイがコウキから少し離れた。なんだ？

「来いムクホーク！」

コウキが腰に付けていたモンスターボールを手にとって俺達の前に
投げてきた！
そしてモンスターボールが開いて中からピジョットより少し小さい
ポケモンが出てきた。
こいつが猛禽^{もつきん}ポケモンのムクホークか……ってか、なんでいきなり
そんなポケモンを出してくるんだよ！？

「悪いけど、ちょっと試させてもらうよ。
さあ、このムクホークとポケモンバトルだ！」

ポケモンバトルだって？

『どうするタケミ?』

あのムクホークとか言う奴とそのトレーナー、やる気みたいだが…

⋮
⋮
⋮
⌞

だな（汗）

なんだか知らないけど、ポケモントレーナーとして売られたバトルは買わないとな。

ピジョット、行ってくれるか？
□

任せる。

俺はピヨットから降りてバトルの邪魔にならないように少しピジヨットから離れた。

「どうやら受けてくれるみたいだね？」

全力でやるよ！

ムクホーク！電光石火で突っ込め！」

ムクホークが凄いスピードでピジョットに突っ込んで来た！

「ピジョット！吹き飛ばしだ！」

「解つた！」

「ピジョットは翼を思いつきり羽ばたかせて突風を発生させた！この突風でバランスを崩したところにピジョットの電光石火を……」

「ムクホークにそんな技は通用しない！」

いっけえええ！！」

げっ！？ピジョットの作り出した突風の中を突き進んできた！？

『ピジョット！吹き飛ばしを止めて高速移動だ！空中に逃げる！』
『あ、ああ！』

ピジョットは吹き飛ばし攻撃を止めて高速移動で上昇した。

「逃がすなムクホーク！」

ムクホークもピジョットを追って上昇してきた！あのムクホーク、かなり良く育てられているな……高速移動を使っているのに逃げ切れない……
なら！

『ピジョット！そこで燕返しだ！！』

ピジョットはその場でターンしてムクホークに突っ込んでいった！
この燕返しによる不意打ち、避けられないだろ！

「ムクホーク！影分身で避ける！！」

避けられないと思われたピジョットの燕返しを、あのムクホークは影分身を使って上手く回避した！電光石火のスピードを活かしての影分身か……やるな！

「ムクホーク！電光石火で加速だ！
そしてそのままブレイブバード！！」

ムクホークが電光石火でピジョットに突っ込んできた……いやそれだけじゃない、電光石火のスピードにプラス落下のスピードも合わせたブレイブバード……

良い攻撃だけど、その技を受ける俺のピジョットじゃないぜ！

『ピジョット！フェザーダンスだ！！』

俺がそうピジョットに指示すると、ピジョットは大量の羽毛をムクホークに向けて放った！

フェザーダンスには相手の攻撃の威力を下げる効果がある。

だけど、俺の狙いは威力を下げる事じゃない！

フェザーダンスで放った大量の羽毛でムクホークの視界を奪い、その隙にピジョットが高速移動でムクホークの背後を取る事なんだからな！

「しまった！？」

コウキが慌てだしたな。俺の狙いに気づいたみたいだが、もう遅いぜ！

すでにピジョットはムクホークの背後を取った！

さすがピジョットだ！

俺が細かい指示を出さなくてもちゃんと解っている！

『これで決めるぞピジョット！最大パワーの燕返しだ！！』

ピジョットの最大パワーの燕返しがムクホークの背中に直撃した！ムクホークはそのまま地上に落下して地面に激突！砂ぼこりがあがった。

……やったか？

ゆっくりと砂ぼこりが晴れていく……

ようやくムクホークの姿を確認する事が出来た。ムクホークは目を回している。

どうやら戦闘不能だな。

『ピジョット、ご苦勞様！かつこよかったぜ！』 『よせよタクミ、照れるじゃないか……』

顔を赤面させているピジョット。

「負けちゃったか……戻れムクホーク！
ゆっくり休んでくれ。」

倒れたムクホークをモンスターボールに戻したコウキ。
その後俺達の所に近づいてきた。

「カントーにジョウトにハウエンで優勝しただけの事はあるね。
さすがだよ。」

いきなりポケモンバトルを申し込んでごめんね？君が本物のタクミ
君なのかどうか、確認したかったから……」

右手で頭を抑えながらコウキが申し訳なさそうに言っている。
本人確認の為にバトルしたって事が……

「今のバトルで解ったよ。君がタクミ君だってね。さあ、早速ナナ
カマド博士の所に案内するよ。こっちだよ。」

コウキがマサゴタウンの方へ歩き始めた。

『タクミ、あのトレーナー信用出来るのか？』

隣にいたピジョットが俺に聞いた。

『あいつは信用出来ると思う。』

妹思いの良い奴みたいだしさ………』

「おいでブイゼル

コウキお兄ちゃんが先に行っちゃうよ！」

『ってうわっ！？』

いつの間にか近くに来ていたアイに俺は抱き上げられてしまった（汗）

そしてそのままアイはコウキの所へ。

『あっ！？待てよタクミ！』

ピジョットも慌てて追いかけて来た。

……ブイゼルになってから良くこんな風に抱き上げられるようになったっちゃんけど……

やっぱこれ恥ずかしいなあ（汗）

第十七話　マサゴタウンを目指して。タクミVSコウキ！（後書き）

第十七話完成です。

タクミ：一週間弱更新が無かったな作者？

作者：すみません（汗）

風邪ひいて寝込んでました（汗）

タクミ：おいおい、ちゃんと体調管理はしとけよ（汗）

作者：以後気をつけます（汗）

第十八話 マサゴタウンのナナカマド研究所。タクミは注射が嫌い？（前書き

コウキのムクホーク、結構強かったなあ。

第十八話 マサゴタウンのナナカマド研究所。タクミは注射が嫌い？

コウキの案内で俺は今マサゴタウンにあるナナカマド博士の研究所の前まで来ていた。

途中コウキから色々話を聞いたんだけど、俺がこっちに向かっている時にシロナさんがナナカマド博士やコウキに連絡をしていたみたいなんだ。

だから俺の事をコウキは知っていた。
シロナさんは本当に頼りになるなあ。

「ブイゼルって毛がフワフワしてるのね
抱いてると気持ちいいわ」

俺はまだコウキの妹のアイに抱き上げられたままなんだよな（汗）
もういい加減降ろしてほしいよ（汗）

「アイ、これから兄ちゃんとのブイゼルは中で大事な話があるから家で待っててくれないか？」

コウキがアイに自分の家で待つよう言っている。

「えゝ！私もこの子と一緒にいきたいゝ！」

俺と一緒にいきたいと言って家に帰るのを拒否するアイ。
それと同時に俺を抱き締める力が強くなった（汗）

く、苦しいんだけど（汗）

「頼むよアイ。話が終わったら後で遊んでやるからさ。」

両手を合わせてアイに頼むコウキ。

「うゝ解ったわよ……」

ちよつとふてくされた感じでアイは俺を降ろしてくれた。
はあゝ……苦しかったぜ（汗）

『大丈夫かタクミ？』

隣にいたピジョットが俺に聞いてきた。

『な、なんとかな（汗）』

本当は結構しんどかったけど（汗）

「約束だからね！
絶対遊んでよ！」

アイは自分の家に向かって走って行った。

「ごめんねタクミ君。
アイってちよつとわがままなところがあったさ。
さあ、中に入ろう。
博士が待ってるよ。」

コウキが研究所の扉を開けて中へ。
俺とピジョットもあとに続く。

「お爺ちゃん！タクミ君を連れて来たよ！」

中に入ったと同時にコウキが誰かを呼んだ。

コウキの呼ぶ声が聞こえたようで、奥から一人の老人、ナナカマド博士がやって来た。

つてか、コウキってナナカマド博士の孫なのか！？

「良く来たなタクミ君。……シロナ君から話は聞いていたが、まさか本当にポケモンになってしまったとは……」

ナナカマド博士は俺がブイゼルになった事を驚いているみたいだ。そりゃそうだよな……

俺がナナカマド博士と出会ったのが二ヶ月前。

その時はまだ人間だったのに……二ヶ月後にはブイゼルになってるんだもんな……

「タクミ君、一体何があったのか詳しく聞きたいのだが……」

ナナカマド博士は俺がブイゼルになった事は知ってるけど、どうやってなったかは知らないみたいだな。教えないと。

俺はリュックからネックレスを取り出して首に付けた。

「久しぶりですナナカマド博士。」

「えっ！？言葉喋れたの！？」

隣にいたコウキがかなり驚いている。

「このネックレスのおかげで言葉を喋れるんだよ。それより、俺がブイゼルになった原因ですが……」

俺はナナカマド博士にどうして俺がブイゼルになったのかを説明した。

それと今までに起きた事も。

「ネオ・ギンガ団……」

そしてその総帥プルートが、タクミ君に薬を注射してブイゼルに変えたと……」

右手を顎^{あご}に当てながらナナカマド博士がそう言った。

「タクミ君だけじゃなく、何の罪もない子供達までポケモンに変えるなんて……」

許せない！ネオ・ギンガ団！」

コウキが両手で拳を握り締めて身体を震わせている。

「タクミ君、そのポケモンに変えられた子供達は今どうしてるんだね？」

右手を顎に当てたままナナカマド博士が聞いてきた。

俺は、今子供達は国際警察が保護していると答えた。

「そうか……」

「……ところで、一つ気になった事があるんだけど……」

コウキが聞いてきた。

気になる事？

「ポケモンに変えられると、人間だった記憶は無くなって完全にポケモンになっちゃうってタクミ君は言ったよね？
だけど、タクミ君は記憶を無くさなかった……
これは何故なんだろう？」

腕組みしながらコウキが言った。

……そういえばそうだな……何で俺は記憶を失わずに済んだんだろ？

「コウキ、タクミ君。

確かにそれは気になる事ではあるが、今はポケモンになってしまったタクミ君や子供達を元に戻す方法を見つけるのが先なのではないかね？」

ナナカマド博士が言った。

……博士の言う通りだな。だけど……

「どうやって人間に戻る方法を見つけるんですか？」

俺は博士に聞く。

「それを見つけるには、タクミ君。
君に協力してもらわねばならん。」

そう言っただけで博士が研究所に用意されている机の所へ向かった。
そして机の引き出しを開けて中から何かを取り出した。

……あれってまさか（汗）

「まずはタクミ君の血液を取らせてくれ。
タクミ君の血液を調べたら何か解るかもしれないから。」

やっぱり注射器!?

「あ、あのっ!?!ちゅ、注射だけは勘弁してください!?!」

俺は小さい時から注射は大嫌いなんだよ!
ブルートのオッサンに薬を注射された時からさらに嫌いになってんだよ(汗)

「タクミ君、君は男の子だろ?
注射位我慢してくれ。」

注射器持つて博士が俺に近づいてきた(汗)
協力したいけど、注射だけは絶対嫌だ!
俺は全力でその場から逃走しようと、出口目指して走り出した!

「あっ!?!待ちたまえタクミ君!?!」

待てと言われて待てるかよ!

『逃げるなタクミ!』

「げはっ!?!」

ピジョットの両足に俺は捕まってしまった(汗)
ピジョットは俺を床にしっかりと押さえつける。そのせいで全く身動き出来ねえ(汗)

「ピジョット!お前俺を裏切るのか!?!」

『お前が注射が嫌いなのは知っているが、こういつ時位我慢しろ。人間に戻る為だろ？』

それは解っている！
解ってはいるけど！

「だけど注射は嫌なんだよ！
離すんだピジョット！」

俺はピジョットから逃げようともがくが、ブイゼルになっている今の俺ではピジョットの力に勝てない（汗）
やはり逃げられなかった（汗）

「タクミ君、心の準備は良いかね？」

はっ！？いつの間にか博士が注射器の鋭い針を俺に刺そうとしている！？

「ちよっ！？待ってくれ！？
まだ心の準備が……」

そこまで言いかけた時、突然誰かの手が目の前に現れて俺の目を塞いで目隠ししやがった！

「刺されるところを見るから怖くなるんだよ。
これなら大丈夫でしょ？」

コウキか！いや、見えないと逆に怖いんだけど！？

「それじゃ、行くぞタクミ君。」

「やゝめゝてゝ!？」

「結果が出るまでは何日か掛かる。

それまではタクミ君。

私の家に泊まっていきなさい。」

……結局俺は注射されてしまった。

俺の右腕には絆創膏ばんそうこうが貼られている(汗)

結果が出るまでしばらく掛かるらしいから博士は俺を家に泊めてくれるらしい。

「……それじゃ、泊まらせていただきます……」

「タクミ君、なんか元気ないけど大丈夫？」

コウキが心配そうな表情をしながら俺に聞いた。

「大丈夫な訳ないだろ！大嫌いな注射を無理やりやられたんだからな！」

俺は思わず怒鳴ってしまった。

「アハハ……(汗)」

まあ、すぐに済んだから良かったじゃない。」

あつ笑って誤魔化したこいつ！

「さあ、僕の家案内するよ。

あつそのネックレスは外しておいてよ？

妹の前で人間の言葉を喋ると色々と問題になるでしょ？」

「それ位解ってるさ！」

俺はネックレスを外してリュックに閉まった。

「それじゃ行こうか！」

俺はコウキと一緒にナナカマド博士とコウキの家に向かった。

第十八話

マサゴタウンのナナカマド研究所。

タクミは注射が嫌い？

（後書き

第十八話完成です。

第十九話 アイと遊ぼう！アイはタクミがお気に入りに？（前書き）

ナナカマド博士に無理やり注射をされて血を抜き取られた俺（汗）
注射なんか大嫌いだ！

第十九話 アイと遊ぼう！アイはタクミがお気に入り？

「着いたよタクミ君。

ここが僕の家だよ。」

今俺はコウキと一緒にいるんだ。

俺の血液の検査結果が出るまで時間が掛かるから、博士の提案でコウキの家にしばらく泊めてもらう事になったんだ。

んで、今俺はコウキの家の前にいる。

「あつそうだ！

タクミ君、一つ頼みたい事があるんだけど良いかな？」

「ブイ？」

頼みたい事？

何だよ頼みたい事って？

「君の手持ちポケモンってピジョットだけじゃないんでしょ？

もし良かったら、他のポケモン達もモンスターボールから出しても
られないかな？」

「ブイブイ？」

フライゴン達を？

首を傾げながら俺は言った。

「アイはポケモンが大好きでね。

アイと遊ぶ時は僕の手持ちポケモン全員を出して遊ぶんだ。

そこで、僕のポケモン達だけじゃなくタクミ君のポケモン達にもアイの遊び相手になってほしいんだ。」

あの子の遊び相手にねえ……

まあ、泊めてもらっただし協力しても良いか！

『皆出てこい！』

俺はフライゴン達をモンスターボールから出した。

『ダーリン！中々出してくれなかったから寂しかったわよー！』

出てきていきなり俺に擦り寄るエーフィ（汗）
しかも甘ったるい声を出しながら（汗）

『またお前はそうやってタクミに擦り寄る！
いい加減それ止めるよな？』

ちょっと呆れた感じでピジョットがエーフィに言った。

『何よ！部下一号のくせに生意気よー！』

エーフィが怒った（汗）
この展開はまさか……

『だから誰が部下一号だ！』

やっぱりか（汗）
なんでこの二人は顔を合わせる度にこうなるんだろうなあ（汗）

『ちょっと部下二号！
一号を懲らしめてやりなさい！』

イーフィが強い口調でフライゴンに言った。

『えゝ!?ば、僕ゝ!?』

戸惑っているフライゴン。ってか、部下二号言われてるのにそこは否定しないのなフライゴン(汗)

「これがタクミ君のポケモン達か……随分と賑やかだね。」

コウキが冷静に言った。

「コウキ兄ちゃん帰ったの?」

コウキの家からアイが出てきた。

「あつ さっきのブイゼルだ」

「ブイツ!?」

アイが近づいてきて俺を抱き上げた(汗)
またですか(汗)

「うわぁ こっちにはイーフィがいる
あつヒコザルもいる」

アイが俺を抱き上げたままイーフィとヒコザルに近寄っていった。
本当にポケモンが好きなんだな……ってか降ろしてほしいんだけど
(汗)

『俺らには近寄らないのかよ(汗)』

あつピジヨットやカメックス達が落ち込んでいる（汗）

「コウキ兄ちゃん、この子達は？」

「皆そのブイゼルの仲間達だよ。」

しばらくお爺ちゃんの研究を手伝ってもらう為に家に泊まる事になったんだ。」

コウキがアイに説明した。

「そうなんだ！」

じゃあ、しばらくこの子達と一緒にいられるのね」

抱き上げられてるからアイの顔が見えないけど、多分笑顔なんだと思う。声が凄く嬉しそうな感じだからな。

……それは良いとして、降ろしてほしい（汗）

「ねえコウキ兄ちゃん！この子達と遊んできても良い？」

えっ（汗）

家に入らないんすか（汗）

「良いよ。でも、あまり遅い時間まで遊んじゃだめだぞ？」

止めないのかよコウキ！？

「やった〜 皆おいで！私が一番好きな場所に案内してあげる！」

アイは俺を抱き上げたまま走り出した。

ピジヨット達も慌ててあとを追いかけて来た。

何処に連れてかれるんだよ俺達（汗）

「到着」

意外とマサゴタウンから離れたな（汗）

俺達が連れて来られた場所は綺麗な湖がある所だった。

「ここはシンジ湖って所なの。

綺麗な所でしょ？

私が一番好きな場所なの」

シンジ湖、ここがそうなのか……

確かこの湖には伝説のポケモン、エムリットがいるんだったよな？

「さあ、まず何して遊ぼうか」

早速遊ぶのね（汗）

それよりも早く降ろしてほしい（汗）

「そうだ 皆でかくれんぼしよう

私とブイゼルが鬼でエーフィ達は隠れてね？」

何故に俺も鬼なの（汗）

『タクミ、やるのか？』

ピジョットが俺に聞いてきた。

『この子もうやる気満々みたいだからやるしかないだろ（汗）』
『解った。よし、隠れるぞ皆！』

ピジョット達が一斉に散らばって行った。

皆結構やる気あったみたいね（汗）

ピジョット達が散らばってから一分が経過。

「さあ、行こうブイゼル」

アイと一緒にピジョット達を捜しに行く事になった。

捜しに行くのは良いけど、何故俺を抱き上げたままな訳（汗）

「あつ！ヒコザルみつけた」

捜し始めてからわずかに十秒。

アイはヒコザルを見つけ出した。

つてか良く見つけたな？ヒコザルは木の上にいたのに。

『あゝ見つかったよ（汗）』

残念がつてるヒコザル。

「さあ、この調子で他の皆も見つけるわよ！

ヒコザルも一緒においで」

アイに呼ばれ、ヒコザルも一緒にピジョット達を捜す事になった。

『タクミ、何でその子に抱かれたままなの？』

『俺が知りたいよ（汗）』

ヒコザルを見つけ出してから五分後。

「はい！ピジョットとフライゴンみつけた」

アイはピジョットとフライゴンを見つけ出した。
まさか二人共同じ場所に隠れていたとは（汗）

『あちゃー！見つかったね？』

『だからお前と一緒に隠れるのは嫌だって言っただよ！
俺達みたいに身体が大きいのが一緒だと見つかりやすいってのは解
つてたろ！』

フライゴンを怒っているピジョット。

『だってー一人は寂しいんだもん！』
『お前は子供か！？』

お前ら漫才コンビか（汗）

「えっと……あとはカメックスとマニョーラとエーフィだけね？
よし皆行くわよ」

再びかくれんぼが再開された。
カメックスとマニョーラとエーフィか……
意外にかくれんぼが強そうなメンツが残ったなあ（汗）

「あれ〜？中々見つからないわね〜？」

かくれんぼ開始から三十分。

中々カメックス達が見つけれないでいた。

つてか、この三十分俺はアイに抱かれたままでかくれんぼに参加してないんだよな（汗）

俺ってそんなに抱き心地が良いのか？

「ちよつと疲れちゃったな〜。
少し休憩しよつか」

アイは近くにあつた少し大きめの岩に座った。

ヒコザルはアイの隣に来て一緒に座る。

ピジョットとフライゴンはその場で座る。

……もうそろそろ俺を放してほしいんだけどなあ（汗）

「バイバイ。」

俺はアイの手を軽く叩いて放してほしい事をアピールした。

「ん？どうしたのバイゼル？」

放してほしいんだが、こりや理解してないな？

俺はもう一度放してほしい事をアピールした。

「あつ解った！お腹空いたんでしょ？」

いや、違うつて（汗）

「ブイブイ（汗）」

『放してほしいうて言ってるんだけど（汗）』

「はいはい、ちょっと待っててね。」

はいどうぞ　ママが作ってくれたポケモンクッキーよ　」

アイはポケットの中からピカチュウの顔をしたクッキーを取り出して俺に手渡した。

「ブ、ブイ（汗）」

『あ、ありがとう（汗）』

全然俺の意思が伝わってねえ（汗）

何か……ポケモンの気持ちが解ったような気がする（汗）

『あゝ良いなあタクミ〜！』

ヒコザルが俺がアイからもらったクッキーを凄く欲しそうにしている（汗）

『……美味しそう。』

フライゴンまでクッキーをじーっと見ている（汗）

『お前らなあ……まあ確かに美味そうだけど……』

ピジョット、お前もか（汗）

「皆も欲しい？」

アイがピジョット達に聞くとすかさず皆は頷いて答えた。
ピジョット達が欲しがってるのは解ったのねアイ（汗）

「はいどうぞ」

アイがポケモンクッキーを取り出すとピジョット達はすぐに飛びついた。

お前達……（汗）

『あゝ私もクッキー欲しい〜！』

ん？この声はもしかして……声がした方に振り向くとそこにはエーフィがいた。

「あつ エーフィみ〜つけた」

アイが嬉しそうに叫んだ。

『あつしまった（汗）』

クッキー欲しさに出て来ちゃった（汗）『

エーフィ……（汗）

「エーフィもクッキー欲しい？」

アイがポケモンクッキーを手に取ってエーフィに見せる。

『欲しい』

エーフィが笑顔でクッキーに飛びついた。
皆揃ってクッキーの誘惑に負けちゃったよ（汗）
ポケモンクッキー、恐るべし（汗）

クッキーを食べ終えた後、再びかくれんぼを再開した。
残るはカメックスにマニョーラか……
カメックスはともかく、マニョーラは手強いだろうなあ。

「ふっふっふん
どこにいつるのっかな」

上機嫌に鼻歌を歌うアイ。かくれんぼを楽しんでいるみたいだな？

「ダーリン、近くに誰かいるみたいよ。」

エーフィが東の方角を見つめながら俺に言った。

「本当かエーフィ？」
「ええ。あっちの方だけ風の流れが違う感じがするから多分ね。」

そういえばエーフィは全身の体毛で僅かな風の流れを感じとれるんだっただな？

あの方角か……

捜しに行こうにも俺はアイにしっかりと抱き上げられてるから動けないし（汗）
しょうがない。

『ヒコザル、ちょっと調べてきてくれないか？』 『うん解った。』

俺が頼むとヒコザルはエーフィが誰かいると感じた東の方角に向かって行った。

『……あつ！いたよ！マニユーラ先輩がいたよ！』

ヒコザルが大声で叫んでいる。

「どうしたのヒコザル？」

アイがヒコザルの所に向かって駆け寄って行った。

「あっマニユーラを見つけてくれたのねヒコザル ありがとう」

アイがヒコザルの頭を撫でる。

『……まさか見つかるとは……無念だ。』

残念がつてるマニユーラ。結構自信があつたみたいだな？

「あとはカメックスだね。よし、頑張って捜すわよ」

張り切るアイ。

残るはカメックスだけか……

あんなに身体が大きいから隠れられる場所はそう無いからすぐに見つかるだろう……

「見つからないねえカメックス……」

マニニューラを見つけてから二十分。

今俺達はシンジ湖の前に戻って来ている。

すぐに見つかると思われたカメックスだけど、中々見つけれず
いた。

カメックスの奴何処に隠れたんだ？

「見つけたぞお嬢ちゃん！」

ん？誰かがバカでかい声で叫んだぞ？誰だ？

「あゝ！あんだ達はさっき吹き飛ばされた悪人面のおじさん達！」

アイが指差しながら言った。

またこのオッサン達かよ？あんな目にあつたのにまだ懲りてないの

か？

「この美形の顔の何処が悪人面だ！？」

うわぁ（汗）自分で美形言っただよこいつ（汗）

「おい、子供相手にムキになるな。

お嬢ちゃん、今度こそ俺達と一緒に来てもらうぞ。お前を使ってナカマド博士からたんまり身の代金を貰う為にな。」

自分を美形と言った男の隣にいたもう一人の男がそうやってきた。またそれか……しつこい奴は嫌われるぞ？

「絶対あんた達とは行かないんだからね！」

アイが強い口調で男達に言い返した。

「嫌でも一緒に来てもらう。」

そのブイゼルとピジョットには油断してやられたが、今度はそうはいかないからな！

出て来いギャラドス！」

男が俺達の前にモンスターボールを投げた。

そしてモンスターボールからは凶悪ポケモンのギャラドスが出て来た。

女の子一人を誘拐する為にそんなポケモン出すかよ普通（汗）

「お、大きい……」

アイの手が震えてる。

ギャラドスの迫力に怖がっちゃったんだな……

「更にグラエナ、アブソル！」

男達が次にグラエナとアブソルをモンスターボールから出してきた。ギャラドス、グラエナ、アブソルの三匹か……カメックスがいなくても、問題無いだろ。

『皆！アイを守るぞ！』

俺がそう言つと皆戦闘体勢に入った。

俺も皆にちゃんと指示出来るように近くに行かないと！

『アイ、ちよつと無理やり離れるけど勘弁な！』

俺はアイの腕を無理やり解いてアイから離れた。

「あつブイゼル！？」

『心配すんなよ。』

俺の言葉は通じないけど、俺はアイに心配かけないように笑顔を作った。

「やれギャラドス！

ハイドロポンプだ！」

相手のギャラドスがヒコザルに向けてハイドロポンプを放ってきた！

『ヒコザル！穴を掘るで避けるんだ！』

『うん！』

ヒコザルは穴を掘るで地面に潜ってハイドロポンプを回避した。

「アブソル、鎌鼬^{かまいたち}だ！」

相手のアブソルがエーフィに向かって鎌鼬を放ってきた！
空気の刃か……なら！

「エーフィ！サイコネシスだ！
その鎌鼬をアブソルに跳ね返すんだ！」
「解ったわダーリン！」

エーフィはサイコネシスで鎌鼬をコントロールして、アブソルに跳ね返した！

「避けるアブソル！」

アブソルはバックステップして鎌鼬を回避した。けど甘いぜ！

「今だヒコザル！」

アブソルがバックステップした先の地面からヒコザルが勢い良く飛び出した！

そしてアブソルの顎^{あご}に一発右のアップーを決めた！
アブソルを吹き飛ばした！

「グラエナ！ヒコザルに噛み砕く！」

相手のグラエナがヒコザルに飛びかかってきた！

『ピジョット、フライゴン！

吹き飛ばしと砂嵐の合わせ技だ！』

『了解！』

『任せてよ！』

ピジョットの吹き飛ばしとフライゴンの砂嵐の合わせ技でグラエナを吹き飛ばした！

グラエナが吹き飛んだ先にはアブソルがいて、アブソルはグラエナの下敷きになった。

『まずはあの二匹から倒すか！

マニニューラ！あの二匹にメタルクローだ！』

『……了解！』

マニニューラは素早い身のこなしでグラエナとアブソルに近づいて行って、自分の爪を鋼のように硬くして二匹を攻撃した！攻撃を受けた二匹は上に吹き飛んだ。

そして錐揉み（きりもみ）状態になって地面に落下、激突した。

二匹共目を回している。戦闘不能だな。

あとはギャラドスだ！

「ちっ！ギャラドス！

まとめて片付けろ！

破壊光線！」

相手のギャラドスが破壊光線を放ってきた！

『皆避ける！』

皆は破壊光線を何とか回避する事が出来た……

あつ！？

「きゃああああ！？」

破壊光線がアイに向かっていつちまった！？
くそ、間に合え！

俺は破壊光線が当たる前にアイを突き飛ばした。

『うわぁ！？』

ギヤラドスの狙いが甘かったみたいで破壊光線が俺に直撃しなかったけど、爆風でシンジ湖の中に吹き飛ばされた。

イタタタ……大した威力の破壊光線だな（汗）

……ってあれ？

湖の中なのに呼吸が出来る？

あっそうか！

今の俺は水タイプのブイゼルだから水の中でも呼吸が出来るんだ！

『げっ！？タクミ！？』

ん？背後から声が？

俺が振り向くとそこにはカメックスがいた。

『カメックス！湖の中に隠れてたのかよ！』

どおりで中々見つからない訳だよ（汗）

『ここなら絶対見つからないと思ったんだがなあ……あゝくそっ！』

かなり悔しそうにしているカメックス。

ってこんな事してる場合じゃないんだった！

『カメックス、今はとにかく急いで地上に戻るんだ！アイが危ない！』

『あの女の子が？』

何か起きたのか？』

俺はカメックスに今の現状を説明した。

『何！？だったらここでのんびりしてられないな！タクミ、俺に掴まれ！』

一気に浮上する！』

『わ、解った！』

俺はカメックスの背中に掴まった。

『行くぜ！ハイドロポンプ、出力全開！』
『うわっ！？』

カメックスは地上に背を向けて、湖底に向かってハイドロポンプを最大パワーで放った！

ハイドロポンプの勢いで一気に俺とカメックスは地上へ！

ザバーン！！

『ってカメックス！？
勢いつけすぎだろ！？』

ハイドロポンプの力が強すぎて俺達は空を飛んじまった（汗）

『イヤッホゥ 最高じゃないかタクミ！』

カメックス、お前この状況楽しんでるだろ（汗）

『タクミ！あれが相手か？』

カメックスが指差した先にはギャラドスがいた。

『あ、ああそうだ！』

『よっしゃ！一発で決めてやるぜ！』

カメックスはギャラドスに背を向けて空に向かってハイドロポンプを最大パワーで放った！

そしてハイドロポンプの勢いでギャラドスに向かって突っ込んで行った！

『俺の渾身の一撃、受けてみやがれ！
ロケット頭突き！！』

カメックスが最大パワーのロケット頭突きをギャラドスの頭部に決めた！ハイドロポンプの勢いと落下スピード、更に全体重をかけたこのロケット頭突きを受けたギャラドスは吹き飛んだ！

「んな馬鹿な……ってぐわっ！？」

ギャラドスが吹き飛んだ先には悪人二人がいて、二人はギャラドスの下敷きになった。

そしてギャラドスは目を回してグロッキー状態になっている。

『何だよ？もう終いか？つまらねえな。』

腰に手を当てて、つまらなそうな表情をしているカメックス。つつか、お前が凄すぎなんだよカメックス（汗）

『タクミ、あいつらどうする？』

ピジヨットが悪人達を見ながら俺に聞いてきた。

『とりあえず竜巻で吹き飛ばしておいてくれ。』 『解った。そらっ
！！』

ピジヨットが思いっきり翼を羽ばたかせて竜巻を発生させた。そして竜巻は悪人達を空の彼方へと吹き飛ばした。

「またですか……」

今悲鳴が聞こえたような……気のせいだな。
うん。

あっそうだアイ！

俺は急いでアイの所に駆け寄った。

「ブイブイ？」

「大丈夫かアイ？」

「ブイゼル……ありがとう」

うわっ！？

アイがいきなり俺を抱き締めた！

ち、力が強い（汗）

苦しいんだけど（汗）

「私を助けてくれたのよね？本当にありがとうブイゼル！
あなたは私のヒーローよ」

ヒーローって……

何か恥ずかしいな（汗）

「あっ。ダーリン、もうすぐ雨が降るみたいよ？」

エーフィが急にそんな事を言い出した。

「雨？本当か？」

「ええ。風の流れが変わったから解るの。」

俺は空を見てみた。

……雲行きが怪しいな。

エーフィの言うようにこりゃ一雨来るな。

「ブイブイ！」

俺はアイの腕を軽く叩いたあとに、アイに上を見るようにアピールした。

「うん？上を見てほしいの？」

おっ今回は通じた！

「あつ雨が降りそうね！早く家に帰らないと！
皆おいで！」

俺達はアイと一緒にマサゴタウンのコウキが待っている家に向かって走り出した。

第十九話 アイと遊ぼう！アイはタクミがお気に入り？（後書き）

第十九話完成です。

第二十話 再び事件発生！ノモセシティに飛べ！（前書き）

アイに気に入られたみたいんだけど……一日中抱き上げられる
ってのは辛いな（汗）

第二十話 再び事件発生！ノモセシティに飛べ！

「……すゝ……すゝ……うゝん……ブイゼル……」

アイとかくれんぼして遊んだその次の日の朝。

俺はアイと同じベッドで、ヒコザルやピジョット達はこのコウキの家の中で一番広いリビングで寝かせてもらう事になったんだ。

本当は俺もピジョット達と一緒に寝ようとしたんだけど、アイと一緒に寝たいって言うてきてさ（汗）

ちなみに、今の状況はというと……ぐっすり眠っているアイに思いつき抱きつかれているんだよ（汗）

多分、夢の中で俺と遊んでるだと思っただけど……

プルプル……プルプル……

あつ俺のポケギアが鳴った！

こんな朝早くに誰だ？

『アイ、ちよつとごめんよ……』

アイを起こさないように俺はゆっくりとアイから離れる。

そしてポケギアと人間の言葉を喋れるようになるネックレスを手
に、俺は家の外に出る。

「はいもしもし。」

外に出た俺はネックレスを首に付けてポケギアに出た。

『あつタクミ君?』

あれ?この声もしかしてシロナさん?

「シロナさんですか?」

『ええ。こんな朝早くにごめんなさい。』

もしかして、ネオ・ギンガ団の情報を掴んだのかな?

「ネオ・ギンガ団の居場所が解ったんですか?」『いえ、そうじゃないんだけど……』

違うんだ(汗)

『最近ノモセシティで子供達が行方不明になる事件が起こっている
ってマキシさんから連絡があったの。』

えっ子供達が行方不明に……

「それって……」

『ええ。前にタクミ君が言っていたトバリシティの事件……
もしかしたら今回のノモセシティの事件と何か関係があるかもしれない
と思うってタクミ君に連絡したの。』

子供達が行方不明になる事件……調べに行ってみるか。

「教えてくれてありがとうシロナさん。」

俺、早速ノモセシティに行ってみます。」

『解ったわ。』

ノモセシティのマキシさんにはタクミ君の事は話してあるから、ノモセシティに着いたら彼に会って。力になってくれるわ。』

「解りました。」

俺は通信を切った。

ノモセシティか……ピジョット達を起こさないとな！

俺は家の中に戻った。

「皆、起きろ。」

俺はピジョット達を起こす為に呼びかける。

『うーん……何だよタクミ……もうちょい寝かせるよ……』

一番先にピジョットが起きた。

不機嫌そうにしてるピジョット。

『どうしたの……？』

ヒコザルや他の皆も目を覚ました。

「朝早くゴメンな皆。」

でも、今からノモセシティに向かわないといけないんだ。」

『……事件か？』

腕組みしながらマニユーラが聞いてきた。

「嗚呼、ノモセシティで子供達が行方不明になる事件が起きたらしいんだ。それを今から調べに行く。」

『解ったよ。んじゃ、シャキツとしますか！』

ピジョットが軽く準備運動を始めた。

「皆はモンスターボールに入ってくれ。」

俺はピジョット以外の皆をモンスターボールに戻した。

「タクミ君？どうしたの？」

その時、コウキがリビングにやって来た。

「悪いコウキ、俺今からノモセシティに行かないといけないんだ。」
「えっ？どうして？」

俺はコウキにノモセシティに行く理由を説明した。

「……ノモセシティでそんな事件が……」

コウキは驚いているみたいだ。

「もしかしたらネオ・ギンガ団がこの事件に絡んでる可能性があるんだ。だから、俺はノモセシティに行く。」

これ、俺のポケギアの番号だ。
何かあったら連絡をくれ。」

俺はポケギアの番号をメモした紙をコウキに手渡した。

「行くぞピジョット！」『おう！』

俺はピジョットと一緒に外に出た。

そして俺はピジョットの背中に乗る。

『しっかり掴まってるよタクミ！』

ピジョットは力強く翼を羽ばたかせて空へ！

そしてノモセシティに向かって全速力で飛んだ！

ピジョットと一緒にマサゴタウンを飛び立ってから約一時間。

『タクミ、見えてきたぞ！』

ピジョットがそう言ったので俺は地上をしてみる。

ピジョットが言った通り確かにそこにはノモセシティがあった。
街の隣にはノモセ大湿原が広がっている。

「ピジョット、あの辺りに降りてくれ。」

俺はピジョットにノモセシティのすぐ近くにある212番道路に
着陸するよう頼んだ。

『解った。』

ピジョットはゆっくりと212番道路に降下し始めた。

「ここまでありがとうなピジョット、ゆっくり休んでくれ。」

212番道路に着陸した後、俺はピジョットを休ませる為にモン
スターボールに戻した。

さて、まずはノモセジムに向かうか。

シロナさんの話だとノモセジムのジムリーダーのマキシさんが協
力してくれるらしいからな。

「ここがノモセジムか……」

俺はノモセジムの前までやって来た。

ジムリーダーのマキシさんが……一体どんな人なんだろう？

「元気ですかぁー!!」

「うわっ!？」

突然背後からやたら大きな声が聞こえてきた！俺は慌てて振り向いた。するとそこには何やらプロレスラーみたいな人がいた。

顔を見られたくないのかマスクをしている……何か怪しい人だな

おい（汗）ってしまった!？

俺思わず声出して驚いちゃったよ（汗）

「だぁゝはっはっは！

君がタクミだろ！

シロナ君から話は聞いているぞ！」

えっ……じゃあ、この人がマキシさん？

「あ、あなたがジムリーダーのマキシさんですか？」

「違う！私はマキシではなく、ノモセジムのリーダー……ウオーター
ストリームマスクマンの……マキシマム仮面だ！

だぁゝはっはっは！」

うわぁ（汗）めちゃくちゃキャラが濃い人だなぁ（汗）

「タクミ君！」

君はこのノモセシティで起きている事件を調べる為に来てくれたんだろっ？」

マキシさんが両手を腰に当てながら俺に聞いてきた。

「はい。それで、このノモセシティで行方不明になった子供達について何か教えて下さい。」

「うむ、まず行方不明になった子供というのが皆ポケモントレーナーでな……その子供達はこのノモセシティの観光名所でもあるノモセ大湿原に行って後で行方不明になっているんだ。」

腕組みしながらマキシさんは俺にそう言ってくれた。

行方不明になった子供達は皆ポケモントレーナー……それでノモセ大湿原に行った時に行方不明に……トバリシティの事件と良く似ている……いや、むしろそのままじゃないか！

「この事件……やっぱり奴らが関係しているのかもしれない……マキシさん、その子供達が行方不明になったノモセ大湿原を調べてみましょう！」

「解った！ノモセ大湿原はこっちだ！
ついて来なさい！」

マキシさんが走り出した。俺もマキシさんと一緒に走る。

ノモセ大湿原……そこで一体何が起こってるんだ……

第二十話 再び事件発生！ノモセシティに飛べ！（後書き）

第二十話完成です。

タクミ：何か今回いつもと文章の書き方違うな作者？

作者：うん。この前小説家になろうの交流サイトを見てて、その中にある文章作法についてみたいな物があつたから見てみたんだ。

タクミ：ふむふむ。

作者：そしたら、初歩編つてやつに文章を書き始める時には空白を一つ作るって書いてあつたんだ（汗）

みたいにね（汗）

こうしたら読者の皆さんが読みやすくなるんだって。

タクミ：マジか！

んじゃ今まであんたが書いてた小説は全部その初歩が出来てないじゃんか！

作者：初心者だったからね（汗）

でもこれ見た時は衝撃を受けたよ（汗）

これから小説を書く際には気をつけるよ。

タクミ：頑張れよ作者。

第二十一話 ネオ・ギンガ団再び！（前書き）

ノモセシティのマスコットキャラって何故グレッグルなんだ？

第二十一話 ネオ・ギンガ団再び！

『そのブイゼル、今夜一緒に過ごさない？』

「遠慮しておく（汗）」

俺は今ノモセジムのリーダー、マキシさんと一緒にノモセ大湿原に来ていた。

このノモセ大湿原で子供達が行方不明になるという事件が発生したからその調査をするためだ……ちなみにさっき俺に話しかけてきたのはこのノモセ大湿原に生息している野生のグレッグルだ（汗）

ノモセシティではマスコットの存在らしいんだけど……あまり関わりたくはないな（汗）

「タクミ君、今あのグレッグルと何を話していたのかね？」

俺の隣にいたマキシさんが腕組みしながら俺に聞いてきた。

「えっと……今夜一緒に過ごさないかと聞かれました（汗）」

俺は正直に答えた。

「なるほど、タクミ君はそのグレッグルに気に入られたという訳か！グレッグルに気に入られるとは、良かったじゃないかタクミ君！このノモセシティではグレッグルに懐かれると縁起が良いと言われているんだぞ。」

笑顔でそう言うマキシさん……縁起が良い言われてもなあ（汗）

「と、ところでマキシさん……子供達が行方不明になったっていうのはノモセ大湿原のどの辺りなんですか？」

話題を変えないと（汗）

「うむ、このノモセ大湿原はエリアで分けられていて、エリア1からエリア6まであるんだ。

今私達がいるのがエリア6、そして子供達が行方不明になった場所がここからずっと先のエリア1とエリア2だ。」

エリア1とエリア2か……結構先みたいだな。

「タクミ君、あれに乗って一気にエリア1と2に行くぞ！」

マキシさんは何かを指差しながらそう言った。何だあれ、電車か？

「マキシさん、あの乗り物は？」

「あれはクイック号だ。このノモセ大湿原に来たトレーナー達が移動する時に苦勞しないように作られた物だ。

さあ行くぞタクミ君！」

マキシさんが駆け足でクイック号に乗り込んだ。俺も急いでクイック号に乗り込む。

「クイック号、発信だぁー！！」

マキシさん、もう少し静かに出来ないのかな（汗）

クイック号に乗り込んでから約2分程。
エリア1とエリア2に着いたみたいだ。
だけど、霧が出ていて見通しが悪い。

「マキシさん、ここってこんなに霧が深いんですか？」

俺はマキシさんに聞いてみる。

「いや……このノモセ大湿原で霧が発生する事は無い筈なんだが……」

答えてくれたマキシさん……霧が出ない所で霧が出ている……何かあるな。

「……こんなに霧が深いんじゃない？ 単独行動は危険ですね……ここは一緒に行動して……」

「いや、二手に別れよう。」

ってマキシさん、俺の話聞いてたのか？

「マキシさん、単独行動は危険ですよ！」

「このノモセ大湿原は広いんだ、一緒に行動していても時間が掛かる。」

マキシさんの言う事も解るけど……

「タクミ君、これを渡しておく。」

ジュンサーさんから借りたトランシーバーだ、何かあったらこれで連絡をする。

私はエリア2を調べるからタクミ君はエリア1を調べてくれ。」

そう言っマキシさんはエリア2へ……って!?

「ちょ、マキシさん!?!」

……あゝ俺の呼びかけ無視して行っちゃったよ(汗)

「はあゝ……しゃあないか……」

俺はエリア1に向けて歩き出した。

ノモセ大湿原のエリア1。

「……霧が深すぎて全然前が見えねえよ（汗）」

マキシさんと別れ、エリア1を調べ始めて約10分が経過していた。

エリア1を任されたは良いんだけど、霧が深すぎて本当に何も見えないんだよ（汗）

霧払いを使えば良いんだけど、俺のピジョットは霧払いを覚えていないし……参ったなあ（汗）

『……タクミ君、タクミ君聞こえるか？』

トランシーバーからマキシさんの声が聞こえてきた！

「聞こえてますよマキシさん、どうしたんですか？」

『エリア2の東側に妙な飛行艇を発見した。』

飛行艇？

『今から私はあの飛行艇に乗り込むつもりだ。』

の、乗り込む！？

「ちょっと待って下さいマキシさん！？」

俺も今からそっちに行きますから、それまで待機していて下さい！」
『先に行っているぞ！』

って人の話聞きなさいって！？

「ちょ、マキシさん！？」

「……………」

ダメだ、通信が切れた！ 何であの人は1人で勝手に行動するか
な（汗）とにかく、マキシさんに何かあったら大変だ！ 俺は急
いでエリア2へと向かった。

ノモセ大湿原、エリア2、東側。

「あれがマキシさんが言ってた飛行艇か……」

俺はエリア2の東側の方で飛行艇を発見した。
飛行艇の近くには何やら煙を発生させている大きな機械が何個か
あった。あれで霧を作っていたみたいだ。

「マキシさん、捕まったりとかしてないよな？」

心配になってきた（汗）俺は急いで飛行艇の中へ侵入した。

「…………何だこりゃ!？」

飛行艇の中に入って俺はビックリした。
何故ならそこら中に気を失って倒れているこの飛行艇の乗組員がいたからだ。

どうやらマキシさんがやったみたいだな（汗）

「マキシさん…………静かに侵入した訳じゃなかったみたいだな（汗）
…………ん?この乗組員の着てる服…………」

俺は気を失っている乗組員の服に書いてあるロゴマークに気がついた。その服にはNとGの文字のロゴマークが…………
間違いない、ネオ・ギンガ団だ…………やっと見つけたぞ!

「…………フローゼル…………かまいたち鎌鼬だ…………」

ん?今奥の方から声が聞こえてきたぞ?
俺は声が聞こえてきた方へ急いで向かった。

「フローゼル、氷の牙だ！」

「ドラピオン、ミサイル針！」

飛行艇内部の奥のフロアにたどり着くと、そこではマキシさんがポケモンバトルをしていた！

マキシさんのポケモンはフローゼルか……相手はドラピオンでトレーナーは……女の子！？

ドラピオンに指示しているのは俺と同じ年位の女の子だった！

「あら、今日は客が多いわね？」

ドラピオン使いの女の子が俺を見ながらそう言った。
そしてマキシさんが俺に気づいた。

「来たかタクミ君！」

こいつらが子供達を誘拐した犯人だ！」

マキシさんが女の子を指差しながら言った。

「……全く騒がしいの……サキよ、まだ邪魔者は掃除出来んのか？」

奥の扉から1人の老人が現れた……

「……ごめんねお爺様、このマスクした男が意外と強くて……」

女の子、サキが老人に謝っている……いや、んな事どうだって良い……やっと思つた！

「プルートー!!」

俺は思いつきりそう叫んだ。

「む？貴様は……まさかあの時の若造か？」

プルトのオッサンは少し驚いた表情をする。

「やっと思つたぞ！

あんたは絶対逃がさない、来いフライゴン！」

俺はモンスターボールからフライゴンを出した。

「……あの失敗作の薬でポケモンに変えられても記憶が消えなかったのか……驚きじゃな。」

この野郎……薄ら笑いを浮かべてやがる……

「フライゴン、あのオッサンを捕まえるんだ！」『解った!』

フライゴンがプルトのオッサンに向かって行こうとした！

「そっはいかん！」

ブルートのオッサンが何かリモコンみたいな物を取り出してスイツチを押した。

すると、俺とフライゴンの前に透明なガラスが上から降ってきて行く手を塞がれてしまった！

『こんな物！』

フライゴンがドラゴンクローでガラスを攻撃した！

『……痛いよ（泣）』

フライゴンが痛がっている……ドラゴンクローが効かないって事は強化ガラスか！

「その強化ガラスは破壊光線やギガインパクトでも割れはせんぞ。」

ちっ厄介な物を……

「さて……サキや。」

「解ってるわお爺様。」

すぐに邪魔者を始末するから……」

まずい、今マキシさんには逃げ場が無い！
いくらマキシさんでも2人相手じゃ不利だ！

「違うぞサキ。」

そいつはこのノモセシティのジムリーダー……
ポケモンに関する知識も豊富じゃ。」

右手を顎に当て、不気味に笑いながらプルートがサキに言う……

「あゝなるほど……解ったわお爺様。」

サキも不気味に笑い出した……まさか、マキシさんを捕まえてポケモンに変えるつもりか！？

「カメックス！」

俺はモンスターボールからカメックスを出した！ このガラスを何とかして割ってマキシさんを援護しないと！

「カメックスはハイドロポンプ！」

フライゴンは破壊光線！」

「おっしやあ！」

「任せて！」

カメックスのハイドロポンプとフライゴンの破壊光線はガラスに直撃した！

……ダメだ……ガラスにはヒビ1つ入っていない！

「若造、貴様はあとでじっくりと調べてやる。
それまでは大人しくしていてもらう！」

ブルートがまたリモコンのボタンを押した。
すると、突然俺達の足下の床に落とし穴みたいな穴が開いた！
俺達はそのまま穴の中に落ちていった……

ドスン！！

「痛っ！？」

こ、腰打った（汗）
ここは一体何処だよ？

『お、おいフライゴン……起こしてくれ（汗）』
『わ、解った。』

カメックスが背中から倒れていた。
フライゴンが手助けしてカメックスを起こしてあげた。

「2人共大丈夫か？」

俺が聞くと2人は頷いて答えてくれた。

『……タクミ、ここなんだろ？』

フライゴンが今俺達がいる空間を見回しながら聞いてきた。

……周りはさっきの強化ガラスで囲まれていて、正面には出入り口であろう扉が1つ。

恐らくロックが掛かっているだろうな……

「……牢屋……だな。」

俺はフライゴンにそう言った。

『ろ、牢屋！？ 僕達、閉じ込められたの！？』

フライゴンが動揺している。

「落ち着けフライゴン。とにかく、ここから脱出するんだ。」

いつまでもこんな所にいる訳にはいかないからな。 マキシさんが心配だ……

『ハア……ハア……ダ、ダメだよタクミ……全然びくともしないよ（汗）』

脱出しようと試みてから20分……カメックスやフライゴン、それに俺も一緒に扉を突破しようと色々試したんだが……扉は開きそうにない（汗）

「くそ……何か良い方法はないのか!？」

考えるんだ……きつと何か良い方法が……

俺が脱出する方法を考えていた時、突然大きな揺れを感じたんだ！この振動……まさか、この飛行艇飛んでる!？

『タクミ、誰か来るぞ!』

カメックスが俺に言ってきた。

コツ……コツ……

足音が扉の向こうから聞こえてくる！俺達は少し扉から離れた。

……足音が扉の前で止まった……来るのか……次の瞬間扉が開いた！

「タクミ、無事か!？」

えっこの声……扉を開けたのはネオ・ギンガ団の筈なんだが、その団員の声には聞き覚えがあった。

「まさか……先輩？」

俺がそう聞くとその人は頷いて答えてくれた。　　やっぱりそうか、ハンサムだ！

「ついて来いタクミ！
ここから脱出させてやる！」

そう言っただけでハンサムは俺達を誘導しようと廊下へ。俺はフライゴンとカメックスをモンスターボールに戻してからハンサムのあとを追った。

飛行艇内部、緊急脱出用のハッチの前。

「先輩、何でこの飛行艇に？」

「潜入調査つてやつだ。」

しかし、タクミがこの飛行艇にいたのには驚かされたぞ。」

そう言いながらハンサムは脱出用のハッチを開けた。

「さあ、これから脱出するんだ。
お前にはピジョットがいるから問題無いだろ。」

……そりゃそうだけど……

「先輩、まだマキシさんが中にいるんですよ！

俺だけ逃げるなんて……」

「マキシさんは俺が助ける。お前は早く脱出するんだ。」

そう言つてハンサムは何かの紙と小さいカードを俺に握らせた……
…何だこれ？

「安全な場所に着いたらそれを見てくれ。

さあ、行くだ！」

「うわっ！？」

俺はハンサムに無理やりハッチから外に突き出された！

「ピジョット！」

俺は急いでモンスターボールからピジョットを出す。そしてピジョットの背中に乗る。

『いきなり空の上だなんて……一体何してたんだよタクミ？』

「訳はあとで話すよ。」

今とはにかくマサゴタウンに向かつてくれ。」

『解ったよタクミ。』

ピジヨットは飛行艇から離れてマサコタウンに向かった。

第二十一話 ネオ・ギンガ団再び！（後書き）

第二十一話完成です。

タクミ

グレッグルに気に入られると縁起が良いって本当かよ作者？

作者

何となくそんな設定にしてみたただだから気にするな（笑）

タクミ

何となくかよ（汗）

まあ良いけど、そういえばこの小説二十話を超えたな？

作者

うん。とりあえず目標は五十話にしているんだ。

タクミ

どうせならバクフーン達の冒険みたく、これも長くしちやえば良いんじゃない？

作者

マジっすか（汗）

（ぶっちゃけバクフーン達みたいはこの小説を続けられる自信無いんだけど（汗））

第二十二話 衝撃（前書き）

マキシさん……無事だと良いけど……

第二十二話 衝撃

「……博士、どうだった？」

ネオ・ギンガ団の飛行艇から脱出した俺はピジョットに乗ってマサゴタウンのナナカマド研究所に戻ってきていた。

「うむ、まだ全ての解析が済んだ訳ではないが……人間をポケモンに変える薬の仕組みは解ってきたぞ。」

頷きながら博士が答えてくれた。

今の状況は、俺がハンサムから受け取ったカードを博士に渡して調べてもらっていたんだ。

カードと一緒にハンサムから一枚の紙を受け取っていたんだけど、それにはハンサムからのメッセージが書かれていたんだ。

それにはネオ・ギンガ団が開発した、人間をポケモンに変える薬についてのデータをコピーしたメモリーカードを調べてくれと書かれていた。

さらに、このデータを調べればポケモンに変えられた人達を元に戻せるかもしれないとも書かれていたんだ。

「このポケモンに変える薬は人間の遺伝子を無理やり眠らせ、ポケモンの遺伝子に組み換えるのだそうだ。」

人間の遺伝子を眠らせてポケモンの遺伝子に組み換える？

そんな事が……いや、現に俺はブイゼルになっちまったんだからな……たくっプルトのオッサンはとんでもない物を作り出しやがったな（汗）

「それで博士……ポケモンになってしまった子供達や俺は……元に戻るんですか？」

一番知りたかった事を博士に聞いてみる。

「恐らく可能だ。」

博士が一言そう言ってくれた。

「本当ですか!？」

「その薬で人間の遺伝子を眠らせてポケモンに変えるのならば、人間の遺伝子を目覚めさせる事が出来れば元に戻るだろう。」

人間に戻る……その言葉を聞けて俺は凄く嬉しくなった。

「早速私はこのデータを更に解析して、人間に戻す薬を作ろうと思う。」

かなり時間は掛かるだろうが、必ず完成させる。タクミ君、それまではもうしばらくブイゼルの姿で我慢していてくれ。」

「この身体にも慣れてきましたから、薬が完成するまで我慢出来ますよ。」

笑顔で俺はそう答えた。

「すまないな……今日は色々あって疲れているだろう？
私の家でゆっくり休んできなさい。」

コウキやアイが君を待っている事だしな。」

「じゃあ、そうさせてもらいます。」

俺は軽くお辞儀してからナナカマド研究所から外に出た。

そしてコウキ達がいる家に向かった……またアイに抱きつかれるのかなあ（汗）

その日の夜、コウキの家。 またコウキの家に泊まる事になった俺。

コウキの家に入った途端、案の定コウキの妹のアイが俺に飛びついてきたんだよ（汗）

それでまたアイと遊ばせられてさ……休む筈が全く休めなかった（汗）

ちなみに今俺はまた前みたいにアイと同じベッドで寝ている。

『……何か……寝れないな……』

何故だか眠くならないんだよな……ちょっと散歩でもしてくるかな。

俺は眠っているアイを起こさないように静かにベッドから降りた。そして気持ち良さそうに寝ているアイやピジョット達を起こさないように静かに外へ。

夜のマサゴタウンはとても静かだった。

外には誰も人がいない、まあ夜だから当然か……あれ？ ナナカマド研究所だけまだ電気がついていて明るい……もしかしてまだ誰か起きてるのか？ 俺はナナカマド研究所の前まで向かった。扉が僅かに開いていて、中からは誰かが話している声が聞こえてきた。中を覗いてみるとそこにはナナカマド博士とその助手がいた。

「博士、タクミ君の血液の検査結果なんですが……」

助手の人が検査結果が書かれていると思われる紙を博士に手渡した。

そっといえば俺、血を抜かれたんだっけ（汗）

「……これは……」

ん？ 博士が紙を見て驚いた表情をしているぞ？ どうしたんだ？

「君……これは間違いないのかね？」

「……僕も最初変だと思って何回もやり直しましたよ……だけど、結果は同じでした……」

な、何で二人共険しい表情をしてるんだよ？

「タクミ君には……人間の遺伝子が無いんですよ……純粋なポケモンの……ブイゼルの遺伝子しか……」

えっ……

「……さっき私がああのデータの解析を進めていたら、あの薬は劇薬

で、使う量を間違えれば人間の遺伝子が崩壊するとあった……まさかそれで……」

「博士、タクミ君に人間の遺伝子が無ければ……彼は人間には戻れませんよ……」

……人間に……戻れない……

『嘘……だろ……嘘だあああ!?!』

俺はその場から走り出した……信じられなかった……信じたくなかった……俺が人間に戻れないなんて……

219番道路、海岸。

『……………』

俺はぼーっとしながら夜の海を眺めていた。

俺……本当に人間に戻れないのかよ……一生俺はブイゼルのまんなのかよ……何でこんな事になっちゃったんだよ……

『何で……』

色々な思いが込み上げてきた俺は涙を流してしまった……

『タクミ!』

誰かの声が聞こえた。俺は声がした方に振り向く……そこにはヒコザルがいた。

『……ヒコザルか……』

『部屋にタクミがいなかったから心配して捜しちゃった……ってタクミどうしたの!?
何で泣いてるの!?』

ヒコザルが驚いた表情をしながらそう言った。

『……ヒコザル……俺……俺……うつっ……ああああ!』

俺は堪えきれずにヒコザルに抱きつき、声を出して泣いた。

『タ、タクミ!? ちょっと本当にどうしたの!?』

それからしばらくして……ようやく落ち着いてきた俺。

『落ち着いたタクミ?』

首を傾げながらヒコザルが聞いてきた。

『……ちよつとな……ごめんなヒコザル……いきなり泣いたりして

……』

『タクミ、何があつたのか……教えてくれる?』

俺はナナカマド博士達が言っていた事をヒコザルに話した。

『……人間に……戻れないの?』

俺は頷いて答えた。

『……正直……すっげーショックだよ……ネオ・ギンガ団を……ブルートのオッサンを捕まえたら人間に戻る方法が見つかると思って今までやってきて……そしたら……俺は人間に戻れないって解つてよ……今まで俺がやってきたのは全部無駄だったんじゃないかって……』

『……タクミ、人間に戻れなくても……たとえどんな姿でも……タクミはタクミでしょ?』

ヒコザル……

『それに、今までタクミがやってきた事は無駄じゃないと思うよ? 僕、難しい事は良く解らないけど……あの悪い人間達を捕まえれば、

子供達が助かるんでしょ？

タクミは皆の為にやってきたんだから、無駄じゃないよ。』

真剣な表情で言うヒコザル。

『タクミ、たとえタクミが人間に戻れなくても僕やピジョット先輩達はずっと側にいるよ。』

笑顔でそう言ってくれたヒコザル……やばい……今度は感動で泣きそうだ……

『……そういえば前にも、どんな姿になっても俺は俺だって……ヒコザルは言ってくれたよな？』
『そうだったっけ？』

あっ覚えてないのかよ（汗）

『言ってくれたんだよ……どんな姿でも俺は俺だってさ……』

そつだよな……姿がポケモンでも……人間に戻れなくても……俺は俺だよな……

『……ありがとうな……ヒコザル……何か少し元気出たよ。』

笑顔を作ってヒコザルに俺はそう言った。

ヒコザルは笑顔で良かったって言ってくれた。

『家に戻るうタクミ。』

もう夜遅いし……』

『そつだな。』

俺はヒコザルと一緒にコウキの家に戻って行った。

第二十二話 衝撃（後書き）

第二十二話完成です。

作者

はぁ……今回のストーリーを作るの難しかったなあ（汗）
それに、僕賢い方じゃないから遺伝子の話とか書いてて自分で訳解なくなっちゃうし（汗）

タクミ

ダメダメだなおい（汗）

てか作者！俺が人間に戻れないとか酷くないか！？

作者

主人公には様々な困難が待ち受けてるのは良くある事でしょ？

タクミ

そりゃそうだが……

作者

心配しないでタクミ。

ちゃんとハッピーエンドにしてあげるから多分。

タクミ

多分かよ！？

第二十三話 自分に出来る事。(前書き)

人間に戻れない……か……

第二十三話 自分に出来る事。

俺が人間に戻れないと解った次の日の翌日。

ナナカマド博士に呼ばれ、俺はナナカマド研究所にやって来ていた。

「……タクミ君……君に伝えなければならない事がある……」

博士は深刻そうな表情で言っている。

……きっと俺は人間に戻れないって事だな……

「……タクミ君……君は……」

「人間に戻れない……そうなんですよ？」

俺がそう言っていると博士は驚いた表情をした。

「何故それを!？」

「……昨日の夜、散歩をしていた時に博士と博士の助手が話してるのが聞こえてきて……」

「……そうだったのか……」

しばらく沈黙が続いた……先に沈黙を破ったのは俺の方から。

「……博士、絶対人間に戻す薬を完成させて下さい。……人間に戻れなくなるのは……俺だけで充分ですから……」

そう言っただけ俺は研究所から出ようとした。

「タクミ君、何処へ？」

「……ネオ・ギンガ団を捜します。
俺に出来る事をやる……昨日の夜、俺はそう決めましたから。」

俺はそう言って研究所から出た。

研究所の外にはピジョットが待機していた。

『もう良いのか?』

首を傾げながらピジョットが聞いてきた。

「^{ああ}嗚呼。行こうかピジョット。」

俺はピジョットの背中に乗る。

『タクミ、何処に向かう?』

「まだ何にも奴らの手掛かりが無いからなあ……とりあえず、これから先の事を考える為に静かな所が良いな……」

『だったらズイタウンはどうだ?』

あの町の近くにある草原、タクミ結構気に入っていただろ?』

あゝ俺達のシンオウ地方で最初の任務がある前にのんびりしていた場所か。

「よし、じゃあそこに行くか!」

『解った!』

ピジョットは力強く翼を羽ばたかせて空へ。

マサゴタウンを飛び立ってから数十分後。

ズイタウンが見えてきた。何か久しぶりだなあここに来るの。

『タクミ、あの辺りで良いか？』

ピジョットが見ている先にはズイタウンの近くにある広い草原が広がっていた。

辺りには人がいない。

「そうだな。あの辺りにしようか。」

『解った。』

ピジョットはゆっくりと草原に向かって降下を始めた。

「よつと！」

無事草原に着陸したピジョット。

俺はピジョットから飛び降りて草の絨毯じゅうたんの上に。

あゝこの草の感触……久しぶりだなあ。

「はあ……」

俺は草の絨毯に寝転んで空を見る。

……そういえば、ポケモンのタマゴ泥棒を捕まえる前もこうやって寝転んで空を見てたっけ……あん時はまだ人間だったんだよなあ……

『何か久しぶりだな？

こんな感じでのんびりするの。』

隣にいたピジョットが空を見ながらそう言った。

「……そうだな。

今まで色々あったのんびりするところじゃなかったからなあ……」

……それからしばらく、俺とピジョットは空を見つめたまま沈黙が続いた……

『……なあ、タクミ。』

先に沈黙を破ったのはピジョットだった。

「うん？」

『これからどうするんだ？ あの人間共を追おうにも手掛かりが無いんだろ？』

そうなんだよなあ（汗） どうしたもんかなあ？

プルプル……プルプル……

ん？ 俺のポケギアが鳴ってる。

「はいもしもし。」

『タクミか？』

あつこの声はハンサムだ！

「先輩！」

『シーツ！？ 大きな声を出すな！ 俺はまだ潜入調査中なんだからな！』

怒られた（汗）

「あつすみません（汗）

それで……今何処にいるんですか？」

『さあな。ずっと飛行艇の中で掃除をやらされているから外を見る暇がなかったからな。』

掃除……完全に下っ端したっぱとして扱われてるじゃん（汗）

『それより、ノモセジムのリーダー、マキシさんは無事に脱出させたぞ。』

「本当ですか！？」

さすがハンサム！

こういう時に頼りになるよ！

『多分今頃ノモセシティに戻っている頃だろう。

俺は引き続き、潜入調査を続ける。

良いかタクミ、お前は絶対に無茶するなよ。

また前みたいに捕まったら今度は助けられないかもしれないんだからな。』

そう言ってハンサムは通信を切った。

……マキシさんは無事か……良かった。

とりあえず心配事が一つ無くなったな。

あとはこれからどうするかだけど……やっぱあれかな。

俺は起き上がってモンスターボールを取り出す。

「皆出てこい！」

俺はモンスターボールからヒコザル達を出した。

『おいおい、皆を出して何をするんだタクミ？』

ピジョットが俺に聞いてきた。

「あゝそれはな……」

『ダーリン』

ピジョットに何故皆を出したのかを説明しようとしたら、いきなりエーフィが飛びついてきた。

それでバランスを崩されて倒れた俺。

さらにエーフィは俺の上に乗っかって擦り寄る（汗）

『今までずっとあの女の子にダーリンを取られてたんだもの。
今日は私が独り占めよ』

独り占めって（汗）

『こらエーフィ！

タクミから離れるよ！

今タクミが何か言おうとして……』

『うるさいわね部下一号！ 私がダーリンを独り占めにするのがそんなに嫌なの？』

ピジョットを睨みつけながらエーフィが大きな声で言っている。

それより、俺から降りてほしいんだけど（汗）

『だから誰が部下一号だ！？ 俺はお前の部下になった覚えは無いぞ！』

『私がそう決めたんだからあんたは部下一号なの！』

『何でお前にそんな事を決められる権利があるんだよ！？』

あゝまたこの二人は（汗）毎度の事だけど……何でこうなるかなあ（汗）

てか、誰かこの二人を止めてくれ（汗）

俺はヒコザル達に止めてくれとアイコンタクトする。

だけど、ヒコザル達は皆して首を左右に振って無理と意思表示してきた（汗） マジですか（汗）

はあ……仕方ない、俺がやるしかないみたいだな。

「お前達けんか喧嘩はそこまでしろよ。

それとエーフィ、俺から降りてほしいんだけど（汗）」

『えゝ降りなきゃダメゝ？』

エーフィ、君は子供ですか（汗）

「頼むよエーフィ。」

『うゝ……解ったわよゝ。』

エーフィは渋渋しぶしぶと俺から降りてくれた。さてと……喧嘩が終わって落ち着いてきたから早速説明するか。

っとその前に……ポケモン同士なんだから、このネックレスは外しておくか。

俺はネックレスを外してリュックに入れた。

『えゝ……何で皆を出したかなんだが……ちょっと頼みがあつてさ。』

『頼み？ どんな頼みなのタクミ？』

首を傾げながらヒコザルが聞いてきた。

『俺をさ……鍛えてほしいんだ。』

俺がそう言うと、皆揃って驚いた表情をした。

『いつまでも皆にバトルを任せっぱなしって訳にはいかないと思つてさ……俺はブイゼルだろ？』

皆に指示するだけじゃなく、皆と一緒に俺も戦いたいんだ。だから、皆に俺を鍛えてほしいと思つたんだ。』

『それは構わないが……バトルって結構しんどいんだぞ？』

それでも本当にやるのか？』

カメックスが腰に両手を当てながらそう言った。

『嗚呼、頼む。』

『解ったよ。ただし、やるからには厳しくやるから覚悟しなよタクミ！』

笑顔でそう言うカメックス。

『部下三号！』

タクミに怪我なんかさせたら許さないんだからね！』

エーフィがカメックスを睨みつけながら言った。

『って俺いつからエーフィの部下になったんだよ！？ しかも三号かよ！？』

驚くカメックス。

『アハハハ……（汗）』

と、とにかく……皆よろしく頼むぞ！』

カメックス達の協力で、俺の特訓が始まった。

第二十三話 自分に出来る事。(後書き)

第二十三話完成です。

第二十四話 タクミの特訓！（前書き）

皆と一緒に戦える位にはならないとな。

第二十四話 タクミの特訓！

ズイタウンの近くにある草原。

俺はカメックス達に特訓してもらっているんだが……

『違うだろタクミ！』

もつと腹に力を入れるんだ！　そして力一杯水鉄砲を出すんだ！』

現在カメックスに水鉄砲の出し方を教えてもらってるんだ。
水タイプの基本的な技だからな。

だけど、これが中々上手く出来ないんだな（汗）

何回か挑戦すんだけど……勢い良く水が出ないし（汗）

それに……カメックスが結構厳しいんだ（汗）

もうかれこれ三時間休み無しで続けてる……ちょっと休憩したい

（汗）

『なあカメックス、ちょっと休憩させてくれよ』（汗）』

『ダメだ！　水鉄砲は水ポケモンが使う基本中の基本だぞ！
出来るまで休憩は無しだ！』

腕組みしながら言うカメックス。

はあ……休みたい（汗）

『すー……すー……』

ピジョット達は気持ちよさそうに昼寝してるし（汗）

『ほらタクミ、もう一度だ！』

『はい（汗）』

再びカメックスの厳しい特訓が始まった（汗）

それから二時間後……

『水鉄砲おおお!!』

俺の口から水が勢い良く噴射された。
ようやくコツを掴めてきたぜ。

『うん、良い感じだな。』

『よし、じゃあ次だ!』

腰に両手を当てながら笑顔で言うカメックス。
『つてか次って!？』

『あの〜カメックス、休憩は?』
『無し。』

一言で済まされた〜!?

『今のタクミはブイゼルだから、やはり素早く動ける特訓をするべきだろうな、おいマニョーラ！
出番だぞ！』

昼寝していたマニョーラにカメックスが呼びかけた。

『……俺の出番か。』

起き上がったマニョーラはゆっくりと俺の方へ歩いてきた。

『……まずは走るぞタクミ。素早く動くには足腰を鍛えなければならぬからな。』

えゝ走るんすかゝ（汗）

『……行くぞ。』

そう言ってマニョーラが走り出した。

『あつ待てよマニョーラ!?!』

俺は慌ててマニョーラを追いかけた。

マニニューラと一緒に走り込みを始めて二時間。

『……よし、そろそろ休憩するぞタクミ。』
『さ、賛成……』

疲れ果てた俺はその場に大の字になって倒れ込んだ。
やべ……もう空が夕日で赤いぞ（汗）
もうそんな時間になってたんか（汗）

『……この位で疲れているようでは、まだまだだなタクミ。』

あれだけ走って息一つ乱していないマニニューラ。すげーなマニニューラは（汗）

『ダーリン！ お疲れ様〜』
『うおっ！？』

横になっていた俺に、いつの間にか起きていたエーフィがやってきていきなり俺に飛びついてきた（汗）

『……またか（汗）』

マニニューラがこの状況を見て苦笑いしている。

『何よ？ 何か文句ある？』

エーフィがマニニューラを睨みつけながらそう言った。

エーフィ、ちょっと怖いぞ（汗）

『……いや、別に（汗）』

エーフィの迫力に負けたなマニユーラ（汗）

『エーフィ、そろそろ俺から降りてもらってくれないかな？』

『嫌。ダーリンから離れないわよ』

降りるよう頼んだけど、拒否されてしまった（汗）

そしてエーフィは俺に頬擦りしてくる（汗）

これじゃあ休憩出来ないんすけど（汗）

『なんだ、またエーフィがタクミにべったりなのか？』

あっカメックスが来た。何処から持ってきたのか、オレンの実を大量に持っていた。

『良いじゃない別に！』

膨れっ面になるエーフィ。

『まあいつもの事が……ほれタクミ、これ食べて体力の回復だ。』

カメックスがオレンの実を一つ、俺に投げ渡した。

『サンキューカメックス。』

オレンの実を受け取った俺は早速食べる。

おっ美味しいじゃん！

『……タクミ、それ食べたらまた走り込むぞ。』

えゝまたですかゝ（汗）

『今日はもう休んで明日にしないか（汗）』

『……ダメだ。』

タクミは俺達と一緒に戦いたいんだろ？

その為にはたくさん特訓しないとならん。』

うつ（汗）

それを言われると何も言い返せねえ（汗）

『……解ったよ（汗）』

オレンの実を食べ終えた俺はもう一度マニョーラと一緒に走り込みを始めた。

特訓開始から三日目。

最初にカメックスから水鉄砲を教えてもらった以外はずっとマニユーラと一緒に走り込みを続けていた。

現在の時刻は午前十時。今もマニユーラと一緒に走り込みをしている。

『……ちよつと休憩しようかタクミ。』

『えっもう休憩か?』

まだ三日目だけど、最初の頃より体力が付いてきた俺。
まだ体力には余裕があったからもつと走れるんだけど……

『……俺が疲れたんだよ。』

あつそついう事。

『タクミ! ちょっと良いかな?』

ん? ヒコザルが呼んでるな。

俺はヒコザルの所に駆け寄った。

『どうした?』

『うん、そろそろタクミもバトルの特訓を始めた方が良いんじゃないかってピジヨット先輩が。』

ピジヨットが?

『そついう事だ。』

あつピジヨットが来た。

『バトルは良いけど……俺まだ水鉄砲しか使えないぜ?』

ブイゼルの使える技はあと他にソニックブームやアクアジェットがあるけど……まだ使い方が解らないし（汗）

『水鉄砲が使えるれば充分さ。とにかく、実際に自分がバトルする感覚が解れば良いんだから。』

バトルの感覚か……

『……解ったよ。

それで俺の相手は?

まさかピジヨットがやるのか?』

『さすがに俺とタクミじゃあレベルに差がありすぎるだろ。ここはヒコザルが良いだろ。』

ヒコザルか……

『解ったよ。ヒコザル、お手柔らかに頼むぜ!』

俺はバトルする体勢に入る。

『まさかタクミとバトルする日があるなんてね! 思いつきりきて良いよタクミ!』

ヒコザルもバトルする体勢に入る。

『腹に力を入れて……勢い良く水を噴射する……水鉄砲!』

俺はカメックスに教えてもらった事を思い出しながら、口から水

を勢い良く噴射した！

『おっと！』

あっ水鉄砲が避けられた！

『もう水鉄砲は完璧にマスターしたみたいだねタクミ。それじゃ、次は僕から行くよ！ 火の粉！』

ヒコザルは口から小さな炎を吐き出して俺を攻撃してきた！

『もう一発水鉄砲！』

俺はもう一度水鉄砲を放った！

俺の水鉄砲とヒコザルの火の粉が激突した！

相性的には俺の攻撃が有利なんだけど、ヒコザルの方がレベルが高いから俺の水鉄砲はヒコザルの火の粉を押し切れず、相殺してしまった。

『マジですか（汗）』

『隙ありだよタクミ！』

げっ！？ いつの間にか穴を掘るで地面に潜っていたヒコザルが俺の足下から飛び出してきた！

『引っ掻く攻撃！』

ヒコザルの引っ掻く攻撃か！ ダメだ、避けられない！？

『そこまで！』

いきなりピジョットがそう叫んだ。

ヒコザルの鋭い爪が俺の顔に当たりそうなところでヒコザルは止めた。

危ねえ……ピジョットが止めてくれなかったら確実に直撃だったな（汗）

『どうだタクミ、実際にバトルしてみた感想は？』

『全然だな（汗）』

ヒコザルの攻撃を対処するのに精一杯でヒコザルの動きを見る暇がなかったよ……』

こんな感じのバトルを、ピジョット達はいつもやってるんだよな

……

『最初は皆そうさ。』

俺だって、ポツポの頃は全然バトル弱かっただろ？』

『あゝそつえばそうだったな。』

あの時のお前、キャタピーとバトルして負けてたんだよな（笑）』

『そ、そんな昔の事言わなくても良いだろ！？』

顔を赤面させながらピジョットが言う。

あのバトルいまだに気にしてたんだ（汗）

『へっ……部下一号がキャタピーにねえ……それは初耳だわ（笑）』

あっエーフィだ。

すっげー嫌みったらしい感じだな（汗）

『な、なんだよ……』

『別に……キャタピーに……ふふふ』

うわぁ（汗） 絶対ピジョットの事バカにしてるぞエーフィ（汗）

プルプル……プルプル……

あつ俺のポケギアが鳴ってる。

『はいはいちょっと待って……』

俺はリュックからネックレスを取り出して首に巻く。

「はいもしもし。」

『あつタクミ君かい？』

コウキだけど……』

なんだコウキか。

「どうしたんだコウキ？」

『……変な事聞くけど、妹のアイがそっちに来てないかな？』

アイ？ 来てる訳ないだろ、ここはマサゴタウンから大分離れたズイタウンの近くなんだから（汗）

「いや、いないけど……何かあったのか？」

『……アイが……いなくなっただ……』

なんだって!？

「おいおい、マジかよそれ!？」

シンジ湖にはいないのか？」

『捜したけどいなかったんだ……』

アイのお気に入りのシンジ湖にもいないのか……

「コウキ、他にアイが行きそうな場所はないのか？」

『あるとしたらフタバタウンかコトブキシティなんだけど……』

フタバタウンとコトブキシティか……

「コウキ、俺もアイを捜すの手伝うよ。」

俺はコトブキシティに行くからコウキはフタバタウンに行ってくれ。

「

『ありがとうタクミ君！

じゃあ、よろしく頼むよ！』

通信が切れた。

アイが行方不明……まさかいつぞやの男二人組が絡んでるんじゃないだろうなあ（汗）

プルプル……プルプル……

またポケギアが鳴ったぞ？ またコウキか？

「はいもしもし。」

『もしもしタクミ君？

シロナだけど……』

シロナさんだ！

「シロナさん、何かあったんですか？」

『ええ、さつきクロガネジムのリーダーのヒョウタ君から連絡があったんだけど……コトブキシティの様子がおかしいんですって。』

コトブキシティの様子が？

「どういう事ですか？」

『ヒョウタ君が言うには、クロガネシティとコトブキシティを繋ぐ203番道路が何者かの仕業で通れなくなっているみたいなの。それに……他の道も通れなくなっているらしくて……コトブキシティには私の知り合いがいるから連絡を取ろうとしたんだけど全く繋がらなくて……』

……何か事件が起きてるとしか思えないな……まさかアイも巻き込まれたんじゃないか……

「解りました、すぐにコトブキシティに向かいます。」

『お願いね。私も準備が出来たら向かうから。』

タクミ君、無茶しないでね。』

通信が切れた。

『タクミ、何か起きたのか？』

ピジョットが首を傾げながら聞いてきた。

「嗚呼、^{ああ}すぐにコトブキシティに向かうぞ！ 皆、モンスターボールに戻ってくれ！」

俺はピジョット以外の皆をモンスターボールに戻した。

そして俺はピジョットの背中に乗る。

「急ぐぞピジョット！」

なんだか嫌な予感がするんだ！」

『解った、しっかり掴まつてろよタクミ！』

ピジョットは力強く翼を羽ばたかせて空に上昇。そして全速力でコトブキシティに向かった。

アイ……頼むからコトブキシティにいないでくれよ……

第二十四話 タクミの特訓！（後書き）

タクミ

更新が遅いぞ作者！

作者

ごめ〜ん（汗） 体調崩してました（汗）

タクミ

おいおい（汗）

作者

でもちゃんと治したから大丈夫だよ。

これからはいつものようなペースで更新出来る………筈。

タクミ

筈かよ！？

第二十五話 コトブキシティへ！（前書き）

アイが行方不明……アイ、頼むから無事でいてくれよ……

第二十五話 コトブキシティへ！

ズイタウンから飛び立ってから約一時間。

『タクミ、見えてきたぞ！』

ピジョットが見てる先を俺も見てみる。

そこには大きなビルがたくさん建ち並ぶ街が。

『あれがコトブキシティ……ピジョット、ポケモンセンターの近くに降りてくれ。』

俺はピジョットにコトブキシティのポケモンセンターの近くに降りるよう頼んだ。

『解った。』

ピジョットはゆっくりとポケモンセンターの近くに降下していった。

ポケモンセンター前。

無事に着陸する事が出来た。

……着陸したのは良いけど、街の様子がおかしいな……

『……タクミ、何か……この街変じゃないか？』

どうやらピジョットも気づいたみたいだな。

『嗚呼、まだ昼間だっていうのに……人が誰もいない……』

そう、街の外には俺とピジョット以外誰もいないんだ。

それに、不気味な程に静かなんだ……まるでゴーストタウンだ。

『……とにかく、調べてみるか。』

ピジョットはゆっくり休んでくれ。』

俺はピジョットをモンスターボールに戻した。

『まずはポケモンセンターの中を調べるか。』

俺はまずポケモンセンターの中を調べる事にした。

もしかしたら人がいるかもしれないからな。

ポケモンセンター。

『……おいおい、マジで誰もいねえよ（汗）』

今俺はポケモンセンターのロビーにいたんだが……そこには誰もいなかった。

ポケモンセンターで休んでいるトレーナーも……いつも笑顔でトレーナーを迎えてくれるジョーイさんも……

『……もつと良く調べてみるか。』

その後俺はポケモンセンター内にある各部屋を一つ一つ調べて回った。

『……妙だな……荷物が置きっぱなしになっている……』

全部回った俺は一つ疑問に思った。

人はいないが、各部屋にはさっきまで誰かが泊まっていたような形跡があったんだ。

そして荷物が置きっぱなしに……

『まさか、他の場所も同じ状況って事は……とにかく、他も行ってみるか。』

俺はポケモンセンターから出て、他の建物に向かった。

コトブキシティを調べ始めてから約一時間が経過。

『……何処も同じ状況だ……一体どうなってんだよ?』

コトブキシティにあるテレビ局、トレーナーズスクール、さらにはポケッチカンパニーも調べたけど……何処もポケモンセンターと同じで、人がいた形跡はあるが人の姿が無いって状況だった。

『まだ調べてないのは……あの建物か……』

俺が見つめる先、コトブキシティの南西の方角にある建物。

まだ彼処だけど調べてないんだよな。

あの建物……確かグローバルターミナルっていう建物だったかな?とにかく、グローバルターミナルを調べてみるか。

グローバルターミナル前。

『あれは！？』

俺はそこで見覚えのある飛行艇を発見した。

その飛行艇はあのネオ・ギンガ団……プルトのオッサンの飛行艇だ！

やっぱりネオ・ギンガ団が絡んでやがったか！

……アイの奴、まさかネオ・ギンガ団に捕まったりとかしてないよな……

ウイン。

って、グローバルターミナルの自動ドアが開いた！？

『やばっ！？』

俺は慌てて飛行艇の物陰に身をひそめた。

「しかし、今回プルト様は大胆に行動したもんだな。」

「確かにな……って、喋ってないでちゃんと持てよ！」

中から男が二人出て来た。あの服装……間違いなくネオ・ギンガ団だ。

団員二人が重たそうに気絶しているパチリスが入った檻おりを運んでいる。

あのパチリス……まさか、あの薬を打たれたんじゃない？

「でもさ、今まで目立たないようにしてトレーナーを誘拐してポケモン化していたブルート様が……今回はこのコトブキシテイにいる人間全員をポケモン化するなんてさ。

ポケモン化するのはトレーナーだけじゃなかったのか？」

なっ……この街の人全員を……ポケモンに変えただって！？

「お前も知ってるだろ？」

前のギンガ団、マーズやらサターンがまたディアルガとパルキアを利用して世界を作り変えようとしている事はさ……ブルート様はそいつらの計画を潰す為に、戦力の強化をしたい訳さ。

だから、こうしてこの街の連中をポケモンにして俺達の戦力にしよって訳だ。」

……なんて奴らだ……許さねえ！

『カメックス、ハイドロポンプだ！！』

俺はモンスターボールからカメックスを外に出した。

そしてカメックスはハイドロポンプを一人の団員に直撃させた！ハイドロポンプを受けた団員は吹き飛ばされて飛行艇に身体を打ちつけ、気絶した。

「なっ！？ 何者だ！？」

『水鉄砲おお!!』

もう一人の団員に俺は最大パワーの水鉄砲をぶちかましてやった。俺の水鉄砲を受けた団員は吹き飛んで、さっきの団員と同じように飛行艇に身体を打ちつけて気絶した。

『うん、良い水鉄砲だなタクミ!』

両手を腰に当てながら、俺の水鉄砲を誉めてくれたカメックス。

『サンキュー……ってそれよりも!』

俺は檻に閉じ込められているパチリスの所に駆け寄った。

『君! 大丈夫か君!』

俺は気を失っているパチリスに呼び掛ける。

『……………』

息はあるけど……俺の問い掛けには反応してくれない。

『待つてろ、すぐに出してやつからな。』

カメックス、頼む!』

『よっしゃ、任せときな! ラスターカノン!』

カメックスは肩のハイドロキャノン砲からエネルギー弾を放って檻を破壊した。

『ほら、しっかり……………』

俺はパチリスを抱えて檻から外へ。

『……………』

まだ意識が戻らないパチリス……多分、薬を打たれて間もないんだろ……俺も薬を打たれた時すぐに気を失ったからな……

『……カメックス、この子を頼む。』

ポケモンセンターなら安全だろうからそこに連れて行ってくれ。』

『それは良いが……タクミはどうするんだ？』

首を傾げながらカメックスが聞いてきた。

『俺は……ターミナルの中に行く。』

まだ中にはネオ・ギンガ団がいる筈だ……そしてプルートのオッサンも……もうこれ以上被害者を出さない為にも……オッサンを捕まえる！』

俺の決意をカメックスに伝える。

『……解った、だが無理すんなよ？』

『嗚呼。』

カメックスはオオタチを抱えてポケモンセンターに向かっていった。

それを確認した後、俺はリュックからネックレスを取り出して首に付ける。

「……俺も行くか。」

俺はグローバルターミナルの中へ入っていった。

グローバルターミナル内部。

「サキや、さっきのパチリスにした小娘で最後かの？」

「ええ、お爺様。」

ポケモン化した人間は全部飛行艇に収容したわ。

後は撤収するだけよ。」

いた……プルートのオッサンにサキだ！

辺りにはあの二人以外誰もいない。

「プルート……！」

俺は大声でプルートのオッサンに向かって叫んだ。

「あら、あなたはこの前のブイゼルじゃないの。」

腕組みしながらサキがそう言った。

「お前達……この街の人達をどうした!?」

「ふん、知れた事……全員ワシが作った薬でポケモンに変えてやったわい。人間の記憶が無い奴らを手懷けてワシらの戦力にする為にな……」

野郎……薄ら笑いしやがって！

「今度は逃がさないからな！ 来い、マニョーラ！」

俺はモンスターボールからマニョーラを出した。

「サキや、相手してあげなさい。」

「解りましたお爺様。」

サキが腰に付けていたモンスターボールを二つ手に持ち、俺達の前投げた。

モンスターボールは開かれ、中からはドラピオンとヘルガーが現れた。

「さあ、私のポケモンと勝負よ。」

挑発的にサキがそう言った。

「ドラピオンにヘルガーか……なら、お前も頼むぞ！ フライゴン！」

俺はフライゴンをモンスターボールから出した。

「二人共、このバトルに勝って奴らを捕まえるぞ!」

「……了解した。」

「解ってるよ!」

これ以上犠牲者を増やさない為に……このバトル、絶対勝つ!

第二十五話 コトブキシティへ！（後書き）

第二十五話完成です。

第二十六話 タクミVSサキ！（前書き）

これ以上犠牲者を出さない為に……絶対にこのバトルに勝って、
捕まえてやるからなプルート！

第二十六話 タクミVSサキ！

「マニユーラはドラピオンに氷の飛礫^{つぶて}、フライゴンはヘルガーに竜の息吹き！」

俺がそう指示すると、マニユーラは氷の塊を作り出してドラピオンに向けて飛ばし、フライゴンはヘルガーに向けて口からエネルギー波を放った！

「ドラピオンは炎の牙、ヘルガーは火炎放射！」

ドラピオンはその鋭い牙に炎を纏^{まと}わせて、マニユーラが放った氷の飛礫を溶かしてしまい、ヘルガーは火炎放射を放ってフライゴンの竜の息吹きにぶつけ、相殺させた！

「ドラピオン、ヘルガーに炎の牙よ！」

サキの奴はドラピオンに炎の牙を使わせて、ヘルガーに攻撃させた。

「味方を攻撃するなんて何を考えてるんだろ？」

不思議そうな表情をしているフライゴン。

「気をつけるフライゴン、マニユーラ。」

あいつ、特性の貰い火を利用するつもりだぞ。」

貰い火。

相手の炎技を受けるとダメージを無効化して、自分の炎技の威力

を上げる特性なんだ。

あいつ……ダブルバトルに相当慣れてるみたいだな。

『……なるほどな、だが……当たらなければどうという事はないな。』

確かに、マニョーラの軽い身のこなしならヘルガーの攻撃は避けられるだろう。

だけど、フライゴンはそこまで素早く動ける訳じゃない……ドラゴンタイプを持っているから炎技には強いが、貰い火で強化された炎技を受ければいくらフライゴンでも無事じゃすまない……

「ヘルガー！ 強化された火炎放射を見せてあげなさい！」

俺が色々考えている間に、サキが強い口調でヘルガーに指示した。そしてヘルガーはさっきよりも強力な火炎放射をフライゴンに放ってきた！

「フライゴン！」

砂嵐で火炎放射を吹き飛ばせ！」

『解った！』

フライゴンは翼を思いっきり羽ばたかせて、前方に砂嵐を発生させたフライゴン。

いくら強化されたと言っても、岩タイプの砂嵐なら……っと思っただけ、ヘルガーの火炎放射はフライゴンの砂嵐を突き破ってきやがった！？

『嘘っ！？』

フライゴンに火炎放射が向かって……ってさせるかよ！

「水鉄砲おおー！！」

俺は最大パワーで火炎放射に水鉄砲を放った！

砂嵐で若干威力が落ちていたみたいで、俺の水鉄砲でヘルガーの火炎放射を防いでフライゴンを助ける事が出来た。

『あ、ありがとうタクミ！ 助かったよ（汗）』
「気にすんなよフライゴン。それより油断すんなよ。」

俺はヘルガーやドラピオンから目を逸^そらさずにフライゴンにそう言った。

奴らはもう次の行動に移ろうとしていた。

「ドラピオンはフライゴンに氷の牙、ヘルガーはマニョーラに炎の牙！」

ドラピオンは牙に冷気を纏わせ、そしてヘルガーは牙に炎を纏わせてフライゴン達に向かって突っ込んで来た。

「フライゴンは空に飛んで回避、マニョーラは高速移動で避けるんだ！」

『……了解。』
『うん！』

フライゴンは空中に飛んでドラピオンの攻撃を回避した。
さすがにドラピオンも空中に飛ばれたら攻撃のしようが無いだろう。

そしてマニョーラは高速移動で素早く動き、ヘルガーの炎の牙を

回避した。

ヘルガーは何回もマニユーラに攻撃を当てようとするが、スピードはマニユーラの方が圧倒的に上。

ヘルガーの攻撃は全てマニユーラに避けられて空を切る。

『……ふっそんなスピードでは、俺に攻撃は当てられん。』

余裕の表情のマニユーラ。さすがだよ。

「ドラピオン、フライゴンは放置して良いわ。

あなたもマニユーラを攻撃しなさい、炎の牙！」

サキの奴……マニユーラが手強いと判断してドラピオンとヘルガーの二匹でマニユーラを集中攻撃するつもりだな。

だがその判断……大きな間違いだ！

「今だフライゴン、最大パワーで竜星群だ！」

『うおおおおー!!』

フライゴンは上空から無数のエネルギー弾をドラピオン達に放った！

これだと、ドラピオン達の近くににいるマニユーラも巻き込まれちゃうけど、マニユーラなら大丈夫だ！

「守るを使えマニユーラ！」

『言われなくとも!』

マニユーラは守るを使って、自分をバリアで身を包んでフライゴンの竜星群から身を守った。

そして竜星群は全て、ドラピオン達だけに直撃した！

竜星群が直撃した事によって発生した爆煙でドラピオン達が見えなくなっていた。

『手応えありってね!』

フライゴンが地上に戻ってきた。
そして爆煙の中からマニニューラがこっちに戻ってきた。

『……まったく、俺が守るを覚えてなかったら今頃俺までやられてるところだぞ?』

腕組みしながらマニニューラが俺に言った。

「マニニューラなら、たとえ守るを覚えてなくてもその軽い身のこなしで避けてくれただろ?」

俺は自分のポケモン達を信じてるからな。
だからああいう事も出来るんだ。

『……ふっ。まあ良い……それより、奴らは倒せたのか?』

マニニューラはまだ晴れていない爆煙の方を見る。

「解らない……二人共、油断するなよ。」

俺がそう言うと、フライゴンとマニニューラは警戒の為に再び戦闘体勢に入る。

爆煙が徐々に晴れてきた……

「なっ!？」

俺は思わず声を出して驚いてしまった。
何故なら、ドラピオンが味方のヘルガーを使って竜星群から身を
守る盾にしていたからだ。

ヘルガーは完全に意識を失っていた。

「良くやったわドラピオン。さあ、その使えなくなったゴミはさっ
さと捨てなさい。」

冷淡にサキがそう言うのと、ドラピオンは気を失っているヘルガー
を放り投げた。

『仲間をあんな風に……酷すぎるよ……』

両手で拳を作り、身体を震わせているフライゴン……お前の気持
ち、すげえ解るぜ……

「お前……自分のポケモンだろ!？
それをゴミだなんて……」

「あら？ 別にそのヘルガーは私のポケモンじゃないもの。
さらに言つと、元々そのヘルガーは人間だったし……」

なっ……あのヘルガーは……本当は人間だったのか!？

「使えなくなつたから捨てただけ……それに、私にはいくらだって

代わりのポケモンがいるからね……人間からポケモンに変わった奴らがね。」

……許さねえ……こいつらは……絶対に許しちゃんらねえ！

「マニユーラ、高速移動から瓦割りだ！」
「……任せろ！」

マニユーラは高速移動でドラピオンに接近して、最大パワーの瓦割りを決めた。

ドラピオンは吹き飛ばされて、壁に激突した。

「マニユーラ、フライゴン！ サキとオッサンを捕まえるぞ！」

「うん！」

『……了解！』

今のでドラピオンは戦闘不能になった、もうサキとオッサンの前に障害は無い。

俺達はオッサン達を捕まえる為に向かって行った。

「冷凍ビーム！」
「なっ！？ 二人共避ける！！」

オッサン達の目の前まで来た時、突然俺達から見て左側から冷凍ビームが放たれた！

俺達は急いで後ろに後退して、冷凍ビームを回避する事が出来た。だけど、俺達とオッサン達の間には巨大な氷の壁が出来ていて、オッサン達に近づけなくなってしまった！

『この冷凍ビーム……まさか……』

えっ……フライゴンが震えてる？

「中々戻らないから何をしているのかと思って来てみたら……随分と楽しそうな事をしてんじゃねえかよ。」

この声は！？

俺達は声が聞こえてきた方に振り向く。

そこには赤い長髪で眼帯をした男がいた。

間違いない……ヒョウガだ！

「ちっ……余計な事するんじゃないわよ眼帯男！」

舌打ちをしてヒョウガを怒鳴るサキ。

「うっせえんだよこの尼^{あま}！

てめえは引っ込んでろ！」

怒鳴り返すヒョウガ。

「おいジジイ、この俺様が時間稼いでやつから……とつと飛行艇に行きやがれ！」

金を貰う前に捕まってもらっちゃ俺様が困るんでな！」

こいつ……俺達の邪魔をする気か！？

「そうさせてもらうかの……行くぞサキよ。」

「くっ……解りました、お爺様……戻りなさいドラピオン。
出て来なさい、アブソル！ 破壊光線！」

サキがモンスターボールにドラピオンを戻した後、新たにモンスターボールを取り出して中からアブソルを出した。

アブソルの破壊光線で壁を壊して大きな穴を開けた。

「さらばじゃ、国際警察の若造よ。」

逃がしてたまるかよ！

「ヒコザル！ 火炎放射でこの氷を溶かすんだ！」

俺はモンスターボールを取り出して、中からヒコザルを出した。

『火炎放射！』

ヒコザルは氷の壁に向かって火炎放射を放った！

「させるかよ！ ユキノオー、吹雪をぶちかませ！」

ヒョウガがモンスターボールからユキノオーを出して、吹雪を使わせた。その吹雪は強力で、ヒコザルの火炎放射をいとも簡単に吹き飛ばしてしまった！

「くっ！？ 邪魔をするな！」

「生憎、俺様はあのジジイに雇われているからなあ……しかし驚いたぜ？」

捕まえようとしたブイゼルが、元は人間だったとはよう……まあ、今はんな事どうでも良いな。

ジジイ達が逃げるまで、俺様と遊んでもらうぜ！
行くぜユキノオー、ユキメノコ！」

ヒョウガの前にあのユキノオーとユキメノコが……くそ、こんな事してる間にもオッサン達が……

「ヒョウガ君、あなたの相手は私がしてあげるわ！」

えっこの声は……俺は声がした方に振り向く。
そこにはシロナさんがいた！

「シロナさん！」

「遅くなつてごめんなさいタクミ君。
彼は私が引き受けるから、タクミ君は奴らを！」

ありがたい！

「お願いしますシロナさん！ 行くぞ皆！」

まずヒコザルの火炎放射で氷の壁を溶かし、俺達はオッサン達を
追い掛ける為に走り始めた。

「行かせねえよ！」

ユキノオー、ユキメノコ、吹雪をぶつ放せ！」

ヒョウガのユキノオーとユキメノコが俺達に向かって吹雪を放つ
てきた！

「華麗に踊れ、ロズレイド！ 天空に舞え、ガブリアス！」

シロナさんが投げたモンスターボールから、俺達の前にシロナさんのガブリアスとロズレイドが現れた。

「ロズレイドはリーフストーム！ ガブリアスは砂嵐！」

ロズレイドのリーフストームとガブリアスの砂嵐がユキノオーとユキメノコの吹雪を吹き飛ばした！

「す、すげー……」

『ここは私達に任せて。
さあ早く行きなさい！』

ガブリアスが言うてくれた。

「わ、解った！」

ヒョウガ達はシロナさん達に任せて、俺達はオッサン達を追い掛けた。

グローバルターミナルの外。

「プルート！」

飛行艇に乗りうとしていたオッサンに、俺は叫んだ。

「またあんた？ しつこいわよ。」

オッサンの隣にいたサキが呆れたような感じで言ってきた。

「絶対お前達は逃がさない！ 行くぞ皆！」

俺達はオッサン達を捕まえる為に向かって行った。

「邪魔はさせないわ！」

そう言っただけでサキがモンスターボールを三つ取り出して、俺達の前
に投げた。

中からは三匹のマルマインが現れた。

お、おい……まさか……

「大爆発！！！」

サキがそう指示をした刹那、三匹のマルマインが大爆発を發動さ
せた！

俺達は回避する事が出来ず、大爆発を受けてしまって吹き飛ばさ

れてしまった！

「くっ……」

くそ……ここまで来て……逃がしてたまるかよ……俺は力を振り絞ってなんとか立ち上がる。

「サキよ。」

「はいお爺様。出てきなさい、アーボック！」

サキがモンスターボールからアーボックを出した。そしてアーボックは俺にその長い身体を巻きつけてきた！

「ぐっ！？」

く、苦しい……

「若造よ、お前はワシ達を捕まえようとしていたらしいが……ワシ達もお主を捕まえようとしていたのじゃよ。」

お、俺を捕まえようとしていただと……？

「あの薬を打たれて記憶が無くならなかったのはお主だけ……何故お主だけが記憶が無くならなかったのか興味がある。」

お主を捕まえて色々調べさせてもらうぞ。」

「アーボック、そいつを連れてきなさい。」

アーボックは俺を締め上げたまま、サキ達の所へ行こうとした。

俺は振り解こうともがくが、アーボックの力が強いうえにさっきの大爆発のダメージが残っていて身体に力が入らない……アーボッ

クの巻き付くから脱出出来ない……

『タ、タクミ……』

フライゴン達は大爆発のダメージが大きかったせいで、身体が言う事をきかないみたいだ……

『ハイドロポンプ！』

突然何処からかハイドロポンプが放たれて、アーボックに直撃した！

ハイドロポンプが直撃した事でアーボックの巻き付く力が弱くなった。

俺はなんとかアーボックの巻き付くから脱出した。

『大丈夫かタクミ！』

この声……カメックスか……声がした方に振り向くとやっぱりカメックスがいた。

「助かったよカメックス……パチリスは？」

『まだポケモンセンターにいる。』

さっき大きな爆発があったから急いで来たんだ。

あとは俺に任せな！』

カメックスは俺の前に立った。

そしてオッサン達を睨みつける。

「よくも邪魔してくれたわね……アーボック、早くそいつを片付けなさい！」

「もう良いサキ。今は撤収するのじゃ。」

オッサンがサキを止めた。

「でも！」

「あの若造を捕まえるのはまた今度で良い。
今はサターンやマーズらを潰すのが先じゃ。」

「……解りましたお爺様……戻れアーボック。」

サキがアーボックをモンスターボールに戻した。そして飛行艇の中へ。

ちっ……逃げる気だ！

『逃がすかよ！ ハイドロポンプ！！』

カメックスがオッサン達に向かってハイドロポンプを放った！
だけど、飛行艇のドアが閉まり、カメックスのハイドロポンプはオッサン達には当たらなかった。そして次の瞬間には飛行艇は空へと飛んで行ってしまった……

「……また……逃げられた……あそこまで追い詰めたのに……くそ

っ！」

俺は悔しさのあまり、地面を思いっきり殴った。

ドォーン！！

突然グローバルターミナルの方から大きな爆発音が！

振り向くと、建物には大きな穴が開いていた。

そして中からヒョウガが現れた。

後からシロナさんも現れた。

「今日はここまでにしておくぜ！

あばよ、シンオウチャンピオンさん！」

ヒョウガはポケットからボールのような物を取り出し、それを地面に投げつけた。

ボールが地面に直撃すると、ボールは割れて眩い閃光を發した！
あまりの眩しさに目を開けてられない！

「くっ目眩ましか……」

しばらくしてようやく光が消えた。

目を開けてみると、もうそこにはヒョウガはいなかった。

「逃げられたわね……」

悔しそうな表情をしているシロナさん。

「……あっタクミ君、あなた怪我を？」
「えっ？」

シロナさんに言われ、俺は身体を確認してみる。俺の身体中に擦り傷があった。

さっきの大爆発のせいだな……

「これくらい大丈夫です……だけど……また奴らに逃げられてしまいました……」

「タクミ君……」

これ以上犠牲者を出さない為に……今日こそ奴らを捕まえる……
そう決めたのに……

「気をしっかり持ちなさいタクミ君。
大丈夫、諦めなければ必ず奴らを捕まえる事が出来るわ。
私も全力で協力するから。」

シロナさん……

「……ありがとう……シロナさん……」
「どうも……あら？」
あの子は？」

シロナさんが何かを見ている。
俺はシロナさんが見ている方に振り向く。

「あっさっきのパチリスだ。」

そこにいたのは俺とカメックスが助けたパチリスがいた。
気がついたんだな。

俺はパチリスのところへ駆け寄った。

「気がついたんだね。」

「……ブイ……ゼル……？」

首を傾げながらパチリスがそう言った。

あっネックレス付けたままで話してたよ俺（汗）

多分、ブイゼルの俺が人間の言葉で喋ったから驚いたんだな。

俺はネックレスを外した。

「怪我はないかい？」

「うん……ねえ……あなたもしかして……コウキお兄ちゃんの友達
の……ブイゼルなの？」

また首を傾げながらパチリスが言った……って、えっ……コウキ
……お兄ちゃん……？

「まさか……アイ……なのか？」

俺は恐る恐る聞いた。

そしてパチリスは頷いて答えた。

そんな……アイが……パチリスに……

第二十六話 タクミVSサキ！（後書き）

第二十六話完成です。

タクミ

「作者、いつになったら俺はオッサン達を捕まえられるんだよ？」

いつになるだろうねえ……まあ、いつかは捕まえられるよ多分。

タクミ

「多分かよ！？」

第二十七話 アイがパチリスに……（前書き）

また犠牲者が出てしまった……まさか……アイまでポケモンにされるなんて……

第二十七話 アイがパチリスに……

アイが……パチリスに……

『私……何でブイゼルの言葉が解るのかしら？
それに、ブイゼルってこんなに大きかったっけ？』

えっ？　もしかして……自分がパチリスになった事に気づいてないのか？

『アイ……その……今の君は、パチリスに……』
『えっ？　パチリス？』

アイは自分の身体をチェックし始めた。

『あれ？　あれ？
可愛い尻尾に可愛い手……えゝ！？』

驚きの声をあげるアイ……驚くなつてのが無理な話だよな……

『私がパチリス……素敵ゝ』

………はい？

『私、前からポケモンになってみたいって思ってたんだゝ　しか
も私の好きなパチリス……最高』

よ、予想外な反応だ（汗）

『ア、アイ？ ショックじゃないのか？』

自分が人間じゃなくポケモンになってしまった事に？』

『えっ？ なんでショックなの？』

大好きなポケモンになれたのよ？

逆に嬉しいじゃない』

とびきりの笑顔で答えるパチリスになったアイ……めちゃくちゃ
ポジティブだな（汗）

ま、まあでも、落ち込んでいる訳ではないからそれはそれで良い
かな（汗）……だけど、コウキはショックだろうな……妹がポケモ
ンになっちまったんだから……

「タクミ君、その子は知り合いなの？」

シロナさんが俺達の所までやってきて、俺達と視線が合うように
しゃがんでから、聞いてきた。

俺は手に持っていたネックレスをまた首に掛けた。

「はい、この子の名前はアイ。俺の知り合いのコウキの妹です。」

「コウキ君の！？」

凄く驚いた様子のシロナさん。

「コウキの事を知ってるんですか？」

「ええ……ナナカマド博士のお孫さんだから、面識があるの。」

そうだったのか。

「シロナさん、俺はアイをコウキの所に連れて行きます。」

コウキの奴、ずっとアイの事を搜している筈ですから……」

「……解ったわ。私は逃げたあいつらを探すわ。
何か解ったら、連絡するわね。」
「お願いします。」

シロナさんはネオ・ギンガ団を捜す為に出発した。

『へ……ブイゼルって人間の言葉を喋れるんだ!』

ちよつと驚いた表情をしているアイ。

「それはこのネックレスのおかげさ。」

俺は首に掛けたネックレスをアイに見せた。

「さあ、コウキがアイの事を捜してるから、早く行こう。」
『うん!』

俺はまず、傷ついたフライゴン達をモンスターボールに戻した。
それから、俺はピジョットをモンスターボールから出した。

『ん? タクミ、その可愛いパチリスは?』

首を傾げながらピジョットが聞いてきた。

『わあゝ あの時ピジョットだゝ』

ポケモンの言葉が解るって最高 』

そう言いながら、アイがピジヨットの背中に乗った。

『な、何なんだこの子は（汗） 』

アイのハイテンションに戸惑っているピジヨット（汗）

「ピジヨット……そのパチリスはアイなんだ（汗）」
『な、何〜!？ 』

凄く驚いた表情をするピジヨット。

『ほ、本当に……あのアイなのか？ 』
『そうよ。ピジヨットの背中って大きいんだね〜 』

ピジヨットの背中の上ではしゃぐアイ。

『間違いなくアイだな（汗）でも、まさかアイまでタクミのようにポケモンになるなんて 』

「嗚呼……とにかく、今からマサゴタウンに向かう。
ピジヨット、頼むぞ。」

『解った。 』

俺はピジヨットの背中に乗った。

『わ〜い 私、前からピジヨットに乗って空を飛んでみたかったんだ〜 』

はしゃぐアイ。

本当にショックじゃないみたいだな（汗）

俺なんかブイゼルになったって解った時はすっげー落ち込んだのに（汗）

『行くぞ二人共！』

ピジョットは翼を思いっきり羽ばたかせて、空に上昇した。

『凄〜い　　うわ〜もう街があんなに小さい〜』

「おいアイ、あんまりはしゃぐと落ちるぞ（汗）」
『は〜い』

……アイって……ある意味すげーな（汗）
将来絶対大物になるな（汗）

マサゴタウン上空。

コトブキシティを飛び立ってから約五分程。
俺達の眼下にはマサゴタウンが見えていた。

『あつマサゴタウンだ！』

私、マサゴタウンを空から見たの初めて。』

マサゴタウンを眺めるアイ。

「おいアイ、そんなに前に行くと落ち……」
『あつととと！？』

って言ってるそばから落ちそうになってる！？

「アイ！？」

俺は慌ててアイの手を掴んで引き寄せた。

「危なかった（汗）」

アイ、大丈夫だったか？」

『うん！ あゝ面白かった。』

面白かったって……こっちは焦ったつつつのに（汗）

『おい大丈夫なのか？』

ピジョットが心配そうな表情をしながら聞いてきた。

「大丈夫だ。ピジョット、ナナカマド研究所の前に降りてくれ。」
『解った。』

ピジョットはゆったりと降下を始めた。

ナナカマド研究所前。

「アイ、降りるぞ。」

俺はアイを抱えてピジョットから降りた。

「……タクミくん！」

ん？　なんか遠くから声が聞こえてきたぞ？
俺は声が聞こえてきた方に振り向く。

『あつコウキ兄ちゃんだ！』

アイが言うように、そこには俺達に向かって走ってきているコウキの姿があった。

「はあ……はあ……はあ……タ、タクミ君……アイは見つかったかい？」

息を切らせながらコウキが聞いてきた。

「えっと……見つけたには見つけたんだが……」
「本当！？　何処、何処にいるの！？」

辺りをキョロキョロするコウキ。

「あの……その……アイは……ここに……」

俺はパチリスになったアイを指差した。

「……えっ……な、何を言ってるんだいタクミ君……冗談は止めてくれよ！」

やっぱり信じられないよな……仕方ない。

俺はネックレスを外してアイの首に掛けた。

『アイ、兄ちゃんと話な。』

俺がそう言っているとアイは頷いた。

「コウキ兄ちゃん。」

「えっ！？ その声……本当にアイなのか！？」

驚くコウキ。

「そうよ。」

「アイ……アイがパチリスに……」

両膝を地面に付けてしまったコウキ……やっぱりショックだよな

……

「どうしたのコウキ兄ちゃん？」

首を傾げながらアイがコウキに聞いた。

「……いや、なんでも……どんな姿になってもアイが無事なら……心配したんだぞアイ。」

そう言いながらアイを抱きしめるコウキ。

「ごめんね……コウキ兄ちゃん。」

アイ……

「何事だ？」

あつ研究所からナナカマド博士が出てきた。

『アイ、ちよつとごめんよ。』

俺はアイに掛けたネックレスを外し、俺の首に掛けた。

「博士、詳しい事は研究所の中で説明します。」

ナナカマド研究所内。

俺はナナカマド博士に今までの事を説明した。

「……そうか……ネオ・ギンガ団の奴ら……大きく動き出したな……」

眉間^{みけん}にしわを寄せ、難しそうな表情をするナナカマド博士。

「……お爺ちゃん、まだあの薬は出来ないの？」

コウキがナナカマド博士に聞いた。

「残念だがまだだ……だが、出来るだけ早く完成させる。」

まだ人間に戻す薬は出来てないんだな……

「頼むよお爺ちゃん。」

アイを元に戻してよ。」

「パチっ？ チパチパチっ！」

『えっ？ 私結構気に入ってるのにっ！』

アイ本人はパチリスの姿を気に入っているらしい（汗）

「タクミ君、今アイはなんて言ったの？」

「えっ？ 私結構気に入ってるのにっ！ だつてさ。」

俺はアイが言った事をそのままコウキに伝えた。

「アイ（汗）」

苦笑いするコウキ。

兄妹なのに……言葉が通じないってのは不便だよな……あっそう
だ！

「なあコウキ、俺のフライゴン達をポケモンセンターに預けてくれないか？」

そう言っただけ俺はフライゴン、マニニューラ、ヒコザルが入ったモン
スターボールをコウキに手渡した。

「別に良いけど……タクミ君、何処かに行くの？」

首を傾げながらコウキが聞いてきた。

「このネックレスを作ってくれた俺の幼なじみがいるんだ。

そいつの所に行って、同じネックレスをもらうのさ。多分あいつの
事だから、何個か余分に作ってる筈だし、そのネックレスがあれば、
アイと普通に喋れるだろ？」

「タクミ君……」

「じゃ、フライゴン達をよろしくな！」

俺はそう言っただけ研究所を出た。

研究所の外にはピジョットを待たせていた。

「ピジョット、今からマコトの所に向かうぞ！」

『マコトの所？　なんでまたマコトの所に？』

首を傾げるピジョット。

「理由は空の上で話すよ。頼むぜピジョット！」

俺はピジョットの背中に乗った。

『なんか知らんが、まあ良いか。それじゃ行くぞタクミ！』

ピジョットは俺を乗せて空に上昇。

マコトがいる212番道路のポケモン屋敷に向けて飛んだ。

マサゴタウンを飛び立ってから約一時間が経過。

『なるほどな。アイにマコトが作ったネックレスをあげるって訳か。』

「そういう事。……そういえば、マコトに会ったの久しぶりだなあ。」

あれから結構日数が経ったからなあ。

『おっ見えてきたぞタクミ！』

ピジョットに言われ、俺は下を覗いてみた。

そこには確かにマコトがいるポケモン屋敷があった。

「よし、降下してくれピジョット。」

『了解。』

ピジョットはポケモン屋敷の前にゆっくりと降下を始めた。

ポケモン屋敷前。

「……何だよ……これ……」

俺は驚いた。何故なら、ポケモン屋敷がまるで誰かに襲撃された後のように、ボロボロになっていたからだ。

「……マコト……マコトオオオ!!」

俺はマコトが心配で、はいきよ廃墟となったポケモン屋敷へ向かって走った。

『あつ待てタクミ!？』

まだ敵がいるかもしれないぞ!？』

ピジョットはそういうけど今はそんなのどうでも良い！
マコトが心配なんだ！

ポケモン屋敷内部。

屋敷の中も酷い状況だった。屋敷の壁に掛かっていた絵画は床に落ちていて、廊下や壁、至る所にヒビが入っていた。

「何なんだよ……一体何があつたんだよ……」

コッ……コッ……

これは……誰かの足音……マコトか!?

「マコト!」

俺は急いで足音がした方に走った。

「ん? 誰だ?」

足音がした方に来たが……そこにいたのはマコトじゃなかった。
俺に気づいたそいつは振り向いて俺の事を見た。何だこいつは……
ん?

あの胸に付いたGのロゴ……こいつギンガ団か!? まさか……
マコトはこいつらに捕まったんじゃない?!

「お前……ここで一体何をしゃがった……マコトを何処にやったんだ!」

「マコト? あゝあの調子の狂うような口調の男か……知っているが、ただで教える訳にはいかないな。
国際警察のタクミ。」

なっ!?! こいつ、何で俺の事を!?

「出てきなさい、ドグロググ!」

ギンガ団はモンスターボールからドグログを出した。
こいつ……やる気か！

「このドグログに勝てたら、君が知りたい情報を教える事を考えても良い。」

「やってやるさ！

頼むぞエーフィ！」

俺はモンスターボールからエーフィを出した。

相手は格闘タイプと毒タイプの二つを持ったドグログ。

エスパークタイプのエーフィなら相性ばっちりだ！

「エーフィ、絶対に勝つぞ！」

『OKダーリン、私に任せて！』

このバトルに勝って、マコトの居場所を聞き出してやる！

第二十七話 アイがパチリスに……（後書き）

タクミ

「おい作者、今回の話で俺やアイが何で記憶がなくならなかったのかが解るって言ってたよな？
全然解らないじゃんかよ！」

僕は明らかになるかもって言ったんだよ？
かもって。

タクミ

「……騙された〜！？」

勘違いした君が悪い。

まあでも、次はその謎が明らかになるからさ。

タクミ

「嘘だったらマルマインの大爆発を受けてもらっからな。」

……マジっすか（汗）

第二十八話 タクミの過去（前書き）

ギンガ団の男に勝って、マコトの居場所を聞き出してやる！

第二十八話 タクミの過去

「エーフィ、スピードスターだ！」

『OK!』

俺がそう指示すると、エーフィは無数の星形のエネルギー弾をドグロググに向けて放った！

「ドグロググ、真空波です。」

ギンガ団の男がそう指示すると、ドグロググは衝撃波を放ってスピードスターを吹き飛ばした！

あのドグロググ……かなり鍛えられてるな……

「ドグロググ、次は悪の波動です。」

ドグロググがエーフィに向かって悪の波動を放ってきた！

「エーフィ、守るで防御だ！」

『解ったわ!』

エーフィは自分の前にバリアのような壁を作り出し、悪の波動を防御した。

「エーフィ、フラッシュだ！」

そう俺が指示すると、エーフィの額ひたいにある宝玉から眩まばゆい光を放した！

そのあまりの眩しさにドグロググは目を閉じた。よし、次にエー

フィのサイケ光線で決めてやる！ あいつは毒タイプと格闘タイプの両方を持っているから、エスパー技のサイケ光線を受ければ倒れる筈だ！

「次で決めるぞエーフィ！ サイケ光線だ！」
『解ったわ！』

エーフィはドグロググに向けてサイケ光線を放った！ ドグロググはさっきのフラッシュで目をやられている、これで決まりだ！

「避けなさい。」

なっ！？ ドグロググの奴、目が見えてない筈なのに……エーフィのサイケ光線を避けやがった！？

「フラッシュからの攻撃は見事でした。
しかし、私のドグロググには特性、危険予知があるんですよ。」

危険予知……そうか、危険予知は自分に大して効果抜群の技や一撃で倒される技を予知する特性……それでサイケ光線を回避出来たのか！

「だったら、効果抜群じゃない技で攻撃するまでだ！ エーフィ、シャドーボールだ！」
『了解よ！』

エーフィは黒いエネルギー弾を作り出してドグロググに放った！

「ドグロググ、守るを使いなさい。」

ちっ……あいつ守るを覚えてたのか！

エーフィのシャドーボールが防御されちまった！

「そろそろですかね。」

ドグログ、悪の波動です。」

男がそう指示すると、ドグログは目を開けてエーフィに悪の波動を放ってきた！

もう回復したのか！

「エーフィ、守るで……」

「させません。挑発ですドグログ。」

俺がエーフィに守るを指示するよりも早く、ドグログはエーフィを挑発した！ ま、まずい！？

『きゃあああああ！？』

エーフィは悪の波動をまともに受けてしまった！

挑発を受けるとしばらく攻撃技しか使えなくなる……それで守るを封じられちまったんだ……

「エーフィ、大丈夫か！？」

『え、ええ平気……だけど……あいつにはムカついたわよ！！絶対ぶっ倒してやるわ！！』

エ、エーフィが怒った（汗）挑発されて頭に來たんだな……目が怖いぞ（汗）

だけどまずいな……攻撃技しか使えないとなると防御手段が……それに、今のエーフィは挑発の影響で怒りで我を忘れている……

『覚悟しなさいこの蛙^{かえる}野郎!!』

エーフィがドグログに向かって突っ込んで行った!?

「ま、待てエーフィ!？」

「こちらの思いつばですね……ドグログ、不意打ちです。」

男が少しにやけながらそう指示すると、ドグログは素早い身のこなしでエーフィに接近して体当たりを決めた!

エーフィは吹き飛ばされた!

まずい、あのままだと壁に……間に合え!

俺は急いで走り、吹き飛ばされたエーフィを受け止めた。

「ぐっ!？」

エーフィを受け止める事は出来たけど、俺は背中から壁にぶつかった。

『はっ……私……あっダーリン!？』

挑発が解けたみたいだな。

「大丈夫かエーフィ？」

『……ごめんなさい……私の為に……』

「これくらい平気さ。」

それより、このままやられっぱなしってというのは……悔しいだろ?」

俺はドグログと男を見ながらエーフィに言った。

『ええ……絶対倒すわ!』

ドグログを睨みつけるエーフィ。

「よし、反撃開始だ!」

俺がそう言うと、エーフィはバトルする体勢に入った。

……さて、反撃開始とは言ったものの……どうするかな?

効果抜群の技を使おうとすれば、特性の危険予知で避けられる……
エスパー技が当たりさえすれば倒せるのに……待てよ? あの技
ならいくら危険予知があっても避けられない筈……その為にはまず
準備しなきゃならないが、あの男はすぐに感づくだろうな……あいつに
感ずかれずに済むには……やっぱりこれか!

俺は首に掛けてたネックレスを外した。

『エーフィ、あいつに夢喰いを決めるぞ。』

ポケモンの言葉で俺はエーフィに言った。

『夢喰い……でもダーリン、あいつを眠らせなきゃその技は意味無い
わよ? それに、あいつを眠らせる前にまた挑発でもされたら……
……』

不安そうな表情をするエーフィ。

『大丈夫だ。とにかく、俺が合図したらあいつを眠らせるんだ。』
『……解ったわ。私、ダーリンを信じる!』

エーフィはそう言った後、再びドグログを睨みつける。

「相談はもう良いですか？　まあ、どんな策を練ろうが私のドグログには通用しませんかね。」

腕組みしながら言う男。その自信に満ち溢れた表情……すぐに崩してやるぜ！　俺はまた首にネクレスを掛ける。

「エーフィ、連続でシャドーボールだ！」

『解ったわ！』

エーフィはドグログに連続でシャドーボールを放った！

「避けなさいドグログ。」

ドグログはエーフィのシャドーボールを全て紙一重で避けていく。

外れたシャドーボールは屋敷の壁に当たり、爆発。爆煙が発生した。

「まだだエーフィ！」

もつともつとシャドーボールだ！」

俺の指示でエーフィはシャドーボールをひたすら放ち続けた！

全てドグログには回避されてるけど、狙いはシャドーボールを当てる事じゃない。

「よし、そろそろかな？」

ひたすらシャドーボールを放った結果、辺りは爆煙で包まれ相手の姿を確認出来なくなっていた。

「今だエーファイ！」

『あくび欠伸！』

俺が合図すると、エーファイは爆煙の中に欠伸で作った無数のシャボン玉のようなエネルギー弾を放った。

これなら、嫌でも欠伸を受けて眠るだろ！

それからしばらくして爆煙が晴れていった……ドグロググは欠伸を受けたみたいでいびきをしながら眠っている。

「作戦成功！ エーファイ、最大パワーで夢喰いだ！」

『覚悟しなさい蛙野郎！』

エーファイはドグロググに最大パワーで夢喰いを決めた！

夢喰いは眠った相手からエネルギーを吸い取る技だ。

さらに、これはエスパー技。ドグロググには効果抜群だ！

「くっ……戻りなさいドグロググ。」

まだ夢喰いの途中だったが、男は悔しそうな表情をしながらドグロググをモンスターボールに戻した。

「さあ、教えてもらおうか。マコトは何処にいる？」

俺は男に聞いた。

「……良いでしょう。」

彼は今、裏切り者のプルートの所にいます。」

あのオッサンの所に!?

「……オッサンは今何処にいる？」

「さあ？ 私は知りませんよ。」

男が恍^{とほ}ける。

「お前……答えるよ！」

「クロバット、黒い霧です！」

いきなり男がモンスターボールからクロバットを出し、黒い霧を使わせた！ くそ、前が見えない！

「エーフィ、サイコネシスでこの霧を吹き飛ばしてくれ！」

『任せて！』

エーフィがサイコネシスを使って、黒い霧を吹き飛ばしてくれた。

「くっ！ あいつがいない！」

男はすでにここにはいなかった。

『待つてダーリン……何か音が聞こえるわ。』

音？ …… 本当だ、確かに聞こえる。

これは……ヘリの音か？ …… あっちだ！

「行くぞエーフィ！」

俺はエーフィと一緒にヘリの音が聞こえてきた方に向かって走った。

ポケモン屋敷、裏庭。

裏庭には一機のヘリコプターが。

そのヘリコプターにあの男が乗り込んでいた。

「おい待て！！」

俺は叫ぶが、大人しく待つ筈もなく、ヘリコプターは上昇を始めた。

「お別れだタクミ。
覚えておくが良い、私の名はサターンだ。」

男……サターンがそう言い終わると、ヘリコプターは何処かへと飛んで行った……

『逃げられちゃったわね……』

残念そうな表情でエーフィが言った。

「……次に会った時は必ず捕まえるさ。
それに……マコトも助けだしてやる。」

ポケモン屋敷、マコトの研究室。

気持ちを切り替えて、今俺はエーフィと一緒にマコトが作ったネ

ツクレスを探していた。

この研究室はどういう訳か荒らされた形跡はない。まあ、今はそんなのどうでも良いか。

『あつ！　ダーリン、もしかしてあれじゃない？』

エーフィが棚を見ながらそう言った。

エーフィが見てる先には確かに俺が掛けてるネックレスと同じ物があつた。

「おゝあれだあれ！
だけど……どうやって取るか？」

ネックレスがある位置が、ブイゼルの俺やエーフィにはちょっと高いんだよ（汗）

俺が背伸びしても届きそうにないし……

『私がやるわよダーリン。念力。』

おっ！　エーフィの念力でネックレスが空中に浮いた！
そしてネックレスはゆっくりと俺の所へ。

「サンキューエーフィ！」

『えへっ』

笑顔のエーフィ。

ついさっきのバトルではすげー怖い表情だったのにな（汗）

「さて、ネックレスは手に入ったしそろそろ……ん？」

床に落ちたノートが俺の視界に入った。

「何だこれ？」

俺はそのノートを拾った。ノートの表紙には名前が書いてあった。

「……これ……親父の名前じゃないか！」

そのノートには俺の親父、タツヒトの名前が書かれていた。

『ダーリンのお父さんのノートが何でここに？』

首を傾げながらエーフィが言った。

「さあな……嫌な名前を思い出しちゃったよ……あのクソ親父……」

俺は親父の事は嫌いだ。親父は研究者だったんだが……毎日研究ばかりで俺の事や母さんの事を気にもとめない……最後には研究の邪魔だ！

とか言っただけで俺と母さんを置いて何処かに行っちゃった……だから、俺は親父の事が大嫌いだ。

「……ノートには何が書かれてるんだか……」

とりあえず俺はノートを開いてみた。

「……やっぱり研究の事に関してか……」

親父のノートには訳が解らない事がたくさん書かれていた。

「……ん？」

その中で、俺は一つ気になる物を見つけた。

「人間とポケモンの……融合……？」

どういう事だ？

人間とポケモンがくつつくって事か？

気になった俺は更に読み進めた。

「　　月××日。

私は長い間研究していた……不治の病に掛かった人間をどうやったら助ける事が出来るかを……だが、人間の身体は脆く弱^{もろ}い……どう足掻いても人間は不治の病には勝てない……だが私は思いついた。ポケモンはとも丈夫で病気になっても耐える事が出来る。

人間にポケモンを融合すれば……消えかかっていた命が救えるかもしれないと……」

何だよこれ……俺は更に読み進めた。

「　　月××日。

実験は成功した！

余命が残り僅かだった少年に、私はフシギダネを融合させ、少年の病気を治す事が出来た！

やはり、融合させる事によって人間の身体は何倍にも丈夫になった。フシギダネには犠牲になってももらったが……人間を助ける為だ。許してくれ……」

少年に……フシギダネを融合させた！？

親父は……何考えてんだよ！？

ポケモンだって生き物だぞ！？ フシギダネだって生きたいって
思ってた筈だ……それを……クソ親父は……

「 月××日。

予想外の事態が起きた。

以前フシギダネを融合させた少年がフシギダネになってしまったの
だ！

どうやら……ポケモンと融合させた場合命を助ける事は出来ても、
人間の姿を保てる訳ではないようだ……後で聞いた話だが、この少
年がフシギダネになったのは少年が死ぬと宣告されたその日らしい。
つまり、人間としての寿命が終わり……融合させたフシギダネで命
を繋いだ……」

人間がポケモンになった……俺やアイとはまた違う形でポケモン
になった奴が……

「 月××日。

なんという事だ……私の息子が不治の病に掛かってしまった！

生きられても……十六才までらしい……私は……息子には生きてい
てほしい。たとえ、息子がポケモンになってしまっても生きていて
ほしい。

私は決意した。

息子にポケモンを融合させる事を。

融合させるのは……息子が可愛がっていたバイゼルド。

ポッポもいるが……ポッポよりもバイゼルのの方が身体が丈夫だろう

……」

えっ……バイゼルを……俺に融合させた……？

第二十八話 タクミの過去（後書き）

足りない頭を使って書いてみました（汗）
疲れたよ（汗）

タクミ

「人間とポケモンの融合……良く思いついたなこれ？」

ヒントはドラ ールのフュージョンからもらいました。
合体したら強くなるっていうあれ（笑）

タクミ

「あれか（汗）てか、俺がブイゼルと融合したのは解ったけど、アイはどうなんだ？ アイもパチリスと融合したのか？」

そうです。次話でもその事をやるつもりだから。

第二十九話 謎の男（前書き）

今回、とあるポケモン小説を書かれている先生の希望で、この小説に登場させました。

……名前などはまだ出していない為、誰だかは解らないですけど（汗）

それと、このキャラクターは多分……このタクミストーリーのレギユラーになる……かもです。

第二十九話 謎の男

ナナカマド研究所。

俺はポケモンが人間の言葉を喋れるようになる道具、マコトが作ったネックレスと俺の親父のノートを持ってマサゴタウンのナナカマド研究所に戻ってきていた。

戻ってきた時に、預けていたフライゴン達が入っているモンスターボールをコウキから受け取った。

「……これで良しと……さあ、喋ってみて。」

俺はアイの首にマコトが作ったネックレスを掛けてあげた。

「……あゝ……あゝ……凄い！ 私喋れてる！」

アイは人間の言葉を喋れた。

ちゃんと道具の効果が出たみたいだな。

「タクミ君……ありがとう。」

コウキがお礼を言ってきた。

「別に良いって……あっそうだ……」

俺はナナカマド博士の所へ。

「博士、ちょっと見てほしい物があるんですが……」

俺は博士に親父のノートを手渡した。

「これは？」

首を傾げながら博士が聞いてきた。

「俺の親父の……タツヒトのノートです。」

「なっタツヒト君の!？」

博士が凄く驚いた表情をした。
どうしたんだ？

「お爺ちゃん、どうしたの？」

首を傾げながらコウキが博士に聞いた。

「い、いや何でもない。」

お前達は家に帰ってなさい。私は少しタクミ君と話がある……」
「……解った。おいで、アイ。」

コウキとアイは研究所から出て行った。

「博士？」

「……タツヒト君には一人息子がいるとは聞いていたが……まさかタクミ君がタツヒト君の息子だったとは……」

博士は……親父の事を知っているのか！？

「親父を知ってるんですか！？」

「もちろんだ……彼は私のポケモンの研究に協力してくれた研究者だったからな。」

親父が……博士の研究に協力していた……初めて聞いたよ……

「……少々変わり者ではあったが……優秀な研究者だったよ。」

そう言いながら博士は親父のノートを開いて中を見始めた。

それからしばらくして、博士は親父のノートを全て見た。

「人間とポケモンの融合……タクミ君にもポケモンを融合させたのか……なるほど、これで合点がいく。」

納得してる博士。

何が何なのか解らないんですけど……

「何故タクミ君に人間の細胞が残ってなかったのか……最初はプルートが作った薬の量が多かったからだと思っていたが……タクミ君にはもうすでにポケモンが……ブイゼルが融合されていたからだっ

たんだな。」

……さっぱり解らない（汗）

「あの……どういう事ですか？」

「この人間とポケモンの融合……融合すれば治らない病気も治り、命を助ける事が出来る。」

確かに命は助かるが……人間としての寿命を伸ばす事は出来ない……簡単に言えば、例えば重い病気になった子供が残り三年の命と宣告されたとする。その子供にポケモンを融合して病気を治す。

だが、宣告された残りの寿命を伸ばす事は出来ない……それはつまり、人間として生きられるのは残り三年だと言う事。」

真剣な表情で説明してくれる博士。

「つまり……病気は治せるけど、人間としてはその宣告された年しか生きられない……その年になると、人間の細胞は無くなって融合したポケモンになってしまುತ್ತて事ですか？」

俺がそう聞くと、博士は頷いて答えた。

「そしてタクミ君にバイゼルを融合させた日……このノートによれば、君にバイゼルが融合されたのは君が八歳の時らしい。」

八歳……今俺は十六だからちょうど八年前か……

「そして、タクミ君は十六歳までしか生きられないと書かれている……今のタクミ君の年齢は十六だったな？」

……君はプルトの薬でポケモンになったんじゃない、最初からポケモンになる事が決まっていたんだ。君がプルトに薬を打たれる

時に偶然、人間としての寿命が尽きたんだ。」

凄い偶然だなそりゃ（汗）

「そして次にタクミ君の記憶が無くならなかった理由……プルートの薬は無理やり人間をポケモンに変える為に、薬を打たれた人間には想像以上の負担が掛かる。

その為に記憶を無くしてしまう……だが、タクミ君の場合は打たれる前に変化が起きていたから薬の効果は無かった。

だから身体に負担があまり掛からなかったから記憶が残ったんだろ
う。」

あれで負担が軽いのか……身体が焼けるような感覚だったのに（汗）

まあ……俺が記憶を失わなかった理由は解った。だけど……解らない事がある……

「博士……アイが記憶を失わなかったのは……何ですか？
そして……何でそんなに親父の研究に詳しいんですか？」

俺は疑問に思った事を博士に聞いた。

博士はすぐには答えず、しばらく黙ったままだった……

しばらくして……

「実は……アイもポケモンと融合しているんだ……パチリスとな……
……」

アイもポケモンと融合していたのか……

「タツヒト君が人を助ける研究をしていると聞いてな……頼んだんだ……そしてアイにパチリスを融合させた……アイを助ける為に……」

……博士もかよ……

「人を助ける為って……それで何の罪も無いポケモンが犠牲になっても良いのかよ!？」

俺は思わず怒鳴ってしまった。

「……確かにポケモンが犠牲になってしまうこの方法は良いとは言えない……だが……助きたい命がある時、何が何でも助けようとする……それが人で親だ。」

「そんなの……ただのエゴじゃないか!？」

俺はそう怒鳴った後、研究所を飛び出した。
その場にいたくなかったから……

219番道路海岸。

「……何で大人は……ポケモンの事を考えてやれないんだよ……」

海を見ながら俺は一人呟いた。

……博士がアイを助けたって気持ちは解らないでもない……だけど、それでポケモンが犠牲になるなんて……納得いかねえよ……俺がそう考えていたその時、突然俺のモンスターボールが開いてポケモン達が出てきた！

「お前ら……急にどうしたんだよ？」

「……モンスターボールの中で聞かせてもらっていたぞ。タクミと博士の会話を……」

腕組みしながらマニニューラが言った。

「タクミ……博士が言ってた、助きたい命があるなら、何が何でも助けようとするって言葉……解る気がするんだ、僕。」

ヒコザル……

「だけど、それでポケモンが犠牲になって良い訳では……」

「そうだけど……例えばタクミの命が危なくなかったら……僕は何が何でもタクミを助けようとするよ。僕の命を賭けてもね……」
「私もよ、ダーリン……」

エーフィ……他の皆も頷いている。
ヒコザルと同じ考えのようだ。

「皆……」

「おや？ こんな所にポケモンがたくさんいるな？」

突然背後から誰かの声が聞こえてきた！

俺達が振り向くと、そこには男が一人佇んでいた。何だこいつ……
まさか、ポケモントレーナーか？

「ブイゼルにピジョットにその他大勢……野生のポケモンって感じじゃないな？ まあ、ちょっと試してみるか。
出てこい、カメース！」

こいつ……やっぱりトレーナーだったか！

男はモンスターボールを投げ、中からカメールが現れた！

カメール……カメックスの進化前のポケモンか……

「タクミ、僕がやるよ。」

ヒコザルが前に出た。

ヒコザルじゃ相性が悪い、俺はすぐにヒコザルに戻るよう言おうとした。

『待てタクミ。』

その時、ピジョットが俺の事を止めた。

何故止めるんだ？

『あの男……危険な奴じゃない。』

ヒコザルは大丈夫だ。

……全く、昔と変わらないなあの人間も……』

少し呆れた表情をするピジヨット。

何だよ……まるであの男を知ってるみたいなの口振り……

「ヒコザルか。カメース、相手が炎タイプだからと言って油断するなよ？」

男がカメールにそう言うと、カメールは頷いた。そして、戦闘体勢に入る。ヒコザルも戦闘体勢に……やるしかないみたいだな。ポケモンが人間の言葉を喋っているとマズいから、俺は首からネットクレスを外した。

『ヒコザル、相手の水系の技には気をつけろよ！』
『解ってるよ！』

こうして、何故かは知らんがヒコザルと相手のカメールとのバトルが始まった。

第二十九話 謎の男（後書き）

はあゝ……僕の文章力の無さを改めて痛感させられたよ（汗）
ちゃんと伝わるかなあれで（汗）

タクミ

「難しい事をやろうとするからこうなるんだよ作者。」

うゝ……

タクミ

「ところで、本当にあの作者を出したんだな（汗）」

うん、色々キャラ設定やら手持ちポケモンなんかメールでもらったしね。

ただ……ちょっと僕のストーリーの都合上、設定を少し変える事になりそうだけどね（汗）

タクミ

「マジか（汗）ちなみにさ、読者の皆に言わなくて良いのか？
出てきた作者が誰なのかを。」

すぐに言うのもなゝ……じゃあ遠回しに……バクフーン達とアスカ達をゲスト出演させてくれてありがとうございます。

タクミ

「それ答え言ってるだろ！？」

第三十話 父の気持ち

219番道路、海岸。

突然現れた謎の男とバトルする事になってしまった俺達。

相手はカメール。

ヒコザルがバトルする事になったんだが……相性は最悪だ。だけどやるしかないよな。

『ヒコザル、まずは乱れ引つ掻きだ！』

『うん！』

ヒコザルは乱れ引つ掻きを決める為にカメールに接近していった。

「カメース、守る。」

男が冷静にそう言うと、カメールは自分をバリアのようなエネルギーの膜で包み、ヒコザルの乱れ引つ掻きを防御した！

「冷凍ビームだ。」

カメールが冷凍ビームを放ってきた！

『避けるヒコザル！』

ヒコザルはバックステップして、カメールの冷凍ビームを回避した。

冷凍ビームは地面に直撃、冷凍ビームが当たった所は凍りついた。

『ヒコザル、火炎放射だ！』
『解った！』

俺の指示で、ヒコザルはカメールに向けて反撃の火炎放射を放った！

「カメース、ハイドロポンプだ。」

男がそう指示すると、カメールは大量の水を放出してヒコザルの火炎放射にぶつけた！

カメールのハイドロポンプは強力で、ヒコザルの火炎放射は簡単に打ち破られてしまった！

ヒコザルにハイドロポンプが迫る！

『穴を掘るで避ける！』

『う、うん！』

ヒコザルはすぐに穴を掘るで地面に潜った。
なんとかハイドロポンプを避ける事が出来た。

『ギリギリセーフだったな（汗）』

ちよつとホッとした俺。

「それで安心して居る場合じゃないと思うぞ？」

腕組みしながら男が言った。

どういう事だ？

俺の疑問はすぐに解ける事になった。

カメールがヒコザルの掘った穴に近づいて、穴の中にハイドロポ

ンプを放ったからだ！

穴の中はカメールのハイドロポンプで水が溜まっていた。

中々ヒコザルが地面から出てこない……まさか、穴の中で気を失ったのか！？

「ちょっとこれはマズいかな（汗）

カメース、すぐに潜ってヒコザルを……」

『ヒコザル！！』

俺は水が溜まった穴の中へ飛び込んだ！

何処だ……ヒコザル……水が溜まった穴の中に入ってヒコザルを
探す俺。穴は思った以上に深く、中々ヒコザルを見つけれない。

早く……早く見つけないとヒコザルが……
気持ちばかり焦る。

『……あついた！』

俺はようやくヒコザルを見つける事が出来た。
やっぱりヒコザルは気を失っていた。

このままにしてたらヒコザルが死んでしまう！

『すぐにここから出してやるからな！』

俺はヒコザルを抱えて泳ぎ始めた。
だけど、まだこの身体で泳ぎに慣れていないから中々スピードが出ない。もっと速く泳がないとヒコザルが……考える……ブイゼルの身体で一番速く泳げる方法を……

『ブイゼル……ブイゼル……あつそうか尻尾！』

ようやく気がついた俺。ブイゼルは尻尾をスクリューのように回転させて泳ぐ事を。

今までばた足で泳いでいた俺はすぐにばた足を止めて、尻尾を回転させる。

そしたら、さっきとは段違いに速く泳ぐ事が出来た。これなら！

全速力で泳いだ俺はなんとかヒコザルを連れて地上に戻ってきた。
俺はまず先にヒコザルを穴から出して地面に寝かせる。
そのあとで、俺も穴から出る。

『タクミ！』

『ダーリン！』

ピジョットやエーフィ達が駆け寄ってきた。

『やだ……ヒコザル息してないわよ！？』

エーフィがヒコザルを見てそう叫ぶ。
確かにヒコザルは息をしていなかった。

『退いてるエーフィ！』

ヒコザルからエーフィを離れさせ、俺はすぐにヒコザルにマウス
ツウマウスを始める。

ヒコザルの口の中に息を吹きかけたあと、心臓がある箇所を両手
で何回も強く押す。

『息をしろヒコザル……頼むから……息をしてくれ！』

俺はその後モウスツウマウスを繰り返した。

『…………ゲホツゲホツ！？
はぁ…………はぁ…………』

やった！ ヒコザルが息を吹き返した！

『ヒコザル！』

『はぁ…………はぁ…………タクミ…………』

『良かった…………本当に良かった…………』

俺はヒコザルを抱きしめた。

「悪かったな…………」

男とカメールが俺達の所へやって来た。

「まさかこんな事になるとは…………本当にすまなかったなタクミ…………」

男が申し訳なさそうにしながらそう言ってきた。…………あれ？ 今

…………俺の名前を言わなかったか？

「おーい！」

何処からか声が聞こえてきた。

声がした方を見てみるとそこにはナナカマド博士がいた。

「あら？ ナナカマド博士じゃないですか。」

男が親しげな感じで言った。博士と知り合いなのか？

「君は……マサト君じゃないか!？」

博士が凄く驚きながらそう言った。
マサトって言うのかこいつは……

「久しぶりです博士。」

軽く会釈^{えしやく}するマサト。

「いつシンオウに帰ってきたのかね？」

「昨日カントーから帰ってきました。」

それで、博士に挨拶しようと研究所まで行ったんですが……途中でこいつに遭遇^{そうご}しましてね。」

俺を指差しながら言うマサト。

研究所の近くにいたのか……全然気づかなかった（汗）

「このブイゼル、タクミですよね博士？」

マサトがそう聞くと博士は頷いて答えた。

やっぱり……このマサトって奴は俺の事を知ってるみたいだ。
一体何者なんだ？

「まあ立ち話もあれですから研究所に戻りませんか？ タクミに俺

の事を話したいし……タクミ、良いよな？」

馴れ馴れしい奴だな……まあ、こいつの事を知りたいし……良いかな。

俺はマサトに頷いて答えた。

ナナカマド研究所。

マサトと話をする為に、俺はネックレスを首に掛ける。

「それで……あんたは何者なんだ？」

「あらら？ 随分と口が悪くなったなお前（汗）」

まあ良いか、まず俺の名前はマサト……ってもう知ってるよな（汗）俺はお前の親父、タツヒトの知り合いだ。」

親父の！？

「俺もちよつとタツヒトの研究に協力しててな。ブライベートでも仲が良かったんだぜ？」

お前の事を良く話してくれたよ。

俺の自慢の息子だ！

って言つてさ（笑）」

笑いながら話すマサト。親父が……俺の事を良く話してた？

「……信じられないな。

あの親父がそんな事を話すなんてさ。」

「随分とタツヒトを嫌ってるなお前？」

「当たり前だ！俺や母さんを捨てた男だぞ！好きになんかなれるかよ！」

大きな声を出して言った俺。

「……捨てた訳じゃないさ。ただ……お前を助ける為に研究を完成させたかっただけさ。」

悲しそうな表情をして俺にそう言ったマサト。

「親父が俺を助けようとした？」

「そうだ。お前が病気になったって知った時、あいつは凄くショックを受けていた。

その時にはもう人間にポケモンを融合させる実験は成功していたんだが……人間がポケモンになってしまふ事を止める事は出来ていなかった。

あいつは必死に研究したよ。お前にポケモンを融合させても人間のままでいられる方法がないかって……結局その方法は見つけられず、そのままブイゼルをお前に融合させる事になっちまったが……」

腕組みしながら言うマサト。

「……ブイゼルの事は考えなかったのかよ……俺に融合されたブイゼルの事は考えなかったのかよ!?」

「タツヒトだつて考えたさ! お前が可愛がっていたブイゼルだつたんだからな。」

「けど……他にお前を助ける方法がなかったんだよ……タツヒトが大切にしていた……お前を助ける唯一の方法だったんだ……」

……だからって……

「とにかく……お前の親父は決してお前と母親を捨てた訳じゃない。それだけは覚えておいてくれ。」

時間は夜の十時。

俺は夜の海を眺めながら親父の事を考えていた。マサトは……親父は俺達の事を捨てた訳じゃないって言うけど……信じられないっていうのが素直な気持ちだ。

「……はあ……」

『ここにいたかタクミ。』

俺の後ろから声が聞こえてきた。

振り向くと、そこにはピジョットがいた。

「ピジョット……」

『隣良いか？』

「あ、^{ああ}嗚呼……」

ピジョットが俺の隣へ来て、その場で座った。

「……なあピジョット、あいつを……マサトを知ってたのか？」

『……嗚呼。覚えてるかタクミ？』

俺とお前が初めて出会った時の事をさ。』

いきなり何を……まあ良いか。

「当然だろ。俺が四歳になった時の誕生日の日さ。」

その誕生日の日に……親父からプレゼントだって言っつて一つのモンスターボールを渡してくれた。その中に入っていたのがポッポ……今のピジョットだったんだよな。

『実はな……俺をゲットしたのがあのマサトだったんだ。』

えっ そうなの！？

『俺が最初にタクミに会った日……お前はブイゼルを抱いていたんだよな。』

ブイゼルを……って……えっ？

「お前……前にブイゼルの事を質問した時、覚えてないって……」
『あれは嘘だ。実は覚えていた……お前とブイゼルはまるで兄弟みたいに仲が良かったんだ。
見てて羨ましいって思える位にな。
それと……ブイゼルがタクミに融合していた事も知ってた。』

なっ！？

『ブイゼルがいなくなって……タクミは大泣きしてたな……』

懐かしむような表情で言うピジョット。

『タクミが覚えていなかったのは……多分、ブイゼルがいなくなったショックが大きかったからだろう。』

現実として受け入れられなかったんだろ……』

「……何で止めなかったんだ……ブイゼルが俺に融合される事を……」

……」

『……ブイゼルが自分から選んだんだ。』

タクミに融合する事を。』

自分から選んだ……？

「何でそんな事を……」

『タクミはもう解っていると思ってたが……今日、ヒコザルを助けたようにした時どんな気持ちだった？』

首を傾げながらピジョットが聞いてきた。

「どんなって……とにかく助けたいって……死ぬなっと思ったけど……」

『それと同じだよ。』

ブイゼルも……そしてタクミの親父さんも……タクミを助けたいって思っただんだ。』

あの時の俺と……同じ気持ち……

『親父さんがやった行為が間違いであれ……タクミを助けようとした気持ちは本物だ。』

それは理解してやっても良いんじゃないか？』

「……………」

俺は黙ったまま海を見つめる。

『……先に俺は戻ってるぞ。タクミも早く戻って来いよ。』

そう言ってピジョットはマサゴタウンへ戻っていった。

「……………親父……………」

第三十話 父の気持ち（後書き）

あゝ……ぐだぐだだよ（汗）

タクミ

「親父……」

何だかまたスランプになりそうな予感（汗）

タクミ

「……ちよつと黙ってるよ（汗）今真剣に親父の事を考えてんだからよ。」

すみませんm（――）m

第三十一話　フイゼル（前書き）

えゝ今回、主人公であるタクミだけではなく、別のキャラの視点に変わるシーンがあります。

タクミ

「なんでそうしたんだ？」

タクミの視点からだけじゃ伝えるのが今の僕では難しかったからです（汗）

第三十一話　フイゼル

219番道路、海岸。

「……うん……」

砂浜で目を覚ました俺……ずっと親父の事考えてたらいつの間にか寝ちゃってたよ（汗）

もう太陽が昇ってやがるし（汗）

「……起きたか？」

ん？　頭の上の方から声が聞こえてきた？

俺は声が聞こえてきた方に振り向く。

そこにはピジョットがいた。

「全く……いつまで経っても帰って来ないから心配になって来てみたら、ぐっすりと眠ってるんだもんな（汗）」

ちょっと呆れた感じで言うピジョット。

今気がついたけど、ピジョットの奴、自分の身体を枕代わりにして俺を寝かせてくれていたみたいなんだ。

「悪いピジョット（汗）」

ずっと親父の事考えてたらいつの間にか寝ちゃってさ（汗）」

正直に俺は言った。

「……それで、考えは纏まったのか？」

首を傾げながらピジョットが聞いてきた。

「……とりあえず、親父が俺を必死になって助けようとした……その気持ちは理解しようと思う。」

「……ただ……まだ親父を完全に許す事は出来ない……」

親父がポケモンを犠牲にした……その事実には変わらないから……

『まあ、これからゆっくり考えれば良いさ。』

「……このうの、多分すぐには答えが見つからないと思うからさ。』」

ピジョット……

『そろそろ戻ろう。』

『皆待ってるぞ?』

「……そうだな。」

俺とピジョットは皆が待っているマサゴタウンに向かって歩き出した。

「……なあ、ブイゼルはどんな奴だったんだ?」

俺……全く覚えてないからさ……」

マサゴタウンに向かう帰り道の途中、俺はピジョットにブイゼルの事を聞いた。

『あいつか？ そうだなあ……凄く優しい奴で、大人しくて……でもいざという時には頼りになる奴だったな。』

昔を懐かしむような表情で言うピジョット。

「頼りになるって事は……ブイゼルはバトルが強かったのか？」
『ああ嗚呼。』

ブイゼルとは思えないくらいに強かったよ。
タクミは覚えてないかもしれないが……昔、トキワの森にお前と俺、ブイゼルの三人で遊びに行った時があつてな……』

ピジョットは昔の事を俺に話し始めた。

今から十一年前。

まだ俺がポップで、タクミは五歳の小さな男の子だった頃の頃だ。

「パパ、ママ、遊びに行つて来ても良い？」

当時五歳のタクミが父親のタツヒト、母親のクミに遊びに行つて良いか聞いている。

「嗚呼、良いぞ。」

優しい笑顔で言うタツヒト。

「暗くならないうちに帰つてきなさいね？」

クミも優しい表情で言う。

「うん ポップ、ブイゼル。行こう」

「ブイ！」

「ポップー！」

タクミを追いかけて、俺とブイゼルは外へ。

「今日は彼処で遊ぼっか」

無邪気な笑顔をしながらタクミはトキワの森を指差した。

「ただ、トキワの森には野生のポケモンがたくさんいるから行っちゃいけないってタツヒトに言われているんだよな。」

「俺やブイゼルもその事は知ってるから、首を横に振ってダメだって事をアピールしたんだが……」

「トキワの森へしゅっぱーっ」

タクミはそのままトキワの森に向かって走り出した（汗）

『はあ……（汗）あゝなったタクミを止めるのは無理だね（汗）』

少し呆れた感じで言うブイゼル。

『どうする？』

俺はブイゼルに聞く。

『どうするもこうするも……行くしかないよ。』

「タクミが怪我しないように僕達が守ってやらないと。」

両手を腰に当てながらブイゼルはそう言った。

『だよな。』

「ポッポ、ブイゼル！早くおいでよ！」

タクミが俺達を呼んでる。俺達は走ってタクミの所へ向かった。

トキワの森。

トキワの森に着いた俺達は……

「もう良いかい？」

かくれんぼをしていた。ちなみにかくれんぼをしようと言い出したのは当然タクミだ。

正直、こんな広い森の中でかくれんぼはないだろうって思ったが……タクミが決めた事だからしょうがない（汗）

「ブイブイ〜！」

今のはブイゼルが、もう良いよ〜って言ったんだ。ちなみに俺達は同じ場所に隠れている。

お互いに離れるとタクミが見つけるのに時間が掛かっちゃまうからな。

「よ〜し、見つけちゃうぞ〜」

かくれんぼがスタートした。

現代に戻る。

「俺がトキワの森でかくれんぼやろって言ったのか（汗）」

恥ずかしい……（汗）

『あのお前は遊ぶのが好きだったからな。』

それからあまり時間が掛からないうちに、お前は俺達を見つけたんだ。』

そりゃあ見つかりやすいように隠れてたんだからな（汗）

『その後はかくれんぼに飽きたと言って鬼ごっこをやったりとか…
…まあ色々な遊びをやったんだ。』

再びトキワの森。

「さあ次は何して遊ぼうか」

まだまだ元気なタクミ。正直疲れた（汗）

「なあブイゼル、そろそろ家に帰るようにタクミを……」
「……………」

何故かブイゼルは空を見つめていた。

「どうした？」

「……………雲行きが怪しいんだ……………もしかしたら雨が降るかもしれない。」
「……………」

雨？……………確かに雲行きが怪しいな……………

俺がそう思っていた時、空から冷たいものが振ってきた。

「あれ？ 雨？」

次の瞬間、土砂降りの大雨が降り始めた！

『うわっ！？ こりや凄い雨だな！？』

『ポップ！ タクミをあの木の所へ！』

ブイゼルが大きな木を指差した。
彼処なら雨宿りが出来そうだな。

「ブイ、ブイブイ！」

「えっあっち？」

俺達はタクミを木陰に連れて行つた。
あゝ俺の翼がびしょ濡れだよ（汗）
タクミも服がびしょ濡れだし（汗）

ゴロゴロ……

雷まで鳴り始めたぞおい（汗）

「…………あれ？ あれはなんだろう？」

急にタクミが木の上を見つめながらそんな事を呟いた。
一体何を見てるんだ？

俺とブイゼルはタクミが見つめる先を見てみた……

『…………ブイゼル、これはマズくないか？』

『……かなりマズいね（汗）』

俺達は焦り始めた。

何故なら、俺達が見ている先にはたくさんのコクーンがいたからだ。

「あれもポケモンかな？

おい！」

タクミがコクーン達に向かって叫んだ。

『ダメだ！？』

俺とブイゼルは慌ててタクミの口を塞ぐ。

今コクーン達を刺激すると、スピアーに進化して襲いかかってくるかもしれない……って！？

『ブイゼル、気のせいかなあ………なんだかコクーン達の身体が光ってるみたいなんだが（汗）』

『気のせいじゃないよ（汗）進化が始まったんだ！』

俺達の嫌な予感が的中したんだ（汗）

コクーン達が一斉に進化を始めたんだ！

どんどんコクーン達の姿が変わっていく。

そして……遂にコクーン達全員がスピアーに進化してしまった（汗）

『逃げるぞ！？』

『ちよっと待って！』

何故かブイゼルが止める。

「な、何でだよ!？」

「タクミを良く見て。」

ブイゼルに言われ、俺はタクミを見てみた。

……タクミは恐怖からか、身体が震えていた。

「怖がっちゃって、タクミは今動ける状態じゃない。」

「だからって、あれだけの数のスピアーと戦える訳がないだろ!？」

スピアーの数は軽く二十匹を超えていたんだ。

「僕がやるよ。」

ポツポはタクミと一緒にいてあげて。」

ブイゼルがスピアー達と戦うと言い出した。

「えっちよつと!？」

「僕なら大丈夫だから。」

タクミを任せたよポツポ!」

そう言っブイゼルはスピアーに向かって行った!

「君達の相手はこの僕だ! 水の波動!」

ブイゼルはスピアーの群れに向かって水の波動を放った!

水の波動はスピアー達に直撃したんだが……あまり効いてないみたいだ。それどころか、ただスピアー達を怒らせただけで、スピアー

ーの群れが一斉にブイゼルに向かって行っただ！

『そうだ！ 僕だけに向かって来るんだ！』

そう言ってブイゼルは巨木から離れて行く。

当然スピアー達もブイゼルを追う為巨木から離れた。

おかげで俺とタクミの周りにはスピアーはいなくなっていた。

ある程度、巨木から離れたブイゼルは走るのを止めた。
その間にスピアー達がブイゼルに一斉に突っ込んで行った！

『これで決める、吹雪！』

ギリギリまで引き付けてからブイゼルは強力な吹雪を放った！
冷たい冷気を受けたスピアー達はあっという間に凍りついてしま
った！

『す、すげー（汗）』

正直滅茶苦茶ビックリした俺。

現在、マサゴタウン。

「スピアーの群れを吹雪の一発で……ブイゼルって本当に強かったんだ。」

スピアーの群れを一発で倒すなんて、相当レベルが高くないと出来ない事だからな。

『あいつはマジで強かった……俺の憧れでもあったんだ。』

憧れか……

「あつタクミ君！」

その時、不意に誰かに声を掛けられた。

声が聞こえた方に振り向くとそこにはコウキがいた。

……何か、すげー嬉しそうな表情をしてるな。

何かあったのか？

「ようコウキ。何か良い事でもあったのか？」

「うん。アイがね、元の人間に戻るかもしれない事が解ったんだ！」

嬉しそうにコウキが言った。

アイが人間に!?

「本当か!？」

「本当だ。」

また別の方から声が聞こえてきた。

声が聞こえた方を見てみるとそこにはマサトがいた。

「一体どういう事なんだ？」

「簡単な事さ。お前みたいはまだあの子の寿命が終わってないからさ。」

ナナカマド博士の薬が完成すれば、あの子は人間に戻る。」

腕組みしながらマサトが言った。

「あとついでに説明しとくが、あの子がポケモンになっても記憶を失わなかったのは、あの子の中にすでにポケモンの遺伝子が含まれていたから……身体への負担が少なかったからだ。」

なるほど……

「さて、そんじゃ行くかタクミ。」

……はい？

「行くって何処に？」

「俺の家だ。タツヒトに……お前に会ったら渡してくれって言われた物があるから、それを渡したい。」

親父から俺に？

「……まあ、今はギンガ団とネオ・ギンガ団の情報はないし……行っても良いが、移動手段は？」

「もちろん……」

マサトがピジヨットを見ている。

「……ピジヨットに乗って行くつもりか？」
「正解」

やっぱりな（汗）

「はあ……しゃあねえな（汗）ピジヨット、良いか？」
『俺は別に構わないぞ。』

そう言っつて、ピジヨットは姿勢を低くしてマサトを乗せる準備をした。

「っで、あんたの家は何処にあるんだ？」
「ノモセシティだ。」

ノモセシティか。

「解った。ピジヨット、頼むぜ。」
『了解だ！』

ピジヨットは俺とマサトを乗せたまま、空へと上昇。
ノモセシティへ向かって出発した。

第三十一話　フイゼル（後書き）

やっと書けた（汗）

タクミストーリーの時は書くのに一苦労だよ（汗）

ピジョット

「もうちよい頑張れよ（汗）」

はい（汗）

第三十二話 異変（前書き）

マサトが言っていた親父から預かった物……一体何なんだ？

第三十二話 異変

ノモセシテイ、マサトの家。

「あれ〜？ 何処に入れたんだっけかな〜？」

マサトの家に来ている俺。親父から受け取った物を俺に渡したいと言われて、ここに来た訳だが……その渡したい物がなかなか見つからないみたいなんだ。

てか、そういう大事な物を何処に仕舞ったかくらい覚えとけよ（汗）

「……おっ！ あったあつた！」

やっと見つけたみたいだな？

「これがタツヒトから預かった物だタクミ。」

俺はマサトからある物を手渡された。

これは……腕輪か？

「何に使うかは聞いてないが……まあ、多分お前へのプレゼントだろ。」

腕組みしながら言うマサト。

親父が俺にプレゼント……か……でも何で腕輪なんだよ？

……見た感じ、ただの銀色の腕輪だし……特に仕掛けがあるようには見えない……

「^は埋めてみるよ。

せつかくのタツヒトからのプレゼントだろ？」

腕組みしながら言うマサト。

「えゝ別に今じゃなくてもいいだろ？」

腕輪とかいつでも埋める事出来るし……

「良いから埋めてみなって！ なんなら、俺が埋めてやろうか？」

何でそうなるんだよ（汗）

「解った、埋めるよ埋めれば良いんだろ！」

しょうがないから俺は左腕に腕輪を埋める。

意外にも腕輪は俺の腕にぴったりと埋める事が出来た。

「似合ってるぞ、タクミ。」

少し笑みを見せながらマサトが言う。

「そりゃどうも。」

右手で頭を掻^かきながら俺は言った。

さて、これからどうするか……ギンガ団やネオ・ギンガ団を捜そうにも何も情報は無いし……そういえば、マキシさんどうしてるだろ？

ハンサムは無事に脱出させたって言ってたけど……ちょっと様子を見に行ってくるか。

「ちょっと出掛けてくる。」

俺はそう言ってマサトの家から出ようとした。

「ちょっと待て、出掛けるって何処にだよ?」

マサトが俺を呼び止めて、そう聞いてきた。

「ノモセジムだよ。」

「ノモセジムに?」

何でノモセジムに行くんだ?」

そういえば、マサトは今までに起きた事をあまり詳しく知らないんだっとな。

「それは……」

俺は今までに起きた事をマサトに説明した。

「……なるほどな。」

解ったよ。あっそうだ、お前のポケモン預かっておこうか? 街中をモンスターボールを持ったブイゼルがうろついてたらちょっと変だろ?」

腕組みしながらマサトがそう言った。

……まあ、確かに街中をモンスターボール持ったブイゼルがうろついてたら変だよな（汗）

「じゃあ、預けて良いか？」

「良いぜ。」

俺はピジョット達が入ったモンスターボールをマサトに預けた。

「あと、お前が野生のブイゼルと間違えられないようにこれをやるよ。」

そう言っただけでマサトが、自分のバッグから赤いスカーフを取り出して、俺の首に巻いてくれた。

「これなら、野生のブイゼルには見られないだろ。結構似合ってるぜ。」

笑顔でマサトがそう言ってくれた。

「サンキュー。じゃあ、行ってくる。」

俺はマサトの家を出て、ノモセジムに向かった。

ノモセジム、出入り口前。

ここに来るのも久しぶりだなあ……マキシさん、いるかな？
俺はマキシさんがいるかどうか確認する為、ジムの中に入ろうとした……んだが、いきなりジムのドアが勢い良く開いた！

「ぐはっ！？」

いきなりだったんで、俺はドアに思いっきり顔をぶつけた。
そして尻餅をつく。

……痛いんですけど（汗）両手で鼻を押さえる俺。

「ん？ おゝタクミ君じゃないか！」

このやたらと元気が良い声は……俺は両手で鼻を押さえながら見上げる。そこには元気そうなマキシさんがいた。

「良かった……無事だったんですねマキシさん。」
「もちろんだ。」

タクミ君、君も無事で何よりだ。」

笑顔でマキシさんはそう言ってくれた。

「……ところで、何故鼻を押さえているんだい？」

「あなたのせいですよ（汗）」

ドアを勢い良く開けたりするもんだから（汗）

「見つけたぜー！」

いきなり何処からか声が聞こえてきた。

俺は声がした方に振り向く。

「なっヒョウガ!?」

そこにいたのはポケモンハンターのヒョウガだった！
なんであいつがここにいるんだよ!?

「へっお前がここににいるという情報、あの男が言ってた事は本当だったな。ジジイからの依頼だ、てめえをとっ捕まえる！
出てきな、ユキノオー！
ユキメノコ！」

ヒョウガがモンスターボールからユキノオーとユキメノコを出した。

「くっ頼むぞマニユ……」

俺はマニユーラが入ったモンスターボールを取ろうとした。
ってしまった……今モンスターボールはマサトに預けているんだ
った!?

「タクミ君は下がりましたまえ！ 戦えフローゼル！」

ギャラドス！」

マキシさんがモンスターボールからギャラドスとフローゼルを出した。

「俺様の邪魔をしようってかオツサン？

言っとくが、ジムリーダークラスの實力じゃあ俺様は倒せないぜ？」

マキシさんを挑発するように言いヒョウガ。

「やってみなければ解らんさ！ ギャラドス、竜巻！ フローゼルはビルドアップだ！」

マキシさんのギャラドスが巨大な竜巻を作り出してユキノオー達に放った！ その間にマキシさんのフローゼルはビルドアップで自分の攻撃力と防御力を上げた。

「ハッ！ 楽勝だなその程度の攻撃！

ユキメノコ、吹雪だ！」

ユキメノコが強烈な吹雪を放った！

ギャラドスが放った竜巻をいともたやすく吹き飛ばしてしまった！ 相変わらずとんでもない吹雪だ……

「隙ありだ！ フローゼル、アクアジェット！」

フローゼルが身体を水で覆い、物凄いスピードでユキメノコに体当たりした！

ユキメノコは吹き飛ばされた！

「ほう、俺様のユキメノコに攻撃を当てるたあ……意外にやるじゃねえのよ！　だがよ、その程度の攻撃じゃあ俺様のユキメノコは倒せねえぜ？」

余裕の表情で言うヒョウガ。

その後、何事もなかったかのような涼しい顔をしてユキメノコが戻ってきた。

あのユキメノコ、防御力もなかなか高いみたいだな……

「少し本気を出すか。
ユキノオー、やれ！」

ヒョウガがそう言った刹那、ユキノオーの身体から凄まじいブリザードが発生した！

そのブリザードは、ユキノオー、ユキメノコ、ギャラドス、フローゼル達を覆い隠してしまった！　真っ白で何も見えない……中は一体どうなってるんだ？

それからしばらくしてブリザードが収まった。

「なっ！？　フローゼル！？
ギャラドス！？」

ブリザードが収まった時、フローゼルとギャラドスが凍り漬けになっっていたんだ！

「デス・ブリザード……この攻撃で仕留められなかった相手はいねえんだよ！ さあ、大人しく捕まってもらおうか！」

ヒョウガ達がゆっくりと俺に近づいてくる……

「タクミ君には近寄らせん！ 行け、又オ……」

「邪魔なんだよオッサン！ ユキノオー、ウッドハンマー！」

モンスターボールからポケモンを出そうとしたマキシさんを、ヒョウガのユキノオーがウッドハンマーでマキシさんを吹き飛ばしてしまった！

「マキシさん！？」

マキシさんは今の一撃で気を失ってしまった！

「邪魔者はいなくなっ たな……」

くっ……どうする？

俺が使える技はいまだに水鉄砲のみ……この技だけでどうにか出来る相手じゃない……だが、やるしかないんだ！

俺は戦闘体勢に入る。

「やるってか？

良いねえ……獲物には抵抗してもらわねえと面白くない！

ユキメノコ、シャドーボールだ！」

ユキメノコが俺に向かってシャドーボールを放ってきた！俺はそれをジャンプして回避する！

「水鉄砲おおお!!」

俺は最大パワーで水鉄砲を放った!

「影分身で避ける!」

ユキメノコは影分身で無数の幻影を作り出した! 俺の水鉄砲は本体ではなく幻影に直撃した。

「くっ本物はどれだ!?!」

「てめえの後ろだバカ!」

ヒョウガが笑いながら言った。

俺は慌てて振り向く。

そこにはシャドーボールを放とうとしているユキメノコが……

「終わりだ!」

「ぐああああ!?!」

シャドーボールを避ける事が出来なかった俺はまともに受け、地面に吹き飛ばされた!

「くっ……」

「遊びは終わりだ。

ユキノオー、冷凍ビームでこいつを凍り漬けにしろ。」

ユキノオーが俺にゆっくりと近づき、冷凍ビームを放とうとエネルギーを集め始めた。

……くそ……こんなところで……俺は……

『……タクミ……タクミは……僕が守るから……』

えっ？ 今……頭の中で声が……何だ……急に……意識……が……

…

第三十三話　ブイゼルVSヒョウガ！（前書き）

更新が遅くなり、大変申し訳ありませんでした（汗）

ブイゼル

「次は気をつけて下さいよ？」

は、はい（汗）

えゝ今回はタクミではなく彼、ブイゼルの視点でやらせていただきました。

ブイゼル

「では、どうぞ！」

僕のセリフ取らないでよ（汗）

第三十三話　フイゼルVSヒョウガ！

「やれ、ユキノオー！」

ヒョウガっていうトレーナーがユキノオーにそう指示すると、ユキノオーは僕に向かって冷凍ビームを放ってきた。だけど、止まって見えるんだよね。

「高速移動！」

僕は高速移動で素早く動き、ユキノオーの冷凍ビームを回避した。そして一旦彼らから離れる。

「ほう、まだ動けたとはな？　だが、足掻^{あが}けば足掻く程てめえは苦しむ事になるんだぜ？」

僕を挑発するような口調で言うヒョウガ。

「……本当に苦しむ事になるか……試してみるかい？」

僕もヒョウガを挑発するような口調で言う。

「やってやるぜ、ユキメノコ！　シャドーボールだ！」

ユキメノコが黒いエネルギー弾を一つ、僕に向けて放ってきた。これくらいのシャドーボールなら……

「アイアンテール！」

僕は尻尾を鋼のように硬くする。

そしてシャドーボールをアイアンテールで攻撃、真っ二つに切断した。

「ならユキノオー！
ウッドハンマーだ！」

ユキノオーが僕に接近してきて、右手をハンマーのように振り下ろしてきて僕を攻撃しようとした。だけど、攻撃スピードが遅い。僕は高速移動で素早く動き、この攻撃を回避、そしてユキノオーの背後に回り込む。

「アイアンテール！」

僕は軽くジャンプして、アイアンテールでユキノオーの頭部を攻撃した。ユキノオーは氷タイプを持っているから、鋼タイプの技、アイアンテールは効果抜群。

結構効いたみたいで、ユキノオーは蹠^{よろ}跟めいている。

これは、もう一発攻撃を当てれば倒れるかも……そう思った僕はもう一度アイアンテールを使おうと構える。

「くっユキメノコ、冷凍ビームだ！」

やっぱり攻撃を許してくれる訳がないか。

ユキメノコが冷凍ビームを僕に向けて放ってきた。

「高速移動！」

僕はまた高速移動で素早く動き、冷凍ビームを回避、一旦彼らから離れる。

「……そろそろ終わらせるよ、雨乞い！」

僕はエネルギー弾を作り出して、それを空に向けて放った。
そしてそのエネルギー弾は弾けて、雲の中に。
その雲は雨雲となり、雨を降らせた。

「準備完了つと……こっからは一気にやらせてもらうよ、アクアジエツト！」

僕は身体に水を纏まとわせて、全速力でユキメノコに向かって突っ込んだ。

「ユキメノコ、シャドーボールで返り討ちに……」

「遅いよ！」

僕はヒョウガがユキメノコに指示するよりも先にアクアジェットをユキメノコに直撃させた。

この一撃を受けたユキメノコは吹き飛んでいつて倒れた。
ユキメノコは目を回している。

「は、速い……」

少し驚いたような表情をしているヒョウガ。

僕が速いのは当然だよ。僕の特徴、すすいのおかげで、雨が降つてるといつもよりも倍のスピードで動く事が出来るんだから。
それに、雨が降つてると水タイプの技の威力が上がるからね。

「言っただしょ？」

「一気にやらせてもらうつてね」

「てめえ……調子に乗んなよ！ ユキノオー、吹雪でこいつを凍り漬けにしろ！」

怒ったヒョウガがユキノオーにそう指示すると、ユキノオーが僕に向けて吹雪を放った。

その吹雪、利用させてもらうよ。

「アクアジェット！」

僕は吹雪に向かってアクアジェットで突っ込んだ。水を纏った状態で吹雪に突っ込んだ為、僕はあつという間に凍り漬けになった。だけど、これは僕の狙い通り。

かなり勢いをつけて突っ込んだから凍り漬けになってもそのままユキノオーに向かっていく。

これに名前を付けるなら……氷のアクアジェットだね。

「なっ！？ 避けるユキノオー！」

ヒョウガが慌てて指示してるみたいだけでもう遅いよ。

僕の氷のアクアジェットはユキノオーに直撃、ユキノオーは吹き飛んでいった。

そして僕を包んでいた氷はユキノオーに直撃した時の衝撃で砕け散った。おかげで氷から出られた僕。

僕は吹き飛んでいったユキノオーを確認する為に近寄る。

そしたら、ユキノオーは目を回していた。

どうやら戦闘不能だね。

「くっ戻れユキノオー、ユキメノコ」

悔しそうな表情をしながらヒョウガが二匹をモンスターボールに戻した。

「どう？ まだやる気かい？」

腕組みしながら僕はヒョウガに言った。

「ちつ……今回は引き下がってやる……だが、お前の動きは見切った！

次はこうはいかないからな！ 覚悟しとけ！」

そう言ってヒョウガは近くに用意してあった車に乗り込み、走り去ってしまった。

「……ふう……」

久しぶりのバトルだったからちょっと疲れたよ……

「……うう……」

えっと……確かマキシさんだったかな……その人が意識を取り戻したみたい。

僕はマキシさんに近寄る。

「大丈夫ですか？」

「……あ、嗚呼……タクミ君があいつを追い返したのか？」

ヒョウガがさっきまでいた所を見つめながら、マキシさんがそう

言った。そっか、マキシさんは僕の事タクミだと思ってるんだね。

「あいつは僕が追い返しました。
ちなみに、僕はタクミじゃないですよ」

正直に僕は言った。
嘘を言ってもしょうがないからね。

「タクミ君じゃない？
それはどういう事だ？」

不思議そうな表情をしながらマキシさんが言った。まあ当然の反応だね。

「話せば長いんですけど……でもその前に……」

僕は凍り漬けにされているフローゼルとギヤラドスの所へ向かった。

「すぐにこの氷から出してあげるからね……」

僕は右手に力を入れる。

「岩砕き！」

まず僕は思いっきり右手でフローゼルを包んでいる氷を殴った。
殴った箇所からどんどん氷に罅ひびが入っていく。

「もう一発！」

僕はもう一度氷を殴る。すると、氷は完全に砕け散った。氷の呪縛から解放されたフローゼルはその場に倒れた。寒そうに震えている。

「次はギャラドスだね」

僕はフローゼルの時と同じように岩砕きで氷を攻撃して氷を砕き。ギャラドスを解放してあげた。

「マキシさん、まずはこの二匹を治療してあげてください。僕の事はその後で説明しますから」

「わ、解った」

マキシさんは二匹をモンスターボールに戻し、そのままポケモンセンターに向かっていった。

「おゝい！」

あの人は……確かマサトさんだったね。マキシさんと擦れ違いでマサトさんがやって来た。

「何か騒がしかったから来たんだが……一体何があったんだタクミ？」

マサトさんが質問してきた。

「あゝ大丈夫、問題は解決しましたから。それと、僕はタクミじゃないですよ」

「……タクミじゃない？
何を言ってるんだ？」

不思議そうな表情をしながらマサトさんが言った。さっきのマキシさんと同じ反応だね。

「僕は、タクミと融合したブイゼルですよ」

僕は正直に言った。

「なっ！？ タクミと融合したブイゼルだ！？
な、何故……そ、それよりタクミは、タクミはどうした！？」

凄く心配そうな表情をしながら聞いてきた。

「落ち着いてくださいマサトさん。
タクミは無事です、今は眠ってるだけですから」

僕は今のタクミの状態を説明した。

「そ、そうなのか……しかし、何故ブイゼルの意識が……」

腕組みしながら考え込んでいるマサトさん。

「それはこの腕輪のおかげですよ」

僕は左腕に填め^はられている腕輪をマサトさんに見せながらそう言
った。

「この腕輪、タクミのお父さんが作ってくれた道具で、これを填め

ている時だけ僕はタクミと入れ替わる事が出来るんです。人間で言う、二重人格に似たような感じですかね」

僕は腕輪の事を説明した。

「そういう道具だったのか……しかし、ブイゼルにはずいぶん賢いな？」

また不思議そうな表情をするマサトさん。

「そりゃあ今までタクミが学習した事を僕も学習してますからね。それに、タクミが見て感じた事なんかも……融合した時からずっと一緒に感じてましたから……」

「ちょっと待て！

融合した時からって……まさかお前、今までずっと意識があったのか！？」

驚いた表情をしながらマサトさんが聞いてきた。僕はそれに頷いて答えた。

「タクミと融合してからの八年間……僕はずっと意識がありました。タクミが僕の事を忘れてしまったのは悲しかったけど……でも、タクミが生きていてくれれば僕はそれで良かったんです」

タクミは僕にとって、とっても大切な存在だからね……

「お前……」

「あっそうだ、マサトさんにちょっとお願いがあるんですけど……」

良いですか？」

僕はマサトさんに聞いてみた。

「別に構わないが……お願いってなんだ？」

首を傾げながらマサトさんが聞いてきた。

「今、この腕輪を付けた状態なら精神世界でタクミと話せる事が出来るんです。

でもその間、現実世界の方では眠った状態になって無防備になっちゃうんです……だから、僕とタクミが話してる間だけ、マサトさんに守ってもらいたいんです」

僕とタクミを守ってもらうようマサトさんに頼んでみた。

「それくらいなら全然OKだ！ 久しぶりに話してきな」

優しい笑顔でマサトさんは了承してくれた。

「ありがとうマサトさん！」

僕は一言そう言った後、目を閉じた。

タクミと話すの……久しぶりだなあ……僕、いっぱい話したい事……あるんだよね……

第三十三話　ブイゼルVSヒョウガ！（後書き）

ブイゼル

「ふう〜……久しぶりにバトルしたから疲れてしまいました（汗）」

お疲れさんブイゼル。

タクミ

「って俺はタクミだったの！」

あっ入れ替わってる（汗）

タクミ

「ん？　入れ替わってるってどういう事だ？」

あゝ君は気にしないで良いよ。

次話でどという事が君にも解るからさ。

ブイゼル

「タクミと話すの楽しみだなあ！」

……また入れ替わって（汗）

第三十四話 タクミとブイゼル（前書き）

タクミ

「更新遅いぞ！」

マジでごめん（汗）

ちょっと仕事が忙しかったからさ（汗）

第三十四話 タクミとバイゼル

ここは……何処だ？

俺は周りには物とかが全く無く、真っ白な不思議な空間にいた。

えっと……確か、ヒョウガのポケモンとバトルして、それで俺はやられて……ユキノオーの冷凍ビームを受けそうになったんだよね？

だけど、その時に急に眠くなって……

「……タクミ」

突然誰かの声が聞こえてきた……誰だ？

俺は声が出た方に振り向く。そこには、首の周りに浮き袋のような物があり、オレンジ色のイタチの様な姿をしたポケモン……バイゼルがいた。

何でだろ……このバイゼル……凄く懐かしい感じがする……まさか、以前ピジョットが話してくれたあのバイゼルか？

「タクミ……会いたかったよ！」

いきなりバイゼルは俺に飛びついて、抱きしめてきた。

「お前……俺に融合したバイゼル……なのか？」

俺がそう聞くと、バイゼルは頷いて答えた。

「こうしてタクミに会えるの……八年ぶりだよ……」

バイゼルの目から涙が溢れている。

「……ごめん、ブイゼル……俺、お前の事何も覚えてないんだ……」

「知ってるよ……融合したその時から僕はタクミが経験した事、感じた事全部、僕も一緒に感じてたからね」

優しい笑顔でブイゼルはそう言った。

「……なあ、ブイゼル……聞いても良いか？」

「何タクミ？」

首を傾げるブイゼル。

「……ブイゼルは……俺と融合する事を自分から選んだって、ピジヨットから聞いたんだが……何で、自分から俺と融合する事を選んだんだ？」

「それはピジヨットが言ってたでしょ？」

僕はタクミを助けたいって思った……ただそれだけだよ」

「だけど、自分が犠牲になっちまうんだぞ？」

怖くなかったのかよ？」

俺はまた質問する。

「……タクミは僕にとって大切な友達で……掛け替えのない大切な存在。

そんなタクミを助ける事が出来るなら、僕は何だってする。だから怖くなかったよ」

……強いんだな、ブイゼルは……俺なんかよりもずっと……

「タクミ、僕……ずっとタクミに言いたい事があったんだ」

言いたい事？

「何だ？」

「……まず、これを見てほしいんだ」

ブイゼルがそう言うと、突然俺とブイゼルを眩い光が包んだんだ。眩しくて目を開けてられない……しばらくしてようやく光が消えた。

俺はゆっくりと目を開ける。

「えっ……ここって」

俺は驚いた。

さっきまで真っ白だった世界にいた筈なのに、今俺達がいるのは俺の実家。トキワシティの家の中だったんだ。

「ここはタクミと僕と一緒に過ごした、タクミの家の中。

ここは精神世界だからね。タクミの記憶からこの部屋を作り出したんだ」

……なんだか良く解らないが凄いな……にしても懐かしいなあ。ポケモントレーナーとして旅に出て以来、一度も帰ってなかったからな……

「……ブ、ブイゼルは……ど、何処……？」

ん、子供の泣き声？

俺は声が聞こえた方に振り向く。

「あれってまさか……」

そこにいたのは両手で涙を拭っている子供がいた。

「あれは八歳の時のタクミだよ。」

これは、僕がタクミに融合したその次の日のタクミの記憶なんだ」

ブイゼルが説明してくれた。

やっぱり、この子供は昔の俺か……

「……この時のタクミは、僕が突然いなくなった事が凄くショックで……泣いてたんだ……」

……そういえば……凄く泣いた記憶があるな……何で泣いたのか、覚えてなかったけど……ブイゼルがいなくなったから泣いてたのか

……

「……ごめんね」

いきなりブイゼルが頭を下げた謝ってきた。

「急に何だよ？」

「……突然いなくなってごめんね……」

また涙を流すブイゼル……ピジョットが言っていた通り、本当に優

しい奴なんだな……

「……気にすんなよ……俺を助ける為に融合してくれたんだろ？
……ありがとうな」

俺はブイゼルを優しく抱きしめる。

「タクミ……」

「お前のおかげで今の俺がいる……お前が繋いでくれたこの命を無駄にしない為に、長生きしなきゃな」

思った事を俺は正直に言う。

そう言った時、突然大きな振動が。

「な、なんだ？ 地震か？」

「いや、この時に地震は起きなかった……現実世界で何かが起きてるんだよ！」

現実世界で？

「タクミ、一度戻るよ！」

ブイゼルが俺の手を握る。すると、握られた手から優しい光が発せられ、その光は俺達を包み込んだ。

第三十四話 タクミとバイゼル（後書き）

タクミ

「更新遅いうえに短いなあい!？」

本当にごめん（汗）

実はネタが思いつかなかったもんですから（汗）

バイゼル

「スランプですか？」

アスカやバクフーンはすんなり思いつくんだけど、タクミのがね…
…（汗）

タクミ

「なんだよそれ（汗）」

バイゼル

「まあまあ（汗）」

とにかく頑張るから許して（汗）

第三十五話 マサトの実力

「……………うん……………」

ここは……………現実世界か？ 俺はゆっくりと目を開ける。
何か……………朝早くに起きたような感じた……………ちよっとボーっとする

……………

「ミサイル針！」

「火炎放射！」

だけど、技と技がぶつかり合った衝撃音で俺はすぐに目が覚める。
俺は衝撃音が聞こえた方に振り向く。
そこにはマサトが自分のポケモンを出してバトルしてる姿が。
相手は誰だ？ 俺はマサトと対峙している相手を確認する。

「なっサキ！？」

俺は思わず声を上げる。マサトと戦っているのはいつもブルートの側にいるサキだったんだ。

「ん？ よう、やっと起きたか」

俺に気づいたマサトが呑気^{のんき}にそう言った。

「おい、これどういう状況だよ？」

俺はマサトに質問した。

「その口調……タクミだな？ 見ての通り、このお嬢ちゃんとバトルしてる最中だ」

サキの事を指差しながら言うマサト。

マサトのポケモンはゴウカザルでサキのはドラピオンか……

「お嬢ちゃん……ですって？ ム力つくわねあんた！」

余程ム力ついたのか、マサトを睨みつけながら怒鳴るサキ。
「ってか、サキ怖っ！？」

「おゝ怖い怖い。」

あんまり怒ると、可愛い顔が台無しだぜ？」

サキを挑発するような口調で言うマサト。

「くっドラピオン、さっさとそいつを倒すのよ！
破壊光線！」

怒ったサキがドラピオンにそう指示すると、ドラピオンはゴウカザルに向けて強力な破壊光線を放った。

「ガザ、避けるんだ」

マサトがゴウカザル、ガザにそう指示するとガザは破壊光線を素早い身の熟^{こな}しで回避した。そして一気にドラピオンに接近していく。

「破壊光線は使った後しばらく反動で動けなくなる……技の選択を間違えたなお嬢ちゃん。」

ガザ、最大パワーでブラストバーンだ！」

マサトの指示を聞いたガザは、口から強力な炎の塊を吐き出し、ドラピオンに直撃させた。

ドラピオンは吹き飛ばされ近くにあつた岩に激突、さらにブラストバーンの炎に身体を包まれた……凄……あれが、炎タイプ最強の技ブラストバーン……

「くっ 戻れドラピオン！」

サキは悔しそうな表情をしながらドラピオンをモンスターボールに戻した。

「降参かい？」

腕組みをして余裕といった表情でマサトはサキに聞いている。

「調子に乗るな！ 行け、ゲンガー！」

サキはモンスターボールを投げる。

投げられたモンスターボールは開かれ、中からは深い紫色の体で、寸胴ずんどうな人の形をしているポケモン、ゲンガーが現れた。

「ゲンガーねえ…… 戻れガザ」

マサトはガザをモンスターボールに戻した。

今のは良い判断だな……ブラストバーンは破壊光線と同じで、使ったらしばらく反動で動けなくなる技、動けないガザを戻して別のポケモンに代える……マサトはトレーナーとしてかなりの実力者だな。

「次はお前だ、ライ！」

マサトは別のモンスターボールを取り出し、それを投げる。
モンスターボールは開かれ、中からは黄色い体毛で覆われ、特徴的なギザギザの尻尾、そして頬ほおに電気袋を持ったネズミのようなポケモン、ピカチュウが出てきた。あのライってピカチュウ……良い毛並みだ……良く育てられてるな。

「ゲンガー、シャドーボールよ！」

サキの指示を聞いて、ゲンガーは両手を使って黒いエネルギー弾を作り出し、ピカチュウのライに向けて放った。

「ライ、高速移動で避けるんだ！」

ライはシャドーボールが当たる寸前で高速移動を使って素早く動き回避した。

そしてゲンガーの背後に回り込む。

あのライってピカチュウ、速い！

「アイアンテール！」

ライの尻尾が光り輝きだした。

そしてライはジャンプして、ゲンガーの背中を尻尾で思いっきり叩きつけた。アイアンテールを受けたゲンガーは吹き飛ばされた。

「悪の波動よ！」

サキの指示を受けたゲンガーは何とか体勢を立て直し、ライに向

けて両手を翳す。

刹那、ゲンガーの両手から黒いエネルギー波が放たれ、螺旋状に回転しながらライに向かっていく。

「10万ボルト！」

ライは身体中から強力な電撃を放出して悪の波動にぶつめた。二つの技がぶつかり合った瞬間大きな爆発が発生した。パワーは互角……だけど、凄い威力だな……

「そろそろ決めるか。」

ライ、高速移動からボルテッカー！」

ライは高速移動で素早く動き、電撃を放出しながらゲンガーに向かっていく。放出された電撃はまるで鎧のようになり、ライの身体を覆っている。

「ゲンガー、シャドー……」

「遅い！」

サキが技の指示を出そうとした時にはもうライはゲンガーの目の前まで来ていた。

そしてライはゲンガーにボルテッカーを直撃させた。ボルテッカーを受けたゲンガーは吹き飛ばされ倒れる。

「くっ……戻りなさいゲンガー」

戦闘不能になったゲンガーをサキは悔しそうな表情を浮かべなが

らモンスターボールに戻す。

あのサキを圧倒するなんて……

「まだやるかい？ お嬢ちゃん」

腕組みしながらマサトはサキに聞いた。

「……今回は引き下がるわ……だけど、次はこうはいかないわ。必ずその子を手に入れるから覚悟しなさい！」

サキは俺の事を指差しながら怒鳴る……って俺！？ 俺を攫さらいに来たのか！？

「ドンカラス！」

サキはモンスターボールから、胸部がせり出し、首筋から胸元にかけて白いあご鬚ひげを思わせる毛に覆われ、尻尾以外の全身が黒い羽毛に覆われており、黒いテングロンハットを被ったような形状の頭部を持つカラスのようなポケモン、ドンカラスを出した。

そしてサキはドンカラスの足に掴まり、ドンカラスと一緒に空へと飛び去ってしまった。

「……行っただか……タクミ、身体は大丈夫か？」

「あ、鳴呼ああ、大丈夫……」

あ、あれ？ 何だ……身体が思うように動かないぞ？ それに……この身体に感じる疲労感は何だ？

『……ごめんタクミ』

えっ？ 今頭の中で声が……ブイゼルか？

『うん。ヒヨウガって奴とバトルした時、僕全力でやっちゃって……タクミの体力を超える動きをしちゃったから……』

それか……こんなに身体がだるいの……

『ごめんね……』

謝んなよ。ブイゼルは俺を助けようとしてヒヨウガとバトルしてくれたんだろ？ ブイゼルは悪くないさ。

「おい、何ボーっとしてんだ？ 本当に大丈夫か？」

俺とブイゼルが話してる時、不意にマサトが話し掛けてきた。

「あ、悪い……何か身体がだるくて思うように動けないみたい……」

苦笑いしながら俺はそう言った。

「おいおい……しゃあないな」

「おわっ！？」

いきなりマサトが俺を抱きかかえた。

「や、止めるよ……恥ずかしいだろ……」

「動けないんだろ？」

文句言うな。それに、この街から離れた方が良さそうだからな。
さっきのサキっていうお嬢ちゃん、あの口振りだとまた来そうだからな」

……確かに……でも、何でサキやヒヨウガに俺がここにいる事が解ったんだ？ ……って、今考えても解んねえよな……

「離れるのは良いが……何処に行くんだよ？」

首を傾げながら俺はマサトに聞いた。

「さあな、とりあえず東に行く」

……無計画かよ……

第三十五話 マサトの実力（後書き）

タクミ

「マサト何か強くね？」

そりゃそれなりに実力は持たせておかないとね。

バイゼル

「ところで、何でサキやヒョウガは僕達の居場所が解ったんですか？」

タクミ

「俺も気になる」

知りたい？

バイゼル

「もちろんですよ」

タクミ

「早く教えるよ」

それは……そのうち解るよ多分（笑）

タクミ

「……言つと思つたよ（汗）」

第三十六話 休息（前書き）

タクミ

「やっと更新かよ？」

ごめんごめん（汗）

第三十六話 休息

「な、なあ……もう降ろしてくれよ」

213番道路の海岸沿いにやって来ていた俺とマサト。まだ俺はマサトに抱き上げられたままなんだ。まあ身体がだるくて思うように動けないんだけどさ……でもさすがに恥ずかしいから降ろしてほしい。

「ダメだ。お前、まだ身体が動かないんだろ？
大人しく俺に抱かれてろって」

笑顔でそんな事言われてもなあ……

「……おっ！ 丁度良い所があるな！
彼処で休むか」

丁度良い所？

俺はマサトが見つめる先に顔を向けて見てみる。そこにはホテルらしき建物が存在していた。

「ホテル・グランドレイクだ。彼処で休んでいこうぜ」

彼処でって……結構高そうだぞ？

「金あんのかよ？」

「お前みたいなお子ちゃまと違って、お兄さんはお金をたくさん持ってたんだよ」

……何かバカにされた気分だ……

「んじゃ行くぞ」

マサトは俺を抱えたままホテル・グランドレイクに向かって歩き出した。

ホテル・グランドレイク、寝室。

本当に泊まる事になったよ……しかもこの部屋結構広い。

俺のポケモン達を全員出しても全く問題ない感じた。ってか、マサトってどんだけ金持ってたんだよ？

「とりあえずお前は寝とけタクミ」

そう言っマサトは俺をベッドに寝かせてくれた。

「お前のモンスターボールここに置いとくな」

マサトは枕元の隣に俺のポケモン達が入ったモンスターボールを置いてくれた。

そしてマサトは部屋の出入り口に向かう。

「ってマサト、何処行くんだよ？」

「ん？ ちょっと散歩してくるだけさ。

すぐ戻ってくつから、大人しく寝てろよ？」

そう言ってマサトは部屋から出て行った。

散歩ねえ……案外このホテルに宿泊してる女性をチェックするつもりだったりして？

《それはどうかなあ？

マサトさんって結構しつかりしてそんな人じゃない？》

いきなり頭の中で声が……ブイゼル、前触れもなく喋られるとビツクリすんだけど？

《あゝごめんごめん。

でもタクミ、前もって僕が喋る事を伝えるのって無理じゃない？

僕とタクミは同じ身体を共有してる訳だし……》

うつ……言われてみれば確かに……

《それよりタクミ、マサトさんが言ってたように寝た方が良いよ》

そうは言われてもちつとも眠くないんだけど……あっそうだ！
なあブイゼル、お前まだ俺の仲間達と挨拶してなかっただろ？

《えっ？ う、うん。》

確かにしてないけど……する機会が無かったし……》

せっかく入れ替われようになったんだ。

挨拶ぐらいしとけよ。

それに、ピジヨットが喜ぶと思うぜ？

《そうだね……せっかくだし、挨拶しようかな》

決まりだな。それじゃあ……俺はモンスターボールから皆を出す
為にまず上体を起こした……まだちょっと身体がだるいな……

《タクミ、無理しないでよ？》

解ってるよブイゼル。

俺はゆっくりと手を伸ばしてモンスターボールを掴む。

「皆、出てこい！」

俺はモンスターボールを軽く投げる。

そしてモンスターボールは開き、中から皆が出てきた。

『ダーリン！ もう、ずっとモンスターボールの中にいたから寂
しかったわよー！』

出てきていきなりエーフィが俺に飛びついてきた。何か久しぶり

だなあこのエーフィの飛びつき。

「ごめんなエーフィ、今まで色々あってさ……実はさ、皆に紹介したい奴がいるんだ」

『紹介したい奴?』

首を傾げるエーフィ。

『誰なんだタクミ、その紹介したい奴って?』

ピジョットが聞いてきた。皆も気になってるみたいだ。

「ピジョットが知ってる奴だよ、ちょっと待っててくれ……」

俺はそう言った後目を瞑る。^{つむ}

……そう言えば、どうやって入れ替わるんだ?

《僕と入れ替わるって強く思えば出来る筈だよ》

なるほど……んじゃ、やってみるか。

ブイゼルの言う通り強く思ってたが……入れ替わったのか?
何か替わった感じがしないんだけど……

『どうしたタクミ？』

この声はピジョットか……

「どうもしないよピジョット……久しぶりだね」

ってあれ？ 俺の意思とは関係なく口が……

（タクミ、ちゃんと入れ替わってるよ）

ブイゼルか。ちゃんと入れ替わってるんだな……だけど変な感じだ。

自分の身体なのに自分の意思とは関係なく喋ったり身体が動いたり……ブイゼルはいつもこんな感じだったのか……

『ひ、久しぶりって……変な事言うなよタクミ』

苦笑いするピジョット、まあいきなりんな事言われたら戸惑うよな。

「僕だよピジョット。」

ブイゼル。昔君がポップだった頃、一緒にタクミと遊んだでしょ？」

腕組みをしながらブイゼルは言った。

……やっぱり身体が勝手に動くって凄い違和感あるなあ……

『ブ、ブイゼルって……冗談よせてタクミ』

こりゃ信じてないなピジョットの奴……他の皆も心配そうな表情をしてるし……

「本当に僕だよピジョット。証明しようか？
タクミが知らないピジョットの秘密、全部言えるよ」

見えないけど何となく解る、ブイゼルの奴、今絶対嫌らしい顔してるな。だけど、俺が知らないピジョットの秘密？
一体何なんだ？

『お、俺の秘密？』

「うん。例えば、君がポップだった頃にタクミに内緒で君がタクミの大好きだったイチゴのショートケーキを食べちゃったりとか……」

……イチゴのショートケーキ……そういえば昔、楽しみで取っておいたケーキが無くて泣いた記憶が……あれはピジョットの仕業だったのか……

『な、何でその事！？』

明らかに動揺しているなピジョット。

『へ……部下一号がねえ……』

あつエーフィが目を細めてピジョットを見つめながら、少しピジョットをバカにするような感じの笑みを浮かばせている。

「他にも言おうか？

トキワの森でスピアーの大群に襲われた時以来虫ポケモンが苦手になったとか、昔好きだった野生のオニスズメに振られた事があるとか……」

次々と話すブイゼル。

野生のオニスズメ……そういえば良く家の近くに来てたっけ？

『ピジョット先輩が虫ポケモン苦手……』

ピジョットを見つめながらヒコザルが呟いた。

『……オニスズメに振られた？』

今度はマニョーラだ。

腕組みしながら少し信じられないといった表情をしてる。

「あとはね……」

『だあー！？ それ以上言うなあー！？』

赤面しながらピジョットは慌てて翼で俺……いや、ブイゼルの口を塞ぐ。

『解った、今のお前があブイゼルだって解ったから！？ 頼むからそれ以上何も言わないでくれ！？』

必死になって懇願^{こんがん}するピジョット……こんなピジョット初めて見たよ。

（しょうがない、この辺にしてあげよう。

本当はもっといっぱい言いたかったけど……）

ブイゼルの考えてる事が俺にも伝わってきた。ブイゼルは頷い

てピジョットの言う事を聞いた……けど、意外にブイゼルってお喋りなんだな。

『あっそうだ！ 今のあなたがブイゼルならダーリンは？ ダーリンはどうなったの？』

心配そうな表情をしながらエーフィが聞いてきた。

「心配ないよ。タクミはちゃんといるから。今も君達の事を見てるよ。ピジョットの秘密を知った時にはちょっと驚いてみたいけどね」

ってこの状態でも俺の事が解んのかよ……

（八年も融合してたら嫌でも解るんだよタクミ）

あっそうなの……

『ねえ、今の君がタクミじゃなくてブイゼルだって事は解ったけど……どうして今になって君が出てきたの？』

首を傾げながらヒコザルが聞いてきた。

「それはこの腕輪のおかげなんだ。この道具の効果で僕とタクミは入れ替わる事が出来るようになったんだ」

左腕に填め^はてある腕輪を見せながらブイゼルは説明した。
ってブイゼル、まだ挨拶済んでないだろ？

（あっそうだったね）

「じゃあ、改めて……初めまして、ブイゼルです。これから僕も皆と一緒にタクミを守っていくからよろしくね」

ブイゼルがそう挨拶すると皆もよろしくって言って挨拶した。

あっそうだ！ ブイゼル、せっかくだから皆と会話したり遊んだらどうだ？ 今まで俺の中にいたからそういうの出来なかっただろ？

（えっ？ で、でもタクミはどうするの？）

俺はお前やマサトに言われた通り、ちょっと寝かせてもらっよ。

……楽しめよ、ブイゼル。

（タクミ……ありがとう）

良いんだよ。だけど、あんまりはしやぎすぎて部屋の中を滅茶苦茶にすんなよ？ それから、皆を部屋から出すなよ？

他の人に迷惑が掛かるからな。

（解ってるよタクミ）

頼むぜ？ じゃあ……俺はそろそろ寝るから……あとはよろしくな……

第三十六話 休息（後書き）

タクミ

「今回は和やかな感じだったな？」

たまにはこういうのも入れないかね。

いや、やはり空の探検隊は面白いねえ（笑）

一昨日やっとなのディアルガ倒せたよ。

タクミ

「クリアすんの遅っ!？」

のんびりやりすぎたよ（汗）ってかさ、マジでポケダンのBGM神

だわ（笑）

チャームズのテーマとか暗黒の未来でに流れるBGM気に入ったよ

（笑）

タクミ

「はいはい解ったからとつと小説を執筆しろ（怒）」

……はい。

タクミ

「しっかりと返事をしやがれ！ それから早く行けこのアホ作者！

（怒）」

そ、そこまで言わなくても……タ、タクミのいじわるー！

〓 〓 （ ）

タクミ

「……ちょっと言いすぎたかな（汗）」

第三十七話　ギンガ団とネオ・ギンガ団！　　テンガン山での戦い！

ホテル・グランドレイクに泊まったその次の日の翌日、一日寝かせてもらったから何だか良い気分だ。今俺はマサトと一緒にピジョットの背中に乗ってホテル・グランドレイクを出発し、テンガン山に向かっていた。

さっきブイゼルに聞いたんだが、皆とは仲良く遊べたみたいだ。それにちゃんと皆を部屋から出さなかったみたいだし……。だが、ピジョットはエーフィにかなりイジられたみたいだ……。朝のピジョットはかなりテンションが低かったからな。

『はあ……。』

深くため息をするピジョット。今もテンション低いなピジョット……。あつそうそう。

何故今俺達がテンガン山に向かっているかという……。今日の早朝に俺のポケギアにシロナさんから連絡があつて、テンガン山でギンガ団とネオ・ギンガ団が戦闘しているという情報をもらったからだ。

ネオ・ギンガ団がいるなら、多分そこにはマコトもいる……。絶対助け出してやるからなマコト！

『……。ん？　タクミ、何だあの煙は？』

ピジョットがテンガン山の山頂付近を見ながら俺に聞いてきた。俺も山頂付近を見ている……。黒煙が上がっている……。シロナさんが言ってた通り、ギンガ団とネオ・ギンガ団が戦闘しているみたいだな。

「ピジョット、あの黒煙の近くまで接近してくれ」

『解った』

状況を把握する為、テンガン山の山頂付近に接近するようピジョットに頼んだ俺。

ピジョットはゆっくりと山頂付近に向かって行った。

「これは……」

テンガン山の山頂付近に来た俺達がそこで見たものは戦いで傷つき倒れたたくさんのポケモン達だった……山頂の方で爆発音が聞こえてくる……まだ戦闘は続いているみたいだな。だけど……こいつは酷い……

《……酷いね……これは……》

頭の中で声が……ブイゼル……ブイゼルの悲しみが俺にも伝わってくる……

《……タクミ、これ以上誰かが傷つかない為に……悪い奴らを捕まえないとね!》

ブイゼル……もちろんだ!

「ピジョット、次は山頂に向かってくれ」

俺がそう頼むとピジョットは頷いて答えてくれた。

「ブニャット、シャドークロー!」

「ドクログ、悪の波動です」

山頂に着いた俺達が見た光景は激しいバトルを繰り広げるギンガ

団とネオ・ギンガ団の姿だった。あっちにいるのは……マーズにサターンか。

それにあいつらの部下と思われる奴らが数人……

「いくら倒しても無駄じゃ。こちらにはまだ戦力となるポケモンがたくさんいるのだからう」

あいつはプルート！

プルートの周りにはかなりの数のポケモンがいた……まさかあのポケモン達全員が元人間なのか……？

『タクミ、このまま飛んでたら奴らに感づかれるぞ、どうする？』

……確かにピジョットの言う通りだな……何処か隠れられる場所
は……

「おっタクミ、彼処に飛行艇があるぞ」

マサトが指差す先には確かに飛行艇があつた。

あの飛行艇は……プルートのだな。

「よし、あの飛行艇の後ろに着陸してくれピジョット」

『解った』

ピジョットはプルート達に気づかれないようゆっくりと飛行艇の後ろに着陸した。

「サンキューなピジョット、しばらく休んでてくれ」

俺はピジョットをモンスターボールに戻した。

「タクミ、どうするつもりだ？」

腕組みしながらマサトが質問してきた。

「とにかく、シロナさんが応援を連れてくるまで奴らをこの場に足止めしないと……」

俺のポケギアにシロナさんが連絡をくれた時、シロナさんは警察と一緒に向かうって言ってたからな。

「足止めな……その役目俺が引き受けてやるよ」

マサトが自分を親指で指しながら言った。

「だけど、マサト一人で大丈夫か？」

「心配すんなよ、俺のポケモン達は強いからさ。
それより、お前はこの飛行艇に侵入して友達を助けに行きな」

マサト……

「……解った。だが、無理すんなよ？」

「タクミに言われなくても解ってるさ」

笑顔で答えるマサト。

そして俺は中にいると思われるマコトを捜しに飛行艇の中に侵入した。

この飛行艇の中に入るのはこれで二回目だな……前に一度来たから何処に何があるのかは大体把握してはいるが……

《マコトさん……何処にいるんだろうね?》

さあな……とにかく、片っ端から捜すしかないだろ。

マコトを捜し始めてから約十分。飛行艇の怪しそうな場所は全部見たけど……マコトは何処にもいなかった。

《マコトさんいないね》

マコト……お前は今何処にいるんだよ……外の方がまた騒がしくなってきたな……もしかしてマサトがバトルしてんのか？

「あっあんだ!？」

な、何だ？ 俺は声が聞こえてきた方に振り向く。

「なっサキ!？」

そこにはサキがいた。やばい奴に見つかっちまったな……

「まさかこんな所で会えるなんてね……今日こそはあんたを捕まえるわよ！ 出てきなさい、アブソル、ドラピオン!」

サキは自分が持っているモンスターボールからアブソルとドラピオンを出した。

ってこんな狭い通路でバトルを仕掛けてくる気かよ……

《どうするタクミ?》

この狭い通路じゃ満足にバトル出来ない。
外に出るぞ。

《なら僕と代わってタクミ。僕のスピードなら、相手の攻撃を受けずに外に出られるから》

解った、頼むぜブイゼル！

「ドラピオン、ミサイル針よ！」

サキの指示でドラピオンはその鋭い爪から無数のエネルギー波を放ってきた。

「高速移動！」

ブイゼルが高速移動でドラピオンのミサイル針を回避、そのまま出口に向かって走りだした。

……やっぱり身体が勝手に動くこの感じ、慣れないな……

「待ちなさい！」

サキとそのポケモン達が追って来てるみたいだ。待てと言われて待つ訳にはいかないよな。

ブイゼルはサキ達の攻撃を上手く避け、飛行艇の外に脱出した。
やるなブイゼル！

（これくらいどうって事ないよタクミ……あつタクミあれ！）

ブイゼルが見せてくれた光景……それはマサトがマーズ、サターンとバトルしている光景だった。あれ、でもプルートがいないぞ？

「アブソル、シャドーボール！」

「水の波動！」

背後からアブソルが黒いエネルギー弾を飛ばしてきた。それをブイゼルは青いエネルギー弾を飛ばし、アブソルのシャドーボールにぶつけて相殺させた。

「逃がさないわよ！」

もう追いついたのか……それより、プルートがいないのが気になるな……

「マサトさん、プルートは何処に行っただんですか？」

俺の気になった事をブイゼルが聞いてくれた。

「その口調はブイゼルか？ あのじいさん、この二人に負けそうになった途端一人でとんずらしやがった」

何だって！？

「余所見とは余裕じゃないの？ ブニャット、アイアンテール！」

「おっと、ライ！ お前もアイアンテールだ！」

マーズのブニャットとピカチュウのライのアイアンテールがぶつかり合った。プルートを逃げた……なら早く追いかけないと！

「ドラピオン、アブソル、破壊光線よ！」

「高速移動！」

ドラピオン達が放ってきた破壊光線をブイゼルは高速移動で避けた。

（どうもあのサキって子は僕達を逃がすつもりはないみたいだよタクミ）

だな……ブイゼル、俺と代われ。この広い場所ならフライゴンとピジョットが思いつきり戦える。

（解ったよタクミ）

「頼むぜフライゴン、ピジョット！」

俺はモンスターボールからフライゴンとピジョットを出した。

多分プルートはまだ遠くへは逃げていない筈……このバトルを速攻で決めてプルートを追いかける！

第三十七話　ギンガ団とネオ・ギンガ団！　　テンガン山での戦い！（後書き）

バイゼル

「ちよつと物語が動いてきた感じですか？」

多分ね……あゝ頭痛い（汗）

バイゼル

「ど、どうしたんですか？」

いやね、友達と気晴らしに遊びに行ったのは良いんだけど……帰る途中で思いつき雨が降ってきてもうびしょ濡れ！

って感じでさゝ（汗）

雨なんか嫌いだ！

バイゼル

「良いじゃないですか雨」

そりゃ君は水タイプだからね（汗）

第三十八話 再び！ タクミVSサキ！

「アブソルは悪の波動！ ドラピオンは自分に壺つぼを突く！」

サキの指示でまずアブソルがフライゴン達に向かって黒いエネルギー波を放ってきた。螺旋状に回転しながら向かってくる。

「二人共空に飛んで避ける！」

ピジョットとフライゴンは素早く空に上昇してアブソルの悪の波動を回避した。

《タクミ、ドラピオンを見て！》

嗚呼ああ、解あつてるよブイゼル。サキの指示の壺を突くでドラピオンは自分の尻尾にある鋭いトゲで自分の身体にある壺を突いて刺激していた。あの技は自分の能力のどれかをランダムに上げる技……一体どの能力が上がったのか……

「ドラピオン、ミサイル針！」

ドラピオンの両腕にある爪から針の形をした無数のエネルギー弾がフライゴン達に向けて放たれた。

「ピジョットは吹き飛ばし、フライゴンは砂嵐だ！」

フライゴンが放つ砂嵐をピジョットが吹き飛ばしで更に勢いをつける、この二人の得意な合わせ技だ。二人の合わせ技でドラピオンのミサイル針を弾き飛ばし、ドラピオン自身にミサイル針が直撃し

た……んだが……

《あまり聞いてないみたいだね》

どうやらさっきの壺を突くで防御力が上がったみたいだな……ただでさえ打たれ強いってのに厄介だな……こうなれば、効果抜群の技で攻めるしかないな。

「フライゴン地震だ！」

『解った！』

空に飛んでいたフライゴンが地上に向かって急降下を始めた。地震を使うには地上にいる必要があるからだ。

「やっぱりそう来たわね！ アブソル、不意打ち！」

「しまった！？ 上昇しろフライゴン！」

慌ててフライゴンに言ったけどもう遅かった。素早い身の熟しこなで一気にフライゴンに接近したアブソルがフライゴンに思いつき体当たりしてきた。ともに受けたフライゴンは吹き飛ばされて近くにあった岩に身体を打ちつけた。地震の攻撃を邪魔されちゃった……

「大丈夫かフライゴン！？」

『痛たたた……な、何とか大丈夫だよ……』

少しふらつきながらもフライゴンは立ち上がってくれた。あのアブソル、凄いパワーだな……

「フライゴンを休ませないで！ アブソル、悪の波動！ ドラピオンはミサイル針！」

フライゴンに集中攻撃か！

「ピジョット！ 竜巻で奴らの攻撃を吹き飛ばせ！」

『任せろ！ うおおおお！！』

ピジョットは翼を思いっきり羽ばたかせ巨大な竜巻を作り出した。竜巻は悪の波動とミサイル針を弾き飛ばし、アブソルとドラピオンに向かっていき二匹を飲み込んだ。

「やったか？」

ピジョットが作り出した竜巻が消えていく……

《……どうやらまだのようだねタクミ》

みたいだなブイゼル。竜巻が直撃する寸前でアブソルは守るを使つて身を守つたみたいだ……だけど、ドラピオンの姿が見えないな……何処に行った？

《タクミ、あの穴は？》

穴？ 俺はさっきまでドラピオンがいた場所を確認してみる。そこには確かに大きな穴が存在していた。マズい！？

「フライゴン！ 急いで空へ……」

「もう遅いわ！ 毒突き！」

フライゴンの足下からドラピオンが飛び出し、両腕の鋭い爪をフライゴンに直撃させた。

『がはっ……………』

「フライゴン！？」

フライゴンが力無くその場で倒れてしまった。

「まずは一匹……………」

「くっ……………戻れフライゴン」

俺はフライゴンをモンスターボールに戻した。

「次はお前だ！ 頼むぜヒコザル！」

俺はモンスターボールからヒコザルを出した。

「ヒコザル？ そんなひ弱そうなポケモンで勝てると思ってんの？」

ヒコザルをバカにするような態度を取るサキ。

「ヒコザルを甘く見んなよ。ヒコザル、ピジョットに乗るんだ！」

『うん！』

「ピジョットはヒコザルを乗せたまま空に上昇だ！」

『了解！』

ヒコザルを背中に乗せたピジョットは空に上昇した。

「ヒコザル、最大パワーで火炎放射だ！ ピジョットは風起こしでアシスト！」

ヒコザルは口から灼熱の炎を吐き出してアブソルに向けて放った。それをピジョットが翼を羽ばたかせて突風を作り出し、火炎放射に勢いをつけた。

「悪の波動！」

アブソルは悪の波動を放って火炎放射にぶつけた。だけど、ピジョットのアシストをもらったヒコザルの火炎放射をアブソルの攻撃だけで止める事は出来ない。二人の合わせ技は悪の波動を打ち破り、アブソルに直撃した。アブソルは吹き飛ばされて倒れた。

「……戻りなさいアブソル」

悔しそうな表情を浮かべながらアブソルをモンスターボールに戻すサキ。あと解っているサキの手持ちポケモンはドンカラスにゲンガー……このまま一気に勝負を決めてプルートを追いかけて……

《タクミ、何か聞こえるよ？》

何か？ ブイゼルに言われ俺は耳を澄^すませてみる……これはヘリコプターの音……もしかして、シロナさんが警察を連れてきてくれ

たのか？

「どうやら警察が来たみたいですね……マーズ、引き上げますよ」

今までマサトが相手していたサターンが引き上げると言い出した。その言葉が聞こえた俺は思わずサターン達の方に振り向く。

「隙ありよ！」

『タクミ危ない！？』

ピジョットの叫びが聞こえ、俺はまたサキの方に振り向く。そして、サキはモンスターボールを投げていて中からはマルマインが飛び出してきた……まさかサキの奴！？

「マルマイン、大爆発よ！」

やっぱりか！？ マルマインの身体が光り輝き出す……ダメだ、避けられない！？ とその時、突然俺の前にピジョットが舞い降りてきて背中に乗せていたヒコザルと俺を身体全体で覆い被さるようになしてきた。

「ピジョ……」

名前を呼ぼうとした時、マルマインが大爆発を発動させた。凄まじい衝撃が俺達を襲う。爆発で発生した爆煙が俺達を包み込んだ。

しばらくすると俺達を包み込んでいた爆煙が晴れてきた。

「……ピジョット……お前……」

俺とヒコザルを覆い被さったまま、ピジョットは気を失っていた……爆発の衝撃はピジョットが受けてくれたから俺とヒコザルにはあまりダメージはないけど……無茶しやがって……

「次で決めるわ！ 行くわよドラピオン！」

サキがドラピオンと一緒に向かって来やがったか！

「戻れピジョット」

気を失っているピジョットを俺はモンスターボールに戻した。

『よくもピジョット先輩を……許さないぞ！』

「あつ待てヒコザル!？」

怒りで冷静さを失ったヒコザルが突っ込んでいった。

《タクミ僕と代わって!》

ブイゼル……解った！

「高速移動！」

俺と入れ替わったブイゼルが高速移動を使って素早く動き、ヒコザルを追いかけた。その刹那、突然地面に亀裂が生じた。

（な、何これ？）

まさか、さっきの大爆発で地盤が脆くなったんじゃ……そう思った次の瞬間、地面が崩れ始めた！

「うわぁ!？」

俺とブイゼル、それにヒコザルやサキとドラピオンは抵抗する暇もなく、そのまま落下していった……

第三十八話 再び！ タクミVSサキ！（後書き）

バイゼル

「酷いです作者さん。」

更新が遅かったうえに僕達を落下させるなんて」

ごめんごめん（汗）

バイゼル

「死亡フラグですかこれは？」

いやいや、主人公とかそう簡単に死なせる訳にはいかないでしょうに（汗）

第三十九話 吳越同舟、サキとタクミ（前書き）

タクミ

「作者、あのタイトルの漢字何て読むんだよ？」

吳越同舟
こえつどうしゅう

仲の悪い者どうしが同じ場所に居合わせたり、行動を共にしたりする事……っていう意味らしいよ。辞典で調べました。

タクミ

「仲の悪い者どうし……あゝ納得」

第三十九話 呉越同舟、サキとタクミ

「……いやしかし、参ったなあこの状況……」

右手で頭を掻きながら困り果てている俺。地盤が崩れて俺やヒコザル、サキとドラピオンは落下したんだが……その時はブイゼルが落下する無数の岩石を利用したんだ。

岩石から岩石にジャンプして移動して、ヒコザルを助けた後は下に向かって水鉄砲を放ってその勢いを利用して安全に着地した……改めてブイゼルって凄いと思ったよ。

サキの方は落下してる時に気絶しちまったみたいなんだが……ドラピオンが身体を張ってサキを守ったんだ。サキが怪我しないように抱きしめてな……だけど、ドラピオン自身は地面に身体を強く打ちつけて足や背中、それに腕にも酷い怪我しちまったんだ……一応俺が応急処置をしないとから大丈夫だとは思うけど……今はサキと一緒に眠ってるし。マサトは落ちる寸前でモンスターボールからフワライドを出してそいつに掴まって落下せずに済んだみたいだが……つつつか助けてくれたの！……ってあの状況じゃ無理があるか……ギンガ団のマーズやサターンは飛行艇に乗り込んで逃げちまったし……んで、サキ達が眠ってる間にヒコザルと一緒に出口を探してたんだが……ものの見事に落下した岩石に出入り口を塞がれてたんだ。

他にも出口があつたから行ってみたが、そっちも岩石に出入り口を塞がれていた……岩石を破壊すれば脱出出来るが……それが出来ないんだ。

上を見てみると今にも落ちてきそうな岩石が大量に……何か強い衝撃……例えば破壊光線を出入り口を塞いでいる岩石にぶつかったりなんかして爆発が起きれば確実に岩石が落ちてくる……それにこの出入り口を塞いでいる岩石……どうやら上の岩石が落ちないように

支えてるみたいで……これを退かそうとしても岩石は落ちてくる……
まさに八方塞がりだな……

「……はあ……」

ため息しか出ねえよ。

『タクミ……僕達出られるのかな……』

ヒコザルが凄く不安そうにしてるな……

「心配すんなヒコザル。きっと出られるからさ」

ヒコザルを安心させようと俺はそう言った。

『……そうだね。うん、きっと出られるよね』

少しは安心出来たみたいだな。

「ヒコザル、しばらくモンスターボールの中で休んでな。いざって時に備えてさ」

『解ったよタクミ』

俺はヒコザルをモンスターボールに戻した。

《タクミ、出られるとは言ったけど……どうするの?》

ブイゼルか……今から考えるんだよ。

《なら、僕も一緒に考えた方が良いね……》

「……うつ……こ、ここは……？」

あつサキが目を覚ましたみたいだな。

「よう」

「あ、あんた！？ もう逃がさないわよ！」

いきなり立ち上がるなりモンスターボールを取り出して……ってまさかこんな所でバトルする気かよ！？

「ま、待て！？ 今ここでバトルしちゃマズいつて！？」

「そんなの知らないわよ！ あなたを捕まえてお爺様に渡す！」

ダメだこいつ……聞く耳持たずってこの事が……って呑気な事考えてる場合じゃねえ！

「いきなさい、ゲン……」

サキがモンスターボールを投げようとした時、サキの後ろで寝ていたドラピオンが目を覚まして、サキの腕を掴んでモンスターボールを投げるのを止めた。

「ド、ドラピオン！？」

ドラピオンは首を左右に振ってダメだってアピールしてる……身体の痛みを堪えてるなあいつ……身体が震えてるじゃねえか……

「ドラピオン……その怪我……」

「そいつはお前を庇^{かば}って怪我したんだ。応急処置は俺がしといた……
ちゃんとドラピオンに礼を言っとけよ」

腕組みをして俺はそう言った。

「ドラピオン……ごめんなさいね……私のせいで……」

……やっぱり、こいつもトレーナーなんだな……いつもはあんな
だけど……

「……とりあえず、現在の状況を説明しとくぞ」

俺はサキに今俺達がどういう状況なのかを説明した。

「……なるほどね……それで、あんたの事だから、もう脱出する方
法は見つけたんでしょ？」

「いや、まだだ」

「はあ！？ 見つけてないの！？ 使えない男ねあんた！」

……何だこいつ！

「本^{もと}はと言えばお前がマルマインに大爆発を指示したのがいけない
んだろうが！？」

「あんたが抵抗するからいけないのよ！」

「俺を捕まえようとするから抵抗すんのは当たり前だろうが！」

……それからしばらく俺とサキの口喧嘩は続いた……

「……なあ、もう止めないか？ 疲れてきた……」

「……ちようど私も同じ事を言おうと思ってたところよ……」

一旦喧嘩を中断した俺達。疲れたから俺は地べたに座り込む。しばらくの間沈黙が続いた。

……何か気まずいな……

「……なあ」

「……何よ」

「……お前さ……何であのプルートのオッサンと一緒にいるんだ？」

この気まずい空気を何とかしようと思って喋ってみたが……何聞いてんだよ俺……サキが素直に話してくれる訳が……

「……お爺様は私を拾って育ててくれた人……だから一緒にいるのよ」

ってサキが話してくれた！？ この展開は予想しなかったなあ……

「拾ってって……お前、親に捨てられたのか？」

「違う……私には本物のお父さんとお母さんがいる……いや、いたわ」

いたって……過去形にするって事は……

「お父さんとお母さんは死んじゃったわ……交通事故でね……残されたのは私とこの子だけ……」

ドラピオンを優しく撫でながらサキはそう言った。

「路頭に迷っていた私を……お爺様が見つけて、私を引き取ってくれたの……そして小さかった私をここまでお爺様は育ててくれた……私はお爺様の期待に応える為なら何だってやるわ……例えばそれが非道だとしてもね」

サキ……

《タクミ、話してるところ悪いけどちょっと静かにして耳を澄まし
てみて》

いきなりブイゼルが語りかけてきた。耳を澄ますって……まあ良
いか。とりあえず俺はブイゼルに言われた通り耳を澄ましてみた……
何か聞こえるな？ これは……風が流れる音か？ それに今気が
ついたけど、微かに風を感じる……

《何処か外に繋がってる場所があるって事だよな？》

ブイゼルの言う通りだな。問題はどうかやってこの風が来てる場所を特定するかだが……ん？ 風？

……そうだ！ あいつなら解るかもしれないな！

「出てこいエーフィ！」

俺はモンスターボールからエーフィを出した。エーフィは全身の体毛で風の流れを感じ取る事が出来る。エーフィなら見つけてくれる筈だ。

『ちよつとダーリン、何でこの女も一緒なのよ？』

サキを睨みつけながらエーフィが聞いてきた。

「いろいろあつたんだよ。それよりエーフィ、風の流れを感じ取ってくれないか？ 多分その風が来る所が外に繋がってると思うんだ」

『解ったわダーリン』

エーフィは目を閉じて集中し始めた。

『……こつちよダーリン』

どうやら風が吹いている場所が解つたみたいだな。エーフィがゆっくりと歩き出した。

「サキ、お前も来いよ。出口が見つかったかもしれない」

「……本当でしょうね？」

「嘘言ってどうすんだよ？ 今はここを脱出するのが先決だろ？ 敵とか言ってる場合じゃねえんだから、行かないなら置いてくぞ」

「解ったわ行くわよ。戻りなさいドラピオン」

サキはドラピオンをモンスターボールに戻した。そして俺と一緒にエーフィの後を追いかけた。

歩き始めてから約三分後、エーフィが立ち止まった。

『この穴から風を感じるわ』

エーフィが見つめる先には確かに穴があった。その穴はサキがギリギリ抜けられそうな穴だった。

「この穴か……よし、行くか！」

エーフィを先頭に俺達は穴の中に入っていた。

穴に入ってからどれ位時間が経ったのかな……なかなか外に出られねえし……

『あつダーリン！ 光が見えてきたわよ！』

エーフィが見つめる先を俺も見てみると、確かに光が見えた。

「やっと外か！ 良し、あともう少しだ！」

俺達は光目指してまた進み始めた。

それからしばらくしてようやく俺達は外に出られた。

「やっと出られたぜ……うわぁ俺達結構高い所から落ちたんだなぁ……」

テンガン山を見上げて俺はそう呟いた。俺達がいたのがテンガン山の頂上付近で、今いるのが麓……良く生きてたな俺達……

「ドンカラス！」

いきなりサキがモンスターボールからドンカラスを出した。そしてドンカラスの足を掴んで空に上昇していった。

「今回は見逃してあげるわ。だけど、次会った時は絶対にあんたを捕まえるから覚悟しといて！」

そう言っサキはドンカラスと一緒に何処かへと飛び去ってしまった。

『何なのよあの女……』

エーフィの言う通り……サキは一体何なんだよ……マジで……

第三十九話 吳越同舟、サキとタクミ（後書き）

タクミ

「サキの事がもう良く解らねえ（汗）」

エーフィ

「嫌な女、それで充分よ」

辛口だねえエーフィ（汗）

第四十話 ネオ・ギンガ団のアジト判明！（前書き）

すみません、今回短いです（汗）

バイゼル

「なんで短くしたんですか？」

ネタ切れ（汗）

バイゼル

「……（汗）」

第四十話 ネオ・ギンガ団のアジト判明！

テンガン山から何とか脱出する事が出来た俺達。まあ脱出してすぐにサキはドンカラスと一緒に何処かへ飛んで行っちゃったけどさ…… あっそうそう、その後すぐにマサトとジュンサーさんを含めた警察の人達が俺を救助しに来てくれたんだ。

その時にジュンサーさんから聞いたんだけど、ネオ・ギンガ団の団員を何人が逮捕出来たみたいなんだ。それでジュンサーさん達に尋問されて、団員がネオ・ギンガ団のアジトの場所を吐いたらしい。ってか、簡単にアジトの場所を吐くなんてネオ・ギンガ団の連中は忠誠心ってやつが無いみたいだな…… まあこっちにとっては好都合だけどさ。すぐにでもアジトに向かいたいけど…… サキとのバトルで俺のピジョットとフライゴンは動けない、しかもピジョットはマルマインの大爆発を受けて重傷だ。

こんな状態ではアジトに行けない…… だから今俺はテンガン山から一番近い街であるヨスガシティのポケモンセンターでピジョットとフライゴンを治療してもらってる最中なんだ。ジョーイさんの話では明日には元気になるらしい。

明日、ピジョット達が回復したらマサトやジュンサーさん達警察の人達と一緒にアジトに乗り込む手筈になっている。

今日はいろいろあって疲れたから明日に備えて、俺はポケモンセンターの寝室のベッドの上で俺は横になっている。

《……明日だね、タクミ……》

ブイゼル…… 嗚呼、明日こそ必ずネオ・ギンガ団を…… プルートを捕まえて、これ以上犠牲者を増やさないようにしないと……

《それにマコトさんも助けないといけないしね》

あつそうだった……

《って忘れてたのマコトさんの事?》

実は忘れてたよ……

《酷いなあタクミ。マコトさんがそれ知ったら怒るよ? もしかしたらまた変な道具を押し付けられるかも……》

それは困る……マジで困る……

《……だよね》

……そろそろ寝るよ。明日は大変な一日になるからな……

《解ったよ……お休み、タクミ》

お休み、バイゼル……

翌日の朝。

ジョーイさんからピジョットとフライゴンが入ったモンスターボールを受け取った俺はポケモンセンターの外に出た。

外にはジュンサーさん達警察の人達とマサトがすでに揃っていた。

「よう、ぐっすり眠れたか？」

マサトが。

「嗚呼」

「では、タクミさんにマサトさん。作戦を説明致します」

ジュンサーさんが俺達にネオ・ギンガ団を捕まえる為の作戦を説明してくれた。その作戦はまず、俺とマサトがアジトに侵入して暴れ、ネオ・ギンガ団の連中の注意を引きつける。その間にジュンサーさん達警察の人達がアジトを包囲して奴らを一網打尽にする……いわゆる陽動作戦だ。

「……以上が今回の作戦の内容です」

「了解しました。では早速俺達はアジトに向かいます。出てこいピジョット！」

俺はモンスターボールからピジョットを出した。

「ピジョット、体調はどうだ？」

『嗚呼、バツチリだ!』

そう言つてピジヨットは力強く翼を羽ばたかせた。もうすっかり元気だな。

「ピジヨット、これから俺達はネオ・ギンガ団のアジトに乗り込む。アジトまで頼むぜ!」

俺とマサトはピジヨットの背中に乗る。

『タクミ、アジトは何処にあるんだ?』

首を傾げながらピジヨットが聞いてきた。

「アジトは……海を越えた所にある島……その島のハードマウンテンといわれる山に奴らのアジトがある。ハードマウンテンに向かってくれピジヨット」

『了解だタクミ!』

ピジヨットは俺達を乗せたまま力強く翼を羽ばたかせて空に上昇、ハードマウンテン目指して前進した。

第四十一話 アジトに突入！ 狂気のプルート！（前書き）

ちよつと調子に戻ってきたかな？

タクミ

「ってか、なんでバクフーン先輩達や後輩のピースはすんなり思い
つくの俺はスランプになんだよ？（汗）」

タクミストーリーって難しいんですもの（汗）

タクミ

「自分で執筆しといて……（汗）」

それは言わないで（汗）

第四十一話 アジトに突入！ 狂気のプルート！

ネオ・ギンガ団のアジトがハードマウンテンにある事が解った。
今俺は、マサトと一緒にハードマウンテンにやってきている。

「…………あれが入り口みたいだな」

ハードマウンテンにある筈が無い、人工的に作られた扉を見つめながらそう言った。

「嗚呼……^{ああ}ジュンサーさん、こちらタクミです。マサトと共に配置に就きました」

俺はポケギアでジュンサーさんに連絡した。

『解りました。では、手筈通りに陽動をお願いします。私達も準備が出来次第、中に突入します』

「了解しました」

俺は通信を切った。

「さあ、準備は良いかマサト？」

「いつでも良いぜ！」

モンスターボールを一つ握りしめ、マサトはそう言ってくれた。
頼もしいな。

「それじゃあ……行くぞ！ 出てこい、フライゴン！」

「出番だぜ、ガザ！」

俺はモンスターボールからフライゴンを、マサトはゴウカザルのガザを出した。

「フライゴン、あの扉に破壊光線！」

「ガザ、お前も扉に攻撃だ！ オーバーヒート！」

俺達の指示を受け、フライゴンとガザは扉を攻撃した。破壊光線とオーバーヒートが扉に直撃した瞬間、大きな爆発が発生した。扉は木っ端微塵こっぴみじんに吹き飛んだ。

「行くぞ！」

俺達はアジトの中に入りました。

「フライゴン、砂嵐！」

「ガザ、熱風だ！」

アジトの中に突入した俺達は、ネオ・ギンガ団の連中の注意を引き付ける為とにかく暴れまくった。

「タクミ！ そっちにいったぞ！」

「エーフィ、サイコネシス！」

ネオ・ギンガ団の団員が数人、俺に向かってきた。俺はモンスターボールからエーフィを出し、サイコネシスを使わせて奴らを吹き飛ばした。

『ダーリンに近づくんじゃないわよ！』

す、凄い迫力だなエーフィ……

「タクミ、ここは俺一人で大丈夫だ！ お前は奥を頼む！」

「解った、任せたぜマサト！ エーフィ、フライゴン、行くぞ！」

残った団員はマサトに任せ、俺達はアジトの更に奥を目指して進んだ。

しばらく走り続けると、俺達の前に一際^{ひときわ}大きな扉が。

《ここがこのアジトの最深部なのかな？》

そうだろうな……多分、この扉の向こうにプルートが……

《いよいよだね》

嗚呼……ブイゼル、いざという時は頼むぜ？

《任せてよ》

「……開けるぞ」

俺はゆっくりと扉を開けた……何だ、これ？

扉の向こうにあった部屋はかなり広く、何かを作る為の機械がたくさん並べられていた。

「……やはり、お主だったか……国際警察の若造よ」

部屋の奥から声が聞こえた。その声の主はすぐに解った……

「プルート！」

俺達の前にはプルートがいた。その隣にはサキもいた……ん？
もう一人、誰がいるな？

「あゝタクミっち久しぶりっ！」

……この緊張感が無い、力の抜けるような喋り方……

「マコト……」

「助けにきてくれるって信じてたよっ！」

「黙りなさい！ あんたのその喋り方、イライラしてくる！」

サキがマコトを怒鳴った。今回ばかりはサキの意見に賛成だ……
ってこんなやり取りやってる場合じゃなかった！

「プルート！ 今度こそ、お前を逮捕する！」

「ふっ……そうはいかのう……サキや」

「はい、お爺様」

サキがモンスターボールを握りしめ、プルートの前に立った。や
っぱり……こういう展開になるか……

「……テンガン山の事は礼を言っておくわ……だけど、私は全力であなたを倒すわ！ 出てきなさい、ドンカラス！」

サキはモンスターボールからドンカラスを出してきた……悪タイプと飛行タイプを合わせ持つポケモンだな。なら、俺はこいつだ！

「頼むぜ、カメックス！」

俺はモンスターボールからカメックスを出した。

「カメックス、ハイドロポンプだ！」

『おう！』

カメックスは両肩のハイドロキャノンから、大量の水を放出した。

「ドンカラス、悪の波動！」

サキのドンカラスは黒いエネルギー波を放ってきた。螺旋状に回転しながら、ハイドロポンプに直撃、大きな爆発が発生した。

「カメックス、冷凍……」

「不意打ち！」

俺がカメックスに冷凍ビームの指示をしようとした時、サキのドンカラスが一瞬でカメックスに接近、突進してきた。

カメックスは回避する事が出来ず突進を受け、後方に吹き飛ばされた。

「カメックス！？ 大丈夫か？」

『くっ……結構効いたぜ……』

カメックスは攻撃を受けた箇所である腹部を押さえながら痛みを堪えている……防御力が高いカメックスに、たった一発でここまで
のダメージを与えるなんて……

「カメックス、一旦戻ってくれ」

俺はカメックスをモンスターボールに戻した。

「任せたぜ、マニニューラ！」

次に俺はモンスターボールからマニニューラを出した。マニニューラなら、素早く動けるからドンカラスの攻撃を回避出来る筈。

「マニニューラ、氷の飛礫^{ひざし}！」

『……了解！』

マニニューラは氷の塊を作り出し、ドンカラスに向けて放った。氷の飛礫は物凄いスピードで飛んでいき、ドンカラスに直撃した。

「くっ！ ドンカラス、悪の波動よ！」

再びサキのドンカラスは悪の波動を放ってきた。

「マニニューラ、電光石火から冷凍パンチ！」

マニユーラは素早い身の熟^{こな}して悪の波動を回避、そして一気にドンカラスに接近、右手に冷気を纏^{まと}わせドンカラスを殴った。
殴られたドンカラスは吹き飛び、地面に倒れた。目を回しているな……

「くっ戻りなさい、ドンカラス……次はあなたよ、いきなさいゲンガー！」

ドンカラスをモンスターボールに戻した後、新たにゲンガーをモンスターボールから出したサキ。相性的にはマニユーラが有利、一気に決めてやる！

「マニユーラ、シャドーボールだ！」

『……くらえ！』

マニユーラは両手を使って黒いエネルギー弾を作り出し、ゲンガーに向けて放った。

「こつちもシャドーボールよ！」

サキのゲンガーもシャドーボールを放ち、マニユーラのシャドーボールにぶつけ、相殺させた。

「催眠術！」

ゲンガーは、黒い輪っかの形をしたエネルギー波を放ってきた。

「電光石火で避ける！」

マニニューラは電光石火で素早く動き、催眠術を回避した。

「そのまま接近して辻斬りだ！」

『……決める！』

マニニューラは両手の鋭い爪でゲンガーを攻撃、辻斬りが決まり、ゲンガーは上空へ吹き飛んだ。

「止めのシャドーボールだ！」
とど

マニニューラのシャドーボールがゲンガーに直撃した。ゲンガーは目を回し、地面に倒れた。

「……戻りなさい、ゲンガー」

ゲンガーをモンスターボールに戻したサキ。

これで倒したのは二体……サキが持つてるのは、ドラピオンにマルマイン、それにアブソル……さあ、次は誰を出すんだ？

「……くっ……」

ん？ ポケモンを出さないのか？

「どうしたのじゃサキ？」

「……ごめんなさい、お爺様……もう、私の手持ちに戦えるポケモンが……いないの……」

悔しそうにしながらサキはそう言った……まさか、あの三体は俺

とのバトルで受けたダメージが回復していないのか？

「……大丈夫じゃよサキ、まだ戦えるポケモンはおる……お前がポケモンになればの！」

「うっ！？」

なっ！？ プルートが……サキにあの薬を打った！？

「お、お爺様……どうして……うっっ！？」

サキが薬を打たれた箇所を手で押さえながら、その場で蹲^{つまた}ってしまった。そしてサキの身体にどんどん変化が起き始めた。

身体がどんどん小さくなり、肌からは漆黒の毛が生えていった。手足にも変化が現れ、エーフィみたいな手足になり、顔もマズルのように……ついには尻尾まで……しばらくして、サキの変化は終わった……そこにいたのは人間のサキではなく、ブラッキーになっ
てしまったサキだった……

「ブ、ブラ……」

『わ、私……』

自分の身体を見つめ、戸惑いの表情を浮かべるサキ……

「喜ベサキ。完成したポケモン化の薬の最初の被験者となれたのだからのう！」

あのジジイ……許せねえ！！

「プルトオオオ！」

俺はプルトに向かって走り出した。

「お前の相手はこのブラッキーじゃ」

そう言っつてプルトはポケットから灰色をした首輪をサキの首に付けた。

『ううつ……ああああ！？』

な、何だ！？ サキが苦しみ出した！？

「サキ！？」

「この首輪はポケモンを意のままに操る事が出来る装置で……さあサキ、そいつを倒すのじゃ！」

『……了解しました……マスター……』

虚ろな目をしたサキがゆっくりと俺に近づいてくる。

「止めるサキ！」

『……悪の波動』

サキが悪の波動を！？

ダメだ、避けられない！？

『タクミ！』

マニユーラが俺の前にやって来て、悪の波動を自分の身体で受け止めた。

『ぐっ!?!』

地に跪くマニユーラ。

「マニユーラ!?!」

『くっ……少し……無理をしすぎたか……』

マニユーラ……俺の為に……

「……助かったよマニユーラ……モンスターボールの中で休んでてくれ」

『あ、嗚呼……そうさせてもらっ……』

俺はマニユーラをモンスターボールに戻した。

《タクミ、僕が彼女を止めるよ》

ブイゼル……出来るか?

《なんとかやってみるよ》

解った……任せたぞブイゼル。俺はブイゼルと入れ替わった。

『ダーリン、あの女は私が……』

「エーフィ、彼女は僕が止める。エーフィはフライゴンと一緒にあのプルートを見てて。また逃げられると厄介だから」

バイゼルがエーフィに頼んだ。

『バイゼル……解ったわ』

エーフィは俺達から離れ、フライゴンの所へ。

バイゼル、サキを操っているあの首輪を外す事が出来れば、サキを正気に戻す事が出来る筈だ。

《解った！》

バイゼルは戦闘体勢に入った。

第四十一話 アジトに突入！ 狂気のプルート！（後書き）

バイゼル

「作者さん、プルートってこんなに悪い奴だったんですか？」

ゲームで半端だったから小説ではとことん悪にしようと思ったんだけど……めっちゃ悪人だねあれ（汗）

バイゼル

「もうプルートの目的が解りません（汗）」

まああれだよ。自分がいかに天才博士なのかを解らせたいからやってるっていうジコ虫ですよ。

バイゼル

「うわっ 迷惑な人間（汗）」

第四十二話　ブイゼル（タクミ）VSブロッカー（サキ）！

「アクアジェット！」

ブイゼルは大量の水をまるで鎧のように身体に纏まとわせて、凄い勢いでブロッカーになってしまったサキに向かっていった。

『……悪の波動』

サキは身体から黒いエネルギー波を放出、螺旋状に回転しながら俺達に向かってくる。だけど、ブイゼルは持ち味のスピードでサキの悪の波動を回避した。そしてサキの背後に回り込む。

「あの首輪を外せば……」

ブイゼルはサキの首に付けられた首輪に手を伸ばす。

『……守る』

あと少しで首輪に手が届きそうになった時、サキは自身の身体をバリアで覆ってしまった。

バリアに阻まれて、ブイゼルは首輪に触る事が出来ない。

『……悪の波動』

身を翻ひるがえして、サキが俺達に悪の波動を放とうとした。

マズい！？　避けるんだブイゼル！

「解とってるよタクミ！　高速移動！」

悪の波動が放たれる寸前で、ブイゼルは高速移動を使って素早く動き、サキから離れた。

刹那、サキが悪の波動を放ち、螺旋状に回転しながら黒いエネルギー波は壁に直撃、小規模の爆発が発生した。

「ふう……危ない危ない」

『……シャドーボール』

今度は黒いエネルギー弾を放ってきたサキ。

「水の波動！」

ブイゼルは両手を使って水色のエネルギー弾を作り出し、シャドーボールに向けて放った。ブイゼルの水の波動とサキのシャドーボールが激突、大きな爆発が発生した。

爆発が起きた事で、俺達とサキの間に爆煙が立ち込める。

ブイゼル、今ならサキに気づかれずに背後に回り込める筈だ。

「解った」

ブイゼルはサキの背後に回り込む為に移動を始めた……けどその刹那、立ち込めていた爆煙が吹き飛んだ。

「な、何！？　なんで爆煙が！？」

サキの目が青く光り輝いてる？　そうか、サイコネシス！　サイコネシスを使って爆煙を吹き飛ばしたのか！

『……シャドーボール』

俺達の姿を確認したサキが、シャドーボールを五発連続で放ってきた。

「高速移動！」

ブイゼルは素早く動き、向かってきたシャドーボールを全部回避、そしてサキから一旦離れる。

「簡単に首輪には触らせてくれないみたいだね……タクミ、これはサキにダメージを与えて動きを止めないと首輪は取れないよ」

サキを攻撃……ダメだそれは！ あいつは操られてるだけなんだ！それに、あいつは人間なんだぞ！？

「じゃあどうするの！？ このままじゃ、僕達がやられちゃうよ！」

それは……そうだが……

『……悪の波動』

「くっ 高速移動！」

サキが放ってきた悪の波動をブイゼルは高速移動で素早く動き、回避した。どうする……何か、何か良い方法は無いのか？ サキの動きを停める方法は……ん？ 動きを……停める？ そうだ！ ブイゼル、渦潮は使えるか？

「えっ渦潮？ ……あっなるほど！ 解ったよタクミがやろうとし

てる事がね。任せて、渦潮！」

ブイゼルは両手を上に翳^{かざ}す。そして水のエネルギーを集め、小さな水の竜巻のような物を作り出した。

「いつけえええ！」

ブイゼルは両手を振り下ろし、渦潮をサキに向けて放った。渦潮はサキに直撃し、渦潮の中に閉じ込める事に成功した。

結局攻撃する事になったけど……渦潮なら然程ダメージは無いし、あれに閉じ込められたらしばらく身動きが出来ないからな。ブイゼル、今なら！

「解ってるよタクミ！ アクアジェット！」

ブイゼルはアクアジェットで渦潮の中に突っ込んだ。そしてサキの首に付けられた首輪を掴む。

「こんな物っ！」

ブイゼルは力いっぱい首輪を引っ張り、サキの首から外した。

『ううっ……わ、私、今まで何を？』

サキが正気に戻った！

「ふう……もう大丈夫だね。それっ！」

ブイゼルは右手で渦潮を殴る。すると、渦潮は一瞬にして消え去った。

「くっ……サキをブラッキーにしてもダメか」

プルート……ブイゼル、代わってくれるか？

「解った」

俺はブイゼルと入れ替わった。

『お爺様……どうして……』

凄く悲しい目をしているサキ。

「プルート！ サキはあなたの家族だろ！ 何故サキまで……」

「サキが家族？ ふん、可笑しな事を言う若造じゃな？ わしはサキの事を家族と思った事など無い。利用できる子供だったから、路頭に迷っていたそやつを拾ったまでじゃ。まあもつとも、そやつの利用価値はもう無くなってしまったがのう」

『そ、そんな……私……お爺様の事……本当の家族だと……思ってたのに……』

サキの目から涙が溢れてきた……あのクソジジイ、もう許さねえ！

「プルート！ お前には冷たく寒い牢獄がお似合いだ！ 絶対逮捕してやる！」

「ふん、わしはまだ捕まらんぞ！ わしにはまだこやつがある！」

なっ！？ プルートの奴があんたの薬をマコトに打とうとしてる！？

「動くな若造！ こやつまでポケモンにしたいくは無いだろっ？」

くっ！？ このクソジジイが！？

「さあ、その出口の前にいるポケモン共をどけてもらおうか」

「くっ……エーフィ、フライゴン、出口から離れるんだ」

俺の指示で、エーフィ達は出口から離れた。

プルートはマコトにあの薬が入った注射器を突き立てながら、ゆっくりと出口に向かっていく。

「ふふふ……またお主はわしを捕まえる事が出来ないようだな？ このアジトはダメになってしまったが……わしにはこの研究データがある！ このデータさえあれば、また薬を作る事が出来るのだからな」

プルートは胸ポケットからフロッピーディスクを取り出し、自慢気に言う。

「くっこのクソジジイが……」

「さらばじゃ、国際警察の若造よ」

プルートはマコトと一緒に出口から出ようとした。

「おらっ」

「がつ!？」

出口の扉が開いた時、誰かが突然プルートの首に手刀を直撃させ、プルートを気絶させた。

「へっすつきりしたぜ! このジジイは気に食わなかったからな」

えっ……ヒョウガ!？」

「な、何でお前が仲間のプルートを!？」

「仲間あ? 俺は金で雇われてるだけだ。まあ、今の雇い主はこのジジイじゃねえけどな」

プルートが雇い主じゃない?

「ほう、こいつがこのジジイの研究データってやつか」

気絶してるプルートからフロツピーディスクを奪い取るヒョウガ。

「……あまり乱暴に扱うなヒョウガ。データが消えたらどうする?」

「へいへい、悪かったな新しい雇い主様よ」

……… どういう……… 事だよ? 何で……… ヒョウガがマコトにフロツピーディスクを渡すんだよ?

「……マコト、どういう事だ?」

俺はマコトに問いかけた……… が、マコトは無言のままだ。

「おい、マコト!？」

「っるせえなてめえ！ こいつぁギンガ団の新しい幹部なんだぜ？」

……マコトが、ギンガ団の新しい幹部？

「……嘘だろ？ 幼なじみのお前が…… 国際警察のお前が、ギンガ団の幹部な訳がないだろ!？」

「……これが現実だよ、タクミっち……」

そんな……

「行くよ、ヒョウガ」

「ちょっと待った。こいつにはやられっぱなしだからよ、ちょっと仕返しがしてえ」

モンスターボールを一つ握りしめ、俺達を睨むヒョウガ。

「……勝手にしろ、僕は先に行く」

マコトが出ていってしまった。

「待てよ、マコト!？」

「そういつてめえが待ちやがれ！ 俺様と遊んでもらうぜ!」

「邪魔をするなヒョウガ！ エーフィ、フライゴン!」

俺の所にエーフィ達 came 来た。

「ピジョット、ヒコザル、カメックス！ お前達も頼む！」

俺は戦える手持ちポケモン全てをモンスターボールから出した。
マニョーラはサキとのバトルで疲れているから出す訳には……

「悪いが……そんな程度の奴らじゃ、この俺様の最強のポケモンには勝てねえぜ」

最強のポケモン？

「全てを凍てつかせるポケモン……出やがれ、フリーザー！」

なっ！？ 伝説の鳥ポケモンの一体、フリーザーだって！？

「こいつが俺様の最強のポケモンだ。一瞬で終わらせてやるぞ……フリーザー、吹雪！」

フリーザーが口から凄まじい吹雪を放ってきた。

「フライゴン破壊光線、エーフィはサイケ光線、カメックスはハイドロポンプ、ピジョットはエアスラッシュ、ヒコザル火炎放射！」

俺は皆に技の指示を出した。皆はそれぞれ吹雪に向けて攻撃を放ったが、フリーザーの吹雪は強力で皆の攻撃を弾き飛ばしてしまっ
た！

「うわっ！？」

俺達は避ける事が出来ず、吹雪をともに受けてしまい、凍り漬
けにされてしまった。

「……いつもならこれで捕獲するんだが、今回は仕返しが目的だ。
次会った時は捕獲してやるぜ！ もっとも、生きてればの話だがな」

ヒョウガはフリーザーをモンスターボールにマコトが通っていつ
た出口に向かっていった。

くそ……身体が、全然動かねえ……寒い……マコト、何でお前が
……やばい……眠く……なっ……て……

第四十二話　ブイゼル（タクミ）VSブラッキー（サキ）！（後書き）

ブイゼル

「作者さん、凄く寒いんですけど（汗）」

まあ、フリーザーに凍り漬けにされたからね（汗）

ブイゼル

「主人公死亡フラグですよね」

んな訳無い。

主人公死んだら、このストーリー終わっちゃうでしょうに（汗）

ブイゼル

「……まあ、作者さんはそんな酷い人間じゃない事を信じましょう……でも、まさかマコトさんがギンガ団の幹部だったなんて……」

あつちなみにプルート達がタクミの居場所が解った理由だけど、彼が捕まった（わざと）時に、彼の所持品はネオ・ギンガ団に没収されて、その中にタクミに渡したポケッチに内蔵されているGPSを探す道具があっただけど……

ブイゼル

「それをネオ・ギンガ団が利用したと？」

そう。

第四十三話 裏切りのマコト、その真意（前書き）

……解ったぞ！！

バイゼル

「わっ！？ いきなりなんですか作者さん！？」

いやね、何故タクミだけがスランプに陥りやすいのかが……ってブイゼル、確か他の皆と一緒に凍ってたんじゃない？

バイゼル

「こつち位良いでしょ？ ずっと凍っていたんじゃない、いくら夏だからって言っても寒いですから」

あっそう（汗）

バイゼル

「それで、なんでスランプに陥りやすかったんですか？」

タクミ視点中心で考えていたから。ずっとタクミ視点にこだわってやってたんだけど、それだと三人称と違って書けるものが限られてくるのよ（汗）

だから、これからはタクミ視点だけじゃなく、他の視点もバンバン使っちゃおうと……

バイゼル

「……なら、最初から三人称でやれば良いのに」

……言わないで（泣）

あっ 今回はマコト視点だから。

第四十三話 裏切りのマコト、その真意

「……ヒョウガ、タクミ達相手にフリーザーを使う事はなかったと思うんだが……」

ブルートから研究データが保存されているフロッピーディスクを奪取出来た僕とヒョウガはギンガ団アジトに戻る為、ヒョウガのフリーザーに乗って空を飛んでいた。

「言っただろうが、俺は奴らに仕返しするってよ？ お前も好きにしろって言っただろうが」

「確かにそうだが……死なないよな？」

「さあな。まあ、奴らの仲間が近くにいたみたいだから、そいつが助けんじゃね？ つうか、あいつを裏切っておきながらあいつの心配をすんのかお前？」

首を傾げながら言うヒョウガ。

「……一応幼なじみだからな……」

言葉ではそう言ったけど……本当は凄く心配だよ……形的にはタクミを裏切る形になってしまったけど、これも全てタクミの為なんだ……

「甘い野郎だな、お前」

「……うるさい」

それからしばらく飛行を続け、ようやくギンガ団の新たな基地がある224番道路に到着した僕とヒョウガ。その基地はかなり大きく、ギンガ団のシンボルマークであるGのマークが基地の中央に描かれている。

「戻りな、フリーザー」

ヒョウガはフリーザーをモンスターボールに戻した。

「ここがギンガ団の基地なのか？ 悪趣味なデザインだな」

ヒョウガはギンガ団の基地には初めて来たから、基地のデザインを見てそんな事を言った。

まあ、そう言いたくなるのも解るけどね。

「行くぞ」

僕はヒョウガと一緒に基地の出入り口の前まで来た。出入り口のすぐ隣にはパスワードを入力する為の機械が設置されていた。中に入る為にはこの機械にパスワードを入力しなきゃならない。

ギンガ団の団員全員には一つのパスワードが用意されているんだけど、幹部である僕やサターン、マーズらには特別なパスワードがある。

そのパスワードは幹部一人一人違うんだ。

僕の場合なら、TAKUMIって入力すると……

『パスワード認証。ギンガ団幹部、マコト』

機械から音声が鳴る。

そして基地の扉が開いた。僕とヒョウガは基地の中へと入っていった。

「あら？ 帰ってきてちゃったのマコト？ せっかくうざったい奴が

いなくなつたと思つたのに……残念」

基地に入つて早々、マーズに嫌みを言われてしまった僕。まあ、六年前に僕がギンガ団に入団した時から嫌みを言われ続けてるからあまり気にしないけど。

「例のデータは手に入れたのですか？」

そう聞いてきたのはサターンだ。

「もちろんだ。……正確に言えば、取り返したただけだね」

そう、この人間をポケモンに変える薬……これは元々、僕とタクミのお父さんであるタツヒトさんと一緒に考えた薬なんだ。

「それは結構。あとは白玉と金剛玉を取りに行っているジュピターの帰りを待つだけですな」

「……僕は部屋に戻つて。何かあつたら、連絡してくれ。ヒョウガ、次の仕事があるまで君は自由行動だ」

「じゃあそうさせてもらうぜ」

僕はヒョウガやサターン達と別れ、自分の部屋に戻った。部屋に戻るなり、僕はフロッピーディスクを部屋に用意してあるパソコンに入れる。

「……初期の状態から、かなり弄^{いじ}つたなブルートの奴……僕とタツヒトさんのアイディアをこんな風にしちゃって……」

フロップीडィスクに記録されていたデータを見て僕は思わずそう呟く。……元々、この薬はこんな目的で作ったんじゃない……誰もが……まあ誰もがそうとは限らないけど、一度は自分もポケモンになってみたいって願望がある筈。

僕とタツヒトさんはそんな人達の願望を叶えようと思ってこの薬を開発していたんだ。それに、ポケモントレーナーがポケモンになれば自分のパートナーと会話する事が出来るし、そうする事でより一層互いの事を理解し合える……悪事に使うなんてこれっぽっちも考えてなかった……それをプルートは……この薬を打たれるとポケモンになれるけど、一定の時間が経てばまた人間に戻るようになっているのに、プルートが弄ったせいで一度打たれると、その薬の効果を打ち消す別の薬を打たない限り元に戻れないようにしてある……

「やってくれたよあのじいさん……とは言ったものの、皮肉な事にこっちの方が今の僕にとっては都合が良いんだよな」

そう……この方が都合が良い。時間の制限が無いから、ポケモンの力を扱う為の練習が出来る。

この薬にちよつと僕が細工をすれば、自分になりたいポケモンになる事が出来る……僕になりたいのは、時間を操る事が出来るポケモン、ディアルガ。ディアルガの力を上手く使えるようになれば、過去や未来にタイムスリップする事が出来る。

そうすれば、八年前では治す事が出来なかったタクミの病気を治す事が出来る筈。今でもタクミの病気を治す医療は無いけど、きつと未来ではその病気も簡単に治せる薬がある筈だから……僕がこのギンガ団に入団したのは、タクミとブイゼルを助ける為なんだ。

ギンガ団はディアルガとパルキアを狙っている。ギンガ団に入団していれば、ディアルガに接触出来る可能性も高いと僕は判断したからだ。

……ディアルガ本体に接触出来なくても、まだ金剛玉があるし。

一番確実なのは、ディアルガ本体に接触して、ディアルガの細胞を手に入れる事。そうすれば、この薬にディアルガの細胞を混ぜれば僕はディアルガになれる。

だけど、本体に接触するのはリスクが高すぎる。一番安全なのはディアルガの力が宿っている金剛玉から、ディアルガのエネルギーを吸い出して、特殊な方法でこの薬にエネルギーを注ぎ込む。

理論上だけど、それでもディアルガにはなれる筈……

「失礼しますマコト様。お茶をご用意しました」

突然一人の団員が僕の部屋に入ってきた……入れる訳が無い。この部屋へは他の幹部も団員も知らない、僕だけのパスワードを入力しないと中には……嗚呼、一人いたよ。

この部屋に入ってこれそうな人。

「そこで止まって下さい。ハンサム先輩」

僕がそう言うとその団員はその場で止まった。やっぱり先輩か。

「なんで解った？ 完璧な変装だったのに」

「変装は完璧ですけど、迂闊うかつですよ先輩。この部屋に入れるパスワードを知っているのは、僕だけなんですから」

「そいつは本当に迂闊だったな。次からは気をつけよう……マコト、何故裏切った？」

鋭い目つきで僕を見る先輩。

「……あなたには関係無いです。それより早く逃げた方が良いでしょう」

よ先輩。この部屋、こういう万が一の時を考えて、僕以外の人間が入ったらセンサーが反応して、警報を鳴らして仲間に知らせるようになっていますから」

僕がそう言った刹那、基地内で警報が鳴り響いた。

「なっ!？」

「ほらね？ 今ならまだ逃げられますよ。早く行って下さい。あっそうそう、無事に逃げ出せたら、タクミっちに伝えておいて下さい。もうすぐタクミっちを助けられるからって」

僕のこの言葉に、先輩は疑問に感じたみたいだけど、すぐに先輩は部屋から出て行った。

第四十三話 裏切りのマコト、その真意（後書き）

バイゼル

「マコトさん……あんな事考えてたんですか」

ちなみにマコトがギンガ団に入団したのは、君とバイゼルが融合した八年前。そして、プルートは昔タツヒトと一緒に研究していたんだよね。

バイゼル

「へ」

んで、マコトはとりあえず天才って設定だから。

バイゼル

「……なんか説明が適当だよね？」

気のせい（笑）

第四十四話 家族（前書き）

すまんブイゼル、また今回も短い（汗）

ブイゼル

「またですか？（汗）」

どうも僕は難しい事を書くのが苦手なようで（汗）
実力不足でごめんなさいm（――）m

ブイゼル

「土下座しないで下さいよ（汗）」

第四十四話 家族

ヒョウガのポケモン、フリーザーの攻撃で僕達は凍り漬けにされてしまった。氷の冷たさにタクミは耐えられずに意識を失っちゃったんだけど、その後すぐにマサトさんやジュンサーさん達が駆けつけてくれて、僕達を氷の中から助け出してくれたんだ。

そしてマサトさん達は、僕達をハードマウンテンから一番近くにあるサバイバルエリアって呼ばれる場所のポケモンセンターに運んでくれた。

ポケモンセンターに運ばれてから丸一日が経過。ジョーイさんの治療の御蔭で僕達は回復する事が出来た。でもまだ完全に回復した訳じゃないから、ジョーイさんに安静にしてなさいって言われて、僕達はベッドの上で横になっている。

ちなみに、僕達を助け出してくれた時にマサトさんとジュンサー達はプルトや他の団員を逮捕して、ネオ・ギンガ団を完全に壊滅させたんだ。

あとサキだけど……彼女はパートナーのポケモン達と一緒に、現在ジョーイさんの治療を受けている最中なんだ。

『……ブイゼル、ダーリンは今どうしてる？』

僕が横になっているベッドの隣で、僕と同じく横になっているエーフィが質問してきた。

「タクミは……まだ心の奥から出てこようとしないんだ……」

ジョーイさんに治療してもらったその時にはタクミの意識は回復していた。だけど、マコトさんに裏切られた事がショックだったせいなのか、心の奥に引き籠もっちゃったんだ。

『タクミの奴……今も昔もそこだけは変わらないな……』

ピジョットが少し呆れた表情で言った。

「……本当だね」

タクミは小さい頃から、何かこういう凄くショックを受けた時に一人になろうとするんだ。

昔だったら自分の部屋に鍵を掛けて誰も入ってこれないようにしたり……タクミの悪い癖だよ。

苦しかったら、僕やピジョット達にその事を打ち明けてくれれば良いのに……僕達は友達……うんうん、家族同然なんだから。

「……ちよつとタクミに会ってくるね」

僕は皆にそう言った後、目を閉じて意識を集中させ、タクミがいる心の世界へ向かった。

「これは……」

心の世界はタクミの心の影響を受けやすい。
今タクミの心は悲しみで溢れているせいなのか、本来は真っ白な
世界が青く染まっていた。

「タクミは何処だ……」

タクミを捜す為、僕は辺りを見回す。

「……あついた!」

この世界の隅っこで、タクミは体育座りをして俯いていた。

「タクミ!」

僕はタクミに駆け寄る。

「……マコト……なんでだよ……なんでお前がギンガ団なんだよ……」

「タクミ?」

「……なんでなんだよ……マコト……」

僕の声が聞こえてないのか、同じ言葉を何回も呟くタクミ。

「タクミ！」

僕はもう一度、大きな声を出してタクミを呼ぶ。すると、僕の声が聞こえたのか、俯いてたタクミが顔を上げた。

「……ブイゼル……？」

やっと気がついてくれたみたいだね。

「タクミ、こんな所に閉じ籠もってないで外に出ようよ。皆凄く心配してるんだから」

僕はそう言いながら、タクミに手を差し伸べる。だけど、タクミは無言また俯いて黙り込んでしまう。

「タクミ！」

「俺……解んねえんだよ……あいつは俺の幼なじみで、親友で、一緒に国際警察になった仲間だと俺はずっと思ってた……なのに……」

タクミの目から少し涙が溢れてきた。

「……マコトさんが裏切った事がショックなのは解るよタクミ。だけど、ここに閉じ籠もっても何も解決しないよ？」

「……ブイゼル……」

「こっから出ようよ。そして、マコトさんがなんでギンガ団に入ってしまったのか、その理由を聞くんだ。ねっタクミ?」

そう言っつて、僕はもう一度タクミに手を差し伸べる。

「……そうだな……解らないんなら、本人に聞けば良い……ここにいたら、解決出来る物も解決出来なくなっちまう」

さっきまで暗かった表情が明るい表情に変わった。そしてタクミは僕の手をしっかりと握ってくれた。すると、今まで青く染まっていた世界が真っ白な世界に戻っていった……もう大丈夫みたいだね。

「……あの時と同じだな……」

「えっ?」

「前にも似たような事があったんだ。俺が……もう人間に戻れないって解った時、俺はその現実を受け止める事が出来なくてさ……その時、ヒコザルがやってきてさ。たとえ、俺が人間に戻れなくても、俺は俺だって……ヒコザルはそう言っつて俺を励ましてくれたんだ」

そっついえば……そういう事があったね。

「そして今回はブイゼルだ。……俺、いつもお前達に助けられっぱなしだな」

「タクミが苦しがっていたら、助けてあげるのが当然だよ。だって、僕達は友達……うんうん、家族同然なんだからね」

僕は思っている事を正直にタクミに伝えた。

「家族同然……か……ありがとう、ブイゼル」

笑顔で僕にお礼を言ってきたタクミ。また目から涙が溢れてきてる。

「あっタクミ、また泣いちゃったの？」

「べ、別に泣いてねえよ！こ、これは、目にゴミが入っただけだから！」

「タクミ、ここは心の世界なんだからゴミがある訳ないでしょ」

「うっ……」

もう、正直じゃないんだから。でも……タクミらしいよね。

「ほら、早く外に行こう？ 皆待ってるよ」

「嗚呼。^{ああ}行くか！」

僕とタクミは、皆が待つてゐる現実の世界へ戻っていった。

第四十四話 家族（後書き）

ブイゼル

「本当に短いですね（汗）」

面目ない（汗）

ブイゼル

「しかも進展無しときましたね（汗）」

……（汗）

ブイゼル

「頑張つて下さいよ作者さん。この小説を応援してください
読者さんがいるんですから」

はい、頑張ります（汗）

第四十五話 強くなる為に（前書き）

タクミ

「遅い（怒）」

ごめ〜ん（汗）

いやね、全くストーリーが思いつかなくなっちゃってさ〜（汗）

気分転換に完全に小説を忘れて、ゲームしたり映画見たり……あと
は楽しくメールしたり（笑）

したら、完璧に忘れすぎて執筆するのをこの2日間やってませんでした（汗）

タクミ

「……よし、今からあんたを逮捕したる（怒）」

ってなんでそうなる（汗）

第四十五話 強くなる為に

ブイゼルと一緒に精神世界から帰ってきた俺。

帰ってきたら、エーフィや他の皆が心配そうな表情で俺の事を見つめてた。心配かけちゃったから、俺は皆にごめんって言って謝った。

そしたら、いきなりエーフィが俺に飛びついてきてさ……ダーリン心配したんだからね！

……なんて言われちゃったよ。他の皆も今回はエーフィに同感だったみたいで、皆揃って頷く。

……俺ってさ……皆に助けてもらったり、皆に心配掛けたり……迷惑掛けてばかりだな……

俺が精神世界から帰ってきてから翌日の朝。

俺達は完璧に回復した。ずっとベッドの上にいて身体を動かせなかったせいもあるのか、ヒコザルは嬉しそうに飛び跳ねて身体を動かしている。

「お邪魔するわよ」

その時、俺達がいる病室に誰かが入ってきた。

「シロナさん！？ えっなんでシロナさんがここに！？」

俺は思わず声を上げてしまった。やって来たのはシンオウチャンピオンのシロナさんだったんだ。

「ネオ・ギンガ団を壊滅させたってジュンサーさんから連絡があったの。その時、タクミ君がポケモン達と一緒に氷漬けにされたって聞いて、心配になったから来たんだけど……その様子だと大丈夫そうね」

優しく微笑みながらシロナさんはそう言った。

「ええ、ジョーイさんの御蔭です」

「……ねえタクミ君、あなた達を氷漬けにした相手って……もしかしてヒョウガ君のフリーザーじゃない？」

「ヒョウガのフリーザーを知ってるんですか！？」

また俺は声を上げてしまった。

「やつぱり……もちろん知ってるわ。フリーザーはヒョウガ君の手持ちポケモンで最強……そして、ヒョウガ君ともっとも信頼関係が強いポケモンよ」

信頼関係が強い？

「信頼関係が強いつて……ポケモンハンターのあいっとフリーザーが？」

「フリーザーはヒョウガ君がポケモンハンターになる前……まだ純粹なポケモントレーナーだった頃にゲットしたポケモンなのよ」

ヒョウガがポケモントレーナーだった頃……今じゃあ想像つかないけど、あいつにもそういう時期があったんだな。

「ヒョウガ君とフリーザーのコンビは本当に強いわよ。シンオウリーグで彼らと戦った相手ポケモンは一瞬で凍り付く……その戦いから、氷のヒョウガと呼ばれるようになったのよ」

あいつがシンオウリーグに……さっきから驚きの連続だなおい。俺がそんな事を思っていた時、プルプルプルとシロナさんが着ている服のポケットから着信音が聞こえてきた。

「あつちよつとごめんなさいねタクミ君……はいシロナです」

シロナさんはポケギアを取り出して電話に出る。誰からだろう？しばらく話していると、少しずつシロナさんの表情が険しくなってきた。

「……解ったわ。知らせてくれてありがとう」

シロナは電話を切った。

「どうかしました？」

「……ナギサシティで保管されていた金剛玉と白玉をギンガ団に奪われてしまったって……ナギサジムのリーダー、デンジ君から連絡があったわ」

なっ!?

「本当ですか!？」

「ええ……そしてデンジ君は奪われた金剛玉と白玉を取り返す為にギンガ団を追跡してるみたいなの。向かってる先は224番道路らしいわ」

224番道路……そこにギンガ団とマコトが……

「俺達もすぐにそこへ行きましょう!」

「待つて。タクミ君、あなたやあなたのポケモン達には行ってもらいたい場所があるの」

行ってもらいたい場所？

「ギンガ団には今ヒョウガ君がいる。彼とのバトルは避けられないわ……今のタクミ君達じゃ、ヒョウガ君のフリーザーには勝てないわ」

うつ……た、確かに今の俺達じゃあフリーザーには勝てないけど

……

「だから、タクミ君達には強くなってもらう為に214番道路の近くにある送りの泉と呼ばれる場所があるの。そこには強い野生ポケモンがいるからレベルを上げるには丁度良いわ」

送りの泉……だけど……

「でもシロナさん、ギンガ団に金剛玉と白玉を奪われたんですよ？俺達、トレーニングしてる場合じゃ……」

「大丈夫よ。その送りの泉はちょっと特別な場所なの。時間の流れが違うのよ」

時間の流れが……違う？

「どついつ事ですか？」

「理由は良く解らないけど……そこで一日過ごしても、外では一時間しか経過してないのよ。つまり、そこで一週間過ごしても外では半日も経ってないって事」

……良く解らんけど凄いな……

「私はそろそろデンジ君の所に向かうわ。タクミ君、強くなって戻ってきてね」

シロナさんはそう俺に言うと、部屋から出て行った。

「強く……か……」

《どうするのタクミ？》

頭の中でブイゼルの声が聞こえた……フリーザーに勝つ為には特訓するしかないし……俺は行こうと思う、送りの泉に。

《解った。早速出発する？》

そうだな。

「皆、モンスターボールに戻ってくれ」

俺は皆をモンスターボールに戻した。そしてリュックを背負い、俺は部屋を出た。そして外へ出る為に出口に向かって歩いた……

『……ううつ……ど、どうして……』

その時、俺達がいた部屋から少し離れた所にある別の部屋から誰かの泣き声が聞こえてきた。

《誰か泣いてるみたいだねタクミ?》

みたいだな……俺は気になったから、泣き声が聞こえてきた部屋を覗いてみる。そこには、部屋の隅っこで泣いているブラッキーと心配そうに見つめているドラピオン、ドンカラス、マルマイン、ゲンガー、アブソルがいた。

《あのブラッキーって……もしかしてサキ?》

サキの手持ちポケモンがいるから間違いないだろ……プルートに裏切られたのがかなりショックだったんだろ……

「……よう」

俺は部屋に入って、サキに一言そう言った。

『……あんた……』

俺に気づいてサキが振り向く。目からは涙が流れていた。

『……私を笑いに來たの？』

「えっ？」

『今まで信じていたお爺様に裏切られ……こんな姿に変えられた私を笑いに來たんでしょ！？』

怒鳴ってきたサキ。

「……笑いに來る訳ねえだろう……」

『じゃあ何しに來たのよ！？』

「……なんか……ほつとけなかつたんだよ……」

顔を背けながら俺はそう言った。

「裏切られた気持ちは……俺も解るからさ……」

『……同情なんていらないわよ……』

《……タクミ、そろそろ行かないと……》

解ってるよブイゼル。

「……こういう時、なんて言えば良いか解んねえけど……元氣出せよ？　じゃあな……」

俺は部屋から出ようとした。

『……ちよつと待ちなさい……あんた、何処に行くのよ?』

サキに質問された。俺はその問いに答える為、その場で止まる。

「送りの泉つてとこだ。そこで修行する……そして強くなったら、ギンガ団のアジトに乗り込んで奴らを潰す。そして……マコトを連れ戻す」

『……あんたを裏切った奴よ?　なんで連れ戻すのよ?』

「……何故ギンガ団に入ったのか……何故裏切ったのか……その答えを知る為……かな」

『……答え……』

「……じゃ、俺行くから」

俺は今度こそ部屋から出た。

「出てこいピジヨット!」

ポケモンセンターから出た俺はモンスターボールからピジヨットを出した。そして俺はピジヨットの背中に乗る。

「ピジョット、214番道路まで頼むぜ」

『了解だタクミ!』

俺に乗せたピジョットは翼を羽ばたかせ、空へ飛ばうとした。

『待ちなさい!』

な、なんだ？ 俺達は声が聞こえてきた方に振り向く。そこにはサキとサキのポケモン達がいた。

「なんだよ？」

『……私達も一緒に行くわ』

……はい？

「な、なんでだよ？」

『……あんたが言う答え……それがどいう答えになるのか、この目で見たいと思ったのよ……』

なんだよそれ……

「……まあついて来たいなら良いけど……そいつら全員ピジョットに乗せるのは無理だぜ？」

『モンスターボールに入れば問題無いわよ。ちょっと待ってなさいよ、すぐモンスターボールを持ってくるから』

そう言っ^ぽてサキはまたポケモンセンターに戻^{かへ}っていった……やっ
ぱり……サキが何考^{かんが}えてんのか全然解^わらん……

第四十五話 強くなる為に（後書き）

ブイゼル

「作者さん、何故にサキがついてくるんですか？」

うーん……ちょっと無理やり過ぎたかな？（汗）

まだスランプ（タクミのみ）なもんで（汗）

ブイゼル

「しっかりして下さいよ（汗）」

はい（汗）

第四十六話 送りの泉、特訓開始！（前書き）

久しぶりの更新だ〜！

タクミ

「遅えよ（怒）」

ご立腹なようで（汗）

バイゼル

「まあまあタクミ、あんまり怒らないで？ それより作者さん、スランプは脱出出来たんですか？」

微妙（汗）

バイゼル

「……（汗）」

とりあえず今回は僕が得意のバトルシーンを執筆したけど……さて次回はどうしよう（汗）

第四十六話 送りの泉、特訓開始！

ギンガ団のアジトに乗り込む前に送りの泉で強くなるようシロナさんに言われた俺は何故か一緒についてきたサキと共に、ピジョットに乗って送りの泉にやってきた。

「ここが送りの泉か……」

辺りには霧が発生していて遠くの方は全く見えないけど、俺達の前には泉があつた。

『こんな場所があつたのね……つで、あんた達特訓するんでしょ？ まあ適当に頑張つてちょうだい』

そう言つてサキは近くにあつた木の下の木陰へ向かい、そこに座り込んだ。

「なんだよ？ お前は特訓しないのか？」

『なんで私が特訓なんかするのよ？ 私はあんたがどんな答えを見つけるのかをこの目で見たいからついてきただけ。別に特訓する必要なんか無いのよ。それに、面倒だしね』

こいつ……姿がブラッキーでもやっぱ中身はサキだな……

「解つたよ……じゃあ行つてくるから、お前はここで待つてろよ」

俺はサキを残し、野生ポケモンを捜しに向かった。

「……あついた」

早速野生ポケモンを見つけた俺。全身が黒く、一つ目でミイラみたいなポケモン、サマヨールだ。サマヨールはゴーストタイプ……俺の手持ちで相性が良いのはマニニューラだが……それじゃあ特訓にならないしな。

「よし、ここはお前に任せるぜ、頼むぞフライゴン！」

俺はモンスターボールからフライゴンを出した。

「フライゴン、あのサマヨールに向かって竜の息吹きだ！」

『解った！』

フライゴンは口からエネルギー波を吐き出し、サマヨールの足下に向けて放った。

竜の息吹きは地面に直撃して小規模の爆発が発生。その爆発の衝撃でサマヨールは少し後方へ吹き飛ぶ。その後、俺達に気がついたサマヨールは怒った表情をしながら俺達を睨みつけてきた。

「やる気になったみたいだな。フライゴン、今度はサマヨールに直撃させるよ、竜の息吹きだ！」

『いつけえ！』

フライゴンはもう一度竜の息吹きを放った。すると、サマヨールは両手を使って黒いエネルギー弾を作り出し、竜の息吹きに向けて放ってきた。二つの技はぶつかり合い爆発が発生した。

「シャドーボールか……なかなかの威力だな。よし、次は竜の波動だフライゴン！」

『うん！』

フライゴンは口から青色のエネルギー弾を吐き出し、サマヨールに向けて放った。それに対してサマヨールはまたシャドーボールを放ってきた。

二つの技はぶつかり合う……けど、竜の波動の方が威力が上だったみたいで、シャドーボールを打ち消して竜の波動はサマヨールに直撃した。

『へっへっどんなもんだい』

嬉しそうだなフライゴンの奴。だけど……

「油断すんなフライゴン。見る、サマヨールはピンピンしてるぞ」

俺はサマヨールを指しながらそうフライゴンに言った。サマヨールは攻撃を受けてなかったかのようにピンピンしている。

『嘘っ！？ 直撃だった筈だよ！？』

驚くフライゴン。

「サマヨールってのは防御力が高いポケモンなんだ。だから、あれくらいの攻撃じゃあ倒れてくれないさ」

……とは言っても、フライゴンの竜の波動を受けてもけろつとしてるのにはちょっと驚いたな……シロナさんが言ってたように、このポケモン達は確かにレベルが高いみたいだ。

「まだバトルは始まったばかりだ。フライゴン、次は砂嵐だ！」

『解った！ それっ！』

フライゴンは翼を思いっきり羽ばたかせて砂嵐を作り出し、サマヨールに向けて放った。

これでサマヨールはフライゴンの姿を確認しずらくなった筈。

「フライゴン、接近してドラゴンクローだ！」

『うおおおお！』

フライゴンは砂嵐の中に突っ込み、サマヨールに接近していった。この砂嵐の中での奇襲……簡単に避ける事は出来ない筈だ。

しばらくして、砂嵐が収まってきた。

『くっ！ こ、こいつー！』

嘘っ！？ フライゴンのドラゴンクローをサマヨールが受け止めてる！？

俺がその事に驚いている時、サマヨールの目が黒く光り輝き始めた。

なんか技を使うつもりだな！

「早く離れるフライゴン！ 何か仕掛けてくるぞ！」

『解ってるんだけど……このっ放してよ』

掴まれた腕を振り解こうとするフライゴンだけど、サマヨールの力が強いのかなかなか放れない。振り解くのにフライゴンが手間取っている間に、サマヨールの目から黒いエネルギー波が放たれ、フライゴンの腹部に直撃した。フライゴンは大きく後方へ吹き飛ばされる。

「フライゴン、大丈夫か！？」

『痛たたた……な、なんとか大丈夫だよ……でも、効いたよ今は……』

攻撃を受けた腹部を手で押さえながらフライゴンは立ち上がった。今の攻撃はナイトヘッドか……使うポケモンのレベルによって威力が変化する技だけど、あのサマヨールのナイトヘッドは相当な威力だったぞ……

『タクミ……あともう一発あの攻撃を受けたら……僕マズいかも……』

ふらふらになりながらフライゴンはそう言った……どうする？恐らく今のフライゴンに持久戦は無理だ……だとしたら、あの技に賭けるしかないな。まずはあの技を確実に決める為にサマヨールの動きを封じないと。

「フライゴン、砂地獄でサマヨールの動きを封じるんだ！」

『う、うんー！』

フライゴンは右手を強く地面に叩きつける。

刹那、サマヨールの足下の地面に砂地獄が発生、サマヨールの下半身がどんどん砂の中に沈んでいく。

サマヨールは抜け出そうともがくけど、そうすればするほどサマヨールの身体は砂の中に沈んでいく。

「よし、フライゴン！ 最大パワーで竜星群だ！」

『当たれえええー！！』

フライゴンは両手で作り出した無数のエネルギー弾を動けなくなっているサマヨールに向けて放った。フライゴンが放った竜星群は

全てサマヨールに直撃し、大きな爆発が発生した。

爆発で発生した爆煙が収まってきた……サマヨールは目を回して倒れていた。

『か、勝った……』

疲れ果てたフライゴンはその場に座り込んだ。

「お疲れさんフライゴン。ゆっくり休んでくれ」

俺はフライゴンをモンスターボールに戻した。

「さてつと……確かこの中に……」

俺は背負ってたリュックを下ろし、中に入れてあったある物を探す。

確かこん中に入れてた筈……おっあったあった！俺が取り出したのはポケモンの怪我を治す傷薬だ。

「ちょっと染みるけど、我慢しなよ？」

俺はフライゴンとのバトルで怪我したサマヨールに傷薬を使った。やっぱり傷に染みたのか、ちよつと身体をビクツとさせるサマヨール。

「……これで良し。あとは安静にしていれば元気になれるよ。ごめんないきなり攻撃して。でもお前強かったぜ、また何処かで会えたらバトルしてくれな。じゃあな！」

俺はサマヨールにそう言ってその場を後にした。しかし本当にこのポケモンは強いな……この調子でやっていけば、かなりレベルアップ出来る筈。良し、頑張るか！

第四十六話 送りの泉、特訓開始！（後書き）

タクミ

「サマヨール強いなおい（汗）」

こんくらいしないと特訓にならないでしょ？

バイゼル

「それより、サキはなんなんですか（汗）」

見物人…… あっ今は人じゃなくてポケモンか。

第四十七話 進化！ モウカザル、ゴウカザル！ そして…… 前編（前書き）

ブイゼル

「また更新遅くなっちゃいましたね」

すんまそん（汗）

第四十七話 進化！ モウカザル、ゴウカザル！ そして…… 前編

俺達が送りの泉に来て、特訓を開始してから約一週間が経過していた。

確かに一週間が経過した筈なんだが……俺のポケギアに表示されている日付は、俺達がここに到着した日からまだ半日にも満たなかった……最初は故障かと思ったけど、ちゃんと機能してるから故障じゃない。

本当にここは時間の流れが違うんだって事を改めて実感したよ……あれから俺達は様々な野生ポケモン達と出会ってはバトルをする……それをずっと繰り返してきた。

ここの野生ポケモン達は皆本当にレベルが高くて、油断したらこつちがやられそうになる……だけど、そんなバトルを繰り返してきたおかげで俺達は最初の頃よりは強くなれた……と思う、多分……

「ヒコザル、火炎車だ！」

『解った！』

今現在、俺はヒコザルと一緒に鳥ポケモンのムクバードとバトルをしている。特訓の成果なのか、ヒコザルの動きが以前よりも格段に良くなっている。素早い身の熟しこなでヒコザルはムクバードに接近、炎を身体に纏まとい体当たりを直撃させた。火炎車を受けたムクバードは目を回して倒れた。

『やったー！』

バトルに勝った事が嬉しいみたいで、飛び跳ねて喜ぶヒコザル。
その時、突然ヒコザルの身体が目映く光り輝き始めた。

「これは……進化か！？」

光の中で、どんどんヒコザルの姿が変わっていく。身体は一回り程大きくなり、長い尻尾が生え始める。手足も少し長くなっていく……そしてしばらくして光は収まり、ヒコザルの変化も終わった。そこにいたのはヒコザルが進化した姿、モウカザルだった。

『わっ！？　なんか身体が変わっちゃったよ！？』

自分の身体の変化に驚いてるみたいだな。
まあ初めての進化だから無理も無いか。

「おめでとうヒコザル……じゃなくてモウカザル！　ついに進化出来たな！」

俺は笑顔でモウカザルにそう言った。

『ありがとうタクミ。なんだか今、誰にも負ける気がしないよ僕！』

ファイティングポーズを取るモウカザル。
進化した事で気が強くなったかな？

「誰にもか……例えばエーフィにもか？」

『うつ……エ、エーフィ先輩はちよつと……』

あらら……進化してもエーフィだけは苦手なんだなモウカザル。

「まあエーフィは怒ると怖いしな……とりあえず、モウカザルはモンスターボールに戻ってゆっくり休んでくれ」

『うん』

俺はモウカザルをモンスターボールに戻した。
さて、あともう少し特訓を続けるか！

それから特訓を続けて約三時間後……俺達は休憩する為に、サキ達が待っている場所に戻ってきた。

『ふふ、ドラピオンってこんなにお喋りだったのね？』

『そうか？ 俺はいつもこんな感じなんだが？』

戻ってみると、サキが自分のポケモンであるドラピオンとなにやら楽しそうに会話していた。

「なんだか賑やかだな」

『あ、あんた！？　いつ戻って来たのよ！？』

なんだ、会話に夢中で俺達に気づかなかったのか？　ってか、何そんなに驚いた顔してるんだ？

「さっきからいたぞ。それより、腹減っちゃったよ……なんか食い物あるか？」

『ふん、あんた達が食べるような物なんか無い……』

『オレンの実ならあるぞ？』

ドラピオンが俺達の人数分のオレンの実を手渡してくれた。

『ちょっとドラピオン！？』

『サキも相変わらず素直じゃないなあ？　別に良いじゃないか、オレンの実ならこの近くにいっぱいあったんだから』

少し呆れた表情を浮かべるドラピオン。

このドラピオンは良い奴みたいだな。

「サンキュードラピオン。よし、皆出てこい！」

俺はモンスターボールから皆を外に出した。

そして皆にオレンの実を手渡す。

『おっオレンの実か！　いっただっきまゝす！』

カメックスがオレンの実に齧^{かぶ}り付く。
美味そうに食うよなカメックスって。

『あれ？ タクミ、ヒコザル進化したの？』

フライゴンがモウカザルの事を見つめながら俺に質問してきた。

「嗚呼^{ああ}、モウカザルになったんだ」

『へへへ どうですか先輩？ 僕、ちょっと遅^{たくま}くなったでしょ？』

『調子に乗らない！』

あっエーフィが右前足でモウカザルの頭を殴った。

『痛たたた……い、いきなりなんですかエーフィ先輩！？』

『進化したからって凄く強くなった訳じゃないのよ？ あんた、進化したから誰にも負けないかと思ってるかもしれないけど……そんなに甘いもんじゃないんだからねバトルは！』

お………なんかすつごい説得力あるなエーフィ。しかもまさにその通りだし。

『……経験者は語る……だな』

近くにあった木に寄り掛かりながら呟くマニョーラ。

『なんか言った?』

マニニューラを睨みつけるエーフィ。怖いって……

『……い、いや……なんでもない』

エーフィから視線を外し、オレンの実を食べるマニニューラ。さすがのマニニューラも、やはりエーフィが苦手みたいだな。

『ふゝん……あんたのポケモンってなかなか面白いわね』

いつの間にか俺の隣にやってきていたサキがそう言ってきた。

「そういうお前のドラピオンも、なかなか良い奴みたいじゃなか?」

俺は腕組みをしてサキにそう言った。

『それは私のドラピオンですもの。やっぱりトレーナーに似るのよ』

「いや似てないから」

右手を左右に振りながら俺は似てないとはつきり否定する。絶対明らかに似てないし。

『あんですって!?!?』

怒鳴りながら睨んでくるサキ。あゝ……なんか相手にすんの面倒くさいなあ……

「よし、休憩は終わりにしてそろそろ特訓を再開するぞ皆」

俺はサキを無視してこの場から離れようとした。

『って私を無視すんじゃないわよ!?!』

『落ち着けてサキ!』

ドラピオンがサキを止めてくれた。

ドラピオン、ナイスだ! ドラピオンがサキを止めてくれてる間に俺達はその場から離れた。

「さて、どこかに強そうな奴はいないかなあ?」

サキ達と別れ、野生のポケモンを捜している俺達。

『ん? おいタクミ、彼処に洞窟があるぞ』

ピジヨットが見つめる先を俺も見てみると、確かにそこには洞窟があった。あれ? だけど、前に来た時はこんな洞窟無かったと思うんだけど……

《どうするタクミ? 行ってみる?》

頭の中で声が聞こえてきた。ブイゼルか。ちよつと雰囲気的に嫌な感じがするけど……とりあえず行ってみるぞ。

「皆はモンスターボールに戻っててくれ」

俺はピジョット達をモンスターボールに戻した。

《気をつけてよタクミ。危なくなったらすぐに僕と代わって……》
心配すんなよブイゼル。俺だって皆と一緒に特訓して鍛えてきたんだ。

「……よし、行くか」

俺は洞窟の中に入っていった。

「うわぁ……またこりや随分と不気味な場所だな……」

洞窟の中は意外に広がったんだが……なんて言つか、空気が重いつて言うのか……とにかく不気味な感じなんだ。

それにどういつ訳か野生ポケモンになかなか出会わない。

こつこつ洞窟だと、ゴルバットとかがいても良いとは思ってたが

……

「……グルルル……」

……ん？　今なんか声が洞窟の奥から聞こえてきたような……

《タクミ、この先に何かがいるみたいだよ》

みたいだな……だけど、この先は暗くて良く見えないんだよね……
……しょうがない。

「モウカザル、出てきてくれ」

俺はモンスターボールからモウカザルを出した。モウカザルの尻尾の先には炎が灯っているから、暗い所でも良く辺りが見えるからな。

「モウカザル、この先に何かいるみたいなんだ。警戒して進むぞ」

『解った』

俺とモウカザルは一緒に洞窟の奥へと進んでいった。

それからしばらく歩き続けて、俺達は洞窟の最深部と思われる場所にやって来た。そこは今まで通つてきた所と違つて、かなり開けた場所だった。

『あつタクミ、彼処に誰かいるよ?』

モウカザルが指している先を俺は見てみる。

そこにはとても大きな何かがいた……なんだあのデカいのは……ポケモンなのか?

「ちょっと近づいてみるか」

俺達はそのポケモンと思われる奴に近寄っていく。

「……でっけえ……」

近くまでくるとそのポケモンは本当に大きくて迫力があつた。

そのポケモンは6本の足を持った竜脚類のような姿をしていて、黒い翼があり、体色は銀色で頭部や脚の爪、首や脚部には金色のリング状の装飾のような部分があつた。

シンオウ地方にはこんなポケモンがいるのか……

『……何者だ?』

大きなポケモンがゆっくりと俺達の方に振り向いてきた。

《……タクミ、このポケモン強いよ……凄いプレッシャーを感じる

……」

……ブイゼルが言うように、確かに強そうだな……

「お、俺はタクミだ。こっちはモウカザル。ここにはポケモン捜しにきたんだ」

『……人間の言葉を話せるのか貴様？』

あつネックレスを外すの忘れてた！？

『……貴様、ポケモンを捜しに来たと言っていたな？ なんのために捜している？』

「えっ？ あつちょっとバトルでもしようかと……」

『バトルか……ならばその相手、この俺がしてやる』

……はい？ 今バトルすると仰おっしゃった？

「あ、あんたが？」

『そうだ。暇でしょうがないんだ。お前の隣にいる奴と一緒にかかってこい』

そう言ってそのポケモンは戦闘体勢に入る。
何、もうバトルするの決定な訳？

『ど、どうするタクミ？ なんかやる気みたいだよ？』

「どうするって……こうなったらやるしかないだろ。とにかく、あ
つちは俺達二人でも良いって事だから、タッグでやるぞモウカザル
！」

「わ、解った！」

俺達も戦闘体勢に入る。

「まだ俺の名を名乗ってなかったな。ギリティナだ。さあ、いつで
もかかってこい！」

「じゃあ遠慮なくいくぜ！」

バイゼル

「ギラティナが相手ですか……でもなんでいきなりバトルする事になっちゃうんです？」

ずっと破れた世界にいて、相手がいなくてギラティナも暇なんじゃないのかなと勝手に妄想してこういう展開にしたのさ（笑）

バイゼル

「今回はモウカザルでしたから……次話でゴウカザルになるんですか？」

なるね。

第四十八話 進化！ モウカザル、ゴウカザル！ そして……

後編（前書き）

タクミ

「やっとかよ（汗）」

それでも全力で執筆してるのよ（汗）

ブイゼル

「タクミ、作者さんもこう言ってるんだから許してあげたら？」

タクミ

「はあ……まあブイゼルがそう言うなら良いけどよ」

ごめんね二人共（汗）

あっそうだ、現在行っている主人公達の人気投票……激戦ですね。

タクミ

「マジ？」

皆人気が高いみたいなんだよね。タクミも票が集まってるよ。

タクミ

「なんか嬉しいな」

第四十八話 進化！ モウカザル、ゴウカザル！ そして…… 後編

「モウカザル、まずは遠距離攻撃で様子を見るぞ。火炎放射だ！」

『解った！ いっけえええ！』

モウカザルは口から炎を吐き出し、ギラティナに向けて放った。
俺もいくぜ！

「まずはエネルギーを両手に……」

俺は両手にエネルギーを集めるようなイメージを浮かべると、俺の前に小さな水色の丸いエネルギーの塊が出現した。

「少しずつこれにエネルギーを流し込んで……」

さらにエネルギーを流し込んで、小さかった水色の丸いエネルギーを大きくする。

「この集めたエネルギーをキープしたまま……相手に向けて放つ！
水の波動！」

俺は大きくした水色のエネルギー弾をギラティナに向けて放つ。
モウカザルが放った火炎放射と俺が放った水の波動はギラティナに直撃、爆発が発生した。

「良し当たった！」

《もうその技、完璧に使えるようになったみたいだねタクミ》

頭の中で声が聞こえてきた。ブイゼルか……そりゃ今まで、皆と一緒に特訓してきたんだからな。

『……随分と可愛い攻撃だな？』

爆発で発生した爆煙が収まり、中からは全く俺達の攻撃が効いてないのか、平気な顔をしているギラティナが姿を現した。……俺とモウカザルが放った技の効果が無かった？ いや違うな……水と炎の両方が効かないタイプなんていない。

だとすると、その両方の技に対して強いタイプだな……姿からして竜みたいだから、ギラティナはドラゴンタイプって事か？

『次はこちらからいかせてもらっぞ。竜の波動！』

ギラティナは口から淡い水色のエネルギー弾を吐き出し、俺達に向けて放ってきた。

「避けるモウカザル！」

『わわっ！？』

俺は左方向に、モウカザルは右方向に向かって飛び、ギラティナの竜の波動を回避した。

「モウカザル、マッハパンチで攻撃だ！」

『うん！』

モウカザルは素早い身の熟しでギラティナに接近、そして右手で

拳を作り、ギリティナの胸元を思いつきり殴った。ドラゴンタイプ
だけなら、格闘タイプの技でダメージを与える事が出来る……マッ
ハパンチは威力が低いけど、ダメージを蓄積ちくせきさせていけば……

『何か……やったか？』

なっ！？ モウカザルのマッハパンチが直撃した筈なのに、あい
つまるで効いてないみたいな顔してやがる！？ どういう事だ？
ドラゴンタイプは格闘タイプの技に強い訳では無い筈なのに……ま
さか、あいつドラゴンタイプだけじゃないのか？

『嘘、効いてないの！？』

『ふん、俺に格闘タイプの技など無意味だ。くらえ、シャドーボ
ール！』

ギリティナは口から黒いエネルギー弾を吐き出し、モウカザルに
向けて放った。させるかよ！

「アクアジェット！」

俺は全身に水を纏まとい、全速力でシャドーボールに向かって突っ込
み、シャドーボールを吹き飛ばした。

『あ、ありがとうタクミ』

「仲間を助けるのは当然だろ？ 気にすんなよ。それより、次が来
るぞ」

もつすでにギリティナは次の攻撃を仕掛けようとしている。

『これを避ける事が出来るかな？ 竜星群！』

ギラティナは無数の丸いエネルギー弾を作り出し、俺達に向けて放ってきた。それはまるで雨の如く俺達に降り注いでくる。

『ど、どうするのタクミ？』

「決まってるだろ！ とにかく全力で避けるんだ！」

俺とモウカザルは二手に別れ、竜星群を回避する事に集中する。

《タクミ、避けてばかりじゃあいつに勝てないよ！》

そんなの解ってるさブイゼル！ まあ見てなよ！

「……まずは身体の中にエネルギーを溜めるようにイメージ……」

俺は竜星群を回避しながら、身体の中でエネルギーを集め始める。

「……ある程度溜まったエネルギーを爆発させるように、一気に吐き出す！ くらえ、吹雪！」

俺は口から溜め込んだエネルギーを一気に吐き出す。それは冷たい吹雪になってギラティナに向かっていく。

『くっ！？』

俺の攻撃が直撃したのか、吹雪でギラティナの姿が見えなくなった。

『タクミ、一体いつの間に吹雪が使えるようになったの?』

近くまできたモウカザルが俺に質問してきた。

「正直に言つと……今初めて成功した」

マニュアルにやり方を教わつてはいたけど……実戦で使うのは今日が初めてなんだよな。

『ぶつつけ本番で成功させちゃうなんて凄いよタクミ!』

「そ、そうか?」

な、なんか……そう言われると照れるなあ……

《ほらタクミ。まだギリティナが倒れたのか解らないのに油断しちゃダメだよ》

わ、解ってるよブイゼル……俺はギリティナが倒れたのかを確認しようとした。

「……つてあれ?　ギリティナが……いない?」

俺が吹雪を放った時まで確かにそこにいた筈のギリティナがいなくなっていた。

「一体何処へ……?」

俺とモウカザルはギリティナを捜す為に辺りを見回す。

『……何処を見てる?』

突然俺達の背後から声が……ゆっくりと振り向くとそこにはギラティナがいた。

「なっ!？」

『吹き飛ば……波動弾!』

ギラティナは口からエネルギー弾を吐き出してきた。俺達は回避する事が出来ず、ともに受けてしまい後方へ吹き飛ばされた。

「痛っ!？」

《タ、タクミ大丈夫!？》

な、なんとか大丈夫だ……けど、結構効いたぜ……

「お、おいモウカザル、大丈夫か？」

『う、うんなんとか……』

モウカザルはゆっくりと起き上がった。

『ほう……俺の波動弾を受けてもまだ立てるか。久しぶりに骨のある奴に出会えたって訳だな……ならば、本気でやらせてもらおうか。シャドーダイブ!』

そう言った刹那、ギラティナはまるで影そのものになったかのよ

うにその場から姿を消した。

「な、なんだあの技!?!」

『ぐあつ!?!』

その時、隣にいたモウカザルがいきなり吹き飛んだ。

「モ、モウカザル!?!」

俺はモウカザルの所に駆け寄ろうとした。

「ぐつ!?!」

だけど、突然俺は前から何かに突進されたような衝撃を受け、後方へ吹き飛ばされてしまった。

「くつ……ど、どうなってんだよ……」

『これが俺のシャドーダイブだ』

誰もいなかった場所に、突然ギリティナが姿を現した。

『相手から見えないように完全に姿を消し、そのまま相手を攻撃するのがシャドーダイブ……そしてこの俺だけが使える技だ』

シャドーダイブ……完全に姿を消した状態で攻撃が出来るだ……
…厄介な技だな……

「凄い技だな……」

一言そう言つて、俺はゆっくりと起き上がる。

『……まだ起き上がれるか』

「これくらいで倒れてられないんだよ……俺には……俺達には、倒さなきゃならない敵がいるんだからな」

ヒョウガを……ヒョウガのフリーザーを倒す為には……このギラティナを倒せるくらいにならないといけないんだ！

『……意気込みは良いが……そんなふらふらした身体で何が出来る？』

……確かに、今の俺は立ってるのがやつとの状態だ……だけど！

「やってみなけりゃ解らねえだろ！ アクアジェット！」

俺は力を振り絞り、アクアジェットでギラティナに突っ込んでいく。

『シャドーダイブ！』

俺のアクアジェットが当たる寸前で、ギラティナの姿が完全に消えた。

「またかよ！？ わわ！？」

もうそこにはギラティナがいなかったみたいで、俺はそのまま壁にぶつかった。

「痛っ……くそ、あいつは何処いった？」

『ここだ。シャドーボール！』

俺の背後にギリティナが姿を現し、シャドーボールを放ってきた。この奇襲に俺は回避する事が出来ず、ともにシャドーボールを受けてしまった。

「がはっ！？」

後方に大きく吹き飛ばされた俺は壁に激突、その場に倒れ込んだ。

「くっ……」

『これで終わりだ』

俺の目の前までギリティナがやってきて、シャドーボールを放とうとしている……やばいなこりゃ……

『火炎放射！』

突然、何処からか放たれた火炎放射がギリティナの背中に直撃した。

『タクミは……やらせないよ！』

モウカザル……

『お前もまだ動けたか……まだ諦めないつもりか？』

『当たり前だよ……僕達は強くなる為にここに来たんだ……だから、
そう簡単に負けられないんだよ!』

モウカザルが力強くそう言った刹那、モウカザルの身体から眩しい光が発せられた。

「この光は……まさか進化!? まだモウカザルになったばかりなのに!？」

俺が驚いている間に、モウカザルの身体がどんどん変化していった。

まず体長がどんどん大きくなっていき、手足も長くなっていく。
尻尾に灯っていた炎は無くなり、代わりに頭から炎が灯り始めた。
そして身体に白い体毛が生えていき、そこで変化が終わった。
そこにいたのはモウカザルから進化したポケモン、ゴウカザルだった。

『進化だと?』

『……いくぜギラティナ……火炎放射!』

ゴウカザルは口から火炎放射を吐き出した。

その炎はモウカザルの時とは比べ物にならないくらい強力で、火炎放射を受けたギラティナは表情を歪める。

『くっ!? 進化した事で大幅にパワーアップしたか!?』

『まだまだいくぜ!』

ゴウカザルは再び火炎放射を放つ。

『調子に乗るな！ シャドーボール！』

それに対してギラティナはシャドーボールで迎え撃った。二つの技はぶつかり合い、爆発が発生した。

「ゴウカザル……あいつが頑張ってるなら、俺だって……」

ゴウカザルと一緒に戦おうと思い、俺は起き上がろうとする。だけど、ダメージが大きかったせいか思っように身体が動かなかった。

《タクミ、僕と代わって！ もうこれ以上は無理だよ！》

……無理じゃねえよ。まだ、俺はやれる……いや、やんなきゃならねえんだよ。

《タクミ……》

今まで俺は、ずっとブイゼルや他のポケモン達に助けてもらってばかりだった……いつまでも助けてもらってばかりじゃダメなんだよ……今度は、俺がお前達を助ける番だ！

「動きやがれ……俺の身体！」

気合いを入れ、俺はなんとか立ち上がる……だけど、まだふらふらしている。

「くそ……俺は……俺は、こんなところで負けられねえんだよ！」

絶対に勝つ！ 俺がそう強く思った時、突然俺の身体から眩しい光が発せられた。

「えっ？」

《これって……もしかして進化！？》

俺達が驚いている間に、身体がどんどん変化していく。体長が大きくなり、両腕から出ている魚の鰭ひれのような物が少し大きくなる。そして首周りにある黄色い浮き袋のような物がどんどん発達していき、腰のあたりまで伸びてきた。しばらくすると俺の変化は終わり、光も消えていた。

「この身体……」

俺は改めて変化した自分の身体を確かめる。

《タクミ、僕達ブイゼルからフローゼルに進化しちゃったみたい》

あ、嗚呼ああそうみたいだな……まさか、俺がフローゼルに進化するなんて夢にも思わなかったよ……だけど、なんだか身体に力が溢れてくる感じがだ！

《いける？》

嗚呼、これならいける！ 待ってるよゴウカザル！

「アクアジェット！」

俺は再び、アクアジェットでギラティナに向かって突っ込んでいき、ギラティナの背中にアクアジェットを直撃させた。

『ぐっ！？ お、お前まで進化したのか！？』

「勝負はこつからだぜギラティナ！ ゴウカザル、しっかり俺のスピートについてこいよ！」

『了解だぜタクミ！』

俺とゴウカザルは二手に別れて素早く動き、ギラティナを攪乱かくらんさせようとした。

『シャドーボール！』

ギラティナは俺達に向かってシャドーボールを連発してきたが、今の俺達のスピードは進化前よりも格段に上がっている。余裕で俺達はシャドーボールを回避した。

『今度はこっちの番だぜ！ フレアドライブ！』

ゴウカザルが火炎車よりも強力な炎を身に纏ってギラティナに進み、ギラティナの胸元に直撃させた。ゴウカザルに進化した事で、新しい技を覚えたんだなあいつ。

『くっ……まだその程度では俺はやられん！』

「だったらこいつでどうだ？ 水の波動！ そして吹雪！」

俺は水の波動を放った後、それに吹雪をぶつける。吹雪を受けた

水の波動はあつという間に凍りつき、大きな氷の塊になった。

「疑似アイスボールの完成ってな！」

俺が作り出したアイスボールは、さっきゴウカザルのフレアドライブがヒットしたギリティナの胸元に直撃した。

「がっ！？」

俺のアイスボールを受け、苦痛で表情を歪めるギリティナ。同じ所を攻撃されれば、そりゃ効くよな。

「ゴウカザル、次で決めるぞ！」

「解った！」

俺達はギリティナに向かって突っ込んでいく。

「水の波動！ さらにアクアジェット！」

「フレアドライブ！」

俺は水の波動のエネルギーをアクアジェットの水と同化させて強化、ゴウカザルは最大パワーのフレアドライブを使う。

俺達の全力の攻撃がギリティナに直撃する。

「これで！」

「決まれえええ！」

俺達の全力の攻撃を受けたギラティナは大きく後方へ吹き飛び、その巨体を壁に激突させた。

「はあ……はあ……も、もう限界だ……」

疲れ果てた俺はその場に座り込む。

『お、俺も限界……』

ゴウカザルも座り込む。

「はあ……しかし驚いたぜ？ 進化したばかりだったモウカザルがゴウカザルになるなんてさ」

『それを言うなら……タクミがフローゼルに進化した事にも驚きだぜ？』

少し笑みを浮かべながらゴウカザルはそう言った。ってか今気づいたけど、こいつ進化した事で口調変わってないか？

「なんか雰囲気変わったなお前？」

『そうか？ 俺は身体が変わった以外は前と同じだと思うが？』

「いやいや、一人称が僕から俺になってるだろ」

《って指摘するのそこ？》

バトルに勝てて、一気に緊張が解けた俺達は笑いながら会話する。

『…………お前達…………』

…………ん？　今なんかやたらと低い声が聞こえたような…………

「今のゴウカザル？」

『いや俺じゃねえよ』

じゃあブイゼル…………じゃなくてフローゼル？

《僕な訳無いでしょ》

…………つつ事は…………俺はゆっくりと振り向く。

そこには、倒したと思っていたギラティナが立っていた。

「…………げっ！？」

まだ倒れてないのかよこいつ！？　やばいぞ…………もうこれ以上戦える体力なんか…………

『そんなに驚くな。バトルはもう終わりだ』

「…………えっ？」

『だからバトルは終わりだと言ったんだ。お前達の勝ちだ、久しぶりに良いバトルをさせてもらったぞ』

^{さすが}清しい表情でそう言うギラティナ。ってかさ、俺達とあんだけのバトルしたのにこいつ息一つ乱してないんすけど…………

『タクミ……と言ったな？ お前が言う倒さなきゃならない相手……倒せると良いな。じゃあな』

そう言っただけで、タクミは俺達に背を向け、何処かへ行こうとした……っけかもう行っちゃったの！？

『……おっと、忘れるところだった』

急にタクミは立ち止まり、俺達の方に振り向く。

『受け取れタクミ』

タクミは光のエネルギー弾を作り出し、俺の方へ向けて放つ。その光のエネルギー弾はゆっくりと俺の所へ来て、目の前で浮遊する。

俺はそのエネルギー弾に手を触れる……すると光は消え、何か宝玉のような物が出現した。

「な、なんだこれ？」

『……困った時にそれを使え。きっとお前達の助けになる。じゃあ、頑張れよ』

俺に宝玉を渡し、タクミは何処かへと行ってしまった。

第四十八話 進化！ モウカザル、ゴウカザル！ そして…… 後編（後書き）

タクミ

「なんか進化しちゃったな、俺達」

フローゼル

「びっくりしたよね（汗）」

いつかは進化させようと思ったからね。

タクミ

「なあ、ギラティナがくれたあの宝玉、あれ何？」

ギラティナも言ってたけど、君達の助けになる物だよ。

第四十九話 最終調整（前書き）

やっと出来た（汗）

あゝ予定では昨日投稿する筈だったのに（汗）

フローゼル

「まあ作者さんは予定通りに行動出来た事がないですからね」

そついう事言わないでよフローゼル（汗）

第四十九話 最終調整

送りの泉で見つけた洞窟の中で、ギラティナという大きなポケモンに遭遇した俺。成り行きでギラティナとバトルする事になったんだけど、こいつがハンパなく強くてさ……俺とモウカザルの二人掛かりで戦っても全く歯が立たなかったんだ。

もう少しで俺達はやられそうになったんだが……モウカザルはゴウカザルに、ブイゼルの俺はフローゼルに進化したんだ。進化した事で大幅にパワーアップした俺達はギラティナを攻撃、一気にバトルを終わらせる事が出来た。

バトルが終わった後ギラティナは俺に不思議な宝玉を渡し、そのまま何処かへと行ってしまった。その後俺はゴウカザルと一緒にサキ達が待っている場所に戻った……そこで俺とゴウカザルが進化した姿を見て、サキやエーフィ達がかなり驚いていたみたいけどな。

ギラティナとのバトルから一週間が経過した。

俺のポケギアで外の世界ではどれだけ時間が経過したのかを確認してみたんだが……まだ外の世界では十時間しか経過してないみたいだ。本当に不思議な場所だぜこは。

『いくぜエーフィ先輩、火炎放射!』

『進化したからって、私に勝つには十年早いわよ！ サイコネシス！』

あれから俺達はずっと特訓を続けてきた。

最初来た時に比べれば、俺達はかなりレベルアップする事が出来た。

今は皆がどれだけ強くなっているのかを確認する為、それぞれにバトルをさせているところなんだ。んで、今バトルしてるのはゴウカザルとエーフィなんだが……かなり白熱したバトルになってるな。ゴウカザルが放った火炎放射をエーフィがサイコネシスでコントロール、火炎放射をゴウカザルに跳ね返しやがった。

『おっと！』

跳ね返された火炎放射を、ゴウカザルは高くジャンプする事で回避した。進化した事でパワーだけでなく、身体能力もかなり向上したみたいだな。

『がら空きだぜ先輩！』

ゴウカザルは素早い身の熟^{こな}しでエーフィに接近していく。

『マッハパンチ！』

『ナメるんじゃないわよ！ リフレクター！』

ゴウカザルが右ストレートで攻撃しようとした時、エーフィは自身の前にオレンジ色をしたエネルギーの壁を作り出した。ゴウカザルの攻撃はその壁に阻まれて、エーフィに直撃させる事が出来な

った。

『くっ！』

ゴウカザルは体勢を立て直す為にバックステップしてエーフィから離れる。リフレクターは自身が受ける物理攻撃の威力を半減させる効果がある技だが……あの様子じゃあ半減どころかダメージを受けてないな。

さすがエーフィ、リフレクターで守ると同じ事をやりやがった。

『ふ〜ん……あんたのエーフィ、結構やるじゃないのよ』

不意に隣から声を掛けられた。俺が横に顔を向けるとそこにはブラッキーの姿になっているサキがいた。

「そりやどうも」

『まっ私のドラピオンに比べればまだまだだけどね』

……なんなんだよこいつ……まあ良いや、いつもの事だし。

「……なあサキ、一つ聞いて良いか？」

『な、何よ急に？』

少し首を傾げるサキ。

「前に言ってたよな。俺が求める答えがどういつものになるのかを見るってさ。……お前はその答えを見た後、どうするつもりなんだ？」

『……さあね。とりあえずドラピオン達と一緒に何処かに行こうかしら』

そう言いながら、サキは空を見上げる。

「お前、警察に行くとかそういう考えは無いのかよ？」

『無いに決まってるじゃないのよ。捕まるのなんてまっぴら御免だわ』

言い切ったよこいつ……

『そういうあんたはどうするのよ？』

「何が？」

『あんたのお友達を連れ戻して、ギンガ団を壊滅させた後あんたはどうするのかって聞いてんの。そのフローゼルの姿で国際警察なんて出来るとは私には思えないし』

……そういえば考えてなかったな。今までマコトやギンガ団の事で頭がいっぱいだっただから……

「……まだ解んないな。まあ、それは今起きてる問題が全部解決した後を考えるさ」

『あんた、意外とアバウトなのね？』

「うるせえよ」

『お二人さん、話してるとこ悪いがちょっと良いか?』

俺とサキが会話している時、サキのポケモンであるドラピオンが割って入ってきた。

「どうした?」

『いやさ、あのゴウカザルとエーフィのバトルを止めなくて良いのかな〜って思ってたさ』

ゴウカザルとエーフィのバトルを? 俺は気になったからゴウカザル達の方に振り向く。

『俺はもうエーフィ先輩には負けねえ! 火炎放射!』

『後輩のくせに生意気なのよ! シャドーボールからサイコキネシス!』

あつ……あいつら練習試合なのにマジでやりあってる。

「お、お前らそこまでだ! バトルを中止しろ!」

俺は慌ててゴウカザル達の所へ駆け寄り、バトルを中止するように言う。

『止めんなタクミ!』

『そうよ! いくらダーリンの言う事でも、このバトルだけは続けるわよ!』

あゝこいつら頭に血が上ってるよ……はあ、しゃあないな。

「水鉄砲！」

俺は口から水を勢い良く吐き出し、ゴウカザルとエーフィにぶつける。

『うわ冷たっ！？』

俺の水鉄砲を受け身体が濡れてしまったゴウカザル達は、身体に付いた水を弾く為に身体を震わせる。

「頭は冷えたかお前ら？　これから俺達はギンガ団の連中と戦わなきゃならねんだぞ？　マジでバトルして、もしここで怪我でもしたらどうすんだよ？」

『……じ、ごめんなさい……』

『……わ、悪かったよ……』

反省してくれたみたいで、ゴウカザルとエーフィは俯きながら俺に謝ってきた。

「まあ解ってくれたなら、それで良いよ。……よし、とりあえず皆休憩にしようか」

バトルを一旦中止し、皆で休憩する事にした。

《ねえタクミ、彼がゴウカザルに進化してから、かなり彼の事を意

識してるよねエーフィ?》

頭の中で声が……フローゼルか。まあ、エーフィって何気に負けず嫌いなタイプだろ?

だから、自分よりも弱かったヒコザルが最終進化系であるゴウカザルになって一気に強くなったあいつに負けたくないって思うから、自然と意識しちゃうんだと思うぜ?

《なるほどね……あっそういえばタクミ、僕達はいつここを出発するの? いくら外の世界とこの時間の流れが違うからって、あまり長くここにいる訳にはいけないでしょ》

解ってるさフローゼル。明日の朝には、ここを出発するつもりだ。

《明日の朝……じゃあ、いよいよなんだね》

嗚呼……待ってるよヒョウガ。

絶対にお前を倒して、マコトを連れ帰ってやるからな!

第四十九話 最終調整（後書き）

フローゼル

「次回で敵のアジトに殴り込みですか？」

予定ではね。

フローゼル

「……じゃあ次回は殴り込みは無いですね」

何故そうなる！？

フローゼル

「前書きで言ったでしょ？ 作者さんは予定通りに行動出来ない人ですから」

……酷いよフローゼル（汗）

第五十話 ギンガ団アジトへ！（前書き）

やっと出来た……毎回苦勞するな〜タクミには（汗）

タクミ

「おい、もうちょい頑張れよ（怒）」

へ〜い（汗）

第五十話 ギンガ団アジトへ！

最終調整を終えた次の日の朝。俺達はギンガ団のアジトがある24番道路に向かう為に出発の準備をしていた。

「ポケモン達が傷ついた時に使う回復の薬だろ……あとはバトルに使う道具に……」

一応道具の整理とかしておかないと、いざという時にすぐ出せないからな。

「あんた、いつもそんなにたくさん道具を持ち歩いてるの？」

俺の隣でこの作業を見ていたサキが質問してきた。

「嗚呼^{ああ}、まあな。トレーナーとしてはこれは普通だろ？」

「トレーナーならね。今のあんたはポケモンのフローゼルじゃないのよ」

「……そりゃそうだけどさ、何もしないよりはマシだろうよ？」

「まあ、あんたの好きにすれば良いんじゃないの？」

……いつもの事だけど、本当こいつの事が良く解らねえ……

「……あら？ 何よこれ？」

あっサキが勝手に俺の荷物を荒らしてる……ってこらー！？

「せつかく整理したのに勝手に触んなよ!？」

『何よ減るもんじゃあるまいし……あら、これって手錠じゃないの』

また勝手に……はあ、もういいや……

「そうだ。国際警察なんだから、手錠位持ってるさ」

『でもこの手錠使った形跡が無いわね？ ピカピカの新品って感じだし……あんたこれ使った事あんの？』

「無い」

俺ははっきりとサキに言ってやった。

『無いって……じゃあどうやって犯人捕まえてんのよ?』

「フライゴンに犯人を取り押さえてもらったり、マニュアルの手刀とかエーフィのサイコネシスで犯人を気絶させたり……まあいろいろだな」

『ほとんど力業ちからわざね……』

少し呆れた表情を浮かべるサキ。

「悪かったな力業で」

そう言った後、俺はまた道具の整理をし始める。

それからしばらくして、俺はようやく道具の整理を終えた。道具の整理を終えた後、俺はピジョット以外の皆をモンスターボールに戻す。

それから俺はピジョットの背中に乗る。

「早く乗れサキ。出発するぞ」

『言われなくても解ってるわよ』

サキもピジョットの背中に飛び乗る。

「よしピジョット、全速力で頼むぜ！」

『了解だ！　しっかり掴まってるよ二人共！』

ピジョットは力強く翼を羽ばたかせて空へ上昇、そして目的地の224番道路へ向かって飛んでいく。特訓の成果なのか、ピジョットのスピードは以前よりも格段に上がっていた。

『…………ん？　おいタクミ、あれはなんだ？』

飛行中、何かを見つけた。ピジョットが俺にそうやってきた。ピジョットが見つけている物を俺も見てみる。

「あれは……爆煙か？　おいおい、224番道路付近じゃねえかよ」

俺達が目指す224番道路付近で黒い煙が上がっていた。確か、シロナさんやジムリーダーのデンジさんがギンガ団を追いかけてた筈だけど……戦闘になっちまったのか？

「なんか嫌な予感がする……ピジョット、急いでくれ！」

『解った！』

爆煙が上がっている224番道路に向かってピジョットはさらにスピードを上げた。

「あれは……シロナさんだ！　他にも何人かいるみたいだな……」

224番道路の上空に来た俺達。地上ではシロナさんと隣にいる男の人……多分デンジさんだと思うけど、その二人と他に一緒にいるジュンサーさんら警察の人達でギンガ団のサターンやマーズとその部下達らとバトルしていた。

「マコトは……いないみたいだな……」

辺りを見回してみたが、マコトやヒョウガの姿は無かった。

『どうするんだタクミ?』

「……今はとにかく現在の状況を確認しないとイケないな……ピジヨット、シロナさんの所へ降りてくれ」

『解った』

ピジヨットはゆっくりとシロナさん達の所へと降下を始める。

「シロナさん!」

ある程度降下したところで俺はシロナさんに声を掛ける。シロナさんは俺の声に気づいてこっちに振り向く。

「フローゼル?もしかしてタクミ君?」

「そうです。今は一体どういう状況なんです？」

俺はシロナさんに現在の状況がどうなっているのかを聞く。シロナさんはバトルしているガブリアスとルカリオに指示を出しながら俺に状況を説明してくれた。

シロナさんが言うには、一度は白玉と金剛玉を所持していたジューピターというギンガ団幹部を追い詰めたみたいなんだが……途中で援軍としてサターンやマーズとその部下、それにマコトやヒョウガらもやって来たらしい。

だけど、マコトがヒョウガと一緒にサターン達から白玉と金剛玉を強奪、アジトの中へと逃げ込んでロックを掛けて中に入れないようにしてしまったみたいなんだ……このシロナさんの話からするとマコトはギンガ団を裏切って何かをしようとしているみたいだけど……一体何をしようとしているんだマコトの奴？

「タクミ君、ここは私達が引き受けるから、あなたは中にいるヒョウガ君達から白玉と金剛玉を取り返して！」

「解りました。ピジョット、一旦上空だ！ 空からアジトに侵入出来そうな場所を探すぞ！」

『了解！』

ピジョットは再び空高く上空、アジトの周りを旋回し始める。

「何処か侵入出来そうな場所は……」

俺達はアジトの中に侵入出来そうな場所を探した……だが、そう簡単には見つからなかった。

『侵入出来そんな場所なんて何処にも無さそうよ？ どうすんのよ？』

首を傾げながらサキが聞いてきた。侵入出来そんな場所が見つからない……だったら……

「フライゴン！」

俺はモンスターボールからフライゴンを出した。見つからないのなら、侵入出来る場所を作れば良い。

「フライゴン、壁に穴を開けるんだ！ 破壊光線！」

『解った、いつけえええ！』

フライゴンは口から強力な光線を吐き出し、アジトの壁にぶつけた。

フライゴンの破壊光線が直撃した瞬間爆発が発生、アジトの壁に大穴を開けた。

「よし、ナイスだフライゴン！」

『力業ね……』

「細かい事は気にすんなよサキ。それより、侵入だ！」

フライゴンが開けた穴から俺達は中に侵入していった。

なんとかアジトの中に侵入する事が出来た俺達。そこで見た光景は、嚴重そうな分厚い扉の前で腕組みをして立っているヒョウガの姿だった。

「ヒョウガ！」

「あん？ 喋るフローゼルだあ？ まさかてめえ、あん時に俺様のフリーザーにやられたタクミって野郎か？」

だるそうな感じで言うヒョウガ。

「だったらどうなんだ？」

「ほう……俺様のフリーザーの技で凍り漬けになりながら助かったのか……運の良い野郎だぜ。……てめえ、この先にいるマコトに用があんだろ？」

親指で後ろの扉を指差しながらヒョウガは俺にそう言うてきた。

「その先にマコトがいるんだな？」

「^{ああ}嗚呼いるぜ。今は金剛玉からディアルガのエネルギーを抽出するとか言って、訳解らねえ実験をしてるけどな」

金剛玉からディアルガのエネルギーを抽出？

「どういう事だ？ マコトは一体何をしようとしてるんだ？」

「んなもん俺様が知った事かよ。俺様はただ金を貰って雇われてるだけだから……雇い主が何をしようが、俺様には関係ねえ事だ」

そう言ってヒョウガはモンスターボールを手取る。

「金で雇われたからには、仕事はきっちりやるぜ。ここから先には誰も通すなと言われてんだ……てめえら、まとめて俺様がぶっ潰してやんよ！」

この先にマコトが……だったら、目の前のこいつを倒してマコトの所へ行つてやる！

「以前の俺達と同じだと思ふなよ！ 勝負だヒョウガ！」

「へっかかってきな！」

第五十話 ギンガ団アジトへ！（後書き）

タクミ

「ヒョウガとバトルか……リベンジしてやる！」

……さて、もう寝ないと朝の仕事に影響が（汗）
じゃあタクミ、もう僕寝るからあとよろしく。

タクミ

「っておい！？ ……行っちゃったよ（汗）よろしく言われても何
すりゃ良いんだよ（汗）」

フローゼル

「僕達がヒョウガに無事勝てるよう、皆さん応援して下さい。よろ
しく願います」

タクミ

「あつ良い感じに終わらせやがった（汗）」

第五十一話 タクミVSヒョウガ！（前書き）

タクミ

「ん？ 次はアスカ先輩達じゃなかったのか？」

そうなんだけど、ある程度タクミのストーリーを進めておこうと思
ってね。それに思いついたストーリーを忘れるといけないからさ（
汗）

第五十一話 タクミVSヒョウガ！

「出てきなユキノオー！ ユキメノコ！」

ヒョウガは二つのモンスターボールからユキノオーとユキメノコを出してきた。ダブルバトルか……相手は氷タイプだから、セオリー通りでいけばここはゴウカザルを出すところだが……ヒョウガにはフリーザーがいる。

あのフリーザーに唯一対抗出来るのはゴウカザルだけ。フリーザーが出るまではゴウカザルは温存だな……だとしたら、あの二人の出番だな。

「サキ、危ないから離れてろ」

『言われなくてもそうさせてもらっわよ』

サキは安全な場所まで離れた。

「頼むぜマニニューラ！ カメックス！」

俺は二つのモンスターボールを手に取り、中からマニニューラとカメックスを出す。マニニューラのスピードなら奴らの攻撃は上手く回避出来る筈だし、カメックスのパワーならユキノオーにも負けない筈……

「二人共、頼むぜ」

『……あゝ
嗚呼』

『おう、任しときなタクミ!』

親指を突き立てて言うカメックス。

「ユキノオーはカメックスにウッドハンマー、ユキメノコはマニニューラに10万ボルト!」

ユキメノコが頭部にある氷の結晶のような角から電撃をマニニューラに飛ばし、ユキノオーがカメックスに接近してきてその太い腕をハンマーのように振り下ろして攻撃しようとしてきた。

「カメックスは守る、マニニューラは高速移動だ!」

俺の指示でカメックスは自分の身体をエネルギーの壁で覆いウッドハンマーをガード、マニニューラは高速移動で素早く動いて10万ボルトを回避した。よし、次は反撃だ!

「カメックスはユキノオーにラスターカノン、マニニューラはユキメノコに辻斬りだ!」

カメックスは口から銀色のエネルギー弾を吐き出し、マニニューラはユキメノコに素早い身の熟^{こな}しで接近、両手の鋭い爪で攻撃しようとした。

「ナメるな! ユキノオーは氷の飛礫^{つぶて}、ユキメノコは影分身!」

至近距離で放ったラスターカノンを、ユキノオーは両手で作り出した氷のエネルギー弾で相殺、ユキメノコは無数の分身を作り出してマニニューラを攪乱^{かくらん}、辻斬りを決められないようにした。やっぱり簡単には決まらないか……

「ユキノオー、ウッドハンマーで決めてやれ！」

「負けるなカメックス！ ロケット頭突きだ！」

『くらいやがれ！』

カメックスはもの凄い勢いでユキノオーに頭から突っ込んでいった。

カメックスのロケット頭突きとユキノオーのウッドハンマーはお互いに直撃、後方へ大きく吹き飛ばされて地面に倒れ込む。……カメックスもユキノオーも目を回している。

「相打ちか……マニニューラ、高速移動で移動しながら全部のユキメノコに辻斬りだ！」

『……了解した！』

せめてこれでユキメノコだけでも倒せれば、こっちが少しは有利になれる……マニニューラは高速移動で素早く動きながらたくさんのユキメノコに辻斬りを決めていく。

攻撃を受けたユキメノコの分身はどんどん消えていき、ついには一体にまで減らす事が出来た。

『……貴様が本物か！』

マニニューラが最後の一体に接近していく。

「……へっユキメノコ、道連れを使え！」

なっ道連れだと!?

「攻撃を止めるんだマニニューラ!？」

俺が叫んだ時にはもう遅かった。マニニューラの辻斬りを受けたユキメノコは宙に浮く。

そして地面に身体をぶつけ、目を回して倒れるユキメノコ。

『くっ……』

その刹那、マニニューラまで目を回して倒れてしまった。

道連れは自分が戦闘不能になると、相手も戦闘不能にする技……まさかそんな技まで使えるなんてな……

「戻れカメックス、マニニューラ」

「てめえらも戻れ」

俺達は倒れてしまったポケモン達をモンスターボールに戻した。

これで俺の手持ちで戦えるのはフライゴンにゴウカザル、エーフィにピジョット……あとは俺自身を合わせれば五人か……フライゴンとピジョットではヒョウガの氷タイプのポケモンと相性が悪い……ここはエーフィと俺がやるべきか？

「少しはやるようになったみてえだなあ？……だが調子に乗るのはそこまでだぜ」

ヒョウガが一つのモンスターボールを握りしめる……来るか？

「出てきな、俺様の最強のポケモン……フリーザー!」

ヒョウガは握りしめたモンスターボールを宙に向けて投げる。モンスターボールは開かれ、白い閃光と共に中からフリーザーが現れた。

「出たな……フリーザー……」

やっぱり凄いプレッシャーを感じるぜ……どうする？　ここは一気にゴウカザルで攻めるか……それともゴウカザルは温存してエーフィ達で少しでもフリーザーの体力を削るか……いや、ここはゴウカザルに任せよう。あの扉の向こうでマコトが何かをしようとしている……早くマコトを止めないと！

「あとはお前に任せたぜ……頼むぜゴウカザル！」

俺はモンスターボールからゴウカザルを出す。

「頼むぞゴウカザル、火炎放射だ！」

『任せろ！　いつけえええ！』

ゴウカザルは口から強力な炎を吐き出し、フリーザーに向けて放った。

「フリーザー、吹雪でそんな炎吹き飛ばせ！」

フリーザーは翼を羽ばたかせて強力な吹雪を発動させた。ゴウカザルの火炎放射は吹雪に阻まれ、フリーザーに届く前に打ち消されてしまった。

「なら接近戦だ、マツハパンチ！」

ゴウカザルは素早い身の熟しでフリーザーに接近、右ストレートをフリーザーに直撃させようとする。

「リフレクターを使い！」

マツハパンチが直撃する寸前でフリーザーは自身の周りに淡いオレンジ色をしたエネルギーの壁を作り出した。

ゴウカザルのマツハパンチはリフレクターを殴る形になり、フリーザー自身にはあまりダメージを与えられなかった。

リフレクター……厄介な技だ。これでしばらくこっちの物理攻撃の威力が半減させられる。

瓦割りでも使えば良いけど、ゴウカザルは瓦割りを覚えてないし……ここはリフレクターの効果が終わるまで、遠距離で攻撃するしかないな。

「ゴウカザル、火炎放射！」

ゴウカザルは一旦フリーザーから離れ、もう一度火炎放射を放つ。

「吹雪だ！」

だが、またしてもフリーザーの吹雪でゴウカザルの火炎放射は防がれてしまった。あの吹雪がある限り、遠距離攻撃は通用しないってか……しかもリフレクターで接近戦の準備が出来ている。

どうする？

《タクミ、いくらリフレクターを使ったとしてもダメージが無い訳じゃないよ。ここは接近戦で少しでもダメージを与えた方が良くいん

じゃない?》

頭の中でフローゼルの声が。……そうだな。

確かにリフレクターはダメージを半減するだけで、完璧に防ぐ訳じゃない……俺は慎重になりすぎてたのかもな。

こういつ時に迷ったら負けだ……よし!

「突っ込めゴウカザル!」

俺の指示を聞いたゴウカザルはフリーザーに向かってダッシュした。

「リフレクターがあるのを忘れた訳じゃねえだろ? フリーザー、冷凍ビーム!」

フリーザーは口から超低温のビームを吐き出し、ゴウカザルに向けて放ってきた。だけどゴウカザルは当たる寸前で冷凍ビームを回避した。

「なっ!?!」

「火炎車だ!」

『うおおおお!』

身体を炎で包まれたゴウカザルはフリーザーに体当たりを決めた。だがリフレクターでダメージが半減される。

「冷凍ビームだフリーザー!」

「回避してマツハパンチ！」

至近距離でフリーザーは冷凍ビームを放ってきたが、それを紙一重でゴウカザルは回避、懷に潜り込んで顔面に右ストレートを叩き込んだ。

「攻撃の手を緩めるなゴウカザル！ マツハパンチでラッシュだ！」

ゴウカザルは両方の手を使ってフリーザーの胸元を連続で殴り続けた。

「調子に乗んなよ！ 吹雪！」

「下がれゴウカザル！」

フリーザーが攻撃する前にゴウカザルはバックステップして後方に下がり、フリーザーの吹雪を回避した。

『はあ……はあ……』

ゴウカザルの呼吸が荒くなってきてる……攻め疲れたのかもしれない。

「こうなったらとおきだ！ フリーザー、心の眼！」

フリーザーが目を閉じて集中し始めた……心の眼は確か、次に放つ技が必ずヒットする補助技だったな。フリーザーが使える強力な技……吹雪以外にあるとしたら……あれか！ マズい、ゴウカザルは守るとかの防御技を覚えていない……ここは建物の中、床は硬いから穴を掘るが使えない……

『はあ……はあ……タクミ、俺は絶対勝つ！……俺を信じる』

ゴウカザル……お前……

「……解った、俺はお前を信じる。頼むぞ！」

『任せろ！ うおおおお！』

突然ゴウカザルの身体から真つ赤なオーラが出現した。これは……

《特性の猛火だね……絶対に負けないって強い気持ちだが、ゴウカザルの特性を発動させたのかもしれない》

ゴウカザル……俺もその気持ちに応えないといけないな。……一か八かだけど、猛火を発動したゴウカザルならきつとこれで！

「これで決めるぞゴウカザル！ 火炎車！」

ゴウカザルは身体を高速で回転させ、火だるまのようになってフリーザーに突っ込んだ。

「くたばりやがれ、絶対零度！」

フリーザーは口から巨大な氷のエネルギー弾を吐き出してきた。

「ゴウカザル、火炎放射だ！」

『うおおおお！』

火炎車を発動したまま火炎放射を放つゴウカザル。火炎車の炎と合わせり強力な火炎放射になった炎はフリーザーが放ってきた絶対零度を受け止めた。

「な、何っ！？」

「ゴウカザル……いつけえええ！」

俺の声が届いたのか、ゴウカザルの炎がまたさらに強くなり、ついにフリーザーの絶対零度を弾き飛ばす。そしてそのままの勢いでフリーザーに火炎車を直撃させたゴウカザル。火炎車を受けたフリーザーは吹き飛ばされヒョウガの所へ。

「がはっ！？」

フリーザーと共にヒョウガも吹き飛ばされ、壁に激突した。そしてヒョウガとフリーザーは崩れ落ちるようにその場に倒れた。

「か、勝った……」

あのフリーザーに……ヒョウガに勝てた……

『はあ……はあ……も、もう限界だ……』

ゴウカザルは座り込んでしまった。俺は急いでゴウカザルの所へ駆け寄る。

「やったぜゴウカザル！俺達勝ったんだ！」

嬉しくて、俺は思わずゴウカザルに抱きついてしまう。

『く、苦しいってタクミ……俺もうヘトヘトなんだ……』

「あつ悪いゴウカザル」

俺は慌ててゴウカザルから離れる。

「本当に良く頑張ってくれたよゴウカザル……あとはゆっくり休んでくれ」

俺はゴウカザルをモンスターボールに戻した。

《タクミ、ヒョウガ達はどつするの?》

「ヒョウガ達は……多分すぐには目を覚まさないだろうから、放置しといて良いと思う。それより……」

俺はヒョウガが守っていた扉を見つめる。

《……マコトさんだね》

「あめ嗚呼……行くぞフローゼル」

俺は扉に近づき、ゆっくりとその扉を開ける。

扉の向こうに広がっていた光景……それは何に使うのか解らない
機械やら容器の中に奇妙な色をした液体がたくさんある光景だった。
なんか……薬品の匂いが鼻に付く。

『……なんか変な部屋ね？』

一緒に来たサキが部屋を見回しながらそう言った。

「……やっぱり来たね、タクミっち」

そんな部屋の中に白衣を着た男が一人佇たたずんでいた。

「マコト……」

「フローゼルに進化したんだねタクミっち。すっかりポケモンらしく
なっちゃって……」

どこか悲しそうな感じに言うマコト。

「……教えてくれマコト、なんでお前がギンガ団なんかにいるんだ
よ？」

「……それは、タクミっちを助ける為だよ」

俺を……助ける為？

「どついう意味だよ？」

「……ギンガ団はディアルガとパールキアを使って新世界を作ろうとしている……タクミっちを助ける為に必要な力を持ったディアルガに接触、またはディアルガの力が宿った金剛玉に接触するにはギンガ団に入って一緒に行動するのが一番手っ取り早かったからね。ギンガ団の事を利用したのさ。この薬を作る為にね」

そう言っマコトは手に持っていた小さな容器に入った青い光を放っている液体を俺に見せた。

「僕はこの薬を飲んで時の神、ディアルガになる……そしてタクミっちとブイゼル……いや、フローゼルを元の姿に戻してあげる。僕がタクミっち達を助け出すんだ」

マコトは手に持っていた薬を飲もうとした。

「や、止めるマコト！？ そんなもん飲んだら、どうなるか解らねえぞ！？」

俺がそう叫んだ時にはもう遅かった。マコトは容器に入っていた青い光を放っている液体を全て飲み干してしまった。

「マコト……」

「……うつ！？ うあああ！？」

突然マコトが苦しみ出した。その刹那、マコトの身体が眩い青い光に包まれてしまう。

「くっ！？」

『ま、眩しい!?!』

あまりの眩しさに俺達は目を開けてられなかった。本当にマコトはディアルガになっちまうのか？

しばらくしてようやく光が収まった。俺はゆっくりと目を開ける。

「……グルルルル……」

「お、おい……嘘だろ……」

今俺の目の前にいるのは人間のマコトではなかった……体色が藍色で胸元にはダイヤモンドのような宝石、神々しいドラゴンのような姿をしたポケモン……ディアルガになったマコトだった。

「マ、マコト……?」

恐る恐る俺はマコトに話し掛ける。だけど、マコトは無言のままだ。

どうも様子が変だ。

「…………グオオオオオ!!」

「うわっ!?!」

いきなり叫んだかと思うとマコトは俺達を踏みつけようと襲いかかってきた。俺達はギリギリでこの踏みつけを回避、マコトから離れる。

「止めるマコト!」

『無駄よ、今のあいつにはあんたの声なんて聞こえてないわ!』

「どういう事だよサキ?」

『ネオ・ギンガ団にいた時に、いろんな人間をポケモンに変えてきたけど、必ず皆暴れ出して暴走状態になるのよ。あいつも同じだわ、急激な身体の変化で自我を保てなかったのよ!』

そんな……

「グオオオオオ!」

ディアルガになったマコトは暴れ始めた。

「くそっ! とにかくなんとかしないと! 頼むぜ皆!」

俺は戦える手持ちポケモンを全員モンスターボールから出した。今はとにかく、マコトの暴走を止めないと!

第五十一話 タクミVSヒョウガ！（後書き）

フローゼル

「マコトさんが暴走状態？ マコトさんともあろう人が対策をしなかったんですか？」

いやしてたよ。ただ神と呼ばれしディアルガのエネルギーが強すぎたんだね。

フローゼル

「神になろうとしたからバチが当たった……そういう事ですか？」

うーん……まあそういう解釈も出来るね。

第五十二話 最後の戦い、暴走ディアルガ（マコト）を止める！（前書き）

タクミ

「なあ、活動報告ん所にこの小説がもうすぐで終わるって書いてあったんだが……」

そだよ。

タクミ

「ってそんな軽く返事しなくても（汗）」

第五十二話 最後の戦い、暴走ディアルガ（マコト）を止める！

ポケモンに変わる薬を飲み、ディアルガに変化してしまったマコト。

だが、ディアルガになった途端にマコトは暴走、ギンガ団アジトを破壊し始める。俺は残りの手持ちで戦えるポケモン達と協力して暴走してしまったマコトを止めようとした。

「エーフィ、サイコネシスでマコトの動きを止められるか？」

『やってみるわ、サイコネシス！』

エーフィは目を閉じて意識を集中、マコトにサイコネシスを掛けようとする。

「グオオオオオ！」

『きゃあ!?!』

エーフィがサイコネシスを使おうとした時、マコトはエーフィを踏みつけようとした。

「危ないエーフィ!?!」

俺は咄嗟とつとにエーフィの所へ走り、そしてエーフィを抱き上げてマコトの踏みつけを回避した……間一髪だったぜ。

「間に合った……大丈夫かエーフィ？」

『う、うん……ありがとう、ダーリン』

あれ？ 気のせいかエーフィの顔が赤くなっているような……？

《タクミ、今は戦闘中だよ！》

頭の中でフローゼルの声が響く。解ってるさフローゼル！

「俺がマコトの注意を引くから、エーフィはもう一度サイコキネシスを頼む」

『解ったわ』

「ピジョットとフライゴンは俺の援護をしてくれ！」

俺がそう言うと、ピジョットとフライゴンは頷いて応えてくれた。

「よし……行くぜ、高速移動！」

俺はマコトに向かって素早く接近する。

「グオオオオ！」

マコトが右前足で俺を踏みつけようとしてきた。

「フライゴン！」

『任せて！ 砂嵐！』

フライゴンが翼を思いっきり羽ばたかせて強力な砂嵐を作り出し

た。

ディアルガは鋼タイプを持つてから砂嵐のダメージは無いが、目眩ましにはなる。フライゴンが放った砂嵐はマコトの顔に当たる。

「今だ！」

俺は右の方角にステップして方向転換する。

マコトの踏みつけはさっきまで俺がいた場所の地面に当たる。

その間に俺はマコトの右側に回り込み、マコトの背中に飛び乗る。

「グオツ！？」

背中に俺が乗った事に気づいたマコトは身体を揺さぶって俺を振り落とそうとしてきた。

「ピジョット！」

『任せるタクミ！ フェザーダンス！』

ピジョットは自分の翼から無数の羽毛を飛ばし、マコトに向けて放つ。

フェザーダンスは相手の力を抜けさせ、攻撃力を下げる技……これでマコトの動きを鈍くする事が出来れば……

「グルルル……」

フェザーダンスが効いたのか、マコトは地面に倒れ込みそうになる。今がチャンス！

「エーフィ！ サイコキネシスでマコトの動きを停めるんだ！」

『うん！ サイコ……』

「グルルル……グオオオオ！」

エーフィがサイコキネシスを使おうとした時、マコトが大きく咆哮する。刹那^{せつな}、マコトの胸の部分にあるダイヤモンドのような宝石が光り輝き始めた。

「な、なんだ！？」

『あれはまさか！？ あんた達、早くそいつから離れなさい！ 大技が出るわよ！』

サキがそう叫んだ時、マコトの口の所にエネルギーが集まり始めた……マジでやばそうだなおい！？

「皆逃げろ！」

「グオオオオ！」

俺が皆に叫んだ刹那、マコトは集めたエネルギーを一気に放出した。

放たれたエネルギー波はアジトの壁に直撃、凄まじい爆発が発生した。

「うわっ！？」

その爆発の衝撃で、俺はマコトの背中から吹き飛ばされてしまった。

吹き飛ばされた俺は壁に身体を強く打ちつけてしまう。

「痛っ……な、なんなんだよ今のは？」

俺はゆっくりと身体を起こす。そしてマコトが放ったエネルギー波が直撃した壁を見てみる。

エネルギー波が直撃した壁には巨大な穴があいていた。そこからは外が見える。

「嘘だろ……なんて威力だよ……」

俺がマコトが放ったエネルギー波の威力に驚愕している時、マコトは自分があけた穴から外に出ていつてしまった。

「あっおい待てよマコト!？」

『うっ……』

マコトのあとを追いつけようとした時、何処からか呻き声うめが聞こえてきた。聞こえてきた方に振り向くと、そこには怪我をしてしまっているエーフィ達エーフィがいた。

「お前ら!？」

俺はエーフィ達の所へ駆け寄る。

『すまないタクミ……逃げるのが遅れた……痛っ!？』

痛みで顔を歪めるピジョット。どうやら翼を痛めたらしい。フライゴンも同じように翼を……それに腕や足も痛めてしまった

ようで、かなり苦しそうにしている。

『ごめんなさいダーリン……役に立てなくて……』

右前足から出血しているエーフィが申し訳なさそうにそう言った。

「気にするなよ。それより、その状態じゃ満足に動けないだろ？ お前達はモンスターボールに戻って休んでな」

俺はエーフィ達をモンスターボールに戻してあげた。

「……あっそういえばサキは？」

『私ならここよ』

後ろから声が。振り返るとそこにはサキとサキのポケモンであるドラピオンがいた。

サキは怪我をしてないみたいだな……どうやら、ドラピオンがサキを守ったみたいだ。

「無事だったんだな」

『ドラピオンのおかげよ。それより、あいつを止めるんでしょ？』

サキは外に出てしまったマコトを見つめながら俺にそう言った。

「当然そのつもりだ」

『……なら、加減なんかしないで本気であいつを攻撃しなさい』

「えっ……?」

強い口調でサキにそう言われた。

『やらないきゃあんたがやられるから言ってるのよ』

「だけど……マコトは俺の親友だ、攻撃なんて……」

『甘いわよあんた! そんな考えだからあんたのポケモンが傷ついたんでしょうが!』

「……!」

そうだ……マコトを傷つけないから、皆にはマコトを傷つけない技を使わせてきた……だけど、俺はそうする事で皆を傷つけてしまった……

《……タクミ、覚悟を決めた方が良いみたいだよ》

フローゼル……

《このままマコトさんをあのままにしていたら外にいる人達だけじゃなく、街にいる人達まで傷つく事になっちゃう……そんなの絶対にダメだよ!》

……そうだよな。それに……マコトだって、誰かが傷つく事なんか望んでない筈だからな。

「俺は……マコトを止める。倒しても止めてみせる!」

『覚悟を決めたのね。良いわ、私も協力してあげる。あいつに暴れまわられたら困るしね』

「助かるぜサキ。じゃあ、行こうぜ！」

俺達はマコトを追いかける為、アジトから外へ。

サキと一緒に外に出ると、マコトにやられたのか、ギンガ団の団員や警察の人達が倒れていた。

「酷いな……」

『あついたわよ！』

サキが見つめている先を見える。そこにはマコトと戦っているシロナさんのガブリアスがいた。近くにはシロナさんもいる。

「サキ、少しだけマコトを足止め出来るか？」

『この私を誰だと思ってるのよ？ 足止め位余裕よ』

自信満々だな。

「じゃあ頼む」

『良いわよ。行くわよドラピオン!』

『良しきた!』

サキとドラピオンはマコトに向かって突っ込んでいった。

『ほらほらそのあんた! 私達が相手よ!』

『俺達を倒せるもんなら倒してみな』

……あれってまさか……挑発?

「グオオオオ!」

『来た! 逃げるわよドラピオン!』

『合点承知!』

挑発に乗ったマコトがサキ達を追っていった……

《戦うんじゃないんだね……》

しかもまさかあんなあつさりと挑発が成功するとはな……ってそんな事言ってる場合じゃない!

「シロナさん!」

俺はシロナさんの所へ駆け寄る。

「大丈夫ですか？」

「助かったわタクミ君。でも何故ディアルガが……」

「それはあとで説明します。それよりシロナさんは、怪我をしてる人達を安全な場所まで運んで下さい。俺はあいつを止めないといけないんで……じゃあ、よろしく願います！」

俺はそれだけをシロナさんに伝え、急いでサキ達を追ったマコトを追いかける。

「一体何処まで行ったんだよあいつら？」

マコト達が向かった方角をずっと走ってきたんだが、なかなか追いつかない。一体何処まで行ったんだ？ そんな事を考えていた刹那、遠くの方で爆発音が聞こえてきた。

「あつちか！」

爆発音が聞こえてきた方へ、俺は急いで向かった。

「グオオオオ！」

『はあ、はあ……たかもう、少しは加減しなさいよ!?!』

あついた。サキ達がマコトに追い詰められてるじゃんか！

「アクアジェット！」

俺は水を身体に纏^{まと}い、その状態でマコトの背中に体当たりした。

「グルルル……」

「くっ……ディアルガだけあって、さすがに防御が硬いな……」

俺のアクアジェットを受けたのに、まるで効いてないような表情をするマコト。俺一人だとマズいな……かと言って……

『はあ……はあ……』

サキ達はかなり息が上がってる……あの様子だと、バトルするのは無理だな……

「グルルル……」

マコトがゆっくりと俺に近寄ってくる……マコトだって解ってる

けど、凄いプレッシャーだ……どうする？ 俺のスピードならマコトの攻撃は回避出来るが……

《あっそういえばタクミ、送りの泉でギラティナに会った時、何か貰わなかった？》

「ギラティナに？ あっそういえば……」

俺は背負っていたリュックを下ろし、中からギラティナから受け取った宝玉を取り出す。

《これが僕達の助けになるってギラティナは言ってたよね？》

嗚呼、^{ああ}確かにそう言っていた……今まさに助けてほしい状況だな。でも……これどう使えば良いんだ？

「グオオオオ！」

俺が宝玉の使い方を考えている時、マコトが突進してきた。

《タクミ！？》

「くっ……頼む、俺達に力を貸してくれ！」

俺は宝玉に強くそう願った。そう願った刹那、宝玉が光り輝き始めた。

「な、なんだ！？」

「グオツ！？」

光はさらに強くなってきて、俺は目を開けていられなくなる。
マコトもこの光に驚き、突進を中断したみたいだ。

しばらくすると光は消えていった。俺はゆっくりと目を開ける。
すると目の前には……

『よう。早速宝玉を使ってくれたみたいだな、タクミ』

「ギ、ギラティナ!？」

目の前にいたのは、送りの泉で出会ったあのギラティナだった。

「なんでここに!？」

『俺が渡したその宝玉……そいつは俺をこっちの世界に呼び出す事が出来る宝玉なのさ。言っただろ？ お前達の助けになるってな』

この宝玉にはそんな力があつたのか……

『ちなみに、そいつを一度使ったら自動的に消滅するぞ』

「へっ?」

その時宝玉から何やらピキツという嫌な音が聞こえてきた。俺が
宝玉を見ると、宝玉には罅^{ひび}が入っていた。

それを確認した後すぐ、宝玉は砕け散ってしまった。

『そう何度も呼び出されるのは勘弁だからな。んで、相手が目の前にいるこいつか……』

「グルルル……」

マコトがギラティナを睨みつけている。

『ふん、ディアルガの偽物か……本物よりも威圧感が全然無いな』

威圧感が無いって……充分あると思うんですけど……

『まあ偽物が相手でも、俺は手を抜く事はしないがな』

戦闘体勢に入るギラティナ。

「俺も一緒にやるぞギラティナ」

俺はギラティナの背中に飛び乗る。

『構わないが、足を引つ張るなよ？』

「解ってるさ」

「グオオオオ！」

いきなりマコトが突進してきた。

『避けるまでもないな』

ギラティナは回避行動もせずに、マコトの突進を受けた。だけどギラティナは平気な顔をしている。

『ゴーストタイプの俺に、そんなただの突進なんか効かないんだよ』

確かにゴーストタイプにただの突進は効果無いからな。ギラティナにダメージが無いのは当然か。

『次はこっちの番だな。竜の波動！』

ギラティナは口からエネルギー弾を吐き出し、マコトに直撃させる。

「グルッ!？」

強力な竜の波動を受け、大きく後方へ吹き飛ばされたマコト。相変わらずギラティナの攻撃は凄いパワーだな。

『俺の竜の波動を受けて立ってるとは……ディアルガの偽物でも、それなりには丈夫って事か……』

「グルルル……グオオオオ!」

マコトが咆哮すると、胸にあるダイヤモンドのような宝石が光り輝き始めた。これはさっきの技か!？

『ほう……時の咆哮か。タクミ、しっかり掴まってな』

ギラティナが身構える。俺は落ちないようにしっかりとギラティ

ナにしがみつく。

「グオオオオ！」

マコトは口から強力なエネルギー波を放ってきた。

『シャドーダイブ！』

ギラティナはシャドーダイブを使って自分の姿を俺と一緒に完全に消した。マコトが放った時の咆哮は俺達には当たらず、そのまま地面に直撃する。しかし……変な感じだ。周りからは俺達は姿が見えてないみたいだけど、ギラティナはただ普通に移動しているだけなんだ。

『タクミ、そろそろ奴の背後から攻撃を仕掛ける。時の咆哮は強力だが撃った後の隙が大きい……俺が奴の背後に回り込んで攻撃した後、最後にお前が決める』

「……解った」

俺が使える技で、ディアルガになったマコトに弱点を突ける技……あれしか無いな。

『いくぞ！』

ギラティナはマコトの後ろに回り込み、そして突っ込む。

『波動弾！』

ギラティナはシャドーダイブを解除し、口から青色のエネルギー

弾を吐き出してマコトの背中に直撃させる。

格闘タイプの技である波動弾は効果抜群、かなり効いたみたいでマコトはよろめく。

『今だタクミ！』

「うおおおお！」

俺はギラティナの背中から空高くジャンプ、マコトに向かって落下しながら右手に力を入れる。

送りの泉で特訓している時に新しく覚えたこの技なら……決まれ！

「マコトオオオ！」

俺はマコトの顔に渾身の気合いパンチを叩き込む。俺の気合いパンチを受けたマコトはその大きな身体を地面に倒す。

倒れたマコトは動かない……どうやら気絶したみたいだな。

「……………ごめんな、マコト……………」

俺は謝りながら、マコトの顔を撫でる。

『終わったか……………じゃあタクミ、俺はそろそろ帰らせてもらっぞ。あまりこの世界で長居する訳にはいかないからな』

ギラティナはこの場から立ち去ろうとする。

「あつちよつと待ってくれギラティナ！　一つ頼み事を聞いてくれないか？」

『頼み事？』

ギラティナは立ち止まって俺の方に振り向いた。

「俺達だけじゃ、ディアルガになったマコトを運べない。だから…

…」

『俺にそいつを運んでほしいってか？』

ギラティナの問いに俺は頷く。

『まあ、お前の頼みなら聞いても良いだろう。で、一体何処に運べば良いんだ？』

「マサゴタウンって所だ。そこに博士がいて、ポケモンに変えられた人達を元に戻す薬を作っているんだ。その人の所に連れていく」

『マサゴタウンだな？ 良し、じゃあ早速出発するか』

ギラティナは気絶したマコトを背中に乗せる。その後俺もギラティナの背中に乗る。

『ちょっと待ちなさいよ！ 私も一緒に行くわよ』

ドラピオンをモンスターボールに戻した後、サキがギラティナの背中に飛び乗ってきた。

「お前もかよ？」

『良いじゃないのよ別に。こいつがどうなるのか気になるし』

『おいお前ら、あんまり俺の背中であぐさすんなよ？ 行くぞ』

ギリティナは俺達を乗せたまま、マサゴタウンに向けて出発した。

第五十二話 最後の戦い、暴走ディアルガ（マコト）を止める！（後書き）

タクミ

「あの宝玉、ギラティナ呼ぶ為の道具だったのな（汗）」

ギラティナは好きなポケモンの一体だから、ちょっと活躍させたかったからね。

さて、次話でラストだよ。

タクミ

「……早くねえか!？」

まあこつちにも色々と思う事があったね。

エピソード（前書き）

はいラスト。……だけど、かなり急な展開になります（汗）

タクミ

「マジか（汗）」

エピソード

「ふぁ〜……やっぱ、ここが一番落ち着くなぁ」

ズイタウンの近くにある広い草原で仰向けになって空を見つめる俺。

ギンガ団との戦闘、そしてギラティナと協力してディアルガになつてしまったマコトとの戦闘から一カ月が過ぎていた。

あの日、ナナカマド博士の研究所に行った時、ちょうどポケモンに変えられた人達を元に戻す事が出来る薬が完成していて、マコトがその薬を使う第一号になったんだ。

薬の効果でマコトはちゃんと人間に戻る事が出来た。まあ、戻った時はあいつ裸だったからちよつとした騒ぎになったけど……ギンガ団はシロナさんや警察の人達のおかげで全員捕まえる事が出来たみたいだ。

あゝそういえばサキの奴は、人間に戻る事を拒否してブラッキーのままでドラピオン達と旅に行く……とか言つてあの日何処かに行つちまった。

結局最後まであいつの事が良く解らなかつたなぁ……

《マコトさんが元に戻つて、他のポケモンにされた人達も元に戻り、ギンガ団も壊滅させた……タクミ、これからどうするの?》

頭の中でフローゼルが話し掛けてきた。

これからか……どうしようかなぁ。一応これからの事を考えたいつて事で、長期休暇を貰つたは良いが……まだなんにも決まつてない。

《国際警察続けないの?》

フローゼルの姿で続けられると思うか？

《……やっぱ無理かな？》

無理だろ。シンオウリーグに挑戦つても、フローゼルの姿じゃ無理だろうし……

「はあ……本当、これからどうするかな……」

ため息を吐きながら俺は思わず呟いてしまう。

「やはりここにいたなタクミ」

不意に誰かに声を掛けられた俺。声がした方に顔を向けると、そこにはハンサムが立っていた。

「あつ先輩。なんか久しぶりですね」

「確かにな……隣、良いか？」

「良いですよ」

ハンサムは俺の隣に来て、その場に座り込む。

「お前、国際警察を辞めるつもりか？」

「……まだ悩んでいます。でも、フローゼルの姿のままで国際警察なんて出来ないですし……やっぱり辞めようかなって……」

「……姿が人間だろうがポケモンだろうがそんなの関係無いんじゃないのか？」

「えっ？」

ハンサムはその言葉を聞き、俺は思わずハンサムの顔を見つめる。

「ようは続けたいのか続けたくないのか、お前の気持ちの問題だ」

「気持ちの……問題……」

「例えば姿が人間じゃなくても、やりたいという気持ちがあれば国際警察は出来る。姿なんか関係無いさ」

空を見つめながら言うハンサム。

「それで、お前は国際警察を続けたいのか？ それとも続けたくないのか？ どっちだ？」

「俺は……続けたいです。困っている人達やポケモン達を助けたい、それが俺の気持ちです」

素直に自分の気持ちをハンサムに俺は言う。

「なら悩む必要なんか無いじゃないか。これからもよろしく頼むぞタクミ」

ハンサムが右手を差し出してきた。俺はその手を握り締め、しっかりと握手する。

「こちらこそ、よろしく願いますよ先輩」

俺は笑みを浮かべてハンサムにそう言う……決めたよフローゼル、俺はこれからも国際警察としてやっていく。
だから、これからもよろしくな、相棒。

《もちろんだよタクミ》

エピローグ（後書き）

タクミ

「本当に急な展開だな（汗）」

とりあえず完結つと。

だけど僕はこの作品には全然納得いつてないんで、いつかこれのリメイク版を執筆しますよ。

タクミ

「あつそうなん？」

問題作を問題作のままで終わらせたくないんで。

タクミ

「……あのさ、一応この小説の主人公なんだぜ俺？ その主人公の前で問題作とか言わんでくれよ（汗）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6567f/>

ポケットモンスタープラチナ・タクミストーリー

2010年10月10日21時14分発行